
クラナド 汐の見る風景

K-JI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラナド 汐の見る風景

【Nコード】

N0117I

【作者名】

K-JI

【あらすじ】

クラナド・アフターストーリーのアフターストーリー。十四歳となった汐から見える、楽しくて賑やかで、幸せな日々の物語。メインキャストのその後もちょっと混ぜようかと思っています。思い描ける範囲の中で、ですが。

またね

最後の荷物が運び出されて、ついに空っぽになった我が家。

私はひとり玄関に突っ立って、十四年間過ごしたこの場所を静かに眺めている。

「こうして見ると、けっこう広かったんだなあ……」

なんて感想をこぼしたりして。

幼い頃は、我が家を狭いと感じたことはなかったけど、この歳になれば、どうしたって狭いと感じてしまう。友達の家に遊びに行ったりすると余計に感じるし、あつきーと早苗さんのお家に行くと尚更のこと。

でも、狭いこの家が嫌だ、と思ったことは一度もない。座敷が一間しかない不便さはあるけど、やっぱりこの方が私は好きだ。

だって、大好きなお母さんとお父さんと、いつも寄り添ってる感があるから。

「汐」

外からお父さんの声がした。だけど、今はなんとなく返事する気になれない。もう少し、こうして見ていたいと思ったから。だから無視。ごめんね。お父さん。

そしたら、カンカンっていう階段を上がってくる足音が聞こえてきた。この足音はお父さんのだ。十四年間聞いてきた、お父さんの音。

子供の頃は、仕事から帰ってきたお父さんのこの足音を聞くと、必ずと言っていいぐらい、喜び勇んで迎えに出た。そしていつも、お父さんはごつごつの大きな手を私の頭にぽんと乗っけて、にっこり笑ってこう言ってくれた。

「ただいま。汐」

そのときのお父さんの優しい顔が、言葉が、あったかい手が、とっても嬉しかった。さすがに今は、玄関から飛び出して出迎えたり

はしないけど。でも、お父さんの帰宅を覚えてくれるその足音を聞くのと、やっぱりちょっと心がうきうきしてしまう。

私って、ファザコンなんだろうか……。

「汐、もう出発するぞ」

おっとそうだった。お父さんが呼びに来たんだっけ。

お父さんはいま私のすぐ後ろ。そんな至近距離から言われては、もう聞こえない振りは出来ない。だから私は、「うん……」って気のない返事をする。振り向きもしないで。

「汐？」

「うん……？」やっぱり気のない返事。視線も変わらず。

すると、お父さんはぼんと私の頭に手を乗っけてきて、そのまま黙り込んでしまった。

私を呼びに来たんじゃないの？

「……お父さん」

「なんだ？」なんとなくおざなりな感じがする。ひよっとしなくても、お父さんもそうなのかな。

「この手はなに？」

「特に意味はない。だから気にするな」

まあいつか。急に意味不明な行動をするのは、今に始まったことじゃないし、お父さんの手、嫌いじゃないし。

で、結局ふたりとも、そのまま黙って立っている。よその人が見たら、あの親子はいつたい何をしてるんだろうって思うだろうな。

「パパー。しおちゃーん」

今度はお母さんの声の外から聞こえてきた。お母さんを無視するのはちょっと可哀想かかって思ったから、「はい」と生返事をする。たぶんこの声の大きさじゃ、お母さんの耳には届かない。でも、一応返事はしたんだから、いいよね。

で、私は相変わらず部屋の目を眺めている。お父さんも、手を乗っけたまま立っている。

そして、ちょっとだけ速足で階段を上がってくる足音。きつとお

母さんのだ。

「パパ？ しおちゃん？」

やっぱり。そしてお母さんの足音がすぐ側で止まった。

さすがにこれ以上は粘れないか。でも、もうちょっとだけ……。

そう思っただけで黙っていたら、お母さんまで黙り込んでしまっていることに気が付いた。きっとお母さんも、お父さんと同じなんだろう。そして私とも。

この場所には、数え上げたらきりが無いぐらいの、たくさん思い出の詰まっている。楽しかったこと。嬉しかったこと。悲しかったこと。その思い出たちが、どれだけの時間が経っても色褪せないで、いつでも私の心をくすぐってくれるように、何一つ残すことなく強く心に刻み込んでおきたい。

柱や床の傷、畳みのシミ、当て紙された襖など、そんな些細なものもすべて。

突然、私の右手が優しく握られた。それが誰の手かなんて考える必要はない。私は振り返って、お母さんを見る。ちなみにお父さんの手は乗ったまんま。手で払うつもりも、振り落とすつもりもないし、そもそも邪魔だと思っていないから、このまま。

振り返った私に、お母さんがふわりと微笑む。そしてそのきれいな瞳はやっぱり潤んでいた。お母さんも色々と思いついてみたけれど、涙をばたばた、とはなっていないかった。けっこう泣き虫なお母さんのことだから、てっきり大量の涙を流していると思っただけ、これはちよつと意外。

じゃあお父さんはどうだろう。

首を反対側に大きくグリンと回しただけでは足りず、体もぐいと捻ってお父さんを見上げる。

とっても優しく、どこか切なそうで、今まで見たことのない顔……。

うつん。一度だけ見たことがあるような気がする。まだ私が小さい頃に。ええと、あれは確か、私にパラレルワールドの話をしてく

れたときだっけ。私が産まれて、そしてすぐお母さんが死んじゃって。それから私はあつきーと早苗さんに育ててもらって、お父さんはこのアパートで一人暮らしで。それで私が五歳のとき。不意にお父さんが「ん？」とこっちを見た。やっと私の視線に気が付いたみたい。

きつと次のせりふは、照れくさそうな「なんだよ」って言葉だろう。お父さん、意外と照れ屋だから。お父さんのそんな顔も見たいという誘惑はあった。だけど、それじゃあなんとなく面白くない。だから、言われる前にこっちから言った。

「特に意味はないよ。だから気にしないで」

そしたら一瞬きよんとして、すぐにくすりと笑って「そっか」って答えた。うん。こっちの顔もなかなか。お母さんも、そんなお父さんを見て幸せそうに目を細めている。こんな両親を見たら、私だつてにやけてしまう。

ああ、やつぱりいいな。

なんて浸ってたなら、外からまたまた声が。

「岡崎ーっ！ いつまで俺らを待たせる気だー！」

今度は陽平おじちゃんだ。

陽平おじちゃんは、お父さんとお母さんの高校の時からのお友達。特にお父さんとは仲が良くて、高一の時から二人で馬鹿なことをいっぱいやってたらしい。今でもたまに遊びに来て、その頃の面白い話を聞かせてもらう。もちろん、お父さんから。

とつても面白い人で、女の人が好きっていうのがちょっとアレだけど、私は嫌いじゃないかな。

ってこういうようなことを前にお父さんに言ったら、なんだか本気で心配されたっけ。しかも、そこにいた陽平おじちゃんが「じゃあボクと結婚する？」って冗談で言ったら、お父さん、本気で陽平おじちゃんの首締めて。あのとき確か、陽平おじちゃん白目をむいて、口から泡出して……。

う、思い出すのはよそう。

「パパ。そろそろ行きましようか」

「そうだな。春原だけなら、ずっと待たせてもいいんだけど」

「わざわざ手伝いに来てくださった人をそんな風に言ったら駄目です」

「渚。それは間違ってる」

「何がですか？」

「あいつに関しては、『来てくれた』じゃなくて、『来させた』だから、俺たちがあいつをどれだけ待たせようが、どれだけこき使おうが、どれだけお茶くみさせようが、何の問題もないんだ」

当然のことのように語るお父さん。たまに思っただけど、お父さんの陽平おじちゃんに対する横暴ぶりって、笑って許していいもの？ お母さん。ってお母さん、口ではちよっと怒ってるっぽいのに、顔があんまり怒ってない。ていうか笑ってる？

うん。これでいいのかなあ。

「さて。それじゃあ行くか」

「はい。行くわよ、しおちゃん」

「うん」

私はそう言っただけで、最後にもう一度、住み慣れた我が家の風景をじっくり眺める。そして、感謝の気持ちを込めてこう言った。

「今までありがとう。ばいばい」

そのとき、とっても奇妙なことだけど、たくさんの光が舞う金色の草原の中、たくさんの人が私に微笑み返してくれたような気がした。しかも、私はそれを、不思議と懐かしく感じていた。

こんなこと、友達に言ったら即冷たく笑われるに決まってる。立っただけで寝てたんだろって。

でも……。

「お父さん。今ね」

私は今このことを説明しようとして振り返る。そしたら、説明する必要がないことがすぐに分かった。

お父さんも感じたんだ。だって、お父さんもちよっと驚いていて、

それから私を見て、どこか懐かしそうな目で「ああ。分かっている。って言ったんだから。なら、自分を疑う理由は何もない。

だからもう一回、今度は応えてくれた人たちに向けて。

「またね」

こうして私は、言葉どおり生まれ育った場所と、最後のお別れをした。

私の名前は岡崎汐。元気はつらつな十四歳の女の子。

引っ越しの日 その1

慣れ親しんだ家を後に、私たちは引っ越しの荷物を積んだ軽トラツクに乗って、新しい家へと向かっている。窓の外を流れる景色は、今のところ私の知っているものばかりだけど、もうすぐ知らないものばかりになる。でもそれもすぐに終わり。

新しい我が家は、前の家からそんなに遠く離れていないのだ。という事で、転校することもないし、今までどおりあつきーと早苗さんのお家にも行ける。これは私にとつてとても嬉しいこと。

「すみませんでした。猫田さん。待たせてしまって」

お母さんが、車を運転している人にそう言った。この人は、陽平おじちゃんの会社の後輩の人。ちよつと気が弱そうだけど、いい人っぽい感じがする。

「いえ、いいんですよ。自分、何度か引っ越ししてるんですけど、愛着が湧いた家から出るときは、やっぱりちよつと感傷的になったりするんですよ」

「そうなんですか」

「はい。だから、皆さんの気持ちはよく分かります
ん。ちよつと疑問。ということと質問してみた。

「あの、愛着があるのに、なんで引っ越しするんですか？」

「仕事の都合で。営業所が変わったりすると、どうしてもね
なるほど。ということとは。

「左遷とかで？」

「し、しおちゃんっ!」

あれ？ 私、そんなにまずいこと言った？ 意味はよく分かんないけど、『転勤』っていうのと同じじゃないの？

「あはは、今のところは、左遷じゃない……、と思います……」

「あ、あの！ 猫田さん？ そ、そんなことありませんから、だから気をしっかり、って猫田さん！ 前っ!」

あ。赤信号。つてこれ、けっこうやばくない？

「え？ うわあつ！」猫田さんもやばいと思つたみたい。思いつ切りブレーキ踏んだ。このとき初めて、私はシートベルトの大切さを痛感した。これがなかったら、まず間違いなく顔からフロントガラスに突っ込んでたと本気で思ったから。

車はぎりぎりで止まってくれた。でも、お母さんの心臓も止まつたかも。お母さん、お父さんと正反対で気がちっちゃいから。私はというと……、お父さん似かな。

「すつ、すみませんっ！ お怪我はないですか！」

「い……、いえ……、大丈夫……です……」

ぜんぜん大丈夫には見えないけど、とりあえず心臓は止まつてなかつたみたい。ふう。

「お嬢さんも、大丈夫ですか！」

お嬢さん、つて私のことだよ。なんか照れる。でもここはこやかに。

「はい。これぐらい平気です」

「ほんと、すみません」

「いえ」

本当に私は平気。でも、お母さん以外にも平気じゃない人がいた。「猫田ーっ！ てめー何しやがんだーっ！ 俺らを殺す気かーっ！」

荷台に乗つてた陽平おじちゃんが、運転席の窓から顔を出して怒鳴つた。そっか。荷台にはシートベルトないもんね。引つ越し荷物もあるし。ところでお父さんは大丈夫かな。

「テテ……。おいおい。何があつたんだ？ 渚」

助手席の窓からお父さんが顔を出して聞いてきた。あんまり大丈夫じゃなかつたみたい。

「え？ え、えつと……、ですね……」お母さんが心臓を押さえながら、答えにくそうにしている。ここは私が。

「猫田さんがお仕事で何度も引つ越しするつて言つたから、私が左遷とかで？つて聞いて。なにその呆れたような顔」

「お前、ほんと容赦ないな……」

む。お父さんにだけは言われたくない。それに、なんでそんな失礼なこと言われなきゃなんないの。

そう思っただけ向いたら、猫田さんが、ぶつぶつ言いながらがつくり頂垂れていた。

結局、これ以上は運転無理っていうことで猫田さんは荷台に移って、お父さんが運転することになった。陽平おじちゃんも手を挙げただけ、お父さんが速攻で却下してた。これは私も同意。

「う、汐ちゃんまで」

だって、陽平おじちゃんの運転ってちょっと怖いんだもん。けっこういい加減だし、よく余所見するし。

「渚ちゃんだけは、ボクの味方だよ」

「あの、春原さんにまで運転させてしまうのは申し訳ないので」

そういう返し方があったか。さすがお母さん。でもね、目を泳がせながら言っちゃあ意味ないよ？ ほら、陽平おじちゃん、泣きながらいじけちゃってるし。

コホン。

ここで、私たちがこうして引越すに至ったお話を、ちょっとだけしたいと思います。

それは三週間ぐらい前、突然お父さんが言い出したことで。

「二人とも、話したいことがあるから、座って聞いてくれ」

夕食も食べ終わり、食器の後片づけをお母さんと二人で終わらせた直後、お父さんが真面目な顔で私たちに言った。いったい何を話すつもりだろうと思いつつ座る。そして衝撃の発言。

「そろそろ引っ越そうと思うんだ」

「え？」

あまりの不意打ちに、思わず私は間の抜けた返事をしてしまった。いや、いつかはこういう場面がやってくるんじゃないかと思ったこ

とは、何度かあった。でも現実には起こると思っていなかった。だつてこの場所は。

「汐も大きくなってきたし、さすがに一問つていうのも、もう限界かなと思つてな」

「そうですね。ちょっと寂しい気はしますけど」

「まあな。んで、実はもう、知り合いからいい物件を紹介してもらつてるんだ。ここからそうたいして離れてなくて、だから汐が転校するようないし、渚の家にも今までどおり行ける。言うなれば、プチ引越してみたいなもんだな。それで、まずは二人に相談してからと」

なんかすつごく腹が立った。そしてすつごく悲しくもなつて、悔しくもなつて……。ついには気持ちの收拾がつかなくなつて、どうにかしたくて、堪えきれなくなつて、お父さんに向かって怒鳴つてしまった。

「私のせいなの？ 私のせいで、引越ししなくちやいけなくなつたつていうの？ なによそれ！」

お母さんとお父さんが、どこか遠くで必死にそうじゃないつて言つてる。

そんなこと分かつてる。今の自分がどれだけ馬鹿なことを言つてるのかも分かつてる。お父さんが私の将来を考えてくれてるからこそだつてことぐらい、分からないはずないじゃない。だつて、お父さんもお母さんも、いつだつて私のことを何よりも先に考えて、心配してくれているんだから。

でも、それでも感情が止まらない。言葉も涙も止まらない。もう、自分がいま何を言つてるのかさえ聞こえなくなつていいる。

この感情は、誰に向けられたもの？ 何が悲しくて、何が悔しくて、私はこんなに泣いているの？

この気持ちは……、

私へのものだ。私自身へのものだ。

この場所は、私にとって大切な場所。私が産まれた場所で、たく

さんの思い出の詰まった、本当に大切な宝箱。
でもそれだけじゃない。

ここは、お母さんとお父さんにとっても大切な場所なんだ。
何度かお母さんから聞いたことがある。私が産まれる前の、ここ
でのお母さんとお父さんのお話。最初はとっても大変だったらしい
けど、それでも毎日が楽しくて、お母さんは仕事から帰ってきたお
父さんの顔を見るのが何よりも幸せで、お父さんも、晩ご飯を作っ
て待ってくれてるお母さんの顔を見るのが何よりも幸せで。そんな
二人の日々の思い出がここにあって……。

その大切な場所を、私のせいで失ってしまう。私が、二人から奪
ってしまう。そうと分かっているのに、私は何も出来ない。なんて
無力な私。そんな自分が悔しくて、情けなくて、悲しくて……。

「しおちゃん……」

お母さんの優しい声が耳元で聞こえた。そして、お母さんの香りと
温もりが私を包んだ。

あれほどどうにも出来なかった感情が、不思議と落ち着きを取り
戻していく。まるで、森を覆い尽くす大火が、しんしんと降る雪に
ゆっくりと消されていくように。

私はもう何も言うことが出来なくなっていた。ただただ、赤子の
ように母の優しさに身を委ねるだけしか。

どれだけそうしてたかなんて分からない。結構な時間、そうして
たと思う。しかもその間、お母さんもお父さんも黙っていた。聞こ
えていたのは、時計の秒針の音と、私の鼻をすする音だけ。

「汐」

お父さんが、ようやく口を開いた。その声はとても優しいもの。
私、たくさん酷いこと言っただろうに。

「馬鹿だな。子供がそんなことで親に気を遣ってどうすんだ」

なんとなく、自分が口走ったことの一部が分かった気がする……。
「まったく。変なところで渚に似やがって」

「そうでしょうか。私は、しおちゃんのこういう優しいところ、パ

パにそっくりだと思えますよ?」

「馬鹿言え。お前の方がよっぽど」

「ふふ。それじゃあ、私とパパに似てるっていうことで」

「……」

「ね」

「……そうだな。汐は、俺と渚の娘なんだからな」

「はい」

娘の前でいちゃいちゃするのはいつものことだけど、こういう場面であるかなあ。なんだか、こうして落ち込んでる私が馬鹿に思えてくる。

「汐。まだ引越するって決めた訳じゃないし、今日中に決めなきゃいけないことでもない。だから、この話はひとまずこれでお終いにして、続きは明日以降だ。それでいいか?」

たぶん、ここで私が言うべき台詞は、「私、引越してもいいよ」だろうな。

でも、どうしてもその言葉が喉の奥で詰まってしまう。だから、自分に正直に、こくと頷いた。

「よし。じゃあ今日のところはこれでお終い。ってことで、汐。お母さんと風呂入ってこい。そんなみつともない顔のままじゃ、布団にだって入れないだろうからな」

今の私の顔を見たわけじゃないのに。だいたいお父さんは、デリカシーなさすぎ。もうちょっと気の利いた台詞言えないの? 私、女の子なんだよ?

と言っても、この父にそれを望むのは無茶っぱいから、もう諦めてるんだけどね。それに、こういう風に言ってくれるからこそ、私も気持ちを変に引きずらずに済む。これって、お父さんの術中にはまってるってことなのかな。

「さ、しおちゃん。久しぶりに一緒にお風呂に入りましょ」

「ん……」

それはいいけど、今の顔をお父さんには見られたくないな。ひど

いことになってるって、私が一番知ってるから。

と思っただけ動かさなかったら、お母さんが「パパ？」って言った。

「ビール切れてるから、ちょっと買ってくる」

そして、お父さんの足音が玄関に向かっていく。普段は信じられないくらい鈍感なお父さんだけど、このときは珍しく察してくれたみたい。だって、まだ冷蔵庫に缶ビールが一本入っていること、わたし知ってるもん。お母さんも知ってたけど、「はい。いつてらっしゃい」って答えてた。

お父さんが外に出てすぐ、私はお母さんの胸から顔を引き剥がし、のそのそとお母さんとお風呂に入った。

さて、お風呂から出るまでに、もしくはお父さんが戻ってくるまでに、このぐしゃぐしゃな顔をどうにか出来るかしら。

引っ越しの日 その2

引っ越しの話をしたその翌日の朝は、お母さんもお父さんも、そして私も、いつもとまったく変わらなかつた。まるで昨日の夜のことか夢だったみたいに。

でも学校では、いつもどおりとはいかなかった。授業の内容などまったく頭に入ってこなかつたし、体育の授業では失敗だらけで、先生や友達に何かあったのかと心配されたほど。その度に引っ越しの話をして、先生たちは「気持ちには分からないでもないが、現実問題として」と言い、友人は皆「何でそんなに嫌がるわけ？」と小首を傾げていた。

本当の理由を話すのはちょっと恥ずかしいから、そんな人たちには「愛着が湧いちゃってね」とだけ答えていたのだけど、こういった会話の中で、自分が「引っ越し先がわりと近くて、転校する必要がない」という情報以外にも知らないことを知った。

これにはさすがに「それじゃ駄々こねるガキンちよと変わんないじゃん」と怒られたり呆れられたりした。

ぶう。そこまで言わなくなつていいじゃないよお。

と、放課後になるまでの間に、気分的にだんだん面白くなつてきていたので、その憂さ晴らしをすべく、部活で思いつ切り気を吐いた。その甲斐あつて、家に帰る頃には気分もすっきりしていた。帰宅した私は、早々に荷物を放り投げて、バタバタとお風呂に入る支度をする。

「しおちゃん、お行儀が悪いわよ」

「だって、いつもより二割り増しで大汗かいてきたんだもん。今すぐお風呂に入んなきゃ死んじゃうよ」

「そんなわけないでしょ」

「あるの!」

そう言つて、問答無用でお風呂に突入。風呂場の戸を閉める際、

お母さんの呆れるような「もうっ」っていう声が聞こえたけど、ちよっと笑ってたっばいから問題なし。気分良く、お風呂で念入りに体と髪を洗い、温めの湯船にゆっくり浸かった。

お風呂から出た私は、バスタオルで髪をワシワシと拭きながら洗面所に向かい、ドライヤーで濡れた髪を乾かし始める。その間に、お父さんが「ただいま」と帰ってきた。ドライヤーの音が邪魔して、いつもの足音が聞こえなかったのがちよっと残念。

お父さんはすぐにお風呂に入り、カラスの行水の如き早さで出てきた。おかげで「いつまでやってんだ」と、乾かした髪をブラッシングしてる後ろから言われてしまった。

「女の子は時間がかかるものなの」
「程度つてもものがあるだろ」

そう言っつて、私の横に割り込んでドライヤーを使い始めた。

「それ言うんだったら、お父さんの方こそお風呂出るの早すぎるのよ。ちゃんと体とか洗ってきたの？」

「いいや」

「え……、ホントに……？」

思わず、反射的にお父さんから離れてしまった。

「嘘に決まってるだろ」

「……」

「いつまでそうしてるつもりだ？」

「お父さんのドライヤーが終わるまで」

「なら、念入りに乾かすとするか」

「お母さあん！ お父さんが意地悪するっ！」

こうしたささいな戯れもまた、私にとって日々の大切な時間であり、思い出の一つとなっていく時間だ。

そしてこの日の夕食の後片づけ後、今回はお父さんからではなく、私から引っ越しの話を切り出した。ちよっと躊躇い気味に。

「お父さん、昨日の話なただけどね」

「引っ越しのか？」

「うん。それでね……、えっと……」

言い出したはいいけど、やっぱりこんな訊き方していいのだろうかとの足を踏んでしまう。お父さんもお母さんも怒りはしないとは思っけど……。

「汐」

「う……ん」

促すようなお父さんの優しい声に、私は覚悟を決める。

「あの……、もしも、もしも……ね、私が生まれてなかったら、お父さんもお母さんも、ずっとこの家で暮らすつもりだったのかな……、って……」

どうにか言えた。でも、娘に『私が生まれてなかったら』なんて言われたお父さんとお母さんは……。

と思っっていたら、お父さんが即答してきた。それはもう、お前なに言ってるの？と言わんばかりに。

「は？ 何を言うかと思ったら……。んなわけないだろ」

この反応は予想してなかった。ちょっと驚いてお母さんの反応を確かめると、笑顔でこちらを見ていた。ただしそれは、呆れたり馬鹿にしたりしたものでじゃない。

「お前な、このアパート、築何年だと思っってた」

え？ そ、そういう話？

「俺とお母さんがくたばるずっと前に、このアパートがくたばるに決まってるだろうが」

そういう話じゃないのよお！

「ていうか、お前が成人する頃には建て替えるんじゃないのか？ それなりにガタが来てるし、修繕するにもけっこうな金かかるだろうし。ならいつそのことって。そうなれば、この部屋だってきれいさっぱり無くなる」

「じゃ、じゃあ！ 百年後もこのアパートがそのまま残ったとして！」

「さあな。つか、まだそんなこと言ってるのか？ 俺もお母さんも、

いつかはこの家とお別れすることぐらい分かっていたし、そのつもりでいた。だから、俺たちのことは気にするな。それよりも、一番大切なのは汐自身の気持ちだろ」

「私は……！ それはやっぱり、寂しいけど、お父さんたちは本当にいいの？」

「だからそう言ってるだろ」

そうは言われても、やっぱり納得できない。そしたらお父さんが、ふうと一息ついて、ゆっくり話し始めた。

「汐。俺が昔、この町が嫌いだったって話、したよな。」

ガキの頃からずっと、何の代わり映えもない、退屈な町だと思っ
てた。高校卒業したら、とっとこんな町から出ちまおうって思っ
てた。

でも、俺は渚と出会って、色々なヤツらと出会って、いつの間にか、この町が好きになってた。この町で暮らしていきたくって思う
ようになった。

そしたら急に、町の風景が変わっていくことが許せなくなった。

ついこの前まで当たり前にあったものがなくなったり、取り壊され
て別のものが建ったり。特に、旧校舎が取り壊されて、俺とお母さ
んにとって、いや、俺たち演劇部の連中にとってたくさん思い出の
あった部室がなくなるって知ったとき、本当に頭に来た。

なんだか、俺や渚や、他のヤツらの大切な思い出が、理不尽に根
こそぎ奪われてくみたいに思えてな。そんなこの町が、また嫌いに
なったこともあった。

でもな

「お父さんはそう言って目を閉じた。」

「部室も、学校も、他のいろんなものも、今も俺の目の前にあるん
だ。形はなくなってしまうけど、俺の中にはちゃんと残っている。
その風景も、においも、声も……」

「私も、あのときの思い出ははっきり覚えてます。まるで、昨日の
ことみたいに」

そして目を開けたお父さんが、お母さんと見つめ合った。

「この家もそうさ。俺たちは絶対に忘れない。忘れない限り、この家はずっと俺たちの中に存在し続ける」

そこ。二人で思い出に浸るのはいいけど、娘を無視しない。と思っただら二人揃ってこっちを見た。なんか、娘ながら恥ずかしく感じちゃう。

お父さんのお話は分かったような分からないような。だけど、とにかくこれだけは言える。お父さんもお母さんも、ずっと前から心の整理が出来ていた。もう私には何も言えない。あとは私だけだ……。

形あるものは、いつか必ずその姿を失う。それを拒絶するのではなく、その事実を受け入れて、新しい明日を迎え入れる。そして姿を失った過去は、消滅してしまうのではなく、人や町が記憶して、その中で生き続けていく。

これはお父さんの言葉。

そうだね。いつかはやってくるお別れ。やっぱり寂しいことではあるけど、このお家は私の心の中から消えることはない。いつだって私の中にある。だからこの別れを拒むのではなく、お母さんとお父さんにありがとうって言うべきだ。

そう素直に思えるようになった翌日の朝、私は引越に同意して、二人にありがとうって言った。

ということ、その翌々週の週末の今日、引越することになったのです。

って、こうして実際に話すと、けっこう恥ずかしいもんだね……。私、猛烈に格好悪いし……。

おっと。どうやら到着したみたい。

以上、説明終わりっ！

車から降りた私は、荷物運びの手伝いをすべく荷台へと向かう。

お母さんは家の中に。

「陽平おじちゃんに猫田さん、着きましたよ」

荷台に座っている二人に声をかける。だけど反応なし。ひよっとして、二人ともさっきのダメージがまだ残ってる？ とりあえず、陽平おじちゃんにトドメ刺したの、お母さんだからね？

それはさておいて、こういう状態の陽平おじちゃんの対処法は、何度も目の前で見てきたので知っている。実践したことはないけど、ということ、声を大にして初体験っ！

「あっ！ あんなトコに、すごい美人さんの大集団がっ！」

「えっ！？ どこどこっ！ 僕を待つてるお姉さん集団はどこっ！ 体育座りでしくしく泣いていた陽平おじちゃんが目にも止まらぬ早さで立ち上がり、荷台の上から周囲を見回し始めた。

よし。次は猫田さんだけ……。

と腕を組んだら、一足遅れて車から降りたお父さんが、慌てた様子で「汐っ！」と言ってきた。

「なに？」

「なにじゃない！ 女の子が大声でそんな台詞を、っていつまでもうるせえんだよお前はっ！」

お父さんが言葉途中に荷台からなにやら掴み取ると、陽平おじちゃんに向かつて思いつ切り投げつけた。それは見事なまでにおじちゃんの側頭部に命中し、そのまま崩れるように荷台に倒れた。なんか当たり所が微妙だったけど、陽平おじちゃんならきつと平気だ。痙攣してるけど大丈夫。うん。

「女の子があんなこと言うもんじゃないっ！ しかも大声でっ！」

え？ なんで私が怒られるのよ。むうっ！ と思っただけで言い返そうとしたら、お父さんの頭からごっつていう鈍い音がした。続いて、頭を抱えるお父さんの足元で軟式のボールがコロコロと転がった。

「なにそんなトコで遊んでいやがんだ！ さっさと運びやがれ！」

あつきーだ。しかもバット持つてる。

「っテーなっ！ 何すんだオッサン！」

「うるせー小僧！」

「ちよつとお父さん！ あつきーもっ！ こんなところで喧嘩してる場合じゃないでしょ！ 陽平おじちゃんと猫田さんを起こさない」と

「早苗のパンでもそいつらの口に突っ込んでおけっ！ ショッキングな味ですぐに目が覚めるだろっ！ さあこい小僧！ お前のへなちよこボールをこの俺様が」

あつきー、荷物運びに来たんじゃないの？ バット構えたら荷物運べないよ？

「私のパンは……」

あ、早苗さん。しかも、スポットライトなんてないのにピンスポットが当たってる。

「私のパンは……、ショッキングな味のパンだったんですねーっ！」

「さ、早苗ーっ！ 俺はお前のショッキングパンが大好きだあーっ！」

あつきーと早苗さんがすごい速さで走っていった。あ、お父さんが疲れた顔で手と膝をついた。陽平おじちゃんは失神したまんまで、猫田さんもぶつぶつ独り言つぶやいてる。うう、私、どうすればいいの？

とここで玄関の戸が開く音がして、お母さんが家から出てきた。

お母さんは、お父さんを見て「パ、パパ!? 大丈夫ですか？」

と、がつくりと手と膝をついて頂垂れたままのお父さんに慌てて駆け寄った。そしてお父さんが一言。

「もう、疲れた……」

続いて杏先生が出てきた。先生は、すぐに大声で怒鳴ってやるうとしていたようだけど、この状況を見て、怒りを通り越して呆れ果て尽くしたって感じで「……なにこのカオス」と呟いた。

そしてそこに、顔を手で覆いながらすごい早さで早苗さんが駆け抜け、続いてあつきーが何か叫びながら駆け抜けていった。

なんでこんなコトになってるんだろっ。

そう思いながら困っていると、杏先生の視線を感じ、先生を見る。

そしたら先生が、ため息混じりに私に言った。

「あんたら、ほんとに引っ越しする気あんの？」

「私はあるんだけど……」

こんなんで、今日中に引っ越し終わるのかなあ。

引越しの日 その3

一時はどうなることかと心配したけど、どうにか引越し作業は再開することができた。

ちなみに、お父さんはお母さんの必死の励ましで復活。

陽平おじちゃん、杏先生の超高速往復ビンタで復活。ただし、途中で口から煙みたいなもの出してたけど。

猫田さんは、復活したお父さんが本当に辛そうな顔で「もう、俺たちにはこの手しか残されていないんだ……。すまない……。」「と言って、猫田さんの口に早苗さんのパンを押し込んで復活。言動がちょっとおかしくなったような気もするけど、この際ぜいたくは言わないでおこう。

あつきーと早苗さんは、猫田さんが復活したすぐあとぐらいに戻ってきた。あつきーは、ずっと走り続けていたらしくて、大汗かいて息も切れ切れ。だけど早苗さんは、ひとしずくの汗もかいていなければ、息もまったく乱れていない。うーん、深く考えちゃいけないだろうなあ。

とにもかくにも、やっと作業が再開されることになって、お父さんとあつきー、杏先生、陽平おじちゃん、猫田さん、それと私とで荷物を次々と運び込んでいった。お母さんと早苗さんは置き場所の指示係とか色々。

そして一時間半後。軽トラックの荷台が空っぽになったところで一段落ついて、少し遅い昼食となった。メニューは、お母さんと早苗さんが今朝握ってくれていたおにぎりに、唐揚げ、卵焼き、サラダ、お漬け物。

総勢八人となる私たちは、わいわいと喋りながら頬張り、たくさんあったおにぎりは、あつという間にみんなのお腹の中に消えていった。もちろん、その他のものも。

そして食後の休憩。

「しっかし、あんたたちも随分と出世したものねえ。一軒屋住まいだなんて」と杏先生。

「借家だけだな」

「それでも、大出世に変わりないでしょ」

そう。新しい我が家は、なんとなんと一軒屋。築二十五年の平屋で、間取りは3K。六畳の和室が二つに、四畳半の和室が一つ、台所、あと水回り一式に、ささやかなお庭。引越先がこんな広い家だと聞かされたとき、てっきり、六畳二間のアパートとかに引越すものだと思っていたから、冗談言わないでよと笑って、完全に信じるまでにはちよつと時間がかかった。

だって一軒屋だよ？ それに、アパートと違ってお家賃がけっこう高いだろうし。うち貧乏ってわけじゃないけど、そんなに余裕はないはずだから、そう簡単に信じられるはずないよね。だもんだから、家賃は先方の好意で格安にしてくれたと説明されようが、見学目的で実際にこの家に足を運ぶまでは、お父さんには悪いけど半分疑ったままだった。

この家のお気に入りには色々あるけど、まずはお風呂が広いこと。湯船は二人入れるだけの広さがあり、洗い場も、子供同士なら余裕で洗いっこが出来るほど。今晚、さっそくお母さんと入ろう。

そして、これが一番のお気に入り。部屋の間仕切りになっている襖を取っ払えば見事な広間に変身する、二間続きの六畳の和室。わりと来客のある岡崎家の娘としてもそうだけど、十二畳間で三人のんびり悠々と、っていうのが魅力的だ。そして、今まさに広間となっている部屋で昼食を取っている。

この家と土地は、もともとはお父さんの会社の先輩のお知り合いのもの。二十年近く前に息子さんが転勤で家を出て、それからずっと、房子おばあちゃん一人で暮らしてた。そしたら二ヶ月ぐらい前、おばあちゃんの面倒を見たいって息子さん言ってきた。

おばあちゃん、けっこう悩んだらしいんだけど、結局引越すことにして、それじゃあ土地と建物はどうしようかってなったとき、

おばあちゃん的には壊したくなくて、この家を大切に使うてくれる人がいたら、その人に使つて欲しいって探してたらしい。それで、いい引越先があつたらつて前から話してたお父さんに白羽の矢が立つたつてわけ。

房子おばあちゃんはとつても優しくて、私はこの町の昔の話を聞いたり、お母さんはお料理を教えてもらつていた。なんだか史乃おばあちゃんみたいな人だった。昨日、息子さんと越して行つちやつただけど、もっと前から知り合えていたら、もっともつと色んな話を聞けたのにと、今さらだけ残念で仕方がない。

「それにしても、汐ちゃん良かったわね」

突然、杏先生がにこにこしながら話し掛けてきた。たぶん、この家のことだと思つて「はい」と答えようとしたんだけど、その前に先生が、すごいことを言つた。

「もつお父さんに着替えを覗かれることなくなるから」

次の瞬間、お父さんとあつきーが、ちょうど飲んでいたお茶を思いつ切り吹き出した。

気持ち分かるけど、二人とも汚いよ。

ついでに言つと、陽平おじちゃんはお父さんに指さして「おかつ、おかつ、おかつ」と繰り返すばかりで、猫田さんは目を開いて固まり、早苗さんは「あらあら」と頬に手を当てて笑つている。

そしてお母さん。

「きよ、杏ちゃんっ！」

「あ、ごめんごめん。渚も覗かれて」

「杏っ！ お前なあっ！ 娘の前で変な言い掛かりしてんじゃねーっ！」

お父さん、ちゃんと口拭いた方がいいよ。

「小僧っつ、俺の大事な娘と孫娘に、なんてことしやがんだあ？」

あつきーも。それじゃあどんなに凄んでも、まったく迫力ないし。

「おっさんはすっこんでろ！ 話がややこしくなるだろっ！」

「おかつ！ 岡崎っ！ テメーなんて羨ましいコト」

あ、陽平おじちゃんの顔にお父さんの拳が、お腹にあつきーが投げたキャッチャーマスクが、背中に杏先生の肘が入った。こういうときだけは、三人の息がぴったり合うんだよね。不思議だなあ。ところで、なんでキャッチャーマスクがここに？ あつきー、引越しの手伝いで来てくれたんだよね……。

これでまた作業が大幅に遅れるのかなと思っただけど、それから三十分ほど経ったところ、早苗さんの誰にも有無を言わせない号令で、作業が再開された。さすが早苗さん。

男の人は、手分けしてタンスの位置を微調整したり、テレビを繋げたり、洗濯機を使えるようにしたり、布団を押し入れにしまった。女性陣は、段ボールから食器や洗剤、調味料などを取り出し、それぞれの場所に適当に並べていった。

あそうそう。房子おばあちゃんから、食器棚と洋筆筒、着物を数着、他にもいくつか貰っていたりする。それらは、息子夫婦の家には持って行けず、もらい手も今のところなく、このままだと処分することになるから、出来れば使って欲しいとお願いされたもの。

おばあちゃんがそれらを大事に使っていたことは、私だっ一目見て分かる。それがゴミとなってしまうなんて、許せるはずない。お母さんもお父さんも同じ気持ちだったみたいで、大切にに使わせて頂きますと言って譲り受けることになった。

昼食後の作業は思いのほか時間がかかったけど、二時間ほどで終わった。といっても、それで引越作業の全てが終わったわけじゃない。今日と明日過ごすのに必要最低限な片付けをしたに過ぎない。残りは明日以降。

まあ、あとは私とお母さんでどうにかなるでしょう。明日は月曜日だけで学校の創立記念日で休みだから、私も丸一日荷物整理できるし、早苗さんも手伝ってくれるっていうし。

ということ、本日の作業はこれにて終了となり、ささやかな祝杯をあげるようになった。のだけど。

「パパ、お寿司でもとりましょるか」

「二時間前におにぎり食ったばつかだからなあ。そんなに体力使ってないし、晩飯の時間にはまだ遠いし。ビールとちよつとしたつまみになるヤツだけでいいんじゃないか？」

「でも、それじゃ失礼じゃないですか？」

「ん〜、そうだなあ。とりあえず」

お父さんはそこでいったん言葉を切ると、陽平おじちゃんを呼んだ。

「春原」

「なんだ？」

「お前、車返してきてくれないか？ そのまま戻ってこなくていいから」

「ちよつとあなた！ それだとボク寂しすぎませんかねえ！」

「俺は寂しくない」

「ボクだボクっ！」

「お前は」

突然お父さんがすごい真剣な顔をして、陽平おじちゃんの両肩にずしりと手を置いた。

「疲れた俺たちに、酒も飲まずに車を返してこいとも言うのか？」

「……ボクは疲れてないとも言いたいのか」

「そうか。お前はそんなに、俺たちのために車を返しに行きたいのか」

「誰もんなこと言ってないでしょ！」

「ということで済。春原の分はいらないそうだ」

「人の話を聞けよっ！」

テレビで下手なお笑い芸人見てるより、よっぽど面白いなあ。

「パパ、それでは春原さんが可哀想です」

「なに言ってるんだ。春原はこんなに喜んでんだぞ？」

「俺のどこをどう見ればそう見えるんだよっ！」

とここで、またお父さんがシリアスモードを発動。

「春原、お前は、感じないのか……？」

「な、なにをだ……？」陽平おじちゃんも神妙な顔になって、ごくりと唾を飲んだ。

「お前が」

「俺が……？」

「どうぞ私をコキ使ってくださいオーラを纏っていることを」

「そうか……、俺は、そんなすごいオーラを……、ってなんだよそれっ！ 嬉しくないよそんなオーラっ！」

というコントがそのまましばらく続くと思っていたら、杏先生の強制終了で幕が下ろされて、そのままお父さんと陽平おじちゃんと猫田さんで車を返しに行った。なお、猫田さんはこのあと用事があるということ、そのまま帰宅することになったんだけど、その用事ってというのが驚きだった。なんと、カノジョとデート。そうと知りながら陽平おじちゃんが強引に連れてきたらしい。

そんな大事な日に引越しを手伝わせてしまつてと、お母さんは何度も頭を下げ、お父さんもさすがに「そんな大切な日に、すみませんでした」と謝っていた。私はというと、いつの間にか猫田さんの言動が元に戻っていたことに、ちよつとほつとほつとしてた。

元に戻らないままデートして、もしもそれが原因で別れることになつたら、なんか責任感じてしまうから。それにしても猫田さん。今日初めて会つたけど、あまりにも第一印象どおりで、一生あんな感じなんだろうなあと思像したら、ちよつと可哀想に思えた。

お父さんたちが出発すると、お母さんが電話でお寿司を注文して、私と杏先生で飲み物などを買いに出た。

その道すがら。事前にもらつた地図を頼りに歩いていると、誰に言うともなく、呆れた様子で杏先生が言った。

「しっかし、朋也も陽平も、ほんつと進歩ないわよねえ」

「そうなの？」

「そう。高校のときからずっとあんな感じ。二人で馬鹿言い続けて誰かが止めてやないと、いつまでも続けかねないぐらいの勢いでね。まったく、あいつら何年成長止まつてんだって」

「ふうん……。でもそれ言ったら、杏先生も同じってお母さん言うてたよ？」

「……………」

「杏先生？」

「汐ちゃん？ 今言ったこと、ホント？ 渚が私のこと、成長止まってるって言ったって」

先生、声と顔は笑ってるけど、こめかみが笑ってない。

「そうは言ってないけど。昔とちっとも変わらないって」

「ふうん……………」

今度は微妙な顔になって、なんか考えている。ひよつとしないで、私の言いたかったことが伝わってないっぽい。

「先生」私は前に向き直って言った。今から喋る内容が、ちよつとだけ気恥ずかしいから。まあそれ以前に、余所見して歩いたせいで転びでもしたら、間抜けもいところだから。

「えっ？」

「この前、お父さんが言ってたんです。『人も町も、変わらずにはられない。それが、生きるっていうことだから』って。

私にはよく分かんないけど、それってつまり、何もかも同じままじゃないってことですよ。人との繋がりとか、関係とかも」

中学二年になって一月半。小中と同じ学校で、中学では同じソフトボール部の、とても仲の良い友達がいた。でも、二年生になって、その子は部活を辞めた。高校受験のためらしい。

最初は、随分と気が早いね、なんて言ったりして笑い合った。でも、クラスが別々なうえに、その子が部活を辞めてしまえば、長い時間を共有することは難しくなる。私は部活中心、向こうは受験勉強中心の学校生活を過ごしているのだから。

そして、時間とともに顔を合わせる機会が減り、お喋りする機会も減り、その子が私の知らない子と笑いながら勉強の話をしているところを見たとき、なんだかその子が、ずっと遠くへ行ってしまったような気がした。このまま終わってしまうような気がした。

変わらずにはいられない。

きっと私も変わり続けて、友達も変わり続ける。これから出会う人たちも変わり続ける。ずっと仲良しのままでいたいと思っても、なかなかそうはさせてくれないだろう。

「だから、今でも同じままでいられるみなさんが、ホントに羨ましいです。私もそういう友達が作れたらいいなって、思ってます」
私の言いたいこと伝わったかなと思って、杏先生を見る。先生は、なんだか照れくさそうに笑顔を浮かべていた。

「そうね。昔と同じように馬鹿し合えるって、けっこう貴重なことなのかもね」

引越しの日 その4

戻ってきたお父さんと陽平おじちゃんに向かって、杏先生が一喝した。

「馬鹿でしょあんたら！」

一時間ほどで帰ってくる予定だったお父さんと陽平おじちゃんは、さらに一時間半経って帰ってきた。しかもちよっとお酒臭い。

とこれだけの説明なら、二人ともこのあと杏先生に半死状態にさせられても文句は言えなかったと思う。でも、事前にお父さんから「ちよっただけ飲んでから戻ってもいいか？」って電話があつて、お母さんが「飲み過ぎないでくださいね」って了承していたので、それは免れていた。というか、なんでお父さんたちは怒られてるんだろう？ 私にはよく分からない。

「空気読みなさいよ！ だいたい朋也！ あんたこの家の家主でしようがっ！」

「いや、悪いとは思ってたんだがな？ 飲み屋からあまりにもいい匂いが……」

「そうそう、まるで、ゴキブリホイホイに吸い寄せられるゴキブリみたいにさあ」

「その例えはやめろ」

「じゃあ、蚊取り線香？」

「それは根本的に間違ってるぞ」

「じゃあ」

とここで、目を泳がせながら喋っていたお父さんと陽平おじちゃんの胸倉を、杏先生がぐわっと掴み、二人いっぺんに引き寄せた。途端に、二人は顔を青くさせて口を結ぶ。そして杏先生が、今度は一転して、怒鳴るのではなく凄味のある低い声でお父さんに言った。「陽平は別として、その誘惑を振り払うのが家主の務めなんじゃないの？」

すると、陽平おじちゃんが「あのおゝ、ならボクの胸倉は掴まなくてもいいんじゃない」と恐る恐る言った。けど、案の定ソッコで返り討ち。

「ああん？」

「ひいっ！ なんでもありませんっ！」

杏先生は自覚してないみたいだけど、先生のこういふところを、お母さんは変わってないって言ってるんだよ？

とここで、早苗さんが穏やかな口調で助け船を出した。

「まあまあ杏さん。いいじゃないですか。男の子同士で飲みたいときもありますよ。ね、朋也さんに春原さん？」

「そ、そうっす。なあ春原っ？」

「うんうんっ！ まったくもってその通りですっ！」

「とこのことで、この件はこれでお終いにして、お祝いの続きをしましょう」

さすがに杏先生も、早苗さんにこう言われてしまつては同意するしかないみたいで、仕方ないため息をついて手を離れた。お父さんと陽平おじちゃんは、安堵の息を長々と吐き出していた。

その後、帰還した二人を加えての宴会が始まった。それまでは、お酒を飲むのがあつきーと杏先生だけだったこともあつてか、わりと穏やかな宴会だった。けど、再開して間もなく、賑やかを通り越したテンションになっている。しかも、四人ともお酒を飲むペースが徐々に速くなっていた。

私としては、みんなの楽しい話がたくさん聞けて、楽しい光景もたくさん見られて、もうしばらくこのままであつて欲しいという気持ちが強かった。だけど、お父さんも陽平おじちゃんも杏先生も、明日はお仕事のはず。あまり飲み過ぎるのはよくないと思う。それを言ったらあつきーもそうなんだけど、その辺はあつきーも早苗さんもけっこうアバウトだから問題ない。いや、大いに問題なんだけどね。

お酒飲み過ぎて、会社に遅刻したり行けなくなったりしたら、す

ごく怒られるって聞いた。そういうときは「風邪引いたことにすりゃあいいんだよ」って陽平おじちゃんは言ってるけど、やっぱり嘘がバレて怒られているらしい。しかも、飲み過ぎでの失敗がその程度ならまだいい。

以前、陽平おじちゃんは、あんまりにもお酒を飲み過ぎて、家まで帰ってこれたんだけど、玄関の前で力尽きてそのまま寝てしまいい、明け方、そんな陽平おじちゃんを見た近所の人が警察と救急車を呼んで、大騒ぎになったことがあった。

他にも、家に帰るはずが、電車を乗り継いでトワイライトなんとかって夜行列車に乗り、目が覚めたら青森にいた、っていうことがあった。どちらも飲み屋さんで飲んだ記憶はあったけど、それから目を覚ますまでの記憶が全くないらしい。

まだまだ失敗談はあるし、お父さんの失敗談もいくつかあるけど、切りがないからもうお終い。とにかく、飲み過ぎは危険だったこと。そういえば、杏先生のお酒の失敗談って聞かないなあ。よし、今度聞いてみよう。

そうして宴会は続き、夜の九時を過ぎたところで、少々残念ではあるけど閉幕となった。

「さて、と……。私はそろそろ帰るわ。二日酔いで子供たちの相手をするわけにはいかないからね」

「かえって、二日酔いの方が子供らが喜ぶかもな。お前の機嫌が良くなつて、ちよつとは怖くなくな」意地悪く笑いながら言ってたお父さんが、杏先生に蹴り倒された。

「ああら朋也ちゃん。もうおねんねでちゆか？」

「お前がぶつ倒したんだろうが！」

あれだけの蹴りを受けてすぐに復活するお父さん。すごいなあ。まあ、陽平おじちゃんの復活の方が凄いけど。よく死なないなあって思うことも多々あるし。

杏先生の言葉がまるで合図のように、あっきーと早苗さんもそろそろ帰ると言い、陽平おじちゃんも、不承不承といった様子で帰る

と言い、飲み食いしたものを片付けてから、みんな帰っていった。

お母さんもお父さんも、当然わたしも、今日手伝いに来てくれたみんなにお礼を言っただけで帰ったことは、言うまでもない。

そして私たち親子三人、新しい我が家へ戻った。

家の中はひっそりと静まり返っており、つい今し方までの騒がしさが、まるで夢だったような気さえしてくる。

お父さんとお母さんのお友達が来ると、必ず賑やかな時間となつて私を楽しませてくれる。お話も、みんなのやり取りも、そして何が一番かって、みんなの楽しそうな顔が、私の心を心地良く踊らせてくれる。まあ、死にそんな顔とか引きつった顔もちよいちよいあるけど、それはご愛敬ということだ。

そして、楽しい時間はやがて終わり、みんな帰っていく。そこに残るのはいつも、静かになった家と私たち。そのことを寂しくないと言ったら嘘になる。だけど、悲しいとは思わない。お父さんたちとの楽しい時間は、これで終わりじゃないといつも思えるから。またすぐに、楽しい時間がやってくると信じて疑わないから。

家の中に入ると、お母さんが早々に「パパ、お風呂の準備できてるから、入ってきたら？」と、上機嫌なお父さんに言った。

「ああ、そうする。なんか無駄に疲れまくったからな。今日は」
確かに、お父さんの疲れのかなり多くが、引越作業以外のところにあると私も思うし、きっとそれは、他の人も似たようなものだと思う。無駄な疲れを残していないのは、ずっと観客気分だった私と、笑顔の絶えなかった早苗さんぐらいかな。

お父さんがお風呂に入っている間、お母さんと二人で、段ボールから十七個のだんご大家族を出し、どこに置こうかとあれこれ相談していた。けどなかなか決まらず、お父さんがお風呂から出てきたときもまだ決めることが出来ずにいた。そして、右往左往する私たちを見たお風呂上がりのお父さんに、「壮観を遙かに通り越した光景だな……。で、そいつらに襲われでもしてるのか？」と呆れ顔で言われてしまった。

一年に一つ。お母さんの誕生日が来るたびに、お父さんが探し回って買ってくるだんご大家族。それが、今や十七個。これだけあると、さすがに全部をアパートに置くことは出来ない。全部アパートに置くものなら、それこそだんご大家族しか住めなくなってしまう。というのは大袈裟だけど、素直に笑える冗談でないことは確か。事実、以前お母さんが「やっぱり、みんなと一緒にいいんですけど」と遠慮がちにお父さんに言ったら、真面目な顔で「却下」と即答されていた。

ということ、アパートには八個だけ置いて、残りはあつきと早苗さんの家の居候になっている。ちなみに、お母さんは「どれも大切な子たちだから」と言っては、こまめに家と実家を往復して、楽しそうにぬいぐるみを取っ替え引っ替えしていたりする。そんなお母さんの姿を見るたび、子供っぽいなあと思いつつも、我が母親ながらホント可愛い人だなあとに私はにやけている。お父さんはいつと、やっぱり苦笑していた。

だけど今度の家では、お母さんの念願叶ってついに勢揃い。誰一人欠けることなく、みんな揃って一つ屋根の下。うん。お母さんじゃないけど、なんか気分が良いな。

そしてそのぬいぐるみの配置については、まだまだ決められそうにないから、とりあえず私たちもお風呂に入ってしまったしようにというお母さんの提案で中断し、彼らを部屋の隅に集めて、お母さんと二人でお風呂に入った。

お風呂の広さは目で見て確認はしていたけど、実際に使っていると体感するとはこんなにも違うものなんだとびっくりするくらい更に広く感じ、浴槽でゆったりと足を伸ばしたときが特に気分爽快だった。これだけ気持ちいいと、さっそく毎日のお風呂が楽しみになってしかたがない。

あまりにも気持ちよかったので、私もお母さんも躊躇うことなく長湯した。

その間、二人でお喋りをしていたのだけど、それがマズかったら

しい。のぼせない程度に、という条件だったはずなのに、お風呂から出てからしばらく、私たちはのぼせた頭で火照った体から噴き出る汗と格闘しなければならなかった。

それからしばらく脱衣室で涼み、頭の方ははっきりしてきた。だけど汗は止まらず、拭いても拭いても埒があかないので、それだったらとバスタオルを体に巻いて、湯気で少し曇る脱衣室から出た。その直前、私を制止しようとお母さんが「はしたないですよ」と言ってきたけど、誰の目を気にしろと？と聞き流し、手の平でばたばたと仰ぎながら廊下に立った。

うん。こつちの方が遙かに涼める。

と、座敷からお父さんの声が聞こえてきた。

「十七年……か。そりゃあ増えるわけだ……。汐もあんなに大きく育ってんだし」

私はなぜか反射的に、自分の胸元を見てしまった。

自分で言うのも悔しいけど、お世辞でも褒められる代物ではない。まあ、まだ十四歳なんだから、これからこれから。

と自分を納得させるも、

でもあの子、同い年なのに……。

と同年の女の子を引き合いに不安になり、むう。私も早苗さんみたいになれるかなあ。

と淡い夢を抱く。

なんて感じで立ち止まっていたら、一度途切れたお父さんの声が再び聞こえた。そしてその声は、とても優しく、昔を懐かしむよう。

私はなんとなく、声をかけたり物音を立てたりしてお父さんの邪魔をしちゃいけないと思った。けど、そんなお父さんの姿を、ほんのちよつとでいいから、ほんの一瞬でもいいから見たい、という衝動も起こり、私は、足音を立てないように座敷に近付き、そつと中を覗き込んだ。

「一番末っ子は……つと、お前だったな」

こちらに背を向けて座っていたお父さんはそう言って、だんご大

家族のぬいぐるみの山から一つ手に取った。

「去年のクリスマスに、俺たちの家族の一員になったんだよな。お前を見つけるのに、ほんと苦労したんだぞ？ たぶん、お前たちの中で一番苦労させられたんだ」

お父さんはそこでいったん言葉を切り、手に持った末っ子を見つめている。きつと、いろんなこと思い出してるんだ。

そして、「二番目が……」と、末っ子を膝元にちよんと置いて、ぬいぐるみの山に手を伸ばす。

「お前だ。確かお前、俺が見つけたとき、店の奥でしょんぼりしてたよな。俺たちの家族になった感想はどうだ？ 俺たちの家族の一員になれて、嬉しいって思ってくれてるか？ って、ぬいぐるみに嬉しいもないよな。ははっ」

そこでまた言葉を切り、思いに耽り、その子を膝元に置いて「三番目は……」と手を伸ばす。そんなことが繰り返された。

四番目、五番目、六番目と。そして。

「お前が、十五番目だ。」

お前が家に来たとき、汐はまだ渚のお腹の中にいたんだ。生まれてくるそのときを、待っていたんだ……。

覚えてるか？ お前が俺たちの家にやってきたその日のことを。渚が、誕生日プレゼントは毎年だんご大家族がいい、一年に一つずつ増やして、ほんとにだんご大家族になったらいいな、なんて言い出して。最初は、さすがに呆れた。どんだけだんごだらけにするつもりだよって。

でも、渚がそう願うなら、俺はそうしてやりたいって思った。一つずつ増やして、あいつを喜ばせてやりたいって。

そして

とそこで、お父さんは残り二つをたぐり寄せ、言葉を続けた。でもその声は、それまでの懐かしむようなものではなかった。

「お前たちも見守ってくれていたあの場所で、汐が生まれて、渚が死んで……、そして、俺と汐も死んで……。」

あれは、夢でも幻でもない。間違いなく俺たちは一度死んでる。あれは全部、本当にあったこと。それでも今こうして、ろくでなしの最低な父親だった俺のそばに、渚と汐がいてくれる。俺を、支え続けてくれてるんだ……。

なあ……。

俺は、あの時より少しはマシな人間になれたかな……。

少しはマシな、父親になれているのかな……。

俺は……」

お父さんの声は、そこで途切れた。

私はそんなお父さんの背中に向かって、大声で言いたかった。でも、またいろんな事を思い出しているのかも知れない、それを邪魔してはいけないと思うと、声は出せない。そんな葛藤の中、とても小さな声で「しおちゃん」とやさしく声をかけられた。その声の大きさから、お母さんもお父さんの独り言をそつと聞いていたことが分かる。

私は振り返り、お母さんを見た。

お母さんは、自分の口に人差し指を当てている。お父さんの邪魔をしないようにしましょう、という合図だ。

やっぱり、そうだね。そう思って、喉まで出かかった言葉を飲み下し、再び部屋の中をそつと覗き込む。すると、お父さんはぬいぐるみを抱いて、こてんと横になっていた。しかも、すうすうという寝息まで聞こえてくる。

どうやら寝てしまったようだ。私は小声で「お母さん、お父さん寝ちゃったみたい」と報告した。

「そう。それじゃあ、パパが風邪引かないように、布団を掛けてあげないとね」

「そうだね」

「それと」

「？」

「しおちゃんも、風邪引かないようにパジャマ着ないとね」

そうだった。すっかり忘れてた。

その後、パジャマに着替えた私は、お父さんにそつと布団を掛け
てあげただけど、その際、「お父さんは、世界一最高のお父さん
だよ」と耳元で囁くことを忘れなかった。本当はもつと大きな声で
言いたかったけど、寝てる人の耳元で大声を上げるのは嫌がらせ以
外のなにものでもない。だから、大声を出したのは心の中だけ。

そして私は、だんご大家族に囲まれ、三男を抱くお父さんと、未
っ子を抱く私と、長男を抱くお母さんとで、川の字になって寝た。

新しい家での、初めての夜。

私は、天井に向かって「これからよろしくね」と心の中で囁き、
幸せな気持ちの中で眠りに落ちた。

Episode「引っ越しの日」 - 了 -

引越しの日 その4（後書き）

とりあえず最初のエピソード終了。しかし、一人称の小説書くの初めてだけど、ほんとに難しいものですね。しかも語り手が中学生の女の子と、私にとってはまるっきりの異世界で、言葉のチョイスも含めて何が何やら。まさに暗中模索の執筆となっております。

まだ登場していないヒロインを小出しにしながら、ショートエピソードによる連作という体で、気ままに連載していきたいと思っておりますので、お付き合いいただけたら幸いです。

ご感想、ご指摘等ありましたら、バシバシお願いします。

寄り道紀行 その1

引越しをしてから五日経った金曜日。登下校時の風景はまだまだ馴染んではいなかったけど、学校の中に入ってしまえば、それまでの日常とさして変わらない。せいぜい、引越し先の家はどうかのこのだのという話題が出たぐらいで、その話題も、数日でほとんど聞かれなくなった。

そして、この日の授業も終わり、いつもと同じように部活で汗を流している。

「次っ！ ショートっ！」

「はいっ！」

グラウンド中に響き渡る、ソフトボール部顧問の倉橋悠二先生の快活な声に、私は大きな声で応えて、ぐっと腰を落として待ち構える。

そして、先生の手にあるボールは小さく放り上げられ、鋭く振り抜かれた金属バットに弾かれる。軟式野球とはまったく異なる音とともに、先生のすぐ側でスタートのタイミングを待っていた一年生の安藤あやめちゃんが猛然と一塁へ走り出し、打ち出された速い打球は、私の正面にはではなく、ぎりぎり届くか届かないかの場所へと飛んでいく。

私は打球の軌道を頭の中に描き出すと同時に、一歩目を力一杯踏み出す。もしもこの一歩が遅れたり踏み出しが弱かったりしたら、間違いなく打球に追いつけない。そして打球は、精一杯伸ばしたグラブにかろうじて収まった。ただこれで終わりじゃない。捕球後、スリーステップした直後にボールを一塁へと投げる。矢のような送球、とはさすがにいかないけど、我ながらなかなか良い軌道を描いてボールはファーストミットにキャッチされた。

ただ、残念ながら一塁塁審役の子の手は上に上がらず、「セーフ」と両手を広げた。しかも追い打ちをかけるように、嫌みったらしく

にこやかに「はいノーアウト一塁」と先生が言った。

正直、今の打球を捕って、あの送球が出来ただけでも上出来だと思っし、打者役は一年生ながらチーム一の俊足。タイミングだってわりと際どかった、と思う。本音を言えば、ちょっとくらいオマケしてくれても言いたいところだけど、そんなことを言おうものなら、アウトカウントが二つ減ってしまう。ノーアウトならマイナスニアウト。つまりアウトを五つとらないと終わらなくなるということ。

そうと分かっている一言口にしてしまうような二、三年生はもういない。そういう人は去年の夏までに辞めている。

私は急いで守備位置に戻って、「次お願いします！」と声を出し、腰を落として待ち構えた。

結局、そのあと受けたノックは十回。つまり五失点。まあ、自分で言うのもなんだけど、悪くない数字だ。三つめのアウトをとると、一年生が守備につき、私は、その子が後逸したボールを捕るために後方に下がる。言ってしまうえばボール拾いなのだけど、ただの球拾いじゃない。私一人でカバーしなければならず、当然、打球に合わせて私も動かなくてはならない。しかも、球拾い役が捕球しそこなったり後逸したりすると、その人に一球あたりダイヤモンド一周のペナルティがつく。例えば今の私がミスをすれば、私が走らなければならなくなる。

といっても、さすがに入部して一ヶ月とちよつとの一年生に、怖がってしまいそうな速い打球や守備範囲ぎりぎりの打球を容赦なく打つことはないのです、こっちは体力的な意味でキツイとか辛いとかはないし、ペナルティを受けることは滅多にない。けど、やっぱりペナルティは怖い。

滅多にないということは、裏を返せば希にあるということ、ノックを受けている子がフアンブルして大きく後ろに逸らしたりすると、それを捕れるか捕れないか運頼みになることがあるからだ。

ということ、一年生は多大なプレッシャーを背負いながらのノ

ツクとなり、必然的に後ろにファンブルさせてはいけないという意識が生まれ、取りそこなったとしても、とにかく体の前に転がるようにしようとする。

まったくもって、意地の悪いことこの上ない練習方法だ。

ちなみに二、三年生の後ろには、そういった球拾いはいない。打球のコースがコースなだけに、後ろはきっちり拾えというのは無茶な話でもあるし。

こうして、週の練習の締めとして行われる恒例のノックが終わると、仕上げの柔軟体操を念入りにして、あとは片づけやグラウンド整備をするだけとなり、一年生も三年生も関係なく、部員全員で手分けして作業に取りかかる。しかも先生までほぼ毎回参加。

他の部の多くは、後片づけはたいてい一年生だけで行っているし、顧問が片付けに参加というのはうちだけ。ただし、こうなったのは倉橋先生がうちの学校に赴任してきて、ソフトボール部の顧問になった去年から。

それまでのソフトボール部は、その他大勢の部類に入っていたそう。しかも顧問は女の先生で、ソフトボールにはあまり明るくなく、かつたらしく、となればノックなど出来るはずもない。なかば生徒たちで勝手にやっていたようなもので、その当時を知る先輩は「あの頃は本当にヌルかったね」と笑っている。

それが、倉橋先生が顧問になって徐々に変化。スパルタとか熱血路線とかそういうわけじゃないけど、練習内容は厳しいものになっていった。以前を知っている先輩たちは先生のやり方に文句を言い、そのうち数人は辞めてしまった。だけど、結果的にはほとんどの人が残った。その理由はいくつかあって、基本優しくて明るい先生だし、とか四十歳と若くないけどちょっと格好いいから、とかあるけど、最大の理由は、「上達する楽しさを、感じたり思い出したりして欲しい」という先生の言葉を多少ながら実感していた子がほとんどだったから。

上達している自分を練習の中で感じる事が出来ると、やっぱり

楽しいし嬉しい。しかもそれが試合で生かされて、勝てたりするともっと楽しいし嬉しい。そうやって私たちは倉橋先生にしてやられて、今に至っている。

グラウンド整備やボール磨き、道具の片付けが終わると、キャプテンが「今日の練習はここまでっ！　ありがとうございましたっ！」と号令をかけ、本日の部活は終了となった。

そして私たちは着替えを済ませ、三々五々、それぞれの家路に就いていく。

私も数人と一緒にお喋りしながら帰り道を歩き、途中途中で別れ、そして今は一人で歩いてきた。

ゆっくりと後ろに消えていく風景。下見を足して、この道を通るのはこれで十回目。頭の中にしっかりと記憶されたものもあるけど、あやふやなものが多い。だから、というわけでもないけど、今のところ同じ通学路をなぞって歩いている。

そう。今のところ、は。

普段歩いている道でも、たまに思ってしまうことがある。こっちの道にいったら、その先はどうなってるんだらう、と。今はむやみやたらと知らない道に突撃することはないけど、子供の頃は、あっちへふらふらこっちへふらふらと、まるで誘われるように吸い込まれていったらしい。私には身に覚えがないけど。

だもんだから、私を連れて散歩するときは、片時も監視の目を緩めることが出来なかったと、今でも思い出したようにお父さんが笑うし、お母さんは未だに、私が迷子になってしまわないかちょっと心配している模様。

私、もう十四だよ？

子供扱いされていると思うと、ちょっとだけ腹が立つ。そりゃまあ、二人から見れば全然子供だし、事実子供なんだろうけどさ。

そんなことを考えながら歩いていると、ふと、通りの反対側にある一軒の建物が目に止まり、その脇にある細い道への誘惑がふと現れた。もし、その建物に何も感じなかったら、たぶんこの誘惑はな

かったと思う。

私は少し先の横断歩道で反対側に渡り、Uターンする。そして問題の建物の前で立ち止まった。

二階建てのその建物はひどく色褪せていて、壁や窓を見ても古くさがが際立っている。その古さは、小学生のときに授業で見た、終戦間もない頃の資料写真に写っていた建物に少し似ている気がする。まるで、この建物だけ時間から取り残されてしまっているような感じだ。

建物は以前お店だったのか、一階の通りに面した部分には格子のガラス戸が並んでいて、その上に看板が取り付けられていた形跡がある。今も営業しているかは不明。次通ったときに確認しよう。ガラス戸は木で出来ていて、戸を開けるとガラガラと騒がしい音が聞こえてきそう。カーテンで中が見えないし、さすがに今ここで戸を開けて、その音を聞いてみようとは思わないけど。

正面をざっと眺めると、次に見るのは脇の道に面した部分。私は角を曲がり、脇道に足を踏み入れる。

建物の間口もそれなりにあったけど、奥行きはその倍近くあった。ただし、建物の奥行きは全体の半分近く。残りは背の低い板張りの塀に囲まれた庭になっていて、庭の隅に大きな木が一本立っているのが見える。

玄関はこの道沿いであり、たくさんの植木鉢がずらりと並んでいる。どれもちゃんとお手入れがされているみたいで、この家の人がどれだけ大切にしているかが分かる。花を咲かせているものもあれば、これから咲かせようと蕾をつけるもの、まだまだなものも色々。全部の植木鉢で一齐に花が咲いたら、とってもきれいだろうなあと想像したら、ついつい顔がにやけてしまった。

とそのとき、道の向こうから声が聞こえような気がした。とても楽しそうな、いくつもの声。それは子供の声だったり、大人の声だったり。

私はもう一度はつきり聞こえようと、耳を澄まして道の向こうをじっ

と見つめる。だけど、さっきのような声は聞こえない。その代わり、不思議なことに、まったく異なる風景の中で舞い踊るたくさんの光たちが、ほんの一瞬見えたような気がした。

「なに？」

思わず驚きの声を上げてしまった。

でもすぐに、なんとなく、この体験が初めてのことだとは思えなくなっていた。きっと、小さい頃は見えたり聞こえたりしていたんだろう。そんな気がしてならない。だから、というわけではないけど、この道の向こうに行きたいという気持ち、もくもくと更に高まった。

「うーん、どうしようかな」

その場突っ立ち、腕組みをして考える。でもそれは、本気で悩んでの行動じゃない。当の本人が言ってるのだから間違いない。これは、一応悩んだよ？という自分への言い訳なのだ。

ということ、悩むフリをすること数秒の後、私の心に一点の迷いもなかった。そもそも最初から迷っていなかったという話もあるけど、それを言っちゃあお終いだから、その人、絶対に言わないこと。

そして私は、軒に並ぶ植木鉢を眺めながらのろりと歩き出したのだけど、板張りの扉が終わるところで一度立ち止まり、恐る恐るといった体で振り返った。背後にお母さんを感じたような気がしたからなのだけど、当然、そこにお母さんがいるはずもない。今は晩ご飯の準備をしている最中のはず。でも、「しおちゃん、寄り道しちゃ駄目ですよ」って言うお母さんの姿と声が本当にそこにあるような気がしてしまう。

お母さんは、鈍感なお父さんと違って妙に鋭いところがあるし、カメラが何かで監視してるんじゃないのかと思いたくなくなるときもある。以前そのことを言ったら、「そんなものなくても、ママにはちゃんと分かりますよ。だって、しおちゃんは私の大切な娘なんですから」と笑われてしまった。

そのとき、笑われたことに恥ずかしくなったのではなく、お母さんの台詞があまりにもこそばゆくて恥ずかしくなってしまうことをはつきりと覚えている。

「ちよっとだけだから」

私は、不満げに頬を少し膨らませているお母さんに向かってそう言い訳をして、再び歩き出した。その足取りには、申し訳ない気持ちなんてまったくくない。

「こんな素敵なお出迎えをされちゃあ、行かないわけにはいかないもんね」

寄り道紀行 その2

道の両側に並んでいるのは二階建ての住宅ばかり。そのどれもが、あの古ぼけた建物に比べればずっと新しいものに見えるけど、それでもこの風景には、『古き良き時代の閑静な住宅街』というフレーズがぴたりと合いそうな雰囲気がある。その時代を知ってるのかと聞かれると困ってしまうけど、とにかく良い雰囲気だったこと。

道は真っ直ぐではなく、少しカーブしたりY字路があったりして、このまま迷子になってしまっても不思議ではない。

そこで私は、そういえばと思い出す。それは、数ヶ月前にテレビで観た外国の映画。ある日主人公の男の人が、ふと目に付いた路地裏に、ほんの気まぐれで足を踏み入れる。そしてそこを歩いていくと、いつの間にか異世界に。主人公はそこで大冒険をして、大活躍して、お姫様とも良い感じになって、最後は元の世界に戻る、という色んな意味でファンタスティックな内容だった。

お父さん曰く「芸がないな」と冷ややかにコメントしていたけど、私はわりと楽しめたし、お母さんは私よりもずっとドキドキだったらしい。

その映画を思い出し、ひょっとして、私も異世界に向かって歩いてるのかな？ などと夢見がちな子供みたいな妄想をして、「ファンタジー世界じゃあるまいし」と笑った。

そしてすぐに、お父さんの話を思い出して「でも……」と笑いが薄らぐ。

私たち三人は別の世界で一度死んでいるという、とても悲しいお話。

そんなの、あまりにもファンタジー過ぎる。空想の世界でしか起こりえない。そういう気持ちもないわけじゃない。だけど、「本当にあった出来事だよ」と、もう一人の私が心のどこかで微笑んでいる。それに、私も今までに何度か不思議な体験をしている。引越

しの日に一瞬見えた光景もその一つだし、ついさっきだって。

だから、お父さんの話は本当のこと。なんだけど……。

ということは、私が向かっている先がファンタジーワールドという可能性も、ゼロじゃないってこと？

そう考えると、ちよつと不安になった。

私に大冒険とか大活躍とかしろって言われても、無理に決まっているでしょ。ただし、王子様といい感じっていうのは大歓迎。

というのは半分冗談だけど、そんなことをいちいち気にし始めたら、終いには家から一步も出られなくなってしまう。私は「そうならならなつたで考えればいいよ」と気を取り直す。

そして、この道に入ってから数分。ブロック塀の上に腹をべたりとつけて座り、尻尾をゆらゆら揺らしている猫を発見した。白と黒の、牛のような模様のその猫さんは、目を細めて私をじつと見ている。その様子に、実は私は牛ですとでも訴えたいのかなと想像してみたら、思わず吹き出しそうになってしまった。あながち冗談ではないと思わせるくらい、その猫が丸々と太っていたから。

試しに私は、「あなたは、本当は牛なんでしょ？」と聞いてみた。すると猫さんは、両の耳をひよこひよここと動かした。

「ねえ。角はどうしたの？ 隠してるの？ それとも、おつこどしちやつたの？」

猫さんは私を無視して、後ろ足で耳を掻こうとする。だけど、横にだらしなく突き出たお腹が簡単にさせようとしない。それでも猫さんは、太った体と首をどうにか曲げて、後ろ足を必死に伸ばして動かす。

たぶん届いているとは思うけど、数回に一回は空振りしているんじゃないかしら。

その可笑しくも愛らしい姿が壺に入って、私はケラケラと笑ってしまった。それでも猫さんには気にする素振りがない。でも、笑い止んでから私が言った言葉には、気分を害したみたいだった。

「ダイエツトしなきゃ、ほんとに牛になっちゃうよ？」

私がそう言っただけで、猫さんは「どっこらしよ」という掛け声が聞こえてきそうな動きで立ち上がった。私としては、もう少しこの猫さんを相手にしていたという気持ちがあったので、「ごめんなさい、冗談だよ」と謝った。それでもやっぱり機嫌は直らなかつたようで、もうお前の相手なんてしてらんないと言っても言うように、こちらにお尻を向けて、ブロック塀の上をのそのそと歩き出した。

ま、失礼だったのは私の方なんだし、どこかへ逃げられてしまうよりは遙かにマシかとの状況を受け入れ、猫さんの機嫌をこれ以上損ねないように、少し後ろを大人しくゆっくりと歩く。

まんまる太った猫さんの後ろ姿と、気怠そうに揺れる尻尾。それだけでも面白いのに、ぶよんぶよんのお腹が、一足ごとにだらしなく揺れているようにも見える。この光景を見て笑うなどというのは酷い話だと思ふ。でも笑っちゃダメ。でもやっぱり笑ってしまいたい。いやいや、我慢しなきゃ。で、でも。

と密かに自分と戦っている、そんな私に気付いたのか、ひよいと塀の向こう側に下りてしまった。いや、自ら落ちていったと言った方がいいかな？

とにかく、私の前から姿を消してしまった。
残念。

「ん、もうちょっとだけ見ていたかったな」
そう口にするも後の祭り。今度会ったときは、失礼のないようにしなきゃと強く思った。けど、笑わずにいられる自信はまったくない。たぶん失礼なことをする。その時は笑って許してね。

こうして、牛のような猫さんとの時間は終わった。さて、どうしようかな。

私はそう思って立ち止まる。すると前方に、今度は猫ではなく、『おおきぱん』と書かれた看板を発見した。

むむ。ライバル店？

もちろん、古河パンからずっと離れているからライバルということはない。でも、古河パンの血を引いている私としては、黙って見

過ぎすわけにはいかない。なんて。

ただ単に、他のパン屋さんを見ると、どんなパンがあるんだろうと興味がわくだけのこと。私は早速、『おおきばん』へと足を速める。そしてお店のすぐ近くまで来たところで、その光景にとても驚いてしまった。

私の知るパン屋さんというのは、あつきーと早苗さんのお店みたいに、店内にはパンを並べる棚や台があつて、その上に何種類ものパンが並んでいて、お客さんがトレイを片手にパンを選び、カウンターでお会計する、というもの。でもこのパン屋さんにはそういった棚が一つもないしトレイもない。それどころか、見上げたそこにあるシャッターを除けば、お店と道路を仕切るものは何もない。

そして、敷地に一步入つてすぐの所に、スイーツショップとかで見られるようなショーケースがでんと構えていて、その中に何種類ものパンと、それ以外にパックの牛乳やコーヒーなどの飲み物が並べられている。しかも店の片隅に、なぜか丸椅子が三脚、重ねられて置いてある。

まるで、商店街の小さな精肉店が、内装とか諸々そのままにパン屋になつたような感じ。と言つた方が分かりやすいかな？

その物珍しさに、お店の真前で足を止めて驚いていると、奥から白髪でシワだらけのおばあちゃんが出てきた。

「いらっしゃい」

心を落ち着かせる間もなく言われてしまったので、「あ……っ」と声を漏らしてから次の言葉を出すのに、ほんの少し時間が掛かつてしまった。

「ん？ どうかしたのかい？」

「と、いえ、なんでもないです」

「ならいいけどね。それで、どれか買うのかい？」

「え、と……、はい。パンを……」

私はしどろもどろでそう答えた。もともと、味を確かめるために一つぐらいは買おうと思つていたから、無理に言つたわけじゃない。

ただ、どれを買うかは決めていなかったもので、ショーケースの中を見ながら、その次の言葉を探さなければならなかった。

そんな私を見て、おばあさんが「うちの自慢は、コロッケパンだよ」とにこやかに教えてくれた。

「ただ、ちよつとだけ待ってもらわないといけないけど」

「え？ でも、ここに」

「どうせなら、出来立ての温かいのがいいだろ？ あと十五分くらいで焼き上がるから、それでも飲みながら、そこに座って待ってな」

おばあさんはどこか楽しそうにそう言って、ショーケースから三角パツクの牛乳を取り出す。

「でも、私牛乳は」

「牛乳は嫌いかい？」

「いえ、そういうわけじゃ」

「それじゃあ、コーヒーがいいのかな？」

「あの、飲み物は」

「んん？ …… ああ、そうか。そうだよねえ」

おばあさんは納得したように頷いて、「これはサービスだから、お金はいらないよ」とコロコロと笑った。

まさに凶星。私は急に気恥ずかしくなり、俯いてしまった。

「ふふふ。めんこいお嬢さんだねえ。いいからいいから、もらってくれ。ばあさんの頼みを聞くと思って」

そうは言われても、タダでもらうわけにはいかない。そう思って顔を少し上げる。

「お母さんのお父さんとお母さんもお店やってるから、何て言うかだからちよつぱり、もらえないです」

「そうかい？」

「ごめんなさい」

「謝ることなんて何も無いよ。私の方こそ、ごめんねえ」

「いえ、そんな」

ちよつと罪悪感。せつかくの好意を無下に断ってしまった。おば

あさんに嫌な思いをさせてしまったかな。

そう思ったけど、おばあさんは強かった。それじゃあ、と気を取り直して奥に消え、すぐに笑顔で戻ってきたその手には、お盆に載せられたお茶とお煎餅があった。

「これなら問題ないでしょ？」

はい。負けました。ここまでされたら、素直に頂くしかないですよ。

「すみません」

「ふふふ。出来たお嬢さんだねえ。ああ、申し訳ないけど、その椅子を出してもらえないかね？」

そう言われて、私は丸椅子三つをショーケース前に並べ置いた。

おばあさんはショーケースの横を抜けて、真ん中の椅子にお盆を置くと、自分も一つに座った。

ひよつとして、この為に置いてあったの？

そして私も、パン屋さんの軒先で丸椅子に座り、初対面のおばあさんとお茶を飲み、お煎餅をご馳走になり、気が付けば平然とお喋りをしていた。

最初は、こうしている自分がちよつと恥ずかしく思っていた。それと同時に、なんでこういう事になっているのだろうと頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいた。だけど、そんなものはすぐにどこかへ行ってしまった。おばあさんとお喋りがなかなか面白かったから。もうちよつと具体的に言つと、ついさっきのデブ猫で話が早々に盛り上がったから。

その話題を切り出したのは私。すぐそこで牛みたいな猫を見ました、と。おばあさんはその表現が気に入ったようで、確かに角を突いたら牛そっくりだねえとしばらく笑っていた。

「あの猫の飼い主、よつぽど甘やかしてるんでしょうね」

「ふふ。あれは野良だよ」

「野良猫っ！？」　　そ、そう言われてみれば、首輪してなかったかな？　あれだけ太つてると、首輪がぜい肉の中に食い込んで、見

えなくなっただけでもおかしくないけど……。でも、まさかあ。飼い猫じゃなきゃ、あそこまで太れませんよ」

「普通に考えたら、そうだろうねえ。でも、ここに住んで六十年近くいる私が言うんだから、間違いないよ」

「う。そう言われちゃうと反論できない……。でも、野良猫があんなに太れるものなんですか？」

「ああ。毎日たらふくマンマ食べてるからねえ」

「誰から？」あれだけ太ってしまったのは、独力で餌を確保するのは不可能なはず。そしてその答えは、考えずともすぐに分かりそうなものだった。

「ここいらの人たちと、私らで」

おばあさんはそう言って、にこりと笑ってショーケースを指さした。

なるほど。納得。

「あんまり食べさせちゃいけないとは思ってるんだけどねえ。ついあげちゃうんだよ。あれだけ肥えていてもさ。牛や豚じゃあるまいし、あの子を太らせてもいいことなんて何も無いのにな」

「メタボは基本、みんなの敵ですからね」

そんな話で時間はあっという間に過ぎ、お煎餅でふと思い出した、お父さんから聞いた『早苗さん特製お煎餅ぱん』を次の話題として話し始めたところで、おじいさんが焼き上がったコロツケパンを持つてきた。

まだまだおばあさんとお喋りをしたかったし、おばあさんもそのパンに興味を持ったみたいだけど、「お父さんは、『パンの中にまんま煎餅なんてありえない。ミスマッチどころの騒ぎじゃなかった』って、早苗さんのいるところで言っていましたよ。あ、早苗さんっていうのは、お母さんのお母さんです」と、その後の展開はあえて割愛して最低限の答えを返し、今日のところはお終い。

後ろ髪引かれるけど、また来ればいいんだし、帰り道の途中にあるんだから、いつでも来られる。

私は、試しに煎餅ぱんとやらを作ってみようかなと笑って言うおばあさんに、止めた方がいいと思うよと苦笑いして、おばあさんとおじいさんに「また来るね」と手を振りながらお店を後にした。

その手には、ほかほかのコロッケパンが二つ入った紙があった。

寄り道紀行 その3

私の寄り道はまだ続いている。といっても、実質歩いた時間は十数分程度。距離的にも時間的にも全然たいしたことない。と言いたいところだけど、経過時間は三十分を軽く超えている。あまり遅くなると、きつとお母さんが心配するだろうから、そろそろ真っ直ぐ家に向かって歩いた方が良さそうだ。

そう思いながら、私はほっかほかのコロツケパンをさっそく食べることにした。

しかし、私の右手には鞆とスポーツバッグが、左手にはパンの入った袋がある。つまり両手が塞がっているということ。となれば、鞆とスポーツバッグをどうにかして、右手を使えるようにする必要がある。そこで最初に思いついたのが、二つを胸の前でぎゅっと抑えつけて、その間に袋から取り出してしまおうという作戦。でも、いざやってみると思ったたより簡単にいかない。しかも、どうにかしてとやっている自分の姿が、耳を掻こうと必死に体をねじ曲げ、足を伸ばしていたさっきの猫さんの姿と重なってしまい、首から上を真っ赤にして止めてしまった。

ちなみに、無様な自分の姿が見られていないか、直後に怖々と周囲を確認し、誰もいないことにほっと安堵のため息をついていた。もしも誰かいたら、全速力でこの場から逃げていただろう。更にその誰かと目があたりしたら、恥ずかしさのあまり悲鳴も追加されていたかもしれない。それほど、猫さんのあの姿にはインパクトがあったわけだ。

こうして最初の作戦が失敗に終わり、このまま食べずに家に帰ろうかとも思ったけど、まだ方法はあると気を取り直す。

深く考えずとも、要は見苦しくない取り出し方をすればいいだけの話。そしてその方法は実に単純で簡単。ということ、道路の端に寄り、立ち止まって鞆とスポーツバッグを地面に置く。これで万

事解決……、なのだけど。

最初っからこうしていれば……。

と思うと、自分の頭の悪さにカラ笑いしてしまいそうになった。けどそこで、なぜかお父さんの情け容赦ない冷ややかな突っ込みが頭の中で聞こえたような気がしたので、笑ったら負けだと慌てて顔を引き締める。そしてそんなお父さんに、女の子の食べ物への執念は、そう簡単に消えたりはしないのだと心の中で高笑いしてみせて、心の内を誤魔化した。

これで問題は全てクリアとなったので、あとは美味しく頂くだけ。袋からパンを半分だけだし、顔の前に掲げる。そして小さく一口、まずはパンだけかじりとる。量が少なかったなので、焼きたての温かさを存分に味わうことは出来なかったけど、ふっくらしたパン生地の食感、そしてほんのり甘い味は十分に味わうことができた。その感想は、満点を通り越すおいしさ。

これだけでこんなに美味しいと、あのパン屋さんの食パンも食べてみたくなる。当然、マーガリンとかジャムとか謎のジャムとか一切塗らずに。よし、次は食パンも買おう。

口の中のパンはあっという間になくなり、いよいよ本番。

私はパンとコロッケをがぶりと頬張ろうと、口を大きく開けた。

がしかし、見知らぬおじさんが乗った自転車が、タイミング良くこちらにやって来た。しかも、目が合ってしまったような気がした。

うわー……。

そんな脱力感のある悲鳴が、心の中で上がる。

おじさんはこちらをじっと見たり笑ったりすることなく、何事もなかったように私の前を通り過ぎていったけど、みっともないところを見られてしまったと思うと、ちよつとシヨック。

こんなところをお母さんに見られたら、間違いない「お行儀の悪いことですか？」と怒られる。お父さんだったら、「気にすることか？」と不思議そうな顔を向けてくるだろう。私のお父さんは、

周りの人にどう見られるかという点について、かなりいい加減なところがあるから。そういつたいいい加減さに、娘ながらに、親としてそれはどうなんだろうと真剣に悩んでしまうことがある。

それはさておき、このままシヨックで食べられなくなるような私じゃない。岡崎朋也の娘であり、古河秋生の孫娘が、こんなことでしょげてどうする。

私は即座に立ち直り、再び大口を開けようとする。さすがに周囲の確認はしてだけど。

そして、がぶりと一口。

最初の一口と違って、ほくほくのコロツケの熱さが舌の上で踊り、口を開けたままハフハフと口内に空気を送り込む。火傷しそうな熱さではなかったけど、数回やらないと食べ始められなかったのは、頬張りすぎた証拠だろうか。

まあでも、味を堪能するにはそれなりの量が必要だから。

そうしてゆつくりと味わい始める。

お、美味すぎる……。

料理番組のコメントーターじゃないから、この味がどうでここがどうか説明できないけど、これだけは言える。

もしこれが漫画だったら、今頃わたしは人でなくなってしまったり、ロケットみたいに空高く打ち上がってしまったり、私の後ろでとんでもない事が起こったりしていただろう。

とにかく、それぐらい美味しいということ。あっきーのパンも美味しいけど……、あっきー、これはかなりの強敵だよ？

二口目がきれいに胃の中に消えると、にこにこ顔で三口目にとりかかる。でもその前に、鞆とスポーツバッグを右手に持ち、ゆつくりと歩き出す。まさかこんなところに突っ立って食べ続けるわけにもいかないから。しかも、にへらと笑みを漏らしながら。

だからといって歩きながら食べるというのも、お行儀の悪い行為であることに違いはない。しかも、もうすぐ晩ご飯が控えている。だけどおばあちゃんに「温かいうちに食べてね」って言われてるし、

部活でお腹ペコペコだし、これ以上は食べないで我慢してなさいって言われても、それは無理。そんなことしたら、私の胃袋さんが大激怒だよ。

というわけで、私は多少周囲を気にしつつ、コロツケパンをぺろりと平らげた。

「ん〜、満足満足」

パンの入っていた袋を右手に持ち替え、スカートのポケットから取り出したハンカチで口元を拭き、お食事は終了。短かった至福の時間も同じく終了。それがちょっと残念で、もう一つ買ってあげれば良かったと思っただけど、そんなことしたら、確実にこの場で二個目に突入して、晩ご飯のための空きスペースがなくなってしまう、買い食いしたことがお母さんにバレてしまう。

やっぱり一つだけで正解だったかな、と納得したところで、聞き慣れた音がどこからか聞こえてきた。その音のする方へと意図的に歩いたわけじゃなく、たまたま帰る方向がそちらだったからだけど、音は徐々に大きくなり、やがて小さな公園の前に出て、音の正体を目にした。

そこには、コンクリートの壁に向かって軟式のボールを投げている一人の男の子がいた。その子の身長と、手足の細いから、たぶん小学生だと思う。

野球をする子供の姿は、物心ついたときから見えてきた。それに混じって私もボールを投げたりバットを振ったりしていたし、お父さんやあつきーとキャッチボールもした。お父さんは野球にあんまり詳しくないけど、あつきーがすごく詳しいから、色々教えてもらったりもした。特に、昔のプロ野球選手のモノマネを。

公園で野球する子供たちや、その中で大人げなくはしゃぐあつきーと、大人げのあるお父さん。私。ビニールシートの上で観戦するお母さんに早苗さん。いつだって、いくつもの笑顔がそこある。

だからだろうか、一人で練習する男の子の姿にちょっと寂しさを感じ、声をかけようかと思った。でも、余計なお世話ということも

あるし、邪魔をすることになるかもしれない。そう迷っていると、まるでそれを察したかのように男の子が暴投し、跳ね返ったボールがこちらへと転がってきた。

私は少しばかり移動してそれを拾い上げ、ボールを取りに来た男の子に「いくよー」と軽く投げ返す。その距離はだいたいダイヤモンドの一辺といったところ。言い換えると、例えば一・二塁間とか。ただしソフトボールのだけど。

すると、男の子はノーバウンドで投げ返されたボールを驚いた顔でキャッチし、私をじつと見つめた。なんで驚いているのかなんて考えるまでもない。私は、白々しく「ん？　どうかしたの？」とにこりと笑顔を見せる。

「べ、べつに……。あんまりへ口へ口ボールだったから……」

男の子はそう答えたけど、可笑しいほど悔しさがにじみ出ていた。きつと、女のくせにとか思っているに違いない。私が小学生の頃に、まったく同じ台詞を言った男の子が何人もいたから。まあ気持ちは分からないでもないけどね。

だから本気にして怒るような真似はしない。そのかわり、冗談でにこやかにこう言っただけだ。

「ごめんね。速い球は捕れないと思ったから」

案の定、男の子は「なんだとお！」と怒った。

「嘘つくんじゃないよ。どうせ今のが全力なんだろう？」

「じゃあ試してみる？」

「やれるもんならやってみろ」

おお。これは良い展開かも。

「じゃあちよつと待ってて」そう言っただけで、ルンルン気分でスポーツバッグからグラブを取り出す。その光景に、またしても驚く男の子。「はい。オーケー。つとその前に、私の名前は、岡崎汐。きみは？」

「駒田正一」

「コマダって……、満塁男の？　まさか、君のお父さんって」

「なわけないじゃん」

男の子が呆れ顔で即答。もうずっと昔のプロ野球選手を女の子ながらにたくさん知ってる私も私だけど、即答したこの子も相当なものだ。しかも、「下の名前が正一なんて、すごいね」って言ったら「金田よりも村田兆治の方が好き」と、これまた小学生とは思えない返答をしてきた。ってどうかその若さでシブ過ぎるぞ正一くん。

などとお喋りをしながらキャッチボールを始めた。

正一くんのボールは、なかなか速かった。だけどコントロールにまだ難あり。そして私のボールを受ける正一くんは、最初こそ「こんなもんかよ」と軽口を叩いていた。相手の力量がまったく分からない以上、急にスピードをアップさせるわけにはいかない。

だけど、これぐらいは大丈夫かな？ と一球投げるたびにスピードを上げていくと、次第に余裕がなくなっていくのが見て取れたし、正一くんの軽口は確実に減っていった。そして適当なところでスピードを落とす。

「どう？ お姉ちゃん、けっこう上手いでしょ」

「ふん。まあまあだな」

このぐらいの年頃の男の子はたいてい、敵わない女の子に対して負けを認めようとはしない。それは仕方のないことだろうし、負けを認めさせるつもりなんて毛頭ない。私はただ、この子とキャッチボールがしたかっただけだから。

「そっか。まあまあか」

「まあまあだ」

「じゃあ、もつと練習しないとね」

「そっだぞ」まるで先輩風を吹かせるような口ぶりだけど、正一くんの表情はとても楽しそう。つられて、私もさらに楽しくなっていた。

そうして、しばらくキャッチボールをしていると、男の人の「正一」という呼びかけの音が、私の背後から聞こえてきた。すると、正一くんは私の後ろに向かって嬉しそうに「お父さん！」と声を上げたので、私は後ろを向いた。

そこには二人の大人がいた。一人は正一くんのお父さん。そしてもう一人が。

「あ、智びょん！」

スーツ姿の智びょん、本名、倉橋智代さんだった。

ん？ あれ？ 智びょん急に顔が赤くなつた。それに、正一くんのお父さんが目を丸くして驚いてる。なんで？ あ、お父さん笑つた。

「汐ちゃんっ！ その呼び方は外では止めてくれと！」

忘れてた。智びょんは、この呼び方に限ってはとつても恥ずかしがり屋さんだったんだ。

寄り道紀行 その4

正一くんは、嬉しそうにお父さんと手を繋いで帰っていった。その際、女子のわりにはスゲー上手かったぞと褒めてくれた。どういたしまして。

「それで、なんで汐ちゃんがこんなところに？」

二人きりになると、智びよんがさかさず問い質すように聞いてきた。

「智びよ、じゃなくて智ちゃんこそ」

「私は、つい先程までこの近くで仕事してたから。今は事務所に帰る途中。で？ 汐ちゃんは？」

あっさり答えられてしまうことは分かりきっていたけど、智びよんのターンがこんなに短いなんて反則だ。

「え、と……。通学路……。だから？」 あえて疑問形で答える、ちょっとピンチな私。

ちなみに智びよんは、岡崎家が引越した事は知っているし、引越し先の住所も知っている。今日は部活の練習日だということもそれは、智びよんがお母さんとお父さんの高校の時からのお友達で、私も智びよんとは小さいときから何十回と一緒に遊んだ仲で、一ヶ月ほど前にも会っていろいろお喋りしているから、といった理由があるけど、他にもある。

智びよんの旦那さんが、我がソフトボール部の顧問、倉橋先生だから。

「なるほど。と言いたところだけど、随分とその道から外れてるんじゃないのか？」

「あはは……。なんとなく、吸い込まれちゃって……」

照れ笑いの私に、智びよんは「まったく」と苦笑しながらため息をついた。そして私はこの隙について、つい今し方手に入った形勢逆転の一手を、ばしっと力強く打った。その眼差しは、なかなか

鋭かったと思う。

「それより、智ちゃん！」

「な、なに？」急に声を大きくした私に、智ぴよんがちよつと驚く。そんな目の前の智ぴよんに、ビシツと指を差して言った。

「イエローカード！」

智ぴよんは「え！？」と驚きの声を上げ、すぐに「私、普通に話してたでしょ？」と苦しげに弁明する。けど、残念ながら私はしっかり聞いていたし、聞かなかったことにはしない。チャンスは確実に活かして、一点でも多く取ろうって、倉橋先生がいつも言ってるからね。

「うっん。『外れてるんじゃないのか？』って、言ったよ？」

その言葉で思い出した智ぴよんは、「あ……！」と口を押さえた。実はこれ、智ぴよんの男の子口調に対する注意。

私がまだ小学生の低学年だった頃、自分の口調をどうにかして直さないと困っていた智ぴよんに、私も協力すると言い出して始めたもの。男の子しかないような言い方したら、今したように「イエローカード」と注意するのだ。

なんで智ぴよんがそんなことを言い出したのか、その当時の私には理解できなかったけど、いまだ理解できないほど馬鹿じゃない。

その頃の智ぴよんは、この町のために何かできないかと考えていて、周りの声にも押されて議員さんを目指すことになったんだけど、その為には喋り方を直す必要があるっていうことになって、という次第。

確かに、あの口調のままじゃすぐに色々と問題が出るだろうと、私だって思う。

そして、智ぴよんは恥ずかしがりながらも努力して、特例は別として、今ではよっぽどのがない限りは、眉をひそめられたり注意されたりするような男言葉を口にするのではなく、市議会議員としてがんばっている。って、普通の女の子だったら、がんばらなくても喋れるんだけどね。

で、今みたいに男の子口調になるときも希にあるから、その時は注意するようにしている。

智びよんは申し訳なさそうに「すみません。気をつけます」とぺこりと頭を下げ、私が「うん。気をつけなきゃ駄目だよ?」と言うと、二人でくすくす笑いあった。どうやら私の寄り道の話はどこかへ行ってくれたみたい。良かった良かった。

「さて、いつまでもここでお喋りしてるわけにもいかないから、帰ろうか」

「はい」

私はそう答えて、はたと思った。

「ここ、どの辺りだっけ? っていうか、どっちに行けばいいの? どうしたの?」

「あ……、大丈夫」

完全に方向が分からなくなっちゃった。こうなったら秘密兵器を出すしかない。

私は鞆をあけ、中に入っているはずの秘密兵器をごそごと探し始めた。だけど、すぐに見つかるはずのそれがなかなか見つからず、徐々に焦りが出てくる。そして、ついには教科書とノートを引っ張り出して隅々まで探したのだけれど、結局それは出てこなかった。

信じ難いこの結果に動揺してしまった私だったが、その理由を思い出したとき、自分の間抜けさに思いつ切り脱力してしまった。

そう。今日学校で友達にそれを見せたあと、鞆に戻さず机の中に突っ込んだんだ。ああ、なんてこと……。

「何を探してるの?」

「秘密兵器……」

「秘密、兵器?」

智びよんが疑問形で返してきた。そりゃそうだよな。

「お父さんがくれた、地図」

これが秘密兵器。一週間ほど前に、万が一に備えてとお父さんがくれた、新しい通学路周辺のロードマップをカラーコピーしたもの。

番地もしっかり記載されているので、まさにこの時の為にもらったような地図だった。だけどそれは今、学校の机の中。

「ひょっとして、道が分からないの？」

「……この辺りは、まったく」ため息混じりに答える。

「やれやれ。寄り道なんかするから、こういうことになるんだぞ？」
うう、そのとおりです。

「それじゃ、私が家の近くまで送ってあげよう。だいたいの場所は分かっているから」

実を言うと、どっちに向かえば大通りに出られるかさえ教えてもらえば、あとはどうにかなると思っていた。だけどせっかく智びよんこうして会えたのだから、早々にバイバイしてこの偶然を終わりにしてしまうのは、あまりにももったいなさすぎる。ということ
で、私は「お願いします」と答え、引つ張り出した教科書とノートを鞆に戻して、智びよんの横にびたりとついて歩き始めた。

こうして並んで歩いていると、冗談抜きで寄り道して良かったな
と思ってしまう。なんて口にしたら、智びよんはどんな顔するかな
帰り道の話題は、新しい家のことに終始した。智びよんが質問する
というより、私が一方的に喋り続ける感じで。それはもう、引つ
越する前は何だかんだと言っていたのに、いざ引つ越して暮らして
みると、こうも自分の言うことが変わってしまうのかと呆れるほ
どに。だもんだから、話し始めて一分も経っていないのではと本気
で思えるほど、その時間は一瞬のうちに終わってしまい、大通りに
出て足を止めたとき、物足りなくてしかたなかった。

「ここまで来れば、もう大丈夫じゃない？」

大丈夫だけど、どうしようかな。もっとお喋りしたいし、どうせ
なら家まで来て欲しい。

なんて考えている姿が、智びよんには自信がないと映ったようで、
「この道は通学に使ってないの？」と聞いてきた。

「使ってるけど……」

「だったら、問題ないんじゃない？」

問題はある。とつても個人的な別の問題が。

「ねえ、智ちゃん。このあと仕事？」

「仕事というほどのものはないけど。あとは事務所に戻って、書類をしまうぐらいかな」

これはチャンスかも。私は勢い込んで「だったら、このまま家に来ない？」と誘った。すると、それまで私が曖昧な言い方をしていた理由を理解した智ぴょんが、少し目を細めて「そういうことが」と呟いた。

「駄目かな」

「そういうわけにもいかないでしょ。こんな時間にお邪魔しては、迷惑になってしまう」

「迷惑じゃなければいいの？」

とそのとき、車の短いクラクションがすぐ側で響いた。私も智ぴょんもちよつとびっくりして、思わずそちらに振り向く。そのときは、なんてタイミングで邪魔するのよと腹が立ったけど、すぐに前言撤回することになった。

なんとそこには、光坂電気と大きく書かれたバンが路肩に止まっていて、その車の運転席には、作業服を着たお父さんがいた。ちなみにその隣に座っているのは芳野さん。どうやら、私たちを見つけたお父さんが車を止め、声をかけてきたようだ。

「お前ら、そんなとこで何やってんだ？」

「お父さん！ ナイスタイミング！」

「は？」

「あ、芳野さん、こんばんは。ねえお父さん、今から智ちゃんがうちに来て、全然問題ないよね」

「そりゃあ問題ないだろうけど……」

お父さんは話が見えないといった顔で智ぴょんを見た。そして私も、してやったりと智ぴょんを見る。

「ほら！ 問題ないって！」

「しかし……、やはりそういうわけにも」

とここで、話に置いてけぼりのお父さんが「ちよつと待て汐。いたいどうい流れてそういう話になつてゐるんだ？」と私に質問した。

「さつき智ちゃん偶然会つて、だから家に招待したいって思つて……なるほど。お前らしい話の流れだな」

なんで呆れ顔？

「まあ、智代がよければ、いいんじゃないか？」

「岡崎まで。さすがに今からはマズイだろ」

「マズくはないし、むしろ渚も喜ぶと思うぞ。いや、喜ぶこと確かだな。なんだつたら、電話してみようか？」

電話をすれば、余程のことがない限りお母さんが喜んで招待することは目に見えている。智びょんもそれが分かっているから、「う……。そう言われたら、何も言い返せないじゃないか」と答えるしかない。いいぞお父さん。

「んで、都合はどうなんだ？ 冗談抜きで都合が悪いのなら、しかたないけど」

そして智びょんは、観念したという手振りで「……分かった。少しくらいなら大丈夫だから、遠慮せずにお邪魔させてもらおう」とOKしてくれた。

よしっ！

「じゃあ決まりだな。汐、智びょんを頼んだぞ」

私は「はい」と答えて、走り出す車に手を振り、智びょんは拳を握り顔を赤くして「お、岡崎っ！」と叫んだ。智びょん的には、誰よりもお父さんにこう呼ばれるのが一番恥ずかしくて、腹立たしいらしい。だからお父さんは、たまにわざと「智びょん」という言葉を本人の前で言ったり、今みたいにそこだけ強調したりしているんだだけ。

お父さん。あんまり意地悪すると、いつかの陽平おじちゃんみたいに、智びょんに三途の川を何往復もさせられることになっちゃうよ？

そうそう。お父さんと喋っていたときの智びよんの口調。本来ならイエローカード連発なんだけど、実はお父さんと陽平おじちゃんと喋るときだけ特別に免除される。それが三人にとつて一番不幸じゃないから、つて三人揃って言うてるけど、私から見れば、お父さんと陽平おじちゃんが失礼すぎるだけ。

だつて二人とも、女の子らしい言葉遣いをする智びよんと話すとすぐに笑いだすんだもの。しかもいまだに。まあ、智びよんの女の子言葉を耳にしたらだけで笑いだしてた昔に比べれば良くなったんだけど、それでも失礼なことにはかわりない。ほんと、二人ともデリカシーないんだから。

その後、智びよんは連絡なしに何うのは失礼だからと我が家に電話し、予想と寸分違わぬ答えをお母さんがして、めでたくご招待となり、私は智びよんを連れて上機嫌で帰宅。お母さんも、「来てくれて本当に嬉しいです」とにこにこ顔で出迎えた。

そして、この日最後のサプライズが。

三歳になる晴樹くんのお母さんである智びよんは、本来なら三分ほどで帰る予定だったのだけど、うちで晩ご飯を食べていくことになった。その経緯はというと、まず倉橋先生から、同僚の先生と飲みに行くことになったと電話があつて、その際、私の家にいることを言ったら、先生がこう言ったそうだ。

「晴樹のことならお義父さんとお義母さんに任せればいいよ。私からも言つといてあげるし、今日はまっすぐ帰る。だから、気にしないでゆつくりしておいで」

さすが倉橋先生。ちなみに先生と智びよんは、晴樹くんが生まれたことで、智びよんの両親と一緒に暮らしている。

それはさておいて、こうしてこの夜、十七個のだんご大家族の物欲しげな視線をさらりと流しつつ、私とお母さんとお父さんと、そして智びよんとで、賑やかで楽しい夕食を食べた。

寄り道つて、いいものだね。

E P I S O D E 「 寄り道紀行 」 . . .

寄り道紀行 その4（後書き）

エピソード2終了。今回は智代編でした。

智代の設定についておさらいすると、既婚者で三歳の息子がいる。仕事は市議会議員。そして智代らしい口調は変更され、女性っぽく。現実問題、あの口調のまま議員さんって、無理ありすぎると思うたので。

その他の設定やちょっとしたエピソードもありますが、智代の物語じゃないので割愛。

こんな智代なんて嫌だ、という方もいらっしゃると思いますが、ご容赦いただけると幸いです。

その一声は慎重に その1

私のお母さんは、驚くほど若く見える。たぶん、二十歳と言ってもほとんどの人が信じるだろう。お母さんと二人でいるところに友達と遭遇したりすると、「あれ？ 一人っ子って言っただけじゃなかったけ？ なんだ、お姉さんいたんだ」と本気で私に言ってくるぐらい。ついでに言つと、お母さんは娘の私から見ても可愛い。

これで、若さを保つための努力を何一つ意識的にしていないのだから、世のお母さんのどれだけの人が羨むことやら。また、努力がまったく報われないお母さんたちにとっては、羨むどころか妬ましくて憎々しい存在だろう。

娘の私としては、無論そんな母を大歓迎。だって、将来私もお母さんみたいになれる可能性があるっていうことだから。

ああ、なんて罪深いお母さん。

そしてその罪は、去年の年末辺りからさらに深くなった。

それまでは、お母さんと二人で歩いていて、知らない男の人から声をかけられたりナンパされることはなかった。それはそうだろう。隣に似た顔の、小学生と思われる女の子がくっついていれば、私たちを親子と思わないにしても、自然と対象から外されるのだから。

ところがここ半年ほどで、まだ片手で足りる回数ではあるけど、二人でいるときに若い男の人から声をかけられるようになった。

例えば、いま現在のように。

「かゝのじよゝたちゝ。かゝわいいねゝ」

十代後半から二十代前半と思われる、見るからに軽薄そうな男の三人組の一人が、こちらが笑い出してしまうような軽薄な口調でシヨッピングモールのベンチで一休みしている私たちに声をかけてきた。

うわあ、こういう人たちってまだいたんだ。

この人たちが声をかけた相手がお母さんだということは、その視

線からすぐに分かった。それはそれでちょっと悔しいけど、自分が対象外だということにちょっとホッとしてもいる。だって、何かされたらと考えるとやっぱり恐いもの。安全だと分かっている状況だとしても。

そんな私とは異なり、お母さんは「そんなことないですよ」と、動じる様子もなくにこやかに答えた。

私も何か言った方がいいような気もするし、例えば「お母さん、これってナンパ？」などと言ってみるのも手だと思う。まさか私みたいな娘を持つ母親だとは思っていないこの人たちは、他の人たち同様にもの凄く驚くだろうし、出鼻をくじかれて、早々に何処かへ行ってくれるかもしれない。けど、こういう場面ではお母さんに任せることになっているので、口を結んでいる。

そして最初に声をかけた青いシャツの男の人は、下心見え見えの顔で「ほんと、すげ〜可愛いつて〜」と、同じような表情の残り二人と一緒にこちらへ寄ってくる。

少しだけ緊張する私と、変わらず「ありがとうございます」と答えるお母さん。

「事実を事実として言っただけだつて〜。マジで〜」

「そんなに言われると、照れてしまいます」

お母さん、本気で照れてはいないと思うけど、そのリアクションは逆効果だと思っけど。ほら、「ねえねえ彼女たち、いま暇？」って喋った派手派手しい柄のシャツを着た男の人の鼻の下が、思いつ切り伸びてるもの。

「残念ながら、暇ではありません」

「あ〜、買い物中ってことね〜？ だつたらさ〜、俺らもその買い物に付き合わせてくんないかな〜。かわりにさ〜、買い物終わったらあ、俺たちが色々ご馳走してやるからさ〜」

私とお母さんが手にしている買い物袋を見てそう言った青シャツ男の態度が、なんか大きくなった。しかも、野球帽みたいなキャップを二つ、ツバの向きを違えて重ねて被っている第三の男も、「食

い物以外にも、色んなものをさあ」と調子づいてくる。

「すみません、そういうわけにはいかないの」

「なあなあ、いいじゃんよお〜」

「良い思わせりから」

「俺たちと楽しくしようぜ？」

うわ〜、三人揃ってここまで小物臭いと、誰がなに言ってるかなんて本当にどうでもよくなるし、なんだか哀れにさえ思えてくる。

こういう人たちって、一生小物で終わるんだろうなあ。どんな世界にいても。

と悠長に達観しているようで、実は私、ちょっとだけ震えています。対してお母さんは、この人たちの相手はもう飽きた、と思っただろうかわからないけど、にこやかにこう言った。

「そんなことしたら、夫が怒ってしまいますので」

「お、っつと？」

「はい。私の旦那さんです」

途端、青シャツ男と派手柄男が「うっそ」「ンだよ人妻かよ」とぶつぶつ文句を言い出した。これで退散してくれることを期待したのだけど、そう簡単には終わってくれなかった。諦めの悪い帽子男が「旦那なんてどうでもいいじゃん」とにやけ顔で言うと、残り二人が気を取り直してしまった。

しつこいなあ。

そう思っていると、青シャツ男が「旦那のことなんて忘れて、俺らと君ら姉妹とで楽しもうぜ？」と言ってきた。

「いえ、この子は私の娘です」お母さんがさりと答える。そして小物たちはしばらく固まり、どつと笑い出した。

「冗談きついでよ！ きみにそんな大きな娘がいるわけないっしょ！」

「姉妹なのバレバレだつて！」

「どう見たってそんなに離れてないじゃん！」

これはこれで娘としても喜ばしいリアクションではあるけど、こういう人たちにされるとムツとするのはなぜ？

「そう言われても、本当にそうなのでしかたありません」

と言われてすぐに信じる人はとても少ない。彼らもやはり信じようとはせず、青シャツ男の隣にいた、派手柄男は「じゃあそれでいいよ。親子ってことにしようぜ」と目尻の涙を拭き取って言った。さて、こういう展開になっってしまうと、お母さんが何を言っても信じてもらえないだろうし、諦めてくれないだろうことは想像できる。私が出来ることといえば、ここで悲鳴を上げることくらい。今の今までは耐えてこられたけど、なんだかもう、本気でこの人たちがウザくなってきたし、大声で叫んでやろうかと考え、ちらりとお母さんの様子を伺ってみた。

その表情に、私は「あれ？」と思った。ぞつと驚き困惑した顔で、それがこの状況に似つかわしくないと感じたから。でも、その理由はすぐに分かった。

お母さんの困惑した顔は、慌てる中で無理につくった笑顔に変わった。

「あ、あの！ でしたらこうしましょう！ あちらにいらっしやるお巡りさんに相談してみましよう！」

こういうときこそその巡回中のお巡りさん。小物さんたちはお母さんの言葉につられて、指さす方を見る。私もつられて見てしまった。あ、いた。

これはさすがに効くでしょう。と思つて小物さんたちを見る。と、右端に立っている派手柄男の右肩に手が乗っかってた。

え……、心霊現象……ですか？

とちよつとだけ血の気が引いた次の瞬間、その手は派手柄男の肩をグイと掴み、派手柄男の体がコマのようになると回転させた。そして、背中を向けたその人は、頭から真横に吹っ飛んでいった。

一人離れていく派手柄男。間髪入れず、真ん中に立っていた青シャツ男の体が、派手柄男のいた方へとくるんと向き、ドンという鈍い音がした。

何の音だろうと思う間もなく、青シャツ男がお腹を押さえて後ろ

に倒れる。そして最後は帽子男。隣二人の異変に気付いた時には時すでに遅く、振り向いた途端、左の頬に振り下ろされた拳が入った。そして帽子男は、その帽子を飛ばして地面に叩きつけられ、頬を押さえて呻く。

そして、

「大丈夫かつ！」

お父さんが私たちに言った。

あまりにも一瞬の出来事だったので、今一つ状況について行けないまま、とりあえず頷く。お母さんも、「大丈夫ですけど……」と戸惑っている様子。

するとお父さんは、安堵の表情を見せたすぐあとに、鬼の形相で帽子男をグイとつるし上げて、そのまま噛み殺しそうな勢いで怒鳴った。

「俺の大事な家族になにしやがった！」

お父さん、こわいよ……。

「パ、パパ！ 私たちは大丈夫ですから！ だから止めてください！」

「事と次第じゃこれで済ませねえぞ！」

激昂したお父さんの耳にはお母さんの声が届かないようで、お母さんは殴りかかろうとするお父さんの右腕を止めようと、慌てて抱きかかえた。

「パパ！ この人たちはただ私たちに声を掛けただけです！」

すると、どうやら身を挺したことが良かったらしく、お父さんは「え？」と驚いた顔で、お母さんに抱きつかれた右腕を止めた。そしてここで、「そこまでにしとけ」という声が聞こえた。見ると、さっきのお巡りさんがいた。

近くで見るとこのお巡りさん、正直恐いんですけど。

さすがにお巡りさんの前ではお父さんも腕を下ろすしかなく、掴んでいた帽子男を投げ捨てるように放し、そして「こっちは正当防衛だ」と言い捨てた。お母さんは「あの、これには事情があるんで

す！ だから、あの！」と困惑した様子で慌てふためいている。
私はというと、この状況で何をどう言えばいいのか分からずにい

た。
「落ち着いてください、奥さん。事情はちゃんとお聞きしますから。とりあえず、壁の方に向いてください。そして、とにかく深呼吸することに集中してください。周りの雑音は一切気にしないで。いいですね？」

「は、はい……」

お母さんは、お巡りさんに言われたとおりに壁に向かい、深呼吸を始めた。そしてお巡りさんは、今度はお父さんに向かって「馬鹿かてめえは」と呆れた様子で言った。

「な、ンだと！ こんなヤバイ奴らをのさばらせるような警察が、偉そうに言ってるじゃねえよ！」

「ヤバイ？ このしよっぱいナンパ常習犯どもがか？」

「ああそうだよ！ このしよっぱいナンパ　！　え？　しよっぱい……、ナンパ常習犯？」

途端、お父さんの怒気が霧散し始めた。

「ちよつと待て。こいつら、女性をナンパしてはそのまま拉致って、卑劣なことをする三人組じゃないのか？」

「あ？　何言ってるんだ？　つうか、いつの話してんだよ」「いつって……、いつ？」

「それはもう八年も前の事件だし、ずっと遠くの町の話だ。阿呆」「え……。てことは、こいつらは……」

「だからしよっぱいナンパ野郎って言っただろ」「な、なんだ……、そうだったのか……」

お父さんは心底ホツとしたようで、長々と息を吐き出した。
つまり、そういうことであれだけ怒ってたんだ……。

いつの間にか深呼吸を止めてこちらを向いてたお母さんも、ちよつと感動してるっぽい。まあ、雑音を気にするなって言っただって、耳には入っちゃももんね。

そして、地面に倒れたままのしょっぱいナンパさんの一人、青シヤツ男が、息苦しそうに「ふざけんじゃねえぞ」と悪態をつくど、お父さんが青シヤツ男の腹をドンと踏みつけ、「お前らが紛らわしいマネすつからだろうが。だいたい、人の嫁さんと大事な一人娘にちよっかい出すからこうなるんだ」と、止めさせようとするお母さんの声を無視して、冷たい目で睨み付ける。

でもお巡りさんの声を無視することは出来なかったようで、「おい、そこまでにしとけ。あんまりすぎると、過剰防衛でしょっぴくぞ?」と言われて、渋々足をどかした。

「しっかし、家庭持ったお陰でいぶん丸くなって、良い父親にもなったって聞いてたが、ガキのまんまか? 岡崎」

「大きなお世話だ。だいたいなんで、見ず知らずのあんたにそこまです、って、なんで俺の名前……?」

お父さんは訝しげにお巡りさんを見る。きつと、記憶に残っている知り合いと照合しているところだと思う。

「……まあ、忘れちゃっても仕方ないか。十五年近く前だからな」「十五年前?」

「俺と河原で殴り合っただろ」

「河原で、殴り合い……、って。ああ! 思い出した! 宮沢の兄貴のことで、族同士のケンカに巻き込まれて。あの時のアンタか」「思い出してくれたか」

「ああ。アンタのパンチも蹴りも強烈だったし、こっちがいくら殴つても効かねえし、あのときはバケモン相手にしてる気分で、本当にうんざりしたぜ」

「そりゃこっちの台詞だ。どんだけぶっ倒しても立ち上がって、負けを認めやしねえ。呆れるぐらいタフで、おまけに、俺らとは何の関係もねえのにあそこまで体を張りやがって、てめえみたいなヤツが、一番厄介で迷惑なんだよ」

「迷惑だったのはアンタらだろ」

「それはまあ、否定はできねえな。くはは」

なんてお父さんとお巡りさんのやり取りに、お母さんも「お久しぶりです。佐々木さん」なんてにこやかに加わった。

……なんか、和やかに盛り上がってるんだけど。今って、そういう状況？

ああ、ついでに言うと、完全に存在を忘れられている三人が、げっ、マジかよ、今や語り草になってる伝説の河原の決闘の、あの佐々木と岡崎かよ、俺たち、そんな人の奥さんと娘さんをナンパしてたのかよ、やべえよ、殺されるよ、いやまて、ポリの前で殺されはしないだろ、そうだとしても、ムシヨ暮らしは確定だよ、下手すりゃ絞首刑だよ、どうすんだよ！

などと、うづくまっただま血相を変えて囁き合っている。

とりあえず、伝説云々についてはあとで聞くことにしよう。

このあと、顔を腫らした帽子男と派手柄男、それとお腹を抱えている青シャツ男は、私たちの前で「もう二度とこのようなマネはいたしません！ だから殺さないでください！」と額をこすりつけて土下座して、お巡りさんの許しも得て退散。ええと、どっちかっていうと謝るのはお父さんの方のような気もするけど、まあ、ついさつきトイレに行ってた際に小耳に挟んだ八年前の事件を、今この町で起きている事件と勘違いしてしまったのは不可抗力なわけで、だからお父さんは何も悪くない、ということ。

そして遠目で見ていた人たちも、その様子を見届けてから散会していった。その中にも、お父さんに拍手したり、よくやったと激励の言葉を投げてくれた人も何人かいて、お父さんもお母さんも恥ずかしそうにしてたけど、私は嬉しくてたまらなかった。

ただ、なにか嫌な予感も、ちらっとした。

まさかとは思うけど、明日から私、恐そうな人たちからいきなり頭を下げられる、なんてことはないよね？

その一声は慎重に その2

ショッピングモールでの一件は、数日のうちに話題になり、学校でもその話が持ち上がった。ただし、話題の人が誰かまでは伝わっていないかった。

娘として、やっぱりお父さんを思いつ切り自慢したい。でも、あれこれとうるさく聞かれたりするのにはちよつと勘弁して欲しいところだし、何より、あのときの嫌な予感を思い出すたび、話が変な方向に進んでしまわないか心配で、あまり噂が広がって欲しくないという気持ちもあって、残念だったりほつしたり。

ということで、友達から「ウツシー、知ってる？ 噂のお父さんのこと」と話題を振られると、ちよつと複雑な気持ちになる。ちなみに今回は亜矢ちゃんから。

これで何度目になるだろう。この話題を口にするのは。

「う、うん。知ってるよ」

「かっこいいよね」。家族を守るために、十何人って悪い奴をたった一人で叩きのめすなんて」

数がまた増えた……。

噂話には必ず尾ヒレがたくさんついてくる。それは時間とともに増えて、巨大化していく。そんなこと、女の子にとっては常識中の常識、というか常識以下。だから驚くようなことではないんだけど、目の前で見えていた身としては、ちよつとどうかなと思ってしまふ。

なので、「十何人って、私が見 聞いた話だと、三人だよ？」
と言ってみる。

とここで、美樹ちゃんが会話に加わってきた。

「え？ たったの一撃で百人を倒したんでしょ？」

また増えた……。ってというか増えすぎだし、一撃って。ゲームじゃないんだから。

「そうなの？ へっっ！」と亜矢ちゃん。まさか、信じちゃうの？

「うん。しかも倒した敵を全員丸刈りにして、もう二度とさせん
って土下座させて、誓約書まで書かせたんだって」

間違ってるけど、ちよつとだけかすってる。

土下座はした。ただし、自分たちから率先して。

「スゲー！ どんだけ強いんだよその人！」

「強いだけじゃなくて、けつこつ格好いいって話だし」
それは正しい。

そして話は、噂のお父さんがどれだけ強いから、うちのお父
さんのここが駄目であそこが最悪だ、といった父親への文句へと流
れ出した。そんな二人の言葉を聞いていると、なんだか二人のお父
さんが可哀想に思えてくる。そして、最後はやっぱりこつ言われた。
「いいよなあ、ウツシーのお父さん、格好良くてさあ」

「ほんとほんと。しかもお母さんも美人で、すつごく若く見えるし。
うゝ！ 私も汐の姉か妹に産まれてきたかったゝ！」

「独り占めなんてずるいぞウツシー！」
「私にそう言われても」

私のお母さんとお父さんの評判はとても良く、友達からこのよう
に羨ましがれること数限りなく、年々その声は増えている。娘とし
て、それは嬉しくて誇らしい。のだけど、今回ばかりは大歓迎とは
いかない。

「ねえ、ひよつとしたら、噂のお父さんって、汐のお父さんなんじ
やない？」

と言われてしまうから。

えーと、そのとおりんだけど……、話がこつも大きくなり始め
ると、名乗り出られるものも出られないよ。やっぱり、誤魔化した
方が良さそうだよな？

と逡巡している僅かな間に、亜矢ちゃんが「それはないんじゃない
い？」と言ってくれた。

ナイス、亜矢ちゃん。

「なんでよお。汐のお父さん、格好いいじゃん」

「でも、すっごい優しいんでしょ？ 暴力振るうような人じゃないよ。ましてや百人も相手にだなんて」

さすがに百人を相手にしたことないみたいだけど、荒れてた頃はわりとケンカしてたそうです。数的不利な状況でも。とは言えませ
ん。

「でも、家族がピンチになったら体張って守ってくれそうじゃん？」

「まあ、ねえ。でも、なんか想像できないなあ」

何度か見えます。相手を殴るのを見たのはこの前が初めてだけでも言えませんか。

「その点についてはどうなの？ 汐」

何とも言えません。

「汐っ！」

「はい？」 すっかり傍観者になっていた心の中でコメントを付けていた私は、美樹ちゃんに呼びかけられてようやく現実に戻った。

「だからあ！ 汐のお父さんって、家族がピンチの時に守ってくれるかってこと！」

「ああ、ええと……、守ってくれると、思うけど」

ここはとりあえず誤魔化しておこう。

「思うって、じゃあ今まで実際そういうことはなかったの？」

「うん。いたって平和に生きてきたから。それに、そんな展開そう
そうあるわけじゃないじゃない」

「そりゃそうだよね」

「そうだよ、美樹ちゃん」

「でもちよつと残念。本当にあつたら、絶対格好いいだろうからね
え。汐のお父さんだったら」

うん。格好いいです。でも、あのときみたいな怖いお父さんはあ
んまり見たくないなあ。

そうしてこの話題は終わり、まったく別の話題へと移っていった。
今回も事なきを得てほつとしたけど、話題の人が私のお父さんだとい
うことが知られたら、私の周りの反応が全然違ってくることは明

らかで、その日がいつか来るのかと思うと、正直ちよつと恐かった。

この日の部活はお休み。ということ、授業が終わるとさっさと学校をあとにして、大幅に寄り道しつつ家へと向かった。そして、その寄り道というか大回りの帰宅コースが功を奏して、いま私はファミリーレストランの四人テーブルに座り、早苗さんと並んでお喋りをしている。

「まあ。汐ちゃんも大変ね」

「こつ話が一人歩きしちゃうと、早いところみんな忘れて欲しくなるよ」

「そうねえ。学校でそんなことになっては、心休まらないものねえ」

二人で喋っている話題は、言うまでもなくシヨツピングモールでの一件にまつわること。ちなみに、早苗さんたちの耳にもこの話題は早くに届いていたけど、ことの真相を知ったのはついさっき。用事があって私の家に来ていて、そのときお母さんから。

ちなみに今はその帰り。

「とにかく、今は台風が過ぎ去るのを静かに待つ方がいいでしょうね」

「やっぱり、そうだよな」

とここで、私はふと疑問に思ったことを尋ねてみた。

「そういえば、早苗さんもこついうことあったの？ピンチのところをあつきーに守ってもらったとか」

「ピンチと言うほどの状況ではありませんでしたけど、ええ、ありましたよ」

「やっぱりあったんだ。どういう状況だったの？」

「それはですねえ」

早苗さんは、それじゃあとちよつとと楽しそうに話し始めた。

それは早苗さんとあつきーがまだ恋人同士になる前のこと。その日、稽古中のあつきーを見学しに行くことになっていた早苗さんは、

前の用事が長引いて大幅に遅刻。で、稽古場の目の前まで来たところで、ナンパ集団に捕まってしまった。どうにか振り切ろうにもすっかり囲まれてしまい、困っていたところに、稽古途中のあつきーと劇団の人たちが登場。

なかなか来ない早苗さんに、あつきーが窓の外をちらちらと見てたから早苗さんのピンチに気付けた、とは劇団員の証言。

で、助けに入った時のあつきーは、何かの役になりきった様子で格好良い台詞を喋り、他の劇団員の人たちもあつきーに合わせてアドリブを加えつつ、早苗さんを助けたのだそうだ。そしてその時の様子を、早苗さんは「今でも、あれは秋生さんが計画した催しだったんじゃないかって思えるぐらい、本当に楽しかったです」と満面の笑みで思い出していた。

さすがは早苗さん。それに、助けに入ったときのあつきーも、如何にもあつきーらしいとしか言い様がない。

そんな話の流れから、早苗さんが中学生の頃からよく告白されてナンパされたのも数回じゃきかないという話になり、私は「早苗さんも、お母さんと同じで昔からモテモテだったんだね」と言った。

「渚は、そんなにモテてはいませんでしたよ？」

「え、そうなの？」

昔のお母さんはとても内気だとは聞いているし、お友達も少なかつたっていうことも聞いているけど、男の子から人気があってもおかしくないと思っただけに、これは意外な答えだった。

「はい。あの子、小さい頃からとても内気で、人と関わるのが苦手でしたからね。それでもあの子なりにがんばろうとはしていたんですけど、生まれたときから病弱で、学校を休むことが多かったからっていうのもあるんでしょうね。なかなかクラスの輪の中に入ることが出来なくて、俯いてばかりでした。」

母親が言うのも変ですけど、俯いてばかりの元気のない子を好きになるような人は、そうそういないものですからね」

そういうもののかなあ。可愛ければ誰でもモテモテになると思

うんだけど。

「でも、朋也さんと出会って、あの子はすっかり変わりました。俯いてばかりの渚がちゃんと前を向いて、明るく歩けるようになって。たくさんのお友達も出来て、自分に自信を持つことが出来るようになって。」

それからちよつとずつ、モテモテになっていったようですけどね。それもこれも、朋也さんが渚のことを大切にしてくれたから。渚を励まし、支え続けてくれたから。だから、今のあの子がいる。私も秋夫さんも、そう思っているんです。

そして、朋也さんが渚をお嫁さんに選んでくれて、汐ちゃんが生まれてきてくれて。

こんなに嬉しいことばかりで、あの子が輝かないわけじゃないです。確かに、お母さんはきらきらしている。いつも笑顔で、優しく、あったかくて。お父さんのぐさりとくる一言にちよつとへこんだりすることもあるけど、そんな顔だって可愛く見える。それは、へこむ中にも楽しい気持ちがあつたとあるから。そう、私のように。

「なんだか嬉しそうね」

不意に、早苗さんが言った。

「え？ あ、うん。まあね」

私は機嫌良くそう答えて、グラスに口を付ける。だけど中は氷だけ。いつの間にか飲み干していたらしい。すぐさまグラスを手に通路側の席から立ち上がり、「お代わりしてくる」とドリンクバーに向かう。その後ろで、早苗さんの「いつてらっしゃい」という優しい声が聞こえた。

嬉しいことばかりで、輝かないわけない、か。

じゃあ私は？

実を言うと、男の子から告白されたことは今のところ一度もない。早苗さんとお母さんの血を受け継いでいるというのに。それは、私が俯いていて元気がないから？ いやいや。自分で言うのもなんだけど、俯いてはいないし元気だったある。なら、嬉しいことが少な

いと？ これも違う。だって、毎日とっても楽しいもの。

それなら何が問題なんだろう。ひよっとして、私の性格？ そんなに悪いとは思ってないけど、こればかりは自分で判断できないまさか……、ほんとにそれが原因？ 私って性格ブスなの？ うわあ、ほんとにそうだったらどうしよう！

などと、グレープフルーツジュースで満たしたグラスに氷を放り込む最中に、ちよっただけ顔を青ざめて考えていたので、気がついたときには、氷が山となってグラスに入っていて、ジュースがぼたぼたと溢れていた。

やばっ！

周囲の目に恥ずかしく思いつつ、そばにあったフキンで慌てて力ウンターを拭き始める。しかもそこに店員さんがやってきて、こちらで拭くのでいいですよと言われ、恥ずかしさが増してしまった。

なにやってんだか私。

そして、新しいグラスに氷とグレープフルーツジュースを入れ、いそいそと席に戻ったのだけど、そこには、つい最近見たような光景があった。

「キミ、すごく可愛いね。マジで惚れちゃったよ」

「ひよっとしなくても、モデルさん？」

二十代後半といった感じの男の人二人が、私たちの座っていたテーブルの横に立って、早苗さんに声を掛けている。パツと見、私とお母さんに声を掛けた三人組にあったような幼稚な軽薄さはないけど、ナンパしていることには変わりないし、小物臭もちゃんとする。

ああ、罪な人がここにも一人……。

「いいえ、ただのパン屋さんです」と、にこやかに答える罪な人。

「うっそでしょ。絶対モデルさんだって」

「分かった！ 本当は女優さんだ！」

二人組は、そう言うところと図々しく私たちの席に座った。一人は早苗さんの前に、一人は私の座っていた場所に。

「すみません、そこは私の連れが座るので、どいてもらえますか？」

「ああ、戻ってきたらすぐよくよ。つうかさ、その連れが戻ってきたら、俺たちとどっか遊び行かない？」

あゝ、素人小説じゃあるまいし、なんで立て続けにこういう展開に遭遇するかなあ。

早苗さんはさほど困った表情はしていないけど、クレールプフルーツジュースを持ったまま突っ立って見届ける、というわけにもいかないの、とりあえず席に戻ることにした。

席に戻る私を見た早苗さんは、「連れが戻りましたので、どいてください」と、やはりにこやかに言う。

二人組は、揃って私を見た。この前の三人組よりは恐いとは思われないけど、まったく恐くない、というわけではない。

「お帰り。待つてたよ」

そう出迎えたのは、早苗さんの隣に座る、Tシャツに薄手のジャケットを羽織った男の人。

なんだかすごく腹立つ。

「戻ったって、一人だけじゃん。まあとにかく、妹さんも座りなよ」
もう一人のナンパ男が私にそう言うてきたけど、こんな人の隣に座りたくないかない。でも、早苗さん一人座らせておくのはと考えると、しょう。

ん？ 妹さん？

「いいえ、この子は私の妹ではありませんよ？ 私の、孫娘です」
早苗さんが、すかさず訂正した。すると二人組はその言葉に一瞬止まり、すぐに「その冗談サイコー！」などと笑い出した。まあ、普通そうなるよね。友達が早苗さんを見て、お母さんのお母さんだよって説明すると、必ず嘘や冗談だと思われて笑われてしまうんだし。

友達同様に、早苗さんの実年齢を知ったら、きつと驚くどころじゃ済まないだろうなあ。

そして、しばらく笑ったあと、チェック柄のシャツを着た相方が「もう一人戻ってきたら、さっそく五人で遊びに行こうよ。二対三

で男が一人少ないけど、そっちの方がキミたちとしては気が楽でしょ」と目尻に涙を残しながら言うと、ジャケット男も「男は狼だからね」とよく分からないことを言った。

テーブルにコップが三つあるからそう判断したんだろうけど、まあ、数字は正しい。けど、一番大事なところが間違っている。三人揃っているところを事前に見ていれば、こういう愚かなことはしなかっただろうに。

ほら、こっちに猛ダツシュしてきた人の腕が、ジャケット男の首にぐるりと。

「そうさ、男はどう猛な獣さ」

「あつきー」

完全に油断していたジャケット男は、口と目を大きく開いて、あつきーの腕を外そうと苦しそうに藻掻いている。そしてシャツ男は、慌てて「ため！いきなりなにしゃがんだ！」と大声を上げて立ち上がろうとした。しかし、あつきーがそれを牽制するように、「ああ？」と睨み付ける。シャツ男は危険を感じたらしく、動きを止めた。

そこで追い打ちをかけるように、あつきーは「それ以上動かない方がいいぜ？ でないと、間違えてこいつの首へし折っちまうからなあ」と不敵な笑みを浮かべる。

「卑怯だぞ！」

「ケツ。なあにが卑怯」

とここで、早苗さんが緊張感の欠片もない口調であつきーを止めた。

「秋生さん、もうそのぐらいにしてあげてもいいんじゃないんですか？」

見ると、ジャケット男の黒目がまぶたの裏に消えかけていて、唇がぴくぴくと震え始めていて、明らかに落ちかけている。

「ん？ん、しゃあねえな。早苗がそう言うなら、勘弁してやるか」

あつきーはそう言うのと、渋々といった様子でジャケット男から腕を外す。解放されたその人は、ぐにやりと前のめりに倒れ、顔面をテーブルにゴンッと強く打ち付けた。たぶんそれが良かったのだと思うけど、ジャケット男の飛びかけた意識が完全に戻り、激痛に額を押さえながら激しく咳き込んだ。

シャツ男はそれを見て、席を立ちあつきーに殴りかかろうとした。ただど見事に返り討ち。あつきーの額が相手の眉間に的確にヒットし、シャツ男は鈍い音とともに首を後ろに反らせ、あまりの痛みに「ぐあああ！」と悲鳴を上げながら、ぐしゃりと膝を折った。

あつきーは指をポキポキと鳴らしながら、足元でこめかみの痛みを呻いているシャツ男を見下ろす。

「人の女に手え出すとは、良い度胸じゃねえか。ガキども」

「お　んな　？」とジャケット男。まだ呼吸が正常に戻っていないようで、言葉が途切れ途切れになっている。

「はい。私の旦那様です」

「人づ　ま？」

「はい」

「そ　れじゃ　、そつちの　、娘　？　って　、まさか

「

「いえ、孫娘です」

「冗だ　ん　でしょ？」

「いいえ。本当です」

「え　、お　、ばあさん？」

あ、早苗さんが笑顔のまま固まった。

「てめえっ！　何てこと言いやがんだ！　早苗に土下座して謝れ！」
あつきーが血相を変えて、慌てて二人を力づくで通路に並べ、そして正座させると、早く謝りやがれと二人の頭を押さえつけながら急かす。二人組は最初こそ、文句を言いながら抵抗しようとしたけど、笑顔のままほろほろと涙をこぼし続ける早苗さんの姿に深い罪悪感を感じたようで、結局、心底申し訳なさそうにすみませんでし

たと顔を床につけて謝った。

けど、涙は止まらず、あっきーは心がこもってないともう一度頭を下げさせる。

「てめえらちゃんと反省しやがれ！ 早苗の心の痛みが消えるまで頭上げんじゃねえぞ！ いいか！ 早苗に対して『おばあちゃん』って言うっちゃ絶対にいけねえんだ！ 分かるか？ 早苗はな、永遠の十七歳でいたいんだ！ そうでなきゃなんねえだ！ 言い出してしまった以上、もう後戻りは出来ねえんだよ！ 例えそれが無茶なことだと分かっていてもだ！ それがどんなに苦しく辛いことか、てめえらに想像できるか？ 孫娘に『おばあちゃん』と呼ばれることが許されないあいつの気持ちか、早苗おばあちゃん』と呼ばれることさ。」「！」

「あっきー」

「あん？ どうした？ 愛しい孫娘よ」

急にテンションを落として冷静に返事をしてくれたあっきーに、私は言葉で説明するよりも見てもらった方が早いと思い、早苗さんを見るように目で訴えた。そして早苗さんを見たあっきーの表情は瞬時に変わった。それはもう、ムンクの『叫び』のように。

「さ、なえ……」

早苗さんは、変わらず笑顔で涙をほろほろ流してはいるけど、そこに加わったものがあつた。それは、こめかみで脈打つ、三つの大きな十字路。

「秋生さん……、私のこと……、そんな風に、思ってたんですね……」

その声は、怒りと悲しみが同居しているような震え方をしていた。「ちちちちち違うんだ早苗っ！ 俺はあくまでもお前の心の傷を説明するために！」

「あっきー。あっきーも謝った方がいいと思うよ？」

「あ……、う……」

あっきーはしばし言葉を失って逡巡したのち、土下座する二人の

横に正座し、「すまん早苗！ このとおりだっ！」と猛烈な勢いで謝り始めた。それを見た二人組は、「ひでえよあんた、自分の奥さんにあんなこと言うなんて」「あんたが奥さん怒せてどうすんだよ」とあつきーを責め立てる。

その非難の声は、どうやら本気でひどいと思って言ってるように聞こえる。まあ、今の早苗さんを見れば、そう思うよね。

「るせー！ てめえらだつて早苗を怒らせただろうがっ！ こめかみのあれの二つはてめえらのなんだよっ！」

あつきーはそう抗議するけど、それは違うよ。三つともあつきーのせいだから。

結局、あつきーはひたすら正座して謝り、二人組は私と一緒に早苗さんを慰めることになった。

何て言うか……、途中までは格好良かったのね。あつきー。

その一声は慎重に その3

ショッピングモールの一件から一週間以上経ったけど、その話題は依然として消えずにいた。ただし、今は沈静化する傾向にある。どうやら、話の内容があまりにも大きくなり、そしてメチャクチャになりすぎて、そもそもこの話題はでっち上げられたものなんじゃないかという声が出はじめ、その意見が主流になるうかとしているのが原因らしい。

お父さんの活躍が無かったことのように扱われるのはちょっと悔しい気もするけど、騒ぎ立てられるよりかはいいかと思い、完全に消えるのを待つことにしている。

そして、その話題に変わるものが、あれよあれよと肥大化していた。歴史は繰り返し返されるって、こういうことなんだろうか。

今話題になっているのは、早々に原型を失った、ファミリーレストランでの一件。

なお、件の人物が誰かなど知れ渡っていると思っただけで、信じられないことにバレていない。あれだけあっきーが早苗さんの名前を連呼していれば、すぐに面が割れるだろうに。

なぜ？ 見えない力でも作用したの？

まあ私としては、真実は闇の中のまま風化してくれることを期待しているからちょうど良いんだけど。だって、自慢できる話じゃないでしょ。

というところで、亜矢ちゃんから「ねえ、ウツシー知ってる？ 噂の女王様のこと」とその話題を振られても、どう答えるかに迷ったりすることは微塵もなかった。

「うん。聞いたよ」

「ほんとすごいよね。十人ぐらいのヤクザみたいな人を正座させて、『申し訳ございません女王様！』って謝らせてたんでしょ？

私も一度、そんなことしてみたいなあ」

正座はさせただけど、そうさせたのはあつきーです。一番謝つていたのもあつきーです。

それにしても、なんでこうも情報って正確に伝わらないんだろ。う。「ああでも、ひれ伏すのはイケメン限定だけだね。っていうか、全員イケメンじゃなきゃ許さない」

「まあ、恐い人よりは格好いい人の方がいいだろうけど、誰に対して許さないって言うてるの？」

なんとも亜矢ちゃんらしい発想というか発言というか。
とここで、美樹ちゃんが加わった。

「その女王様だけどさ。ひよつとしてその人って、たった一人で町の不良を次々と倒して、その人を渡り合えるのは一人しかいなかったっていう、伝説の女の人の人なんじゃない？」

この町って、けっこう伝説が多いのかな……。

それに、その伝説の女の人の人って、たぶん智びよんだよね。

「なに、そんな伝説あんの？ ウッシーは知ってる？」

ここは知らないことにした方が無難だと思うので、「知らないよ？」と答える。そして話題は、その伝説にまつわるものとなった。

この日の授業が終わり、部活も終わり、着替え終えた私は、部室のそばで私を待っているお母さんのもとに向かう。

なぜお母さんが学校にいるかという点、今日は二人で映画を観に行くことになっていて、私が一度家に戻ってからだと上映時間間に合わないからと、わざわざ来てくれたのだ。映画館前で待ち合わせという提案もしてみたのだけど、私の練習している姿も見たいしと言われ、じゃあいつかと。

映画を観に行くことになった経緯は、そもそもお父さんが昨日、職場の人から映画の特別鑑賞券を一枚もらってきたことから始まった。

仕事から帰ってきたお父さんからそれ聞いたとき、三枚だったら

ちょうど良かったのにと思ったけど、映画のタイトルを見てその考えはすぐに消えた。冗談でお父さんに「一緒に行かない?」と言ったら、案の定「勘弁してくれ」と心底嫌そうな顔で拒絶されてしまった、女性向けのラブロマンス映画だったから。

そしてチケットの有効期限を見たら、なんと今週の金曜日まで。友達と観に行くという選択肢もあったけど、タイトルを知って興味を示したお母さんを見て、折角だからお母さんと行こうと。ということまで今に至ってる。

部室を出ると、お母さんは倉橋先生と楽しげにお話をしているところだった。

「先日は本当に妻がお世話になりました」

「いいえ、こちらこそ無理を言って、遅い時間まで引き留めてしまっ
つて」

「そんなこと。とても喜んでましたよ。それはもう、家に帰ってから寝るまでの間、ああだったこうだったと、ずっと喋り続けっぱなしだったほどに」

「そうだったんですか」

なんとなく、今はお母さんに声を掛けるタイミングじゃないかなと思っただけど、私を発見したお母さんが、先生との会話を切って「しおちゃん。もういいの?」と言っ
ては、タイミングも何もなし。

「うん」

「それじゃ、行きましようか」

「いいの? 先生とお話してたんじゃないの?」

私がそう言うと、先生が「私のせいで上映時間に合わなかったとあっては、後でお前に何言われるか、恐くてたまらないからな」と笑った。

「そんな恐いこと言いませんよ。せいぜい、お腹がいっぱいになるまでケーキを奢ってもらっただけですから」

「それが恐いって言ったんだ。まあでも、そうだったら、岡崎だけ練習量を二倍にするまでだがな」

「なんでー」と抗議する私。すると先生は、急に真剣な顔をしてこ
う答えた。

「急激に重くなった体重は、お前のプレーに支障を来す。それとお
前の胴回りに」

「先生それセクハラ発言！」

「おっと。これはマズイ」

私の指摘に、先生の表情がとたんに崩れ、「では逃げるとするか。
それでは失礼します」とお母さんにお辞儀をして、何事もなかった
かのように職員室へと歩いていった。その後ろ姿に、私は「もうっ
！　なんで男の人ってみんなデリカシーないんだろ」と文句を言わ
ずにはいられなかった。

学校を出た私たちは駅に向かった。これから観に行く映画館は駅
二つ向こう。

駅に着くと、すぐに電車がやってきた。夕方の六時過ぎというこ
とでそれなりに混んでいて、着替える際にボディスプレーをたっぷ
り吹きかけてきたけど、汗臭さが残ってないかちょっとだけ心配に
なった。

目的の駅に下りると、お母さんが時間を確認。思っていたより早
く着いたようで、上映時間まで二十分以上余裕があった。そこで、
お母さんが「何か軽く食べておく？」と提案。すでにお腹が空き始
めていて、お腹の虫が今にも喚き出しそうだった私としては、これ
に飛びつかない手はない。

ということと、時間を考慮してファストフードに入り、私はハン
バーガーを一つとポテトを食べた。ちなみにお母さんは、私のポテ
トを少しつまんだだけだった。

なお、注文する際に一つじゃ足りないとお母さんに言ったのだけ
ど、見終わった後にちゃんとした食事をするから、その分にとって
おきましようと言われ、それが美味しいものならと条件を出して妥
協していた。

小腹を少しだけ満たした私たちは、ファストフード店を早々に出

て映画館に。

公開終了間近とあって、館内は空席ばかりだった。

映画の内容は、愛し合う二人にはそれぞれに事情があつて、周囲の人は二人の仲を認めようとしなず反対ばかりで、中には嫌がらせをする人も。それでも互いに愛し続け、そして最後は二人めでたく結ばれて、反対だった人たちの数人が、二人を祝福して終わるというもの。

面白かったかと聞かれれば、面白かったと答えるけど、ただ、認めない人たちの言い分がよく分からなかった。なんで素直に祝ってあげようとしなのよと腹立たしくなる場面も多々あつた。

そんな私の感想をお母さんに言ったら、「しおちゃんにはちよつと難しかったかもね」と言われてしまった。そりゃまあ、民族間のなんたらかんたら言われたつてよく分からないし、大人が考える良い悪いだつて、子供の私には理解できないことばかりだけどさ。

ちなみにお母さんの感想は、「とつても感動した」でした。

映画を見終わると、次は夕食。時刻は八時半をまわったところ。

空腹への我慢の限界もすぐそこ。さつそく、映画館を出たところで立ち止まり検討会を始めた。

「しおちゃんは何が食べたい？」

「美味しいもの！」

「もちろん美味しいものにするけど、もっと具体的に」

「高いもの！」

「今はそれを具体的とは言いません」

お母さんは人差し指を立ててぴしゃりとそう言うけど、顔は笑っている。もちろん、私も笑っている。

「ん〜と〜、とにかくお腹ペコペコだから、ボリュームのあるものがいいなあ」

「そうなるよ、あれ？」

急に、お母さんが何かに気付いたように声を上げた。私が「どうしたの？」と聞くと、とある方向を見てにこりと微笑む。知ってい

る人を見かけたといった様子だったので、誰だろうと私もそちらを向いた。

「こんばんは。渚さん。汐ちゃん」

そこにいたのは、控えめながらもきれいにドレスアップした、笑顔の有紀寧お姉ちゃん。本名、榊有紀寧さん。お母さんとお父さんのお友達で、喫茶店のママさん。以前は普通の会社で働いてたんだけど、居場所のない子たちのための居場所を作りたい、という理由で会社を辞めて、いろいろとあつて旦那さんと喫茶店を営んでいる。

なんで喫茶店なのかはよく分からないけど、有紀寧お姉ちゃんの「スナックだとかっぱり問題ありますから」というのは頷けた。

「こんばんは。有紀寧さん」とお母さん。私も「こんばんは」と答える。

有紀寧お姉ちゃんはおっとり優しく、私の大好きな人の一人。先生や智びよんほどには会えていないのがちょっと残念。

「ひよっとして、この映画を観てらしたのですか？」

「はい。パパが券をもらったもので」

「そうですか。それで、岡崎さんは？」

この質問には私が答える。

「一緒に行こうって言ったなら、ヤダって言われちゃった。お父さん、こういうの好きじゃないから」

「まあ。それは残念ですね。とつても素晴らしい映画なのに」

「有紀寧お姉ちゃんも観たの？」

「ええ。一ヶ月ぐらい前に」

こうして、映画館の前で思いも寄らなかつた立ち話を始めた私たちだったけど、それを邪魔する輩が早々に現れた。

二十代前半らしき、スーツ姿の男の人が「すみません。ちょっと道を教えて欲しいんですけど」と私たちに声を掛けてきた。見た目は悪くないし、軽薄さや粗暴さは見受けられないけど、すでに小物臭が。

またなの？ なんだってこうも立て続けにこういう展開になるのかなあ。誰かの策略？

「私の知っている場所であれば。それで、どちらに行こうとなさってるのですか？」そう答えたのは有紀寧お姉ちゃん。私もお母さんも、この辺りのことはよく知らないので、有紀寧お姉ちゃんに任せることにした。

「『じん・ばらーる』っていうレストランなんですけど。グルメ雑誌でたまに紹介される、スペイン料理のお店で。この辺りだと聞いたんですけど、なかなか見つからなくて」

「そのお店でしたら、ちょうど私もそこへ行くところなので、良かったらご案内しましょうか？」

「え、マジで？」

あ、素になった。

「つと、すみません。ホツとしてしまったもので。そうして頂けると助かります。ええと、そちらの方々は違うんですか？」

「あ、はい。私のお友達で、ばったりここで会いまして。ということなので渚さん、汐ちゃん。すみません。こちらの方を私たちの立ち話に付き合わせるわけにもいきませんので、これで失礼しますね。あ、そうだ。近いうちに、お引越しの祝いにお伺いしようと思っっていますので、そのときはよろしくお願いします」

「はい。こちらこそ。それでは失

「ちよつとタンマッ！」

慌てて、私はお母さんの返事を止めた。

「どうしたの？ しおちゃん」

「あの、有紀寧お姉ちゃん。そのレストランの料理って、美味しいの？」

「はい。とても美味しいと評判ですが」

なら考えるまでもない。私はお母さんに「私もそのお店のお料理食べたい。晩ご飯、そこにしよ？」とねだる。

「そう……ね。探し歩くのも大変だし。あの、お邪魔じゃなかった

ら、私たちも一緒に行つてよろしいですか？」

「晩ご飯、まだだったんですか。ええ、かまいませんよ。むしろ、大歓迎です」

有紀寧お姉ちゃんのこの言葉に、男の人が小さくガツポーズをとっていたのを、私はしつかり見ていた。

こうして、私とお母さん、有紀寧お姉ちゃん、そして声を掛けてきた男の人一人とで歩き始めたのだけど、案の定、一分も経たないうちに四人から七人の集団になっていた。なし崩し的に加わった三人は、言うまでもなく男の人の友達で、いかにも偶然会ったようにしてたけど、この人たちもグルだということは臭いですぐに分かった。

だいたい、加わった三人が、俺らもそのレストランで食事をすると言い出せば、疑わない方がどうかしている。

お店に着くまでの間、小物さんたちは私たちに、褒め言葉を中心にずっと喋り続けていた。途中、お母さんと有紀寧お姉ちゃんが既婚者だということを知って驚いていたけど、すぐに気を取り直していた。まるでシヨップिंगモールの帽子男みたいに。

私に対しては、まあ当然だろうけどあまり興味を持っていないみたいで、ほとんど話し掛けられなかった。少しばかりほっとしたけれど、こうも何度も相手にされないと、女としてそれなりに悔しい。どうせ私はお子様ですよーだ。

なお、私とお母さんを姉妹と思っているようだったけど、その話題に触れることがなかったの、あえて何も言わなかった。

そうして、目的へとやって来た。

「さ、つきましたよ」

有紀寧お姉ちゃんがそう言うのと、最初に声を掛けてきた人が「ありがと。じゃあ、案内してくれたお礼に、ここは自分らに奢らせてもらうよ」とかつこつけて言ってきた。

「そついうわけにはいきません」

「奢らせてくれよ、そうでないと俺ら、申し訳なくて死んじゃうよ」

第二の人も調子を合わせ、第三の人も「ここで君たちみたいな美人に奢らなかつたら、男として失格だし」と言い、第四の人も何か言ってる。

この人たちがこう言い出したのには理由があった。ここに着く前に、有紀寧お姉ちゃんの待ち合わせの人が旦那さんではなく、お友達と聞いていたから。

でもそれが大間違いだということは、なんとなく感じていたし、それは正しかった。

店の前で小物さんたちの相手をしていると、「おい」という低い声がした。

「ああ？ なんだよ」

肩を掴まれた小物さんの一人がそう言って振り返ると、ヒツという小さな悲鳴を上げた。それに気付いた別の一人が「どうした」と言うも、すぐに口を結ぶ。残り二人も、異変に気付いて周囲を見て、顔を青くさせた。

そして、私たちを取り囲む一団の一人、田嶋さんが有紀寧お姉ちゃんに言った。

「有紀姉、なんですか？ こいつら」

「あ、みなさん。こちらは」

と有紀寧お姉ちゃんが説明しようとしたところで、私が割って入った。さすがにうんざりしていたのと、空腹だったのと、お母さんと有紀寧お姉ちゃんに何度か気安く触っていたので、その腹いせというか天罰として。

「有紀寧お姉ちゃんとお母さんをナンパしてた人たちです」

「なにいつ！」

一瞬先にその声を上げたのは小物さんたち。もちろん、驚いた理由は私の「お母さん」発言。

それから僅かに遅れて「んだと！」と怒鳴ったのが、有紀寧お姉ちゃんのお友達の方々、総勢十数名。言うまでもないだろうけど、お友達はみんな男の人で、しかもみんなの声には迫力がある。私はお

母さんやお父さんと一緒に田嶋さんたちと何度か会っているので、ちよつとだけしかこの迫力に押されなかつたけど、小物さんたちは足をがくがくと震わせていた。

そして私は、追い打ちをかけるようにこう追加する。

「ついでに言つと、有紀寧お姉ちゃんとお母さんにベタベタしてた人たちです」

この言葉に、田嶋さんたちの怒気が明らかに増した。

「ガキどもお。良くい度胸してるじゃねえか。ああ？ そんなに俺らにぶつ殺されてえのか？ ああっ！」

「ひゃあっ！ ひゃの……！ ひ、ひ……！」

さらに怯え震える小物さんたち。まあ、こうなるよね。やっぱり。ただし、お父さんだったら怯むことはないだろうけど。

「何とか言ってみるや！」

「覚悟は出来てんだろうな！」

「生コン詰めにしてやるうか！」

「ミンチだミンチ！」

一斉に声を荒げる田嶋さんたち。でも、「みなさん、落ち着いてください！」と言つと、怒号がぴたりと止まった。こう言つては何だけど、有紀寧お姉ちゃん、猛獣使いみたい。というか、みんなわざと怒鳴つてた？

「すみません。有紀姉。祝いの席つてことで、俺たち気分が高揚していたもんで。他には何かされませんでした？」

「何も」

と有紀寧お姉ちゃんは説明しようとしたところを、またも私がその言葉を遮る。

「奢ってくれるつて言つてた」

「ちよつとしおちゃん！」

お母さんはそう言つてきたけど、田嶋さんは「本当かい？」と聞いてきたので、素直に答える。

「うん。確かに言つてたよ？」

「ほおお」

田嶋さんはやりと笑みを浮かべると、小物さんの一人の首に太い腕を巻き付け、「そいつはありがたいがとうな。俺たちのために」と顔を近づけて呟き、そのまま引きずるようにして店の中に入っていた。残りの三人も、別の人に引きずられて入っていく。これには有紀寧お姉ちゃんが「ちよつと待つてください！ 見ず知らずの方にそんなことさせては！」と止めようとしたのだけど、まさか本当に奢らせるわけないでしょと笑顔で言われ、半信半疑といった表情で、渋々中に入っていた。

でも、たぶん本気で奢らせるつもりだと思う。

「しおちゃん、なんであんなこと言ったの？」と、お母さんがちよつとだけ語気を強めて私に言う。

「だって、お母さんと有紀寧お姉ちゃんにいつまでも馴れ馴れしくしてたから……」

「だからって。駄目ですよ、こういうことは」

「はあい」生返事でそう答えると、私は店の中に逃げ込んだ。

食事はとても美味しかったし、とても賑やかで楽しくもあった。

小物さんたちは、田嶋さんたちに囲まれて終始青ざめたままだったけど、自業自得。

有紀寧お姉ちゃんたちが集まったのは、須藤さんが結婚することになり、その前祝いをするため。ちなみに、須藤さんのお相手は同じ職場の人で、けつこう可愛い人らしい。

そして食事が終わり、私とお母さんは一足先に帰ることになったのだけど、その帰り際にふと思いついて、私は有紀寧お姉ちゃんに相談事をした。その内容は、ここ最近似たようなことが起こり、私の性格もさっきのように意地悪になって、誰かの作為を感じてならないのだけど、有紀寧お姉ちゃんのおまじないでどうにかならないか、というもの。

そうしたら、嬉しいことに「それなら、良く効くおまじないがあ

りますよ」と言ってくれた。私はそのおまじないを覚えてもらい、みんなに挨拶をして店を出た。

そしてさっそく実践。

まず空を見上げ、右手を高々と挙げ、人差し指を空に向かってピーンと伸ばし、三回唱える。

「この三流っ！ この三流っ！ この三流ーっ！」

「ど、どうしたの？ 急に」

「有紀寧お姉ちゃんに教えてもらったおまじないをやって、あれ、雨だ」

唱え終わってすぐ、雨雲のない夜空から、さめざめと雨が降り出した。天気雨だと思うけど、そのわりに雨の量が少し多いような気もする。

それはともかく、私の心は対照的に晴れ晴れとし、元の自分にも戻れたような気がした。たぶんこれで、ナンパされてどうだこうだっというのは、もうないでしょう。

Episode「その一声は慎重に」 -了-

その一声は慎重に その3（後書き）

エピソード3終了。有紀寧ご一行にも登場願いました。

有紀寧については、本文にあったように既婚者。子供はなし。喫茶店のママ。旦那はマスター兼社長。そのぐらいでしょうか。

とりあえず、岡崎家と有紀寧たちとの付き合いが今なお多少ながらあるという設定にしました。

あとは、佐々木はつい最近この町に赴任してきました。以上。

さて、前のエピソードがかなり牧歌的だったので、今回はギャグに走ってみました。笑っていただけただけでしょうか。

春来たる？ その1

ベッドが一つ置かれた薄暗い個室で、椅子に座ったお父さんと杏先生が視線を膝に落とし、どこか遠い場所をぼんやりと眺めているような瞳で、しんみりといった様子でとつとつと喋り始めた。

「まさか、こんなあつけない最後を迎えるとはな……」

「ほんとよね。正直、今でも信じられないわ……。ゴキブリも真っ青な生命力を誇っていたのに」

「ああ。俺だつて信じられないよ」

二人の言葉がそこで途切れると、それを待つていたかのように、少し開いた窓から風が入ってきた。風は閉められた遮光カーテンの端を小さく膨らませ、穏やかに揺らす。でも風はすぐに止み、カーテンはゆっくりと元に戻っていく。

それはまるで、巻き戻されていく時間のようにも感じられた。

出来ることなら、本当に時間を巻き戻して欲しい。でも、それは叶わない願い。過去はもう変えられないから。

「あいつは……、どれだけ殴られても、蹴られても、それで生死の狭間を彷徨つても、すぐに復活してた」

「そうね」

その姿は、私も何度も見てきた。物心着く前から、何度も何度も。でも……。

「何があつても、復活してたつてのに……」。

どんなに水虫になつても、イボ痔になつても、円形脱毛症になつても、女に相手されなくても、目でカレーを食べても……」

「本気で息の根止めようとしても、結局、私には仕留められなかった……。本当、残念でしかたないわ……。でもまあ、だからこそ、あいつらしい最後なのかもね」

「そうだな……。タンスの角に小指をぶつけて、痛みあまり片足ではねていたら、その足の小指までタンスの角にぶつけて、そのま

ま逝つちまうなんて……」

「馬鹿だ馬鹿だと思つてたけど、散り際まで馬鹿のままなんて、どこまで馬鹿なのよ、陽平は……」

お父さんも杏さんも、悲しみを押し殺すように拳を強く握りしめている。

私だつて、悲しい……。

「……あのー、いつまで続くンスか？ 人をおちよくり倒したその芝居」

あ、ようやく陽平おじちゃんが喋つた。しかも呆れ顔で。

「つていうか……、なんで汐ちゃんまでこいつらに乗つかつてナレーションしてんのさ！」

「雰囲気出るかなーと思つて」私は笑顔でぺろつと舌を出して答えた。

「お願いだから出さないください！」

「うるせーぞ春原！ 他の人に迷惑だろ！」

「そつよ陽平！ ここをどこだと思つてるの！」

「それはあんたらでしょーがっ！ つうかここ個室だし！」

ええと、とりあえずこの部屋の状況を説明します。

まずここは光坂病院の病室。部屋の中にいるのは、私とお父さんと杏先生と、そして入院患者の陽平おじちゃん。その陽平おじちゃんの右足のスネにはギブスがあつて、吊されている。

余談だけど、時間が巻き戻つて欲しいとか悲しいとかつていうのは、昨日抜き打ちであつた数学の小テストのこと。陽平おじちゃんのことを言つてたわけじゃないからね。

「だいたい、見舞いに来たなら手土産の一つも持つてこいよっ！ なんてお前ら手ぶらなんだよっ！」

「なんで自爆した馬鹿に、そんなことしてやらなきゃなんねえんだよ」

「逆に、ここまでの交通費を出して欲しいくらいよ」

お父さんも杏先生も、むすつとした顔で答える。

「だったら来なくてもいいでしょ！」

「俺も杏も、そう思ったんだけどな……」今度は、やや神妙な面持ちで。

「思うなよっ！ 僕が寂しい人になっちゃっじゃん！」

「いちいちうっさいのよアンタは！」

杏先生が陽平おじちゃんを一喝して、喧噪が止んだ。といつても、陽平おじちゃんは不服そうにぶつぶつ小さな声で呟いているけど。

そして、ほんの少し間を置いてお父さんが言った。神妙だった表情を一変させて、とても楽しそうに、音符が目に見えそうなほど声も弾ませて。

「こんな面白いイベントに参加しない手はないよなっってことになっ
てさあ」

「ボクは面白くねえ！」

「なに言っつてんだお前」

また神妙な顔に戻った。しかも顔を近づけて、ヒソヒソ話をしようとしてるみただけで、声がダダ漏れ。っていうか意図的でしょ。お父さん。

「これで堂々と、杏に言いたいこと言えるんだぞ？」

「なんでだよ」

「よく考えてみる。実の妹が勤めている病院で、その姉が入院患者にさらなる怪我を負わせるわけにはいかないだろ？ だから、今お前がなにを言っつても、殴られも蹴られもしないんだよ」

「マ、マジか！？」陽平おじちゃんが杏先生を見る。全部聞こえている杏先生は、にこりと微笑んでいる。

「ごくり。という大きな音は陽平おじちゃんの唾を飲みこんだ音。

「ほ、本当に大丈夫なんだろうな」と不安げにもう一度お父さんを見る。そう言われたら、やっぱりこう言った。爽やかに親指を立てて。

「俺を信じる」

「……それでけっこう失敗してきたんですけど。でも、こんなチャ

ンスはもう二度とないかもしれないし……」

そして再度、杏先生をちらりと見る。微笑み具合が増していた。

「や、やっぱ無理でしょ！ 絶対殴るでしょあの人！」

「大丈夫だって」

「いや、大丈夫じゃないツス！ 無理ツス！ あの顔は殴る気満々の顔ツス！」

確かに、杏先生の笑顔には「お姉さんに言っただらァん？ 私の気持ちがスカツとするぐらい殴ってあげるから」という文字がくつきり浮かんでいる。これにはさすがに陽平おじちゃんも挫けざるを得なかった。

でもさ、仮に杏先生が本当に手を出せないとしても、退院後のことも考えてみようよ。

自分の誘導に引つかからなかった陽平おじちゃんに、お父さんは「ちっ」と舌打ち。

「なんスかその『ちっ』って」

「せっかく面白いもの見られると思ったのに」

「面白いのはアンタだけでしょ！ まったく、さっきから……。嫌がらせに来ただけなら、もう帰ってよ」

「そう簡単に帰れるか。せっかく嫌がらせに来たのに」

「……はつきり言っちゃいましたね。あなた」

「ま、冗談はお前の顔だけにしといて、これからしばらく、看護師さんたちにお世話してもらえるんだから、そういう意味じゃ良かったじゃないか。って、なんで落ち込んでんだ？ いつものお前だったら、底抜けなアホ面で大喜びするところだろ」

「底抜けのアホ面って、あんたねえ。それに、入院して良かったもクソもないでしょ。ってか、その話はしたくないよ」陽平おじちゃんの目から光が消えて、床が抜けてしまいそうなほど重いため息を吐き出した。

その件については、私もてっきり大喜びしているものだと思っていたのだけど、このリアクションは予想外。思わず、落胆した様子

で横を向いてしまった陽平おじちゃんに「どうして？」と聞きたくなったところで、病室のスライドドアが開いた。

入ってきたのは、手にお見舞いの品を携えたお母さん。

「春原さん、お怪我の具合はどうですか？」

「渚ちゃん……。ボクもう、生きる元気を無くしたよ」

陽平おじちゃんは横を向いたまま答えた。お母さんは、「えっ！

？ 怪我の具合、そんなに悪いんですか？」と驚きの声を上げた。

「ああ。ボクの心は傷だらけなんだ」

「そんな大変な怪我だったなんて……」

お母さんの表情がとたんに沈んだ。

陽平おじちゃんの心の傷の理由が、怪我に寄るものじゃないだろ

うことは私にも分かる。当然、お父さんも杏先生も。

「渚、もう手の施しようがないの。陽平はもう……」

「そうなんだ。春原のアホアホ病は……」

たまらず、陽平おじちゃんが「ちよつとあんたら！ さつきから

失礼にもほどがあるでしょ！ 少しはボクを気遣ったらどうなん

ですかっ！」と、がばつとこつちを向いた。

うっん、お父さんと杏先生に喋らせていたら、永遠に話が進まな

いような気がする。お母さんもずっと勘違いしたままだろうし。

やっぱりここは私が。

「陽平おじちゃん。らしくないよ？ 足の怪我の他に、何かあった

の？ もし私が力になれるようなことだったら協力するから、教え

てくれない？」

「汐ちゃん……」私を見てそう言うと、俯いて「ありがとう。でも、

こればかりは」と悲しげに微笑んだ。でも私は諦めない。ここで

諦めたら、お父さんたちのコントがまた始まって、話が足踏みし続

けてしまう。お母さんのためにも頑張らないと。

「そんなの分かんないよ。ねえ、話してみて？」

「……もう、どうにもならないんだよ」

「どうにもって……、陽平おじちゃんの面倒を見てくれる看護師さ

んが、婦長さん命令で若くない人に限定にされたっていう話なら、私には何も出来ないけど……、でも　！　って、あれ？」

陽平おじちゃんが口を大きく開いて驚いている。

「ひよっとして……、当てちゃった？」

「な、なんで知ってるのおっ！」

試しに一番可能性の高そうなものを言ってみただけだったんだけど、本当にそうだったなんて……。まあ、陽平おじちゃんらしいというか、お約束というか。

「どうせそんなこつたるうと思っただわよ」と杏先生。お父さんも「アホらし」と呆れた様子。お母さん一人だけ、「心の傷って、そういう意味だったんですか？」とちよつとびっくりしてから、「でも、怪我が理由じゃなくてちよつとホツとしました」と胸をなで下ろしていた。

「怪我つつつたって、ほんのちよつとヒビが入っただけなんだから。心に傷を負うような代物じゃないし、それに、杏や智代にやられ慣れてる春原にとつちや、こんなのかすり傷程度さ。だから」

とお父さんが言って椅子から立ち上がると、吊されている陽平おじちゃんの右足のギブスに片方の手を添えて、もう一方は親指を立て、さわやかな笑顔でこう続けた。

「ここを思いつ切りチョップしても、痛くも痒くもない。なあ春原？」

「痛いに決まってるでしょ！　つか痛みで死ぬわ！」

一瞬本気で、陽平おじちゃんなら大丈夫だよと思っってしまった。やばいぞ私。

さて、説明するのが遅くなったけど、陽平おじちゃんが怪我して入院したのは二日前の木曜日のお昼頃。入院先が棕ちゃんの働いているこの光坂病院だったから、すぐに私たちのところに連絡がありそうだけど、担当部署が違っつていう理由で、棕ちゃんが知ったのが昨日。それから杏先生の耳に入って、杏先生から私たちに。

最初、足を骨折して入院したって聞いたときは、軽く血の気が引

いてしまったほど驚いた。頭の中でイメージしたものが、途中からあらぬ方向に折れ曲がった足だったから。でも杏先生がすぐに「ほんのちよつとヒビが入った程度で、たいしたことないらしいから、何の心配もないって」と説明してくれたのでそのイメージを振り払うことができ、驚きはだいぶ軽くなった。

でも先生。骨にヒビが入ってるって、たいしたことあると思うよ？
そして、お父さんと杏先生とでこの日のこの時間、言い換えると土曜日の二時ぐらいに、みんなと一緒にお見舞いに行こうという話になって、今こうしているところ。お母さんが少し遅れたのは、お父さんが急に「すまん、飲み物買つといてくれ。ああそれと、軽くつまめるようなやつ」とお母さんに言い出したから。しかも陽平おじちゃんへのお見舞いもお母さんに持たせて。

私も杏先生も、それぐらい自分で買いなさいと言っただけで、またもお父さんが「汐、杏。俺たちは、俺たちにしかできないことしよう」と言い出して、そんなお父さんの様子から何か企んでいることに気付いた私と杏先生は、お母さんに任せることにした。

で、お父さんの企みというのが、病室に入って、無言のまま椅子に座り、コントをするというもの。

いつも思うけど、お父さんのこういうところ、思いつ切り子供だよね。

好きだけど。

そのコントも一段落して、やっとごく普通のお見舞い風景になるうかというところで、さつきまでナーズ姿だった椋ちゃんがショルダーバッグを肩に掛けて病室に入ってきた。

「春原くん、どう？ 具合は」

「どうもこうも、岡崎とお前の姉貴を摘み出してくれよ！」

「え？ 何かあつたんですか？」

「ひどいんだよこいつら、傷ついたボクの心を嘲笑うんだ！」

「お、お姉ちゃん！ それに岡崎くんもっ！ いくらなんでも嘲笑うのはひどすぎです！ ただでさえ患者さんの心は、普段よりもず

つとデリケートになるんですよ!」

強い口調で掠ちゃんが看護師さんらしいもつともなことを言ったのに対し、杏先生は「あつははあ。デリケートになってこの程度なんだってさ、陽平」と笑った。

「お姉ちゃんっ!」

「まあ待て、藤林。杏の言い分は間違っていないんだ。そうだろ？」

汐

え、えーっ!?!?

なんで私に振るのよおっ!

春來たる？ その2

無茶振りされた私は、苦肉の策としてこう答えた。

「お母さんパス！」

「え！？ 私？ そ、そう言われても！」

当然、お母さんは困る。そうなることを知った上でのパス。ごめんね、お母さん。お父さんが悪いんだからね？

ということ、なんてことするの！という抗議の目をお父さんに向けた。お父さんは私に「それは狡いぞ」と言いたかったようだけど、最初の四文字で口を結んだ。というか結ばせた。そして、そんな私とお父さんの水面下の攻防に気付いた杏先生が、ほほうと言いたげな笑みを浮かべていたのを、私は視界の端でしつかりと捉えていた。

その一方で、私のパスを受けたお母さんがあたふたと「春原さんの心の傷は、若い看護師さんがついてくれないからだそうですけど、それにしても、パパも杏ちゃんも言い過ぎですっ！」と説明していた。それを聞いた棕ちゃんは、意外な答えだったようでちよつと驚き、陽平おじちゃんに「そ、そんな事だったんですか？」と問い質した。

「そんな事って！ こんな寂しい部屋の中で一人つきりなんだよ！他に何の夢があるっていうんだよ！」

そういうことを唯一の夢とするところが、いかにも陽平おじちゃんらしい。

事情を理解した棕ちゃんは、やれやれといった様子。そして、苦笑いしながら「でもそれは、春原くんのせいなわけですから」と言った。

これを聞いて、杏先生が右の拳をポキポキと鳴らし、ゆらりとした低い声で言った。

「陽平……、あんた、私の可愛い妹に恥をかかせるようなマネ、し

てくれちゃったわけ？」

杏先生がこういう反応を示したのには理由があった。

病室に着く前に、杏先生を見た看護師さんが私たちに話し掛け、そのときの話の中で「椋さんのお姉さんも、春原さんと高校からの友人なんですってね。え？ 誰から聞いたかですか？ ナースの間ではもう知れ渡ってる話ですから」と笑いながら言われた。

つまり、陽平おじちゃんの恥が、結果的に友達である椋ちゃんの恥をかかせることになる、という論法と。

これに対して陽平おじちゃんは、身の危険を感じながら「ご、誤解です！ ボクは何も悪いことしてませんっ！」と強く主張。でも目は泳ぎ放題泳いでいるし、冷たい汗もぶわっと浮きだしている。

まあ、どちらに軍配が上がるかは考えるまでもない。

それに、何をしたのかはだいたい想像つくし、それが的外れだとも思わない。陽平おじちゃんの行動パターンは、昔も今もずっと変わらないでいるんだから。

そんな陽平おじちゃんは、杏先生の威圧で口を封じられて、代わりに椋ちゃんが、お父さんの催促に仕方なくといった表情で、事の次第を説明した。その内容は、方向性としては思ったとおりだったけど、中身についてはその上をいってた。

まず、私はてつきり、陽平おじちゃんの病室は最初から個室だと思っていた。だけどそれは間違いで、最初は六人部屋だった。そこで陽平おじちゃんが取った行動は、言わずもがな。

若い看護師さんが部屋にやってくると、えっちなことを言ったり口説いたりしてたらしい。

それを見ていた同室の大人の患者たちは、暇潰しにちょうどいいと止めようとせず、ただ一人の小学生の患者に至っては、早々にマネをし出した。しかも陽平おじちゃんが色々と余計なことを教えたため、さらにひどい状況に。

その結果、その子の親と若い看護師たちからクレームが出て、部屋を移動させることになった。その際、相部屋だとまた他の人に悪

影響が出ないとも限らないという理由で、個室に強制隔離。さらに、クレームを受けて若い看護師に接する陽平おじちゃんの様子をこっそり見ていた婦長さんが、この患者にはベテラン以外近づけてはいけないと判断。

陽平おじちゃん的には、さあ次はボディタッチだ！と次の日以降を楽しみにしていたらしく、天国から地獄に突き落とされた気分だったと言ってた。

たぶん、その下心を婦長さんが見抜いたからこうなったんだと思いい、試しに棕ちゃんに聞いてみたら、やっぱりそのとおりだった。ちなみに、相部屋での陽平おじちゃんの行いを棕ちゃんが話しているとき、杏先生が本気で陽平おじちゃんの右足のスネにかかと落としをしようと、突然立ち上がって片足を高々と振り上げていた。しかも、スカートを穿いていることなどお構いなしに。

慌ててお母さんが止めに入り、私も先生の足が振り下ろされないようにと咄嗟にその足を押さえて、陽平おじちゃんが悲鳴を上げる中で、棕ちゃんが説得。それで惨事は免れることができたんだけど、お父さんだけは、耳を赤くしてそっぽを向いていた。

棕ちゃんの話が始まる前に、席をお母さんに譲って移動したその場所からは、しっかり見えていたんだね……。

お父さんのえっち。

といった一幕もありつつ、棕ちゃんの説明が終了し、杏先生が「今度同じようなことしたら……、分かってるわよね」と釘を刺して、というよりも鉄杭を打ち付けて閉幕。

これでやっと、お見舞いらしいお見舞いになるのかなと思ったところで、棕ちゃんが帰ることとなった。

もともと長居できなかったのだから、しかたない。

凶暴なお前の姉貴を連れていけという陽平おじちゃんの訴えは、杏先生の眼力で即座に取り消され、棕ちゃんは「それじゃあまた明日」と陽平おじちゃんに言って病室を出た。棕ちゃんとちょっとお話ししたいことがあったので、ついでに私も病室から出る。

「ここじゃあ二人でお話しするどころじゃなかったからね。」

廊下は、当たり前前だけど静かで、部屋の喧噪とのギャップに思わず苦笑してしまった。

「急にどうしたの？」

「うん。お父さんたちって、毎度毎度賑やかだなあって。」

それには棕ちゃんも同意見のようで、クスツと笑った。

「それは言えてるわね。まあ、賑やかすぎるというか、度を越した悪ふざけをするときもあるけど。」

「特に陽平おじちゃんを相手にするときにはね。」

「そうそう。」

そんな会話をしているうちにエレベーター前に着く。おっと、こ
ういう話をしたかったんじゃない。

「ねえ、棕ちゃん。看護師さんのお仕事って、やっぱり大変？」

まさか私がこういう話を振ってくると思っていなかった棕ちゃんは、「え？」と一瞬驚く。

「どうして？」

「深い意味はないけど、どうなのかなって。」

深くはないけど、浅い意味はある。実をいうとここ最近、パン屋さん以外にも、看護師さんになるのもいいかなあって思っている。

「やっぱり大変？」

「そうね……。私、看護師以外の仕事をよく知らないから比較できないけど……。大変だとは思わ。」

「例えば、どういうところが？」

「うーん、やっぱり人の命に関わるお仕事っていうところかな。間違えましたでは許されないお仕事ですからね。」

確かにそれは言える。

「だから、医学や医療に関するいろんな知識が必要だし、知識だけじゃなくて技術も必要だし、状況に応じた適切な対応が出来ないといけないから、もう毎日が勉強。その為には体力だって必要だし、とにかくやるべき事がとっても多いの。それに、患者さんの心のケ

アもね」

「うわあ……、大変そう……」
「やっぱり、ハードル高いなあ……」。

そんな気持ち表情に出ていたようで、棕ちゃんが「でもね」と続けようとしたところで、エレベーターのドアが開いた。中には、パジャマ姿の七十歳過ぎぐらいのおじいちゃんが一人乗っていて、棕ちゃんを見るなり「おや、野上さん」と快活に話し掛けてきた。野上というのは、棕ちゃんの名字。

「あ、笹塚さん。今日もお散歩ですか？」

「ああ。せつかく元気が湧いてきたんだから、寝っ転がってちゃもつたいない」

「そうですね。でも、無理は絶対に禁物ですよ？」

「分かっている分かってる。野上さんの言いつけは守るよ。でないと、ばあさんと娘にこっぴどく叱られちゃうからね」

おじいちゃんはそう言っつて、目を細めて笑う。棕ちゃんも、「私にも叱られちゃいますからね」とにっこり微笑えむ。

「おお。野上さんに叱られるのはいいねえ」

「またそんなこと言っつて。おばあちゃんに言いつけちゃいますよ？」
「それは拙いな」

一階へ着くまでの僅かな時間の中、二人はそんな会話を楽しみ、私はそのやり取りを耳で楽しんでいた。

途中で止まることなく一階に到着すると、おじいちゃんは「それじゃあね」と元気に手を振っつて、病院のお庭へと向かった。すると、棕ちゃんが「今の人はね」と、関係者用の出入口へと歩きながら私に語り始めた。

「二ヶ月ぐらい前に、肺を患っつてこの病院に入院してきた患者さんなの。手術は無事成功したんだけど、よほどシヨックだったみたいで、ベッドの上ですつとふさぎ込んだ。元気がなくて、食欲もなくて、生きる力を失っつてしまった、そんな感じだった。

そんな笹塚さんをご家族の方が、毎日毎日病院に来て、一生懸命

励ましたり、怒ったりしてた。なんで自分の気持ちを分かってくれないのかって、笹塚さんもおばあちゃんも泣いてたこともあった。私も、笹塚さんには一日も早く元気になってもらいたくて、励ましたり怒ったり、……一度だけ口喧嘩みたいなこともしたわ」

「棕ちゃんが喧嘩!？」

棕ちゃんからはまったく想像できない光景だ。

「ま、まさか、杏先生みたいなことも……?」

「口喧嘩って言ったでしょ? さすがに、手や足は出さないよ」

よかった。棕ちゃんが私の知らないところで杏先生みたいな打撃技をしてたら、シヨックで卒倒していたところだ。だって、私にとって棕ちゃんは、白衣の天使そのものなんだから。

「その甲斐もあって、笹塚さんはすっかり元気を取り戻して、今はああしてりハビリ目的で散歩をするようになったの。」

そのとき、私ほんとうに嬉しかった。ご家族の方の心から喜ぶ顔も嬉しかった。

それともう一つ。

『ありがとう』って言うてもらえて、とっても嬉しかった。

命に関わるお仕事だから、辛いことや悲しいことは少なくない。わんわん泣いたことだって、何度もある。最初の頃なんて、それこそ泣いてばかりだったしね。

それでもこのお仕事を選んで、本当に良かったって思えるのは、そういう喜びがあるからなの。ありがとうって言うてもらえて、私も、元気になってくれてありがとうって患者さんに感謝して、よし、もっと頑張ろうっていう勇氣も湧いてきて。

だから、大変だけど大変じゃない。何物にも代えられない大切なものが、そこにあるんですもの」

やっぱり棕ちゃんは白衣の天使様だあつ!

と心の中で叫ぶ私。まさかここで絶叫できないでしょ?

そうして関係者用出入口の手前までやってくると、ここでお別れ。棕ちゃんはこれから、四歳になる一人娘のゆかりちゃんを迎えに保

育園へと行かなければならない。

余談だけど、ゆかりちゃんが産まれる前はパートじゃなかったけど、今はパートで働いている。看護師の仕事も大切だけど、娘も大切だからということだ。

「ねえ、汐ちゃん」

「うん？」

「ありがとうって言う言葉って、すごい力を持つてると思わない？」

「まあ、言われて嬉しくはなるけど……、すごい力かどうかは、どうだろう」

掠ちゃんみたいな経験なんて無いから、正直なんとも言えない。

「そうね。まだ実感として分からないかもね。でも、これだけは覚えておいて欲しいな。」

思いを込めた『ありがとう』の言葉は、必ず幸せな気持ちを運んでくれる。言われた相手も、言った本人も。大切に想う人が相手であればあるほどにね」

幸せを運んでくれる、か。大切な人であればなおさら。

やっぱり掠ちゃんとお話しして良かったな。

私は掠ちゃんの言葉をしっかりと胸に刻んで、バイバイと手を振り、踵を返した。

来た道をなぞるようにして陽平おじちゃんの病室に戻り、スライドドアを開ける。その音にお父さんたちが私の方へと顔を向けたのだけど、このとき、私は背後に人の気配を感じたので、何の気なしに振り返った。

そこにいたのは、ナース服ではなく私服を着た二十歳前後らしき私の知らない女の人。その手にはお見舞いの品だろうものがある。そしてその女の人は、けっこう可愛かった。

え〜と、どちら様？

春来たる？ その3

病室の前にいつまでも突っ立っているわけにもいかなかったので、背後の女の人にちよこんと頭を下げて、そそくさと病室の中に入った。そのとき、その女の人にお母さんは別段驚きはしていなかったけど、お父さんと杏先生は、幽霊でも見るような顔をしていた。

そして、陽平おじちゃんはどうと……。

なんで「あなた誰？」っていう顔してるの？ 失礼すぎるでしょ。ひよつとして、この人が部屋を間違えてるだけ？ それなら全部丸く収まるけど。でも、そうはならなかった。

「怪我の具合はどうですか？ 春原さん」
「やっぱりお見舞いに来た人なんだ。」

なのに陽平おじちゃんは、頬を赤くしつつ激しく緊張した様子で「え！ あ、はい、もうびんびんですっ！」とよく分からない答えをして、すかさずお父さんが「てなに言い出すんだこの鬼畜ヤロオ！」と、動揺を露わにツッコミを入れた。

杏先生も、「あんた何したの！ この子に何しでかしたの！ この鬼畜っ！」と陽平おじちゃんの胸倉に掴みかかると、力任せにがくがくと揺さぶりだした。

こんな可愛い人がお見舞いに来たんで、二人がパニックになる気持ちは分かるけど、陽平おじちゃんが骨折してることに、完全に忘れてるでしょ。

この事態に、お母さんが「パパっ！ 杏ちゃんも！ お客様が驚いてるでしょ！」と大きな声を上げた。

あれ？ ついさつきも似たような光景が……。

うーん。今日は一段と密度が濃いなあ。

お母さんの大声の効果はあったようで、お父さんも杏先生もはたと我に返り、ぴたりと動きを止めた。次いで、取り乱したことを無かったことにするかのようになり、何食わぬ様子で元の位置に戻り、コ

ホンと咳を一つつく。そして、いかにも冷静な顔を装って、女の人に尋ねた。ただ一人、陽平おじちゃんだけはひくひくと呻いている。「あー、と。あの、この鬼畜野郎とは、どんなご関係で？」とはお父さん。

「キズモノになんてされてませんよね」これは杏先生。

思いつき引きずってるよ。二人とも。

「あんたらボクを何だと思ってるの！ 誤解されるようなこと言わないでくれる！」

さすが陽平おじちゃん、復活早っ。

「なにつて、鬼畜だろ？」

「鬼畜よね」

「誰が鬼畜だ！」

「お前以外に誰がいる」

陽平おじちゃんのお客さんがいないのならこのまま続けてもらっても構わないけど、困惑しているお姉さんを置いてきぼりにし続けるわけにもいかない。

というわけで、お母さんよりも一足先んじて、今度は私が声を上げた。

「いい加減にしなさいっ！ いつまで続ける気なのっ！」

するとお父さんと杏先生は、バツが悪そうに頬を指でかいたり苦笑いしたり、陽平おじちゃんまで「そ、そうだね」と頭をかく。私が言ったのは、お父さんと杏先生に対してだったんだけどなあ。ちなみにお母さんはやれやれと苦笑し、お姉さんはぽかんとしていた。「ほら、陽平おじちゃん」私はそう言っつて、意識をお姉さんに向けさせる。これで話が進むでしょう。

「あ、ああ。ええと……、お見舞いに来てくれて、ありがとね。ボク、すごく嬉しいよ……。それで、さ……。て、あの、ボクの声、聞こえています？」

「……あっ！？ は、はい、すみません！」

「どうか、したの？」

「いえ、ちょっと、圧倒されちゃいまして……」

「あ、あはは。こいつら、ちょっと頭がおかしいから　ね……」
と言うも、お父さんと杏先生の睨みに語尾がしぼんでいた。

「いえ！　そういうわけでは……」

「そ、そう……。と、とにかく座りなよ」

そう笑顔で勧めても、部屋にある椅子は二つだけ。そして一つは杏先生が、もう一つはお母さんが座っていて、どちらかに席を空けてもらうしかない。たぶん、陽平おじちゃん的には杏先生に席を立つてもらったつもりだったんだと思う。けど、席を立ったのはお母さんだった。というか、お母さんが即座に立ち上がった。

「こちらへどうぞ」

「いえ、いいですよ！　いいですよ！」

「そう仰らずに、どうぞ座ってください」

私は、てつきりこのままお母さんの椅子にお姉さんが座るものだと確信していたのだけど、杏先生も席を立ち、「そうそう。遠慮しないで」と自分の椅子に半ば力ずくでお姉さんを座らせ、ならば杏ちゃんは私の椅子にと勧めるお母さんに、「それじゃ私が立った意味ないっしょ」と笑ってお母さんを座らせる。

そしてお父さんの隣に立ち、興味津々といった表情でお姉さんを見つめた。お父さんも何か考え込んでいる様子。実を言うと、私もさつきから気になっている。この三人の考えているところは、間違いないと同じはず。

ちなみにその内容は、すでにお父さんが口に出している。

陽平おじちゃんと、どういう関係の人なのか？

私もそれについて尋ねてみたいところだけど、ここは陽平おじちゃんとお姉さんの時間。割って入るには気が引けてしまい、成り行きを見守ることにした。どうやらお父さんも杏先生も余計な茶々を入れるのを控えることにした模様。

そんな中で、なんとお母さんが何の躊躇いもなく陽平おじちゃんに質問した。

「春原さん、こちらの方は？」

「あ、え〜と〜……」

やっぱり知らないらしい。

でも、それってつまり……、陽平おじちゃんには知らなくて、お姉さんは知っていて、わざわざお見舞いにやって来て……、で、どういうこと？ 何があったの？

私は思わず頭を抱えそうになった。そしてお父さんも杏先生も、深刻な問題に直面しているような顔をしていた。

そんな状況の中、お姉さんが陽平おじちゃんの代わりに答えた。

「御久島^{みくしま} 朝子^{あさこ}っていいいます。春原さんとは、同じ会社で働いてます」

その答えのあと、私たち四人は激しく驚いた。

というと語弊がある。お姉さんが答えたあと、まるで驚愕の事実を聞かされたかのように陽平おじちゃんが大声で驚き、そんな陽平おじちゃんにみんなが大声で驚いた、というのが事の顛末。

陽平おじちゃん、それはひどすぎない？

そう思ったのはお父さんも杏先生も同じ。

「おまえ、それ最低だぞ……」

「同僚の顔を覚えていなんて、今すぐ土下座して謝んなさい」

「だ、だつてさ……」

でも、捨てる神あれば拾う神あり。お母さんが「何か事情とかあるかもしれないじゃないですか」とフオロ〜。

そしてその事情を、少しだけ落ち込んでるように見受けられるお姉さんが説明し始めた。

「あの、しかたないんです……。春原さんとは部署が違いますし、それに私、会社ではとっても地味で、目立たない存在なものですから」

「え〜っ」

つといけない、思わず声に出しちゃった。

でも幸いなことに、声を出してしまったのは私だけじゃなかった。

杏先生が「そのルックスに陽平が食い付かないはずないわよ」と反論した。これには私も同意だし、お父さんも「だよなあ」と頷いてから、「ひよつとして、春原が入院する前日に入社したとか？」と聞いた。

「いえ、入社したのは一年くらい前です。でも」

お姉さんはそう言うと、シヨルダーバッグから黒縁の眼鏡を取り出してそれを着ける。次いで、深緑地に白の水玉模様のヘアバンドを外した。途端に艶やかなセミロングの黒髪がさらさらと流れだし、押さえられていた前髪がおでこを覆い隠し、耳の後ろに流し留めていた髪が、しっかり見えていた両の耳を完全に隠し、目尻をも隠した。

そして仕上げに、目にかかる髪をヘアピンで申し訳程度に留めて変身終了。

はつきりと見てとれていた顔立ちが、髪の毛と眼鏡ですっかり隠されてしまった。確かにこうすれば、地味で目立たないと言われて納得してしまう。

女は髪型変えるだけで別人になるって聞くけど、こうまで変わるものなんだ。けっこうびっくり。お母さんも少し驚いていて、陽平おじちゃんも指を差して「あ、あ、あゝっ！ 御久島さんっ！」と驚いている。

「はい……。つまり、こういうことなんです。私、会社ではいつもこうしてまして」

「な、なるほど……。春原が分からないのも頷けるな……」

「でもさ、なんで会社にいるときだけ、顔を隠すようなことしてるの？」と杏先生。

「会社だけじゃなくて、普段はいつもこうしてるんです」

「絶対さっきの方がいいよお。なんでいつもそうしないの？」とちよつと訴え気味に言ったのは私。だって、本当にもつたいないんだもん。

「その、高二ぐらいから男の人に声を掛けられるようになって、そ

れがなんだか恐くなってきて。それで、なるべく目立たないように
とこの髪型にして、眼鏡も掛けようにして」

なるほど。納得。

「ふうん。可愛いには可愛いなりの苦労があるものなのねえ」

「良かったな、杏。そんな苦労をする必要がなく」

言葉途中に、お父さんの顔面に杏先生の回し蹴りが一閃。お父さんは壁と先生の足に挟まれたまま、笑顔で尋ねられた。

「なあんか言っただあ？ 朋也あ」

「な、な、んも、言っただけ……」

また余計なコト言うから。っていうか、杏先生だって可愛いよ。

「ったく。まあ、これでスッキリしたわ。つまり御久島さんは、会社の代表でお見舞いに来た、ということなのね？」杏先生はそう言いながら足を下ろし、お父さんは顔面を押さえた。

「いえ、代表というわけでは……」

「え？ それじゃ……、罰ゲーム!？」

「何でそうなるンスか!」

「当たたり前でしょ。あんたのお見舞いに女の子がたった一人で来るなんて、絶対に有り得ないじゃない」

「なんで有り得ないんだよっ！ 本当にボクのことを心配して来てくれたのかもしれないじゃないかっ!」

でもなあ、この前引っ越しの手伝いに来てくれた猫田さんが言っ
てもんなあ。男の人にはけっこう人気あるけど、女の人には総スカ
ンだっつて。

って、あれ？ なんでみんな私を見てるの？ それに、なんで陽
平おじちゃん「汐ちゃん……、いま言ったこと、マジ?」って私
に聞いてくるの?

「私、なにか言っただけ?」

「思いつ切り言っただけでしょ! 女の人には総スカンだっつて!」
しまった。知らずに口に出していたんだ。

「あ、と……、でも、私は嫌いじゃないよ?」

「フォローになつてませんっ！」

すると杏先生が私の代わりにフォロー……、するわけないか。

「陽平、無駄な抵抗なんてしないで、現実を受け入れなさい。もう手遅れなんだから」

「手遅れ言うな！」

とここで、お姉さんがクスツと笑つた。これに杏先生が「ほら。

彼女も諦めた方が身の為だつて笑つてるじゃない」と言うと、お姉さんはさらりと答えた。

「あ、いえ、そうじゃないんです。春原さんの周りつて、どこに行つても明るくて賑やかになるなあって。会社でもそうなんですよね。まあ、女子社員の間では、その……、そういう声も確かにありますけど……。」

でも、私もそういう春原さん、嫌いじゃないです」

……お、おっつとっつ！

春来たる？ その4

お姉さんの言葉をどう受け取ればいいのか悩みどころだけど、少なくとも、陽平おじちゃんに対してわりと好印象だということは分かり、私の表情が驚きの中でちょっと緩んだ。周りを見ると、お母さんも私と同じリアクション。お父さんと杏先生は、そんな馬鹿なと顔をひくひくと引きつらせている。陽平おじちゃんは大いに驚き、興奮気味にその真意を確認しようとした。

「あ、あの、御久島さん……、それってつまり、ボクのこと、すすす、好きってこゝろ」

でも杏先生の無言の脳天チョップがその言葉と意識をつかのま断つ。チョップじゃなくてもいいんじゃない？ そして、引きつった笑顔で先生が質問。

「嫌いじゃないけど、別に好きでも何でもない、ってことよね？」
お姉さんは「いえ」と否定すると、言おうかどうかと躊躇とだけ迷ってから「明るい人って、けっこう好きです。それだけで幸せにしてくれそうですし、私にはないものですから」と答えた。

またもや部屋の中の時間が止まった。

これってつまり、やっぱりそういう意味？と思考を再開させたと同時に、杏先生が必死の形相でお姉さんを諭し始めた。

「ちよーっ！？ ちよちよちよ、ちよっと待ちなさい！ ね？ い、いい？ こいつが明るいいことは認めるけど、救いようのない馬鹿なのよ？ それにだらしないし、へたれだし、経済力ないし、セクハラおやじだし、顔も終わってるし、それからそれから……」
そこまで言わなくても。

それに、これが陽平おじちゃんへの告白と決まったわけじゃないから。

そしてお母さんも「杏ちゃん！ いくらなんでも言い過ぎですよ。春原さんが可哀想ですっ」と陽平おじちゃんをフォロー。この援護

射撃に、陽平おじちゃんが頭を押さえながら「そおだそおだ！」と復活。

「なら渚！ あなたは陽平のいいところを言えるの？」

「それは……！ その……、明るいところと、優しいところと……、それと、え」と……」

あ、陽平おじちゃんが落ち込んだ。

「次っ！ 汐ちゃん！ 渚が言った以外のこと！」

えっ！ 私？ しかも制限あり？

「ええとね……、周りを楽しくしてくれること、かな」

「それは渚と被ってる！ 次っ！ 朋也っ！ って聞くまでもないか」

さらに落ち込ませちゃったみたい。

「こいつに良いところなんてないからなあ」

まあそう言うとは思ってた。

「あんたらそれでも長年の友達があっ！ 少しぐらいボクを持ち上げてくれてもいいじゃないかっ！」

「と、まあ。こいつはただの脳天気バカなだけなのよ。だから今こいで、しっかり目を覚ましなさい？ まだ若いんでしょ？」

「二十二です」

「に、じゅう……、ってずいぶん若いじゃない。じゃなくて、こいつは今年で三十四よ？ 干支一回り違うのよ？」

「はい、知ってます」

「知ってるって……、あなた、男の人と付き合った経験ないでしょ。男を見る目がないと、あなたが不幸になるばかりよ？」

「あの、今まで何人か彼氏いました。それと、昔から同じようなことよく言われています。男を見る目がないからダメ男に引っ掛かるんだ、だから早急に目を養いなさいって」

……なんていうか、それって、陽平おじちゃんがダメ男だと宣告してるようにも聞こえるんだけど、気のせいだね？

「実をいうと、今まで私がお付き合いした人って、みんなあんまり

いい人じゃなかったんですね。

別れた後もしばらく私をストーキングしてた人とか、
知らないうちに私名義で借金をした人とか、

私のお給料を競馬や競艇につき込んでた人とか、

私に変な格好を強要した人とか、

夜のお仕事をさせようとそういうお店に勝手に応募してた人とか、
一番シヨックだったのは、高一の時の初めての彼氏で、そういう
年頃だから我慢しきれなかったんでしようけど、私が寝ている間に
私のシヨジ

「つとストープ！」

杏先生が慌ててお姉さんの口を塞いだ。

シヨジ……、所持？ 所持品？ 何か大事なモノが盗られたって
こと？

「カミングアウトはもういいから！ っていうかそれ以上はアウト
しすぎっ！」

お姉さんは頷き、ふうとため息をついて杏先生が塞いでいた手を
放す。そんなに慌てるようなことをお姉さんが言おうとしたのか
な。う、ちよつと興味が湧いた。けど、聞いても杏先生に駄目って
言われるだろうから諦めよう。

「とにかくっ、あなたがダメ男専おだということはよく分かったわ。
でもね、だからこそ一刻も早く足を洗わないと、本当に取り返し
つかないことになるのよ？ あなたの人生ズタボロで終わっちゃ
うわよ？」

「それはそうでしょうけど……、だからといって春原さんがそう
とは……。それに、お付き合いを始めたわけでもないですし、交際
を申し込まれてもいませんから」

じゃあ、申し込まれたらどう返事するつもりなんだろう。という
興味が湧いたら、すかさず陽平おじちゃんが真剣な眼差しでお姉さ
んに申し込んだ。私たちがいる前でするなんて、しかもベッドの上
で、右足にはギブスをつけて、寄りにも寄ってパジャマ姿で。

さすがだなあ。

「御久島さん。いや、朝子ちゃん、ボクとお付き合いして、幸せになりませんか？ 君のその不幸な人生に、ボクがヒロードをつけてあげるから」

「んなモンつけんなよ」とお父さんが呆れ顔で突っ込む。

ピリオドって言いたかったのね。それにしても、陽平おじちゃんってほんとチャレンジャーだね。好印象を持っていたとしても、だからといってそれが恋愛感情とは限らないのに。

と思ったのだけど、ところがところが。

「はい」とお姉さんが答えた。

「……え、ええええっ！ マ、マジでえっ！？」とは陽平おじちゃんの叫び声。

「はい」

私も信じられない気分。お父さんと杏先生も愕然としている。この日最大の衝撃と言っても過言じゃないですよ。

「あ、あははははは……、じよ、嘘とか冗談とかじゃ、ないよね？」

「はい」

「え、え〜とお……、ど、どうしようか、ボク、どうしたらいい？」

岡崎

OKしてくれるとは陽平おじちゃんも思ってたんだね。まあ、今までOKしてもらえた試しがないから、困った顔でお父さんに助けを求めてしまうのも仕方ないのかもしれないけど。でも、この状況で相談するならお母さんにすべきだよ。だって、今のお父さん、明らかに冷静さを欠いているもん。ついでに杏先生も。

「ま、まずはだ！ これが夢か現実か確認する必要がある！ ということで杏、こいつの右足をへし折ってみてくれ！ 痛ければ、夢じゃないって分かるから」

「分かったわ……。いくわよ、陽平！」

「お、おう……！ ってボクの足で確認しなくてもいいじゃん！

ていつか折るなよ!」

「じゃあどうやって確認しろっていうんだよ!」

「自分のほっぺたでもつねればいいでしょ!」

「あ、そうか……」

これが素だつていうところで、どれだけパニックになっていたかがよく分かる。で、お父さんも杏先生も自分の頬をつねり、これが現実だと言っことを確認した。

「そうか、これは夢じゃないのか……。なんてこった……」

「……なんで残念そうなんだよ。てか、どうすりゃいいんだよお」

「どうもごうも、自分でコクっておいて俺に聞くな! ていつかあんな、長年こいつのアホアホ振りを見てきた俺からの忠告だ。今すぐ前言撤回しろ。さもないと」

お父さんがお姉さんにそう言い掛けたところで、お母さんが笑顔で「私は、とても良いお話だと思いますよ」と割って入った。

「渚っ! あなたなに言い出すの! この子の人生が滅茶苦茶になつても構わないっていうの!」

「滅茶苦茶なのはあんたらでしょ!」と陽平おじちゃん。そしてお母さんは、動じることなく、当たり前のことのように言つてのけた。「そんなことにはならないと思います。だって、春原さんはとても優しい人ですから、きつとこの人のことを大切にします」

「ぐっ……! 汐ちゃんからお母さんに何か言つてあげてよ!」

「えっっ! えと、私も、ちょっとお姉さんが心配だけど、お母さんの意見も間違つてないとは思つし、それに、これは陽平おじちゃんとお姉さんの問題だし、今すぐ結婚するっていう話じゃないんだし……」

「ぐっっ! 陽平! あんたから直接言つてやんなさい! 俺と付き合つたら、塵すら残さず破滅させてやるぞつて!」

「誰が言つかつ! ていつかボクは悪魔ですか! 半マゲ井ですかっ!」

「まあまあ、杏。汐の言うことにも一理ある」

あれ？ お父さんは反対派じゃなかったの？

「朋也までっ！」

「だから落ち着けて。いいか？ 汐の言うとおり、今すぐ結婚するわけじゃない。それにだ、実際に付き合えばこいつの本性がよく分かるし、そうなれば彼女は愛想を尽かして、春原はめでたくフラれて、万事解決だ」

「でも、その間にこの子が受けた傷はどうなんのよ！」

「あんたらねえ！ どこまでボクを貶めれば気が済むんですかっ！」

「そうですよ二人とも。きっと彼女とうまくやっていきます」

「渚ちゃん……、渚ちゃんだけだよ、ボクの味方はっ！」よつばどお母さんの援護が嬉しかったようで、涙と鼻水を流しながら喜んでいる。でも、お母さんもまるつきり心配していなかったわけじゃなかったみたい。

「ただし、もしも彼女を泣かせるようなコトしたら、絶対に許しませんからね」

お父さんや杏先生、智びょんなら、どう許さないのかなんて考えるまでもないのだけど、お母さんがどう許さないのか、それがまったくの未知の世界だけに、お母さんの笑顔は違った迫力を纏っていた。泣いて喜んでいた陽平おじちゃんが、ぴしりと凍り付いたほどもど。

お母さん、腕を上げたね。かなり早苗さんに近付いてきたよ？

杏先生は納得しかねる様子だったけど、ひとまず何かあったらお姉さんからお母さんに連絡を入れて、内容によってはお父さんと杏先生が陽平おじちゃんを叱ったり肅正したりする、ということを得した。

なんだか、お母さんとお父さんと杏先生が、正式にお姉さんの保護者になったような。

それはともかく、これで陽平おじちゃんとお姉さんのお付き合いが私たちの中で公認のものとなったわけだけでも、果たしてこの話この場にはいない人のどれだけが信じてくれるだろうか。早苗さんと

有紀寧お姉ちゃんはすぐに信じてくれるだろうけど、少なくとも智ぴよんと芽衣ちゃんは、実際にその目で確認するまでは信じてくれないと思う。

そうそう、芽衣ちゃんといえば、明日お見舞いに来ることになっている。旦那さんと、今年小学一年生になったばかりのマリアちゃんとタケルくんも連れて。そのあと私の家に寄ってくれることになっているので、とても楽しみにしていたりする。

こうして、まさに青天の霹靂と言える衝撃展開が一段落つくつと、お見舞いは終了となり、その余韻がいつこうに消えないまま、私たちは病院を後にした。ちなみにお姉さん、御久島さんも一緒に部屋を出て、私たちとはバス乗り場で別れた。

そして帰り道。

「しっかし、世の中わからないもんだなあ」

「ほんとよねえ……。神様の悪戯というか、誰かの作為としか思えないわ」

誰かの作為？ つい最近、私もそんな事を思ったけど。……まさか、有紀寧お姉ちゃんのおまじないが効いてないってこと？ もう一回、あのおまじないをした方がいいのかな。

「にしても、あの子でホント大丈夫なのか？ 随分と大人しそうだし。やっぱ春原には、手綱をしっかり握れる姉さんタイプの方がいいと思うんだけどなあ。例えば杏みたいなの」

「あ、それいいかも」

と思ったのに、杏先生の体がぞわぞわって震えて、明らかに拒否反応を示した。

「そこで私の名前を使うなっ！ 虫ずが全速力で走ったじゃないのっ！ 汐ちゃんも肯定しないっ！」

「でも、けっこう息合ってると思うよ？」

「そういう問題じゃないのっ！ くは、全身鳥肌立ったまんまよ」杏先生はそう言っつて自分の腕を見る。うわ、確かに鳥肌まみれだ。するとお母さんが、「私は、あの二人はともお似合いだと思

ますよ?」と言った。

「何の根拠があつてそう言つてんの」

「根拠はないですけど……、なんとなく」

「なんとなくつて……。そんなんでああも自信満々に言えるとは、さすが渚ね……。まあ、端から見て釣り合いがまったく取れていないようで、結局こうして釣り合つちやつた渚の言う言葉だから、無下には出来ないのかもしれないけど。ねえ朋也?」

にやりと牽制する杏先生の視線に、お父さんが「んなことより、お前の方はどうなんだよ」はちよつとだけ恥ずかしそうな顔をして、ぶつきらぼつに言葉を返した。

「何が」

「新しい彼氏のことにかまつてるだろ。ベンチャー企業の社長やつてんだっけ? そいつ」

「ああ、あのボクちゃんね。もう別れた」

え、だつてまだ半年ぐらいだよ。付き合い始めて。

「またかよ……」

「だあつて、たかだか小生意気な悪ガキ二人相手に、ビビりまくつてんだもの。しょうがないから私が蹴り倒してやつたけど」

「そんな理由で別れるなよ……、てか蹴り倒すな」

お父さんはそう言うけど、やつぱり、怯まずに守つてくれるような強い人じゃなきゃ幻滅しちゃうよ。男の人は、優しいだけじゃ駄目だからね。

「たく、いつまでもそんなことやつてると、死ぬまでバツ二のままだぞ」

「大きなお世話よ」

「そうやって余裕カマすのはいいが、知らないからな。あの子と結ばれた春原に散々つぱら自慢されて、屈辱の泥沼に全身漬かり続けることになつても」

意地悪な笑みを浮かべて言つたお父さんのその言葉に、杏先生は笑顔で「あの二人が結ばれるはずないじゃん。すぐに別れるに決ま

ってるわよ。あんただってそう言ってたじゃない」と否定はしているけど、顔色は一瞬にして真っ青になり、大量の汗が流れ出していた。

とにもかくにも、三十四年目にしてやっと陽平おじちゃんに春がやってきました。いやいや、お相手が二十二歳の可愛い人となれば、まさに桃源郷にたどり着いた気分かな？ あとは、この春というか桃源郷がずっと続くかどうか。

ついでに、私の春も来てくれないかなあ……。

Episode「春来たる？」 -了-

春来たる？ その4（後書き）

エピソード4終了。

今回は椋が登場しましたが、それよりなにより、衝撃の展開と衝撃の事実が！

春原にとつとつ春が来ました。お相手はダメ男^お専門の御久島朝子嬢二十二歳。さあさ二人の行く末は？

そして杏はなんとバツ二。いったい何があったのか！などと感嘆符をつけるほどの中身じゃないというか、お約束的な代物なんですけどね。ちなみに子供はいません。

きょうだい その1

この日の午後、陽平おじちゃんのお見舞いを終えた芽衣ちゃんたちが、家族揃ってうちに遊びにやって来た。のだけど……。

「岡崎さんっ！ 渚さんっ！ どうしようっ！」

これが、我が家の玄関の戸を力任せに開けて最初に放った、芽衣ちゃんの第一声だった。しかも呼び鈴を押すことを忘れ、ごめんくださいなど最初に声を掛けることも忘れて。

来訪を告げる騒々しいその物音と声に、お母さんが表情を曇らせて、慌てて玄関へと急ぐ。私とお父さんかというと、そう慌てることなくやや遅れて玄関へと向かった。こういった感じの登場シーンは、昨夜の一家団らんの中で想定されていたからなだけ、そこにはお母さんも居たはず。なのに一人だけ反応が違うのは、もしかしたら別のことで大変な事があったのかもしれないと心配したから。ホントお母さんは、心配性というか優しいというか純真というか。そして、一足先に玄関に着いたお母さんが尋ねた。

「芽衣ちゃん！ どうかしましたかっ！」

で、返ってきた答えは、動揺のほどがはつきりと分かる「渚さんっ！ お兄ちゃんが彼女で会社の人なんですっ！」という、日本語になっていない言葉。

一瞬、芽衣ちゃんの勢いに釣られるようにしてお母さんが「えっ！？」と驚いてしまっていたけど、さすがに驚き続けるようなことはしなかった。ただし、再び喋るまでに、僅かに遅れて玄関に顔を出した私とお父さんは芽衣ちゃんたちへの挨拶をしませていたけど。「え……、と？ あの、もう少し分かりやすく話して頂かないと」「だから彼女がお兄ちゃんと会社なんですよっ！」

うっん、ここまで本気で取り乱す芽衣ちゃん、初めて見た。それほど、陽平おじちゃんに御久島さんのような彼女が出来たことが衝撃的だったということなんだろうけど、ひょっとしてお母さんが心

配するように、私たちが想像しているものとは違う理由で動揺しているとか？

と思っていると、お父さんが芽衣ちゃんに「とりあえず落ち着けつて。後ろの三人が困ってるだろ」と、微塵の不安も感じていないような口ぶりで言った。まあ、お父さんだからね。

「これが落ち着いてられますかっ！」

「んじゃあ、芽衣ちゃんはここにいて好きなだけ興奮していいから、そっちはとりあえず上がってくれ。このまま玄関に立たせっぱなしってわけにいかないし。汐、居間まで案内頼むな。渚はお茶を出してくれ。芽衣ちゃんの相手は俺がするから」

「うん。わかった。けど、いつもみたいに悪ふざけしてコントなんかしたら駄目だよ？」

「するか」

「どうだか」

私は念のためにお父さんに釘を刺し、豊治おじさんにマリアちゃん、タケルくんの三人に「さ、どうぞ」と声を掛け、二つの元気な返事と一つの控えめな返事を受けて居間へと案内した。案内と言っても、たかだか数メートルの距離でしかないけど。

居間に入ると、途端に三者三様の声を上がった。何に対してかというのと、テレビの周辺を所狭しと陣取り、しかも、ささやかな庭に面する壁一面のガラス戸を死守しようとしているかのように並んでいる、十七個のだんご大家族のお出迎えに対して。

「わあっ！ だんご大家族がいつぱあいつ！ ねえ、全部で何個あるの？」と目を輝かせて最初に私に質問したのは、元気印のマリアちゃん。

その質問に、部屋の戸を閉めてから「十七個だよ」と答えると、感心した様子で眺めていたタケルくんが次いで質問してきた。ちなみにタケルくんも元気印。

「これ以外にもあるの？」

「ううん。我が家のだんご大家族はこれで全部。でも、今年のクリ

スマスにまた一つ増えると思うよ」

最後に、どちらかというとな大人しい性格の豊治おじさんが、他の大人の人と同じような一言。

「これだけあると、圧巻だね」

「そうですね。私も初めて全部を並べた光景を見たときは、ほんと感動しました。やっと全員集合できたんだって」

「そうだね。きつと、この子たち喜んでると思うよ」

「私もそう思います。ところで、芽衣ちゃんが言おうとしたことなんですけど。ってその前に、どうぞ座ってください」

芽衣ちゃんが冷静になるのを待っているより、豊治おじさんから聞いた方が話はずいぶん早い。

豊治おじさんは、それじゃと言って座り、「あんなに驚かなくていいのにな」と苦笑いしながら話し始めた。

「お義兄さんのお見舞いに行ったら、病室に若い女の子がいてね。」

その子がなんと、お義兄さんの彼女だったんだ。まあ、お義兄さんは明るくて楽しい人だから、彼女がいたって不思議じゃないんだらうけど、お義兄さんにそういう人がいるだなんて聞いていなかったら、本当に驚いたよ。お相手は同じ会社の子で、しかも十二歳も年下だって言うし」

あんまり関係ないけど豊治おじさんは芽衣ちゃんより二つ下。

とここで、マリアちゃんと一緒にだんご大家族と戯れていたタケルくんが「でもさあ、しおちゃんのパパが前に言ってたよ。陽平おじちゃんに彼女ができたなら、世界が破滅しちゃうって」と割って入った。

お父さん、タケルくん相手になんてこと言うの。

と思っただらマリアちゃんまで「だから陽平おじちゃんには、一生彼女ができないんだって言った」と付け加えてきた。

「それじゃあ、世界は破滅しちゃうの？」

「そんなわけないよ」

心配そうに聞いてきたタケルくんは、笑顔でそう答える裏側で、

いらないうところで子供っぽさを発揮するお父さんの所業に頭痛がしていた。そしてそれはお母さんも同じだった。ちょうど、全員分のお茶とジュースを載せたお盆を持って部屋に入ってきたお母さんが「もうっ。パパったら」と少し眉をつり上げていた。

まったく、うちのお父さんは。

まあそれはさておき。

「それで、他には何かありましたか？」

「他と言うと、そうだね。芽衣さん、これはお義兄さんと岡崎さんの企みだろうとか言っ、最初は信じようとしなくてさ。それで、やっと信じたと思ったたらいきなり錯乱状態に陥って。あそこまで壊れた芽衣さんを見たのは初めてだったから、ほんとビックリしたよなあ。お前たち？」

二人はごくごくと飲んでいたジュースからいったん口を離して、声を揃えて「うん」と答え、でもすぐ面白かったと満面の笑みで感想を述べた。どこかどんな感じで面白かったのかという詮索は、あえて放棄しておこう。

「そんな場面に看護師さんが来ちゃったもんだから、いくら実の妹とその家族とはいえ、このまま病室にいさせるわけにはいかないってなって、追い出されてしまったんだ。だもんだから、行ってすぐにお見舞いが終わってしまって、何しに行っただらうって気分さ。まあ、看護師さんの判断は正しいと思うから、文句なんて言ってもりないけどね」

「陽平おじちゃんがいるところ、必ず騒がしくなるんだね……」

「ははっ。お義兄さんの彼女も同じようなこと言ってたね。えっと、何て言っただけか。彼女の名前」

「御久島さんです。御久島朝子さん」

「そうそう。そういう名前だった。……って、汐さんも知ってるんだ。てことは、お義兄さんと御久島の話は本当だったんだ」

うん？ 陽平おじちゃんは何を話したの？

「いや、昨日のことを少しだけ聞いたんだけど、いまいち信じ切れ

なくて」

突然の御久島さんの告白っぽい言葉に、勢いにまかせた陽平おじちゃんの交際申込、そして彼女の即OK。しかもそれら全て私たちがいる目の前で行われた。ついでに言うと、お母さんたちは御久島さんの保護者になり、陽平おじちゃんに対する監督官になった。

これを素直に信じろというのは無理な話だと私も思う。

ただ、このうちのどこらへんまで聞いていないか知らないし、陽平おじちゃんが変に脚色している可能性は決して低くない。念のため確認しておいた方が良くないかな。

「ん〜と、どこまで聞きました？ 昨日のこと」

豊治おじさんは、思い出そうとするかのように目を閉じて話してくれた。

要約すると二点。

交際を申し込んだのは陽平おじちゃんだけど、先に告白したのは御久島さんで、昨日からお付き合い始めた。

証人は、その場に立ち会った私たち。

細部の脚色はあったけど、本筋は間違っていない。きっと、御久島さんの補足や修正があったのだと思う。だって陽平おじちゃん、すぐ自分に都合の良いように言い換えようとするから。

「だいたいそんな感じですよ。それで、そのあとお母さんたちが御久島さんの保護者みたいになって、陽平おじちゃんの監視役にもなってます」

「そんなおまけがあったんだ。いやあ〜、芽衣さんには悪いけど、さすがお義兄さんとしか言い様がないな」

「ですよ。って、そういうえば芽衣ちゃん」

すっかり芽衣ちゃんのことを忘れていた私は、閉められた部屋の戸へと視線を向け、聞こえてくるお父さんと芽衣ちゃんの声に耳を立てた。

「考えてもみる。いくら自分より弱い奴にはSになるといつても、あいつは基本Mだしへたれだ。それに、もしかしたら彼女、ああ見

えて本性はSかもしれないぞ？ だとしたら、Sな彼女とMな春原で、それこそ相性ばつちりかもしれないじゃないか」

お、お父さん、玄関でなんて話してんのよ！

私は思わず、お母さんに先んじて脱兎の如く部屋を飛び出し、後ろ手に戸を閉めることを忘れずに玄関へと駆けた。そして、依然として同じ場所に立つお父さんのすぐ側で急ブレーキをかけて足を止めると、居間に響き渡らないよう声を押し殺すようにして怒鳴った。「お父さんっ！ そんなところでそんな話しないでよっ！ 恥ずかしいじゃないっ！」

けど、「なに言ってるんだお前は。それに、なにが恥ずかしいっていうんだ？」というお父さんのとぼけた台詞に、つつい大声で返してしまった。

「そ、そんなこと言えるわけじゃないでしょっ！ なに考えてるのよっ！ それに私、コントは駄目って言ったじゃない！」

「んなことしてないだろ。俺は真面目に、芽衣ちゃんを冷静に「なんないっ！」

「そんなことはない。いつか俺の声が届く日が「来ないし待つてらんないっ！」

「二段否定でくるとは。つか、おまえ声大きすぎだ」

「お父さんが変なこと言うからでしょっ！」
「まあ落ち着け。汐。芽衣ちゃんだってこのとおり、お前の声が大きすぎると抗議してるじゃないか」

両の耳を手のひらで押さえている芽衣ちゃんの姿が抗議のポーズかどうかは置いていて、これを見てしまったのは、お父さんに対して癪な気もするけど音量を下げざるを得ない。

「とにかく、馬鹿なこと言ってるじゃないで、早くいつもの芽衣ちゃんに戻してあげてよねっ」

「だからその為にこうして俺が「

「やってません！ ああもうっ！ やっぱり、お父さんに任せたのがいけなかったのかなあ」

「ここで私は、ため息混じりで無理矢理気持ちを切り替えて、「あの、芽衣ちゃん？ とにかく部屋で話し合おう？」と声を掛けた。すると、きよとんとした顔の芽衣ちゃんが困惑した様子で答えた。

「あ……れ？ ここ、どこ……？ 私は……」

え、なに？ そのリアクションはなに？

まさか私の大声で、芽衣ちゃんが記憶喪失に……？

など一瞬思ってしまったけど、そんなわけないよね。

「あ、そっか……。あんまりにもショッキングだったから、ちよつとパニックっちゃった。病院を出て、岡崎さんの家に来たんだけ。

こんにちは、岡崎さん。汐ちゃん。で、二人ともそんなところでぼーっと突っ立って、どうしたんですか？」

「誰のせいでこういう状況になったと思う？」とお父さんがやれやれと頭をかきながら質問すると、芽衣ちゃんは目を強く閉じ、腕組みをして考え始めた。そして数秒後、かっと目を見開いてこう答えた。

「私のお兄ちゃんですっ！」

元を辿れば、ということなんだろうけど、いくらなんでもそれは辿りすぎだし、可哀想だよ。

きょうだい その2

私の怒鳴り声でつていうところがちよつと納得いかないけど、ともかくにも芽衣ちゃんが正気を取り戻し、さつそく会議が始められた。議題はむろん、陽平おじちゃんと御久島さんのこと。

最初のうちは、妹としてこの事態をどう受け止めて、どう対処すればいいのか分からない、といったことを言うばかりの芽衣ちゃん。まあ、そういう反応も想定内だったので、芽衣ちゃんの心の内もなんとなく想像できていた。

そんな芽衣ちゃんの相手をしたのは、当然お父さんではなくお母さん。そして私は、お父さんの余計な茶々を牽制したり摘み取ったりすることに集中していた。

ちなみに豊治おじさんもお母さんに一任してほとんど喋らず、ちびっこ二人は、この会議に退屈してしまったようで、だんご大家族で遊んでいた。

お母さんの心洗われるフォローの末に、芽衣ちゃんは「兄と御久島さんのこと、どうかよろしくお願いします」と深々頭を下げて、事態はようやく収束してくれたのだけど、最後の一押しが、お父さんの「俺はともかく、監督官に杏がいるし、これに智代が加われれば、下手なマネのしようがないだろ」というのは、ちよつと身も蓋もないんじゃないかと。

「それにしても、まさかお兄ちゃんに彼女ができる日が本当に来るなんて……。ぶつちやけ思ってもみなかったですよ。しかも、相手は私よりもずつと若いだなんて」

ぶつちやけすぎだよ芽衣ちゃん。ここは素直に祝福してあげようよ。

「まあなんだ、事實は小説よりも奇なり、つて言うしな。そもそも、春原の存在自体が『奇』とも言えるわけだし」

「そうなんですよねえ……」

「そこ、同意するところじゃないと思うんだけど……」あまりにも陽平おじちゃんが不憫に思えたので、思わず突っ込む。

「いいよ、汐ちゃん。お兄ちゃんの話は私が一番よく知ってるから」

ああ、実の妹さんからもここまで言われてしまう陽平おじちゃんって。

とまあ、こうして芽衣ちゃんが今回の件をようやく受け入れたことよって、この議題は一段落した。そして話題が変わると、このタイミングをまっていたかのようにマリアちゃんが「おトイレ行きたい」と立ち上がった。するとそれに呼応するようにタケルくんも「ボクも」と立ち上がる。これも双子ならではのかな？ 行動がシンクロすることが多いっていうし。

場所を口頭で説明するよりも、直接案内した方が手っ取り早いと思った私は、すつくと立ち上がって案内役を買って出た。

「さ、こっちだよ」

そう言って、二人を引き連れて部屋を出る。トイレは部屋を出て左手に真っ直ぐ行った突き当たり。順番としては、先に手を挙げたマリアちゃんに優先権がある。でもそんなことはお構いなしに、トイレの前に来たところでタケルくんが先に駆け込もうとした。すると、マリアちゃんが「ずるいっ！」とタケルくんを引きずり出そうとし、かくして二人は自分が先だと騒ぎ出した。

このまま放っておくと、すぐに激しい兄妹げんかに発展することは目に見えている。実際、今までに何度も見てきた。そして何度も対処してきた。だからこの場面で困ってしまうような私ではない。

「ほおらっ。喧嘩しないっ」

「あたしの方が先でしょっ！」

「ボクが先に中に入ったんだから、ボクが先だ！」

「はいはい。どっちが先かはお姉ちゃんが決めますっ。いいですねっ」

と言ったところで二人が急に大人しくなるとは最初から思ってい

なかったので、

「あたしが先ーっ！」

「ボクが先だっ！」

などと騒ぐ二人に構わず、コホンと咳を一つして言った。

「では発表します。とその前に、おつきい方をする人、手を挙げて！」

その声に釣られるように、タケルくんが元気よく「はいっ！」と答えた。これで決まり。

「ということで、勝者マリアちゃんっ。タケルくんは後っ」

この裁定に、当然タケルくんは「なんでだよー！」と不平を言う。「ちっさい人の方がすぐに終わるでしょ。ということだから、タケルくんはこっち」

「えーボクもう漏れそうなんだよ！」

と言われてもね。キミがしたいのはおつきい方で、急に前を押さえてモジモジしても、説得力が無いどころか逆効果なんだよね。そもそも、限界に近い素振りなんて今の今までまったくなかったから残念。

ということタケルくんをトイレから引っ張り出し、「気合いで頑張れ」と励ます。

「無理だよお！」

それでも私は、顔をグイと近づけて、急かすように捲し立て。

「なら、さらに気合いの入るおまじないを教えてあげる。耳を塞いで、『長谷川タケルは男前だのクラッカー』って、私に向かって二十回言うの」

「そんな数えてらんないよ！」

「大丈夫。お姉ちゃんがちゃんと数えてあげるから。いい？ いくよ？ 準備はいい？」

「え、だって、待ってよ！」

「待ったはなし！ それと、途中でつつかえたらやり直したからね？ じゃあいつてみよう！ さんはいつ！」

「た、長谷川タケルは男前だのクラッカー！ 長谷川タケルは、
うふふ。相手の勢いに飲み込まれやすいタケルくんの性格は、と
うの昔に把握しているのです。」

こうしてタケルくんは、トイレの前でやや慎重気味におまじない
を唱え、私は声に出してカウントした。そして座敷からは、芽衣ち
やんのこんな声が聞こえていた。

「ああいう力押し作戦を使うところは、岡崎さん似ですね」

え、そうなの？ うん、これは喜ぶべきか悲しむべきか、どっ
ちなんだろう。雰囲気的に、なんとなく後者のような気もするけど。
そうこうしているうちにカウントは二十を迎え、タケルくんが訴
えるように「終わったよ！」と言った。

私は、早口からいつものテンポに戻して、「うん。これではっち
り。どう？ 気合い入ったでしょ」とにっこり微笑み返す。

「入るわけないじゃん！」

「おかしいなあ。じゃあこれはどうだ！」

私はそう言っつて、タケルくんをがばつとハグする。

「あつっ！」

私の奇襲攻撃にタケルくんが一瞬たじろいだ。

はい。タケルくんが女の子のハグに弱いことを承知した上での行
動です。

でもさすがに、見知った相手のハグ攻撃に為す術が無くなる、と
はならず、すぐに立ち直つて「こんなんで騙されないぞ！」と抵抗
ならばと、わざとらしい言葉でこう返した。

「タケルくんひどいっ！ お姉ちゃんのハグをこんな呼ばわりする
なんて！」

「いいから放してよお！」

まあ、これ以上続ける必要はもうないから解放してあげよう。

ということ、「しかたない。私にはタケルくんに気合いを注入
する力がないみたいだから」とハグを解き、「それじゃ、おトイレ
行っつてきて」と促す。これを聞いて、タケルくんは、水を流す音の

残響が消えようとしているトイレに入った。

そして、用を足し終えたばかりのマリアちゃんが、タケルずるいと呟いていた。

さて、いつの間にマリアちゃんがおトイレを済ませたのかというと、私がタケルくんをおトイレから引つ張り出してからハグを解くちよつと前まで。実は、タケルくん「気合いで頑張れ」と言ったとき、私は唇に人差し指を当て、マリアちゃんに「今のうちにこっそり入っちゃって」とアイコンタクトで告げていたのだ。タケルくん「耳を塞がせておまじないを唱えさせたのは注意を逸らすため。」

そしてそれは見事に成功し、マリアちゃんをたくさんハグしてあげたところで、作戦は完了した。

「さて、戻ろっか」

私は座敷に戻ろうと、マリアちゃんの手を取り歩き出そうとするけれど、マリアちゃんは「お姉ちゃんのおうち探検したい。探検しよう?」と逆に私の手を引っ張った。別にそうしても良かったのだが、どうせなら二人一緒に探検させた方がいいと思ったので、タケルくんが出たらね、と言った。

するとマリアちゃんは、おトイレの戸をドンドンと叩き、「早く終わらせてよ! 探検できないでしょっ!」と急かし始めた。中からは「うるさいなあ!」とタケルくんが文句を言い、またしても騒がしくなった。

ほんと賑やかだなあ。この二人は。なんて呑気にしていると、ようやく芽衣ちゃんが私の援護射撃をしてくれた。

「マリア、女の子がそんなことしたらみつともないよ」

「だってっっ!」

「マリアはレディーになるんじゃないの? レディーはそんなこと絶対しないよ?」

「っっ……」

勝負あり。

私も、「おうちは逃げたりしないし、探検する時間はたくさんあ

るから、急がなくても大丈夫だよ」と添えて、渋々といった表情ではあったけどマリアちゃんは諦めてくれた。

それから岡崎邸探検が始められたのは、たいして待たずしてだった。それはもう、タケルくんが水を流す音が聞こえたときに、待っていた私たちが「もう？」と驚くほどに。

「行こう！ お姉ちゃん！」

「はいはい」

私はマリアちゃんに引つ張られて座敷を出て、おトイレから出てきたばかりのタケルくんと合流すると、まずは第三の座敷である四畳半の部屋の戸を開けた。

この部屋は基本的に私の部屋なのだけど、ほとんど使っていないのが実情。というのも、寝るのも勉強するのも二間続きの六畳間だから。この部屋を使う用途といえば、教科書やノート、鞆など学校関係のものと、押し入れの片隅で間に合う程度の量しかない私物を置いておくこと、それと、お客さんが来ているときにここで着替えるぐらい。

となれば、ひどく殺風景な部屋になってもしかたないし、二人に「本当にお姉ちゃんの部屋なの？」と疑われてもなにも言い返せない。しかも、女っ気がないと男の子にモテないよとまで小学一年生のマリアちゃんに言われると、もう凹むしかない。

という、見るべきモノがまったくないと言っても過言じゃない私の部屋は早々に飽きられて、私たちは台所に移動。ここも子供たちの興味を引くようなモノは何もなかったのですぐに退室。そして次に向かったのは、洗面所や脱衣室を通り抜けた先の、ちょっと自慢のお風呂場。

そして、風呂場のドアを押し開けて子供たちを中に入れると、クリーム色を基調とした広々としたその空間に、二人の歓声が反響した。

「うおお、すげー！」

「うちよりずっと広いっ！」

ふふ。そうでしょうそうですね。

「あつきーのうちのより広いんじゃない？」

「うん。あつちより広いよ」マリアちゃんの質問に、私はちょっと得意げに答えた。ある意味さつきのリベンジを兼ねて。

それからしばらく、二人はお風呂場でわいわいきやつきやお喋りをしていた。その間、内容がなかなかシビアで、私としては笑えたり笑えなかったり、というか苦笑するのが精一杯といった具合だった。

自分の家のお風呂も広くしたいと言い出したタケルくん、マリアちゃんが極めて現実的な説明で一刀両断。それでも食い下がるタケルくんを一刀両断、の繰り返しで、その切れ味が鋭いこと鋭いこと。例えば、お風呂を大きくするためのお金なんかうちにはない、とか、お父さんの稼ぎがどれくらいか分かって言ってるのか、とか、そもそも分譲マンションのローンがまだ残ってるんだからね、とか。

そんな話に、私はどう参加すればいいっていうの？

二人のこのやりとりが豊治おじさんに聞こえていないことを願いつつ、私は強引にその話題を終了させて、お風呂場を出た。

そして、最後の案内先へ。

お母さんたちがお喋りをしている座敷の隣の部屋を突っ切り、壁一面のガラス戸を開け、申し訳程度の狭いデッキに出る。目の前にあるのは、奥行きが二メートルぐらいしかない代わりに、横幅はたっぷりある細長い庭。その庭の塀に沿って、植木鉢が肩を寄せ合うようにしてずらりと並んでいる。それらのいくつかは、前に住んでいた房子おばあちゃんが残してくれたもので、ほとんどは、お庭を華やかに飾るべくお母さんが買い揃えたもの。

その数は相当あり、私としては、お花がたくさんあるお庭は歓迎するところだけど、こんなに急に増やさなくても最初は思った。でも、お母さんの「このお庭で、季節毎に違ったきれいな風景が見られるって思うと、どうしても我慢できなくて」という笑顔の前で

は、私もお父さんもまったくの無力だった。

そんなお庭にマリアちゃんとタケルくんが、そこにあったサンダルに足を引っかけて下りた。明らか大きすぎるサイズのことなど構わず、二人はそれぞれ興味を持った方向へと駆け出そうとした。

マリアちゃんは植木鉢へ、タケルくんは庭の端にある物置へと。

この辺りは、やっぱり男の子と女の子なんだなあ、と目を細めた途端、マリアちゃんがどてつと転んだ。その音に、タケルくんが足を止めて振り返る。私も、「大丈夫？」とお父さんのサンダルを穿いて庭に下りた。ただし、転んだ勢い等々を考えると、せいぜいが肘や膝をちよつと擦りむく程度だと思っていたので、さして心配していなかった。

それでも、マリアちゃんが無言でむくりと起き上がり、自分の肘についた土を払い落とそうとしたところで、声を出してわんわんと泣き出すと、こちらもあり呑気に構えていらなくなる。

お母さんたちも何事かと慌ててやって来て、「どうしたの!？」と私に聞いてくるし。

結局、私の簡単な状況の説明と、マリアちゃんの傷口の確認ののち、探検はこれにて一時中断。マリアちゃんは「このぐらいで泣かないの」と芽衣ちゃんに言われながら、血がじわりと滲む肘と膝の擦り傷の手当を、涙をポロポロこぼして受けることとなった。

そして、そんなマリアちゃんに、タケルくんが真剣な顔つきで「痛くない、痛くない」と、おまじないを唱えるかのように声を掛けていた。

普段のこの兄妹は、マリアちゃんがお姉さんで、タケルくんが弟といった印象が非常に強い。あまり深く考えないで行動することが多いタケルくんに対して、マリアちゃんはしつかり者。タケルくんを諭すような場面はよくあるし、言動もちよつと大人びている節がある。

それだけに、こういう場面を見るとやっぱりタケルくんは優しいお兄ちゃんなんだなと思ってしまう。まあ、「お兄ちゃん」と言っ

ても、双子だからあまり関係ないのかも知れないけれど。

そんな二人の様子を、私は微笑ましく眺めていた。一人っ子の私としては、兄妹っていいよねと思いつつながら。だからだろう。急にお父さんが私の頭に大きな手の平をぽんと置いてきた。

「なに？」

「兄弟、欲しかったか？」

「やっぱり。」

正直、ちらつと思うことはあっても、本気で欲しいと思ったことは一度もない。

「言っておくが、今から兄とか姉が欲しいって言われても無理だからな」

「そんなの分かってるよ。お父さんじゃあるまいし」
それに、と私は思う。

ある意味、子供じみたことをするときのお父さんは、私の中でお兄ちゃんとして映ったり弟として映ったりすることがあるから、是非とも欲しいと思うような憧れはない。

姉という存在も同じ。可愛らしい姿を見せてくれたときのお母さんは、私にとって最高のお姉ちゃんとして映ったりすることがあるから。

他にも、私にとってお姉ちゃんと呼べる人は昔からたくさんいた。お兄ちゃんと呼べる人も……、いや、これ言ったらお父さんが全力で止めてくれと言ってくるから止めておこう。

弟や妹は、タケルくんとマリアちゃんの間で間に合ってる。

ということ、私はお父さんにこう答えた。

「お父さんが子供っぽいことしなくなったら、弟が欲しくなるかもね」

「どっついう意味だよ」

「べつつにい」

それからしばらくして、そろそろおやつにしましようにと出されたケーキの量のこと、タケルくんが復活したマリアちゃんと喧嘩を

始め、二人とも芽衣ちゃんに叱られて大泣き。そこでお母さんが二人のケーキの量が増やしてあげた途端、泣いたカラスはどこへやら、二人とも大喜びでかぶりついていた。

Episode「きょうだい」 -了-

きょうだい その2 (後書き)

エピソード5終了。

芽衣ちゃん編でした。というか、マリアちゃんとタケルくん編と言った方が良いかも。

本当は、もっと二人の性格をくつきり見せられるようなエピソードで登場させようと思っていたのですが、こうなってしまいました。ほんとは、あっきーと早苗さんも絡ませたかったのですが……。

雨の日の出来事 その1

基本、雨は嫌いじゃない。でも、毎日毎日降られるとさすがに迷惑に感じてしまう。湿気でじとじとはまだ良いとして、何より部活への影響が深刻。グラウンドを使った練習がずっと出来ないのだから。しかも、この日も朝から降っているその雨が、バケツをひっくり返したような土砂降りともなると、気分はマリアナ海溝並に落ち込み、自然とため息がこぼれてしまうし、こんな台詞だつて出てしまう。

「うちに車があつたらなあ」

びしょ濡れにならずに学校に行けるのに。

なんて、洗面所で顔を洗いタオルでごしごしと拭いているところに、パジャマ姿のお父さんがやってきた。

「あつたら、どうするつもりなんだ？」

「あ、お父さん。おはよう」

「おはよう。汐。んで？ まさか車があつたら、俺をお前のお抱え運転手にでもするつもりか？」

お父さんはそう言いながら、まるで荷物をどかすように洗面台の前から私をどかして、ばしゃばしゃと顔を洗い始める。

「それ以外にどういう理由があるっていうの？」

「毎日お前が、俺の送り迎えをする」

「出来るわけないじゃない。それに、免許取れるのまだまだ先だよ？」

「んじゃあ、お前が免許を取ったあかつきには、毎日頼むな」

「それまでの間、一日も欠かさず私の送り迎えをしてくれたら、ちよつとは考えてあげてもいいよ？」顔を洗い終えて洗面台から顔を上げたお父さんに、まだ使われていないもう一枚のタオルを手渡しつつ言い返す。

「だったら、お前の小遣いで俺に車を買ってくれ」

「だったら、今すぐにも買えるようなお小遣いにして。そしたら買ってあげる」

「だったら、俺の給料を上げてくれ」

「ここで、お母さんの微笑ましそうな二人とも、いつまでそんなところで遊んでる気なんですか？ 遅刻しちやいますよ？」という言葉で、このやり取りは打ち切りとなり、私は「はい」と答えて洗面所を後にし、お父さんは電気カミソリでひげを剃り始めた。

すっかり目を覚ました私は、四畳半の自室ではなく、ついさっきまで寝ていた座敷で制服に着替える。あっちでもいいんだけど、一間で暮らしていた今までの習慣からか、こっちの方がじっくりするのでこうしている。ということ、私の制服は寝室としても使われているこの部屋の壁に掛けられているし、シーズンオフのものを除いた、普段着る衣類全般も、お母さんたちの使うタンスの一角にしまっている。

ただし、このままずっとそうし続けようと固く誓っているわけじゃない。そのうち四畳半の部屋を自分の部屋として十二分に活用する日は来ると思う。でも今は、まだそのときでないというだけのこと。……たぶん、ね。

さつさと着替えを済ませた私は、襖を開けて、居間として使っている隣の部屋に移動。そして、すでに朝食が並べられているテーブルの前に座り、お父さんより一足先に食べ始める。美味しいはずの朝ご飯は、庭に続く広い窓から聞こえてくる激しい雨音のせいで、美味しさが少々ダウン。この雨のなか学校に行くことを考えるとさらにダウンしていた。

車があれば、とまとも思ってしまつと、ため息が一つこぼれる。

「しおちゃん、朝からそんなため息をしてたら、今日一日の楽しいことが全部逃げだしちゃいますよ？」

「だってえ。絶対にびしょ濡れになるんだよ？」

「そんなの、替えのものやタオルを持っていけばいいだけじゃない？」

「それはそうだけども」

「それに、きつとこういう日でも、何か楽しいことや嬉しいことが一つはありますよ。だから、それが逃げてしまわないようにしないと」

私が言いたいののは、実害がどうこうじゃなくて気分の問題。でも、お母さんのその笑顔に、私は心の中で「負けました」と頭を垂れるほかなかった。ただ、だからといって気持ちを前向きなものに切り替えられたわけじゃない。これから外出する人たちの中で、晴れ晴れとしていられるような人なんて、きつといないよ。

そして朝の用事を全て済ませると、お母さんとお父さんに「行ってきまあす」と言って、傘を片手に玄関を出た。

雨の中の登校はこれで四日連続。雨の中の下校も四日連続確定済み。そしてここ二週間を振り返ってみれば、雨の降らなかった日は片手でも余る程度しかない。まあ、梅雨の真っ直中だから仕方ないのだろうけど、この雨脚の強さだけはどうかして欲しかった。

家を出てものの一分も経たずして、スカートの裾辺りから下がびしょ濡れ。ついでに、隙間から吹き込む雨粒と私の足を伝い落ちる雨粒と出、長靴の中も早々に気持ち悪いことになり始め、学校までの道のりの半分を過ぎた頃には、ぐっしょりと濡れたスカートからぼたぼたとい滴が落ち、たくさんの水分を含んだ靴下が、長靴の中で一歩ごとに嫌な音と感触を私に向けていた。

そんな最中、早く学校に着いてくれないかなと歩いていると、一頭の犬が目止まった。

ガードレールと車道を挟んだ向こう側、雑種らしき薄茶色のその中型犬が、雨に打たれ全身ずぶ濡れになりながら、平気な顔をしてトコトコと歩いていた。首輪をしているから、きつとどこかの家で飼われている子だ。リードがないところを見ると、勝手に出歩いているっぽい。そう考えると、こんな大雨の中を好き勝手歩き回っているその姿が、なんとも勇ましくて、可愛らしく見える。

幸い、私の歩く方向とこの犬の歩く方向が同じだったので、しば

らくちらちらと見ながら歩いていただけで、歩く速さは向こうが上。瞬く間に差が開き、そのまま姿を見失ってしまった。

もうちよつと眺めていたかったし、出来ることならもつと間近で見で、あわよくば一撫でしたかったので、残念で仕方がない。でもその代わり、この出会いを心の中で楽しんでいたおかげで、それまでの陰鬱な気分はどこかに隠れてしまっていたし、それからの時間がひどく短く感じられた。

ほんの一瞬の、ささやかな出会い。

そんな一幕が、こうも私の気分を変えてくれるとは。

ここで思い返されたのが、お母さんの今朝の言葉。ため息ばかりついていたら、嬉しいことや楽しいことが逃げてしまう、というあれ。この場合は、逃げてしまうというより、見逃してしまうといった方が正しいような気がするけど、それはともかく、つまりそういうことなんだよね。お母さん。

そして、重そうな足取りの周りの学生に比べて、いくぶん軽い足取りで、学校に到着した。

玄関のひさしの片隅でスカートの裾を握り、ぎゅつと水を絞り取る一部の女子たちに混じって、私も簡単に絞り、それから中に入る。そうして下駄箱までやってきたところで、靴を脱ごうとしている亜矢ちゃんと遭遇したのだけど、本来なら「おはよう」と言うところを、私は思わず「す、凄いことになってるね」と、率直な感想を述べていた。

不気味な暗い笑みを浮かべた亜矢ちゃんは、まさにバケツの水を頭から被ったような様相で、スカートは言うに及ばず、制服の上からも、そして髪の毛からも水を滴り落としている。

「どうしたの？」

「傘が根性なしでさ……」

「つまり、途中で壊れたってこと？」

亜矢ちゃんはこくりと頷く。どうして壊れたかは今はおいといて、私は鞆からタオルを取り出し、「とりあえずこれ使って」と差し出

した。けど、亜矢ちゃんはそれを受け取る代わりに、こう呟いた。

「……同情するなら服をくれ」

「くれって言われても。っていうか、体操着に着替えれば」

「ふふふ……、そうなのよね、そうなんですよね。でもね、今日体育があるってのに、忘れやがったのですよ、この私は……」

うわあ。ある意味ダメージが二倍だ。

「だから、だからね……」

「う……ん？」

なんか嫌な予感。

「うっしーの制服を、よこしなさい！」

なんで体操着じゃなくて私の制服？

などと呑気に突っ込む間もなく、壊れた亜矢ちゃんががばーっと飛びつこうとしてきた。このままはぎ取られてしまいかもと身の危険を感じた私は、弾かれるように上体を反って後ずさりする。けど、まだ脱いでいなかったゴム長靴の靴底が災いしてしまった。

最初の一步目。左足を引いたところ、思っていた以上に長靴が滑らず、予想外の地点で足が止まってしまった。これでバランスを完全に崩してしまった私は、二歩目でどうにか踏ん張ろうとした。でもその足も、着地直後に長靴の中で足がずるりと滑り、さらにバランスを失う。そして、あとはもう為す術なく、バタバタと足を数歩後退させるのが精一杯で、背中から思いつ切り倒れるしかなくなっていた。

その状態で私は、ああ、このままみつともなくお尻を打って、背中を打って、後頭部を打つんだろうなあ、と思いつながら、亜矢ちゃんの驚いている顔や、下駄箱などの周りの光景を、スローモーション映像のように眺めていた。

そして、もう完全にアウトだと思ったとき、私は何かに受け止められた。それは硬くて冷たいものではなく、むしろ温かくて、コンクリートのような硬さもない。

何が起きたの？

私は思わず、目を丸くして固まった。そして頭上から「ぎりぎり、セーフだったね」という男の子の声。反射的に私は首をぐるんと回して見上げる。そこにいたのは、隣のクラスの。

「あ、高瀬くん」

高瀬くんとは一年の時おなじクラスだった。入学当初から女子に人気で、同学年の男子の中で三本の指に入るほど。

「おはよう。岡崎さん」

「おはよう」

えーと、で？ どういうこと？

と思ったところで、ちょうどおへそ辺りの圧迫感に気付いて、視線を上から下に落とした。目についたのは、ちょうど圧迫感のある場所に巻きついている男の子の両腕。

「あのさ、自力でどうにかしてもらえないかな。この体勢だと、支えるのが精一杯なんだよね」

つまり、この腕は高瀬くんので、危ないところを高瀬くんに助けてもらって、そして今、高瀬くんを支えてもらっている、ということか。

と状況を理解したところで、「わ、ごめん！」と私はようやく慌てた。

ひとまず自力で体勢を立て直さなくちゃいけない。そのためにはまず足の位置を変える必要がある。でも、体があまりにも後ろに傾いてしまっているために、どこに足を置こうが状況は変わりそうもない。むしろ悪化する可能性がある。

少し足の位置を動かして手詰まりとなってしまう私は、目の前の亜矢ちゃんに救いの手を求めた。

「見てないで助けてよお！」

「いいの？」

「いいに決まってるでしょ！」

っていうかなんでそんな言葉が返ってくるの？

「まあ、うっしーがそう言うなら」

そして、いつの間にかいつもの亜矢ちゃんに戻っていた亜矢ちゃん、私の腕をしつかり掴むと、高瀬くん「うっしーを放していよ」と言っ、私をぐいと引つ張った。その勢いが少々強すぎて、今度は前につんのめりかけてしまっていたのは、加減というものをあまり知らない亜矢ちゃんらしい。

ともかく、こうして私はピンチを脱し、高瀬くんもほつと胸をなで下ろしていた。

「ごめんね、高瀬くん。それと、ありがと」

「それはいいけど、今日は滑りやすいから、あんまりはしゃがない方がいいよ?」

あれ、なんだか私が悪いみたいな話になってない? それに、子供扱いされてるっぽい。いくら助けしてくれた高瀬くんとはいえ、これはちよつと納得いかないよ。

私は少しだけ語気を強くして、「え、違うよ。いきなり亜矢ちゃんが私を襲ってきたから」と、苦笑している高瀬くん「事の次第を説明しようとした。だというのに、亜矢ちゃんが満面の笑みで「うっしー」の制服が欲しくてねー」なんて付け加えてきた。

「なに、二人はそういう関係?」

「え? そういう関係?」

何のことかまったく分からない私は、思わずきよんとしてしまった。そんな私を見て、高瀬くん「分からないならいいよ。っていつかただの冗談だから」と笑いながら上履きに履き替え、それじや、と爽やかに去っていった。

なんか煙に巻かれたような気分。

すると、亜矢ちゃんが突然私を指さした。

「なに?」

「芸者ガール」

「へ?」

次いで、自分を指さして「悪代官」と。そして、手をわきわきと動かしながら「よいではないか、よいではないか」と顔を近づけて

きた。

なんか今の亜矢ちゃん、溺死した幽霊が笑顔で私に取り憑こうと
してきているみたいで、正直恐いんですけど。と、ちよつと怯えて
いるところに、美樹ちゃんの呆れたような声が聞こえた。

「で、二人とも。いつになったら上履きに履き替えるの？」

それは、亜矢ちゃんが私を解放してくれたら。

雨の日の出来事 その2

美樹ちゃんの登場で、ようやく上履きに履き替えることができた私は、タオルと体操着を手渡した亜矢ちゃんと女子トイレの前で一時間のお別れをして、美樹ちゃんと教室へ向かった。

なんともドタバタな一幕で始まったこの日の学校。そしてそのドタバタ劇は、下駄箱前で終わりじゃなかった。というか、終わりにしてくれなかった。女子トイレで私の体操着に着替えて教室にやってきた亜矢ちゃんが、「ありがと、ウツシー」とタオルを返してくれたあと、「で、高瀬くんを抱かれた気分はどう？」と、とんでもないことを言ったおかげで。

もうすぐ始業のチャイムが鳴ろうとしているこの時間の教室には、ほとんどのクラスメイトがいる。そのクラスメイトたちは、各々授業の準備をしたり友達と雑談したりしている。けど、亜矢ちゃんのこの言葉に、それまでの忙しないお喋りや物音がぴたりと止まり、思わず悪寒が走ってしまったほど、水を打ったように静かになった。そして数秒間の沈黙の後、一転して天地がひっくり返ったかのよう騒がしくなった。

亜矢ちゃんの意味不明なとんでも発言と、騒然としたこの反響に、瞬く間に耳がじんじんと熱くなるのを感じながら、なんてこと言うのと亜矢ちゃんに抗議しようとした。

けど、もう遅かった。この教室の半数近い女子が、わっと私に押し寄せてきて、一瞬にして取り囲まれ、悲喜こもごもの声を問答無用で一方的にぶつけられては。

「今のマジ!? うっわー!」これは単純に驚きの声。

「いつの間に付き合ってたの?」これは興味津々といった黄色い声。そして圧倒的に多かったのは、「ちよっと今のどういことよ!」という、嫉妬を含んだ怒りの声。

中には「そんなときどんな感じだった?」「岡崎さんって、結構ヤ

つてる子なの？」「奥手だと思つてたら大胆なんだね」などという、本当に勘弁して欲しい声も混じっていた。

これは早くどうにかしないと、冗談で済む話じゃなくなるかもしれないと思い、「ちよつと待ってよ！ 私そんなことしてないよっ！」と、場をいつたん落ち着かせたい一心で声を上げた。けど私の声は周囲の声に飲み込まれただけで、しかも「言い逃れしようつての？」と、相手によつてはさらにヒートアップさせてしまった。

そんな状況で、美樹ちゃんが助け船を出してくれてはいたのだけど、効果はない模様。そしてコトの張本人である亜矢ちゃんは、「いやあ、まさかここまで反応してくるとは」と呑気に感心している。これにはさすがに怒鳴りたくもなる。

「亜矢ちゃんが変なこと言うからこうなつたんでしょっ！ 早くなんとかしてよお！」

「ん〜、まあ。試してみようか」

そう言つて、亜矢ちゃんは一呼吸置き、びりびりと響く大きな声で言い放つた。

「ああっ！ 高瀬くんが来たあっ！」

その言葉に、私も含めた教室中のほぼ全てのクラスメイトの呼吸が一瞬止まり、視線が入り口へと向けられる。そしてそこにいたのは、いま話題の高瀬くんではなく、クラスメイトの川端くんだけ。

訳も分からず注目を浴びている川端くんは、「え？ なに？ 俺がどうしたん？」とたじろぎ、二歩後退。しかも、騙されたことに気付いた子たちの一部に、「お前じゃないっ」と理不尽にも怒られていた。なんて間の悪い川端くん。

そして残りは、亜矢ちゃんに文句を言おうとしたり食つてかかるうとしたのだけど、その前に亜矢ちゃんは「みんな引っかかり過ぎ。つつか、妄想し過ぎ」と笑つた。これに激昂したうちの一人、福原さんが「も、妄想つてなによ！」と怒鳴る。まあ、激怒するのも当然だと私も思う。

そんな怒氣を向けられたというのに、亜矢ちゃんの態度は変わら

ない。

亜矢ちゃんって、いろんな意味でほんと強者だ。

「あのねえ、ウツシーと高瀬くんが、みんなが妄想したようなこと、本気でするでも思ってたんの？」

「水野さんがそう言ったんでしょがっ！」

そのとおり。

「うん。抱かれたことは間違いないわよ？ ねえ、ウツシー？」

この期に及んでまだそういうこと言うか。

「そんなことしてないでしょっ！ もう、変なこと言わないでよっ」

「だって、さつき下駄箱前で」

「してませんっ！」

「そんな力一杯否定して。あんたまで変な妄想してどうすんのよ……。助けてもらったでしょ？ 高瀬くんに、こうやって」

亜矢ちゃんは私の背後に回り、椅子の背もたれなど構わずに後ろから抱きしめようとしてきた。確かに私は高瀬くんに助けてもらって、後ろで支えられてはいたけど、抱かれてなんて、抱かれて……なんて？ そういえば、高瀬くんの両腕があって……、え、なに？ まさか、そういうこと？

ここに至って、私は亜矢ちゃんの言わんとしているところがようやく分かった。また、完璧でないにしろその意味を察した人もけっこういて、それは私を取り囲んでいた子に限らず、遠巻きに傍観していた人も含めてだった。そして、そういった人たちは例外なく、まさか、と言わんばかりにぽかんと口を開けていた。

ただ、察したところですべてを理解するには情報があまりにも少なすぎるし、まだ察していない子もいる。それと、怒る方向性を見失いかけている子も。

「助けてもらったって、どういう意味よ！」と怒りにまかせた感じで、福原さんが亜矢ちゃんに更なる追求をしてきた。

どういう意味も何も、そういう意味なんだけど。

と言いたいところだけど、きつと他の子たちも、納得のいく説明

を聞かないことにはスッキリできないだろう。私としても、中途半端に終わらせてしまつては、後々面倒な遺恨が残りそうで恐い。だから、その説明を亜矢ちゃんに任せるような愚行はしなかった。

「それは！」

亜矢ちゃんよりも先に私が声を上げると、みんなの視線が一瞬にして私に集まる。

ここで勢いよく強い口調で喋れば完璧だったのだろうけど、一斉に向いたクラスメイトたちの眼差しに圧倒されて、どうにかこうにか口を開くのが精一杯となつてしまった。

「えと、亜矢ちゃんが私に『服よこせつ』って飛びかかってきて、逃げようとしたら躓いて、危うくそのまま背中から転びそうになつて、たまたまそこにいた高瀬くんが助けてくれて」

訴える自分の声は不本意な代物ではあつたけど、とりあえずこれだけで、ほとんどのクラスメイトが、いったん「はあ？」と呻き、続いて「なんだよそういうことかよ」と不満そうに口を尖らせたり苦笑したり、「岡崎さんがそういうことするはずないもんね」と安堵の息を漏らしたり、「羨ましいな〜、私も助けられたいよ〜」と羨望の言葉を口にしたりしと分かつてくれたようなので、良しとしよう。

でも、まだ理解できない人もいるし、感情的になつたままの人もいる。

前者は「それと『抱かれた』と何の関係があんのよ」などと疑問を口に出している。これに対し、どう分かりやすく解説すればいいだろうと考え始めたところ、私に代わつて、理解できずに首を傾げている子に解説してくれる子がちらほら出た。私の後ろに立っている亜矢ちゃんも、一部実演しつつ答えた。

「ウツシーが背中から倒れて、高瀬くんがこう抱きとめて。も一度言つよ？ 抱きとめて。とつまりそゆこと」

これで亜矢ちゃんの“抱いた”という言葉の意味はみんな理解することが出来たと思う。

残るは後者。「なにそれ！ バカにしてんの？」と攻撃的な言葉を口に出している。ただし、私に向けてではなく、亜矢ちゃんに向けて。

その責任を私に負わされては、私だってかなわない。

そしてこれに対し、亜矢ちゃんはまたもやとんでもない言葉を返した。

「ていうか、『抱かれた』って言葉に食い付き良すぎでしょ」

正直、私も唾然としてしまった。

言っに事欠いてそうくるか。

これには、当たり前だけど教室中でブーイングの嵐が起きた。

それはそうだよ。でもそこは強者の亜矢ちゃん。

「まあまあ、ちょっとは気分転換になったでしょ？ それとも、こんな天気みたいに鬱陶しくじめじめしてた方が良かったかな？」

などと終始笑い声で蹴散らし、蹴散らされる方も亜矢ちゃんのペーすに毒気を抜かれてしまったようで、ブーイングは早々に鎮火していった。

亜矢ちゃん、将来きつと大物になるよ。

なお、全員の感情を鎮めたわけじゃなく、感情的になりすぎていた福原さんを含む数人は、ずっと憤然としたままだったし、美樹ちゃんも「亜矢つちが紛らわしい言い方するからっ」亜矢ちゃんを叱っていた。

「いやあ、こういう展開になるとはほんと予想してなかったからさあ」

「予想しろっ。見な、可哀想に汐がこんなシナシナな姿になって」今の私は、ぐったりと疲れて机に突っ伏している。二人のやり取りに参加する気力もまだ回復できていない。

「いやあ、悪いことしたなあとは思ってるよ？ うん」

「思ってるなら、謝罪として汐にケーキの一つでも奢ったんなさい」
「まあ、そうだね」

ん？ ケーキ？ うむ。甘ん堂のケーキ二つなら、許してあげよ

う。

なんてこつそり耳を傾けていると、先生が教室にやって、なんとも疲れる一限前の一幕、というか朝の二幕目が終わった。

あとは、この話に八丈迷惑な尾ヒレがうじゃうじゃと付かないことを切に願うだけなんだけど、願うだけじゃあまりにも心許ない。

よし、今日学校終わったら、強力な願掛けみたいなおまじないを有紀寧お姉ちゃんに教えてもらいに行こう。

こうして、朝のドタバタがようやく一段落した。でも悲しいかな、この二幕目で終演、とはなってくれなかった。次の休み時間、数人の女の子が私のところに来て、抱きとめられた感想を求めてきた。

そんなもの求められても、「みっともないところ見られて、ちょっと恥ずかしかった」以外に言う言葉はない。だというのに、「そうじゃなくてっ！ あの高瀬くんはハグされたんだよ？ 天にも昇る気持ちできゃーとかなるでしょ、ふっ」と、自分が私の立場だったらのなコメントと同じものを私に求めてくる。

まあ、相手は学年で三本の指に入るイケメンの男の子。多くの子がそういう反応をするだろうことは想像するまでもない。でも、私にそれを当てはめられても、私にはそういうの無いから。

で、と思う。もし相手が高瀬くんみたいな女子に大人気の男の子ではなく、いつも無愛想で不良属性のある強面の、女子に不人気の岸川くんが相手だったら、みんなどんな反応していたらう。ちなみに私は、そんな岸川くんとかごく普通に話す数少ない女子の一人です。

ちよつとした悪戯心でそんなことを考えながら、同意を求めてくる声に苦笑いで答えていると、美樹ちゃんがまたもや助け船を出しにきてくれた。

「汐は、お父さん命だからねえ」

あれ、これって助け船って言うの？

「だからあの高瀬くん相手でも、微動だにしないんだよね」

「別に命じゃないよ！」

すると、「え？　じゃあ岡崎さんが重度のファザコンって話、やっぱり本当だったんだ」という声が。

ちよつと待った。私ファザコンじゃないよ。……まあ、ファザコンかなって思うときもたまにあるけどさ、とくかく重度のファザコンじゃないから。ていうかやつぱりってなに。

そんな思いを込めた「違うよ！」という私の訴えは、美樹ちゃんのコメントによってどうでもよいものになったらしい。

「汐のお父さんって、すつごく格好いいんだよ。しかも優しくてさ」「え、そうなの？　ちよー見てみたーい」

「岡崎さんっ、今度会わせてよっ」

などと、関心はすっかりお父さんへと向けられた。

なんと言うか、とりあえず話題が変わってくれたことには素直に喜べるけど、美樹ちゃんの一言で第三幕が開けてしまったような気がしてならない。

不幸中の幸いというか、この場に亜矢ちゃんがいなかったのは助かった気がする。その亜矢ちゃんがこの休み時間中どこにいたかというと、体操着を誰かに借りるべく、教室を渡り歩いていた。

雨の日の出来事 その3

美樹ちゃんの言葉で幕を開けたような第三幕は、そう長くは続かなかった。そもそも、私こと岡崎汐が重度のファザコンという話は何となく知られているようで、お父さんの評判もわりと知られていて、騒ぎになるような話題ではなかったらしい。変な方向に発展しないことは良いことだけど、ある意味すでに発展しきっているとも言えるので、素直に喜べなかつたりする。

いったいいつからそんな話が出回っていたんだろう……。

とにもかくにも、波乱の始まりに今日一日大丈夫かと心配になっただけど、思ったよりも波乱が拡大することなく終わった。高瀬くんを抱きとめられたという事実に対しても、概ね羨ましがられるに留まってくれた。ただし、ごく一部の女子にはすつかりやつかまれてしまった。

女の妬みはタチが悪いって言うし、めんどくさいことにならなければいいなあ。

などと思うと、助けてくれた高瀬くんにはほんと申し訳ないけど、受け止めてくれたのが女の子だったり、あまり目立たない男の子だったらと思ってしまう。

こんな罰当たりな私でも効き目があるのかどうか分からないけど、これも有紀寧お姉ちゃんのおまじないに頼るとしよう。私とその子たちに何を言っても、神経を逆撫でするだけだろうから。

そうして、いつもよりずっと長く感じたこの日の学校が終わった。みんなが次々と教室から出ていく中、私も教室を出る。向かう先は部室ではなく、有紀寧お姉ちゃんのお店。

この日の部活は倉橋先生の一声で中止。こつも廊下が濡れていては、校舎内での基礎トレーニングは危険だから、というのが理由で、その知らせがあったのはお昼の時間。副部長がわざわざ教室まで連絡に来た。

「で、こんな雨の中、二人とも本当にくるの？」

教室を出た私の横には美樹ちゃんと、まだ湿っている制服に着替え済みの亜矢ちゃんがいる。私がこれから行くところに、二人とも一緒に行くと言い出したのだ。

「なんか嫌そうだねえ。まさか誰かさんと逢い引きしようって言うの？」と亜矢ちゃんが訝しげに言う。

「またそういうことを言う」雨脚は今朝ほどじゃないけど、決して弱くはない。付き合わせるにはちよつと申し訳ない気がするだけ。

「冗談冗談。まあ、深刻な話でもするっていうなら、話は別だけどそんなことないけど、ここは一つ。

「うん、ちよつと深刻な話なんだ」

「そっか。じゃあ一緒に行こう」

「だから深刻な」

「ふふふ。ウツシーごときに騙される私とお思いか？」

「汐の嘘は、下手とかそういう次元じゃないからね」
なんかひどい言われようだ。

まあ、二人が行きたいと言っているのを無理に拒む理由はないので、有紀寧お姉ちゃんの喫茶店に三人で向かうことになった。ちなみに、二人はそのお店に行くのは初めて。当然、有紀寧お姉ちゃんと面識はない。今回が初対面になる。

きつと二人とも、有紀寧お姉ちゃんのこと好きになるだろうな。
学校を出ておよそ三十分。

徒歩と二駅分の電車移動で到着。

その途中、犬専用のレインコートを着た一匹の犬を連れて、傘を差して歩いている人を見かけた私は、今朝学校に行く途中で見かけた犬のことを、ふと思いついた。

あのときは、雨などものともせず悠々と散歩してるのだと思っていたけど、改めて考えてみると、そうじゃない可能性も浮かんできてる。例えば、勝手に飛び出したはいいけど、迷子になっていたりするだった、とか。実際、そういう飼い犬もいるらしい。

心配性なお母さんの性格が私にもいくぶんあるようで、ちょっと心配になってしまったけど、私にどうにかできる話でもない。すぐに切り替えて、二人のお喋りに付き合っていた。

名前とギャップを感じる、お洒落な雰囲気のお店の前にやって来た私たちは、カランカランと出迎える『喫茶店ぎやらんどう』の扉を開く。その音に、別々の席に座っている背広姿の男性客二人がこちらをちらりと見て、エプロン姿の有紀寧お姉ちゃんもカウンターから「いらっしやいませ」と笑顔を見せてくれた。ただし、お客が私と分かるなり「あら、汐ちゃん」とちょっと驚いていた。

平日の、しかもこんな雨の中、わざわざ電車に乗ってやって来るとは思うまい。

先頭に立ってお店に入った私は「こんにちは。有紀寧お姉ちゃん」と挨拶をして、傘立てに傘を置いてから座る席をどこにしようか考えた。たぶん後ろの二人はテーブル席の方が良いのだろうけど、ここに来た目的を考えると、カウンター席の方が都合が良い。気兼ねなく有紀寧お姉ちゃんとお話できるから。

なので、カウンター席に座ることにした。

「こんにちは。こんな天気の中、よく来てくれました」

「うん。ちょっと相談したいこと、っていうか、またおまじないを教えてください」

「おまじないですか。いいですよ。でもその前に、何か飲みますか？」

有紀寧お姉ちゃんは、カウンター席に座った私たちにお水を出しながらそう聞いた。喫茶店に来ておきながら何も注文しないというのも悪いと思った矢先、美樹ちゃんが「ついでにケーキ注文したら？ 汐のぶんは亜矢っちが出すって言ってるし」と言った。

そういえば、謝罪として私にケーキを奢るとか言ってたなあ。じやあ、奢ってもらうことにしようかな。手加減なしで。

「それじゃ遠慮なく」満面の笑みを向けて亜矢ちゃんにそう言い、私はアップルティーに豪華スペシャルミックスケーキ、亜矢ちゃん

はダージリンティーにマロンケーキ、美樹ちゃんはミルクティーにチーズケーキを注文した。

旦那さんは用事があって外出中のため、有紀寧お姉ちゃん一人ですべてやらなければならぬ。慣れた様子で用意をしているけど、邪魔しちや悪いかなと思ひ、亜矢ちゃんたちと本題とはまったく関係のない雑談をしながら待った。

そうして、私たちの前に飲み物とケーキが燦然と輝きながら並ぶと、もうおまじないどころではなくなつた。やっぱり、ケーキは女の子にとって凶器にも値する代物だよ。

ひとしきり私のスペシャルミックスケーキへの外観的感想が飛び交つたのち、それぞれ自分のケーキを、歓声を上げながらじっくり堪能。食べ終わったあとともケーキの話題で盛り上がり、本題に入つたのは、「それで、どういつたおまじないをご所望ですか？」と有紀寧お姉ちゃんに苦笑しながら言われてからだつた。

「それは」と、下駄箱でのことから始めて、どんなことがあつたかを順を追つて話す。ただし、私が重度のファザコンであるという噂話については割愛。

一通り話し終えると、それまで黙つて耳を傾けていた有紀寧お姉ちゃんが、つまり、とこれから私が言おうとしていたことを話し始めた。

「汐ちゃんとしては、その高瀬くんっていう男の子に助けてもらつた話が、変な方向に広がらないで欲しい、出来ることなら、一刻も早く風化して欲しい。」

それと、嫉妬している女の子が変なことをしないようにして欲しい、出来ることなら、嫉妬そのものをどうにかして欲しい。

ということですね？」

「はい、まったくそのとおりです」

あまりにも的確だつたので、さすが有紀寧お姉ちゃんと感心し、亜矢ちゃんと美樹ちゃんも、おおーと小さく歓声を上げていた。

「自分でも虫の良い話だとは思つけど、どうにかならぬかなあ」

「うん、そうですね……。それにぴったり合致するもの、となると難しいですが、近いおまじないなら。ただ、あくまでもおまじないですから、あまり期待しないでくださいね？」

「うん。それは分かってる」

それと、有紀寧お姉ちゃんのおまじないが、実はおまじないの域を完全に超えているということも。

「ではまず、嫉妬している女の子の方ですが」

説明してくれたのは、相手の邪念を消し去る、というおまじない。邪念と妬みが同質かという点で自信がないようだったけど、私的には同質なので問題なし。

「まず、自分の口元に、両の人差し指と親指で三角形を作ります。

そして、相手に向かって『消える消える邪念よ消える』と三回唱えます。相手との距離は、近くても遠くても構いません。相手の姿がちゃんと見えてさえいけば」

「それは、一人一人にしなきゃいけないの？」

だとしたら、けっこう大変だ。

「はい。基本一人一人にです」

……けっこう大変なことになってしまった。

「次に、助けてもらった話ですが、この前教えてあげたのが一番効果的なんですが、あのおまじない、下手に使うと世界が破滅してしまうかもしれないんですよ」

この前のおまじないとは、「この三流」と三回唱えるというあれ。ということとは、あるとき世界が破滅しちゃったかもしれないなかったってこと？

「そ、そんな危険なおまじないだったの？」

「ある意味、ロシアンルーレット的なおまじないなんです。しかも回数を重ねる毎に、破滅する確率が上がります。といっても、所詮はおまじないですから、破滅なんてありえませんが」

そう言ってくすつと笑っても、有紀寧お姉ちゃんに言われると、そうだねって笑って返せないよ。ていうか、変な汗が出てきたよう

な気がするんだけど。

このおまじないは永遠に封印しておこう。世界の破滅を回避するために。

結局、別のおまじないを教えてもらった。こちらは一人一人にというものじゃなく、ちよつとほつとした。ただ、そのおまじないの方法が見た目恥ずかしそうだったので、家に帰ってこつそり実践することにした。亜矢ちゃんたちはここでやれと言ってたけど、そんなこと出来ません。お父さんじゃあるまいし。

こうして当初の目的を果たした私は、すっきりした気分で、心おきなくここでの時間を楽しむことにした。

話題はいろいろ。でも、途中から一気に雲行きが怪しくなってきた。その発端は、有紀寧お姉ちゃんが口にした、学校でもさんざん聞かれた素朴な疑問。

「そんな女子に人気の男の子に助けてもらって、汐ちゃんは嬉しくないの？」

特別うれしいとは思わない、という答えは学校でもしていたので問題ない。

ただ、むしろ騒ぎにならない相手だった方が良かったかな、という答えは、思いはしたけど口に出してはいない。

学校でそんなこと言ったが最後、どれだけの敵を作ることになるか。でもここは学校じゃないし、大丈夫だろうと思って言葉にしたこれに対し、亜矢ちゃんも美樹ちゃんもどうせそうだろうと思っていたようで、なにも言っただけだった。だけど有紀寧お姉ちゃんは、あらあらと苦笑して「そんなこと言っちゃ、高瀬くんが悪いわよ？ まあ、気持ちは分かるけどね」と言ったのち、こんな言葉を続けた。

「でも、そんな男の子に何も感じないなんて、ひよつとして、好きな男の子がいるの？」

「それが、いないんだよね」

私はため息混じりに答える。そして、待ってましたとばかりに亜

矢ちゃんが嬉々とした感じで言い放った。

「お父さん以外眼中にないからね、ウツシーは」

「まあ、そうなの？」

「そうじゃないよう！」

ここから、私のファザゴン話が始まってしまった。亜矢ちゃんと美樹ちゃんは、私の必死の否定など意に介さず、有紀寧お姉ちゃんにあれやこれやと喋り立てる。有紀寧お姉ちゃんも、なんだか楽しそうに聞いている。

もう、好きにして……。

そして二人がひとしきり喋ったところで、ようやく場が落ち着き、それまで聞き役に徹していた有紀寧お姉ちゃんが口を開いた。

「まあでも、私が汐ちゃんだったら、やっぱり汐ちゃんみたいになっちゃうでしょうね。岡崎さん、かつこいいですから」

フオーしてくれないんだ……。

「そこなんですよねえ。重度のファザゴン娘の父親があれじゃ、そりゃ戦意喪失する連中が続出するのも無理ないですよえ」

美樹ちゃん、だから私は重度じゃないとあれほど。っていうか、戦意喪失ってなに？

むう。今ここで、美樹ちゃんと亜矢ちゃんに邪念を消すおまじないをしてしまおうか。

などと思いつつ、話は男の子の好みがどうだとか、まさにガールズトークとなり、気が付けば相当な時間が経っていた。

さすがにそろそろ帰らなくちゃいけない時間となつたので、私たちは「またいらしてくださいね」という有紀寧お姉ちゃんの笑顔と、ガールズトーク中に帰ってきた旦那さんの笑顔に見送られて、『喫茶店ぎやらんどう』を出た。

あ、そうだ。有紀寧お姉ちゃんの名誉の為に言っておくけど、お店の名前を考えたのは旦那さんです。先生曰く「朋也や陽平じゃあるまいし」だそうで。

そしてその帰り道。

雨はまだ降っていて、雨脚は来たときよりもやや強い。

だけどそんな雨を吹き飛ばすように、私たちは有紀寧お姉ちゃんの話題で盛り上がった。将来、ああいう大人の女性になりたい、といった感じで。ただ、亜矢ちゃんが有紀寧お姉ちゃんみたいになるのは無理というのは私も美樹ちゃんも同意見で、二人で「性格が違すぎるから絶対無理でしょ」と全面否定していた。

そんな最中、正直タイミングが悪いんだか良いんだか分からない遭遇が起きた。

歩いていると、どこかで見たようなバンの後ろ姿が、前方の路肩に見えた。まさかね、と思いつつ近付いていくと、バンの横に書いてある文字が見て取れて、思わず立ち止まってしまった。

二人は、急に止まった私に、「どうしたの？」と足を止めた。

「え？ あ、ううん。なんでもない」

私はそう答えて、再び歩き出そうとした。目の前のバンがお父さんの会社の車だとしても、この車に乗っているのがお父さんとは限らないし、わざわざ二人に説明することでもないと思ったから。

でも二人は、目を細めて「嘘は良くないよ？」と追求してきた。ま、隠し通すほどのことじゃないから、素直に白状してもいいんだけど。

そんなときだった。私たちが立ち止まったていたすぐその脇のビルから、工具箱や他にもいろいろ入った段ボール箱を抱えたお父さんと出てきた。

なんだか、ご都合主義のサスペンスものみたいな展開としか言い様がない。

お父さんは私を発見するや否や急ブレーキをかけて立ち止まり、驚いている私に、驚いた顔で言った。

「汐っ！？ なにしてんだ、こんなところで」

「あ、うん。有紀寧お姉ちゃんのお店に行ってたの。今ちょうど帰るところ」

「なるほど。そっぴやあいつの店、この辺りだもんね」お父さんは

納得した顔でそう言うと、亜矢ちゃんと美樹ちゃんに軽く挨拶をして、バンの後ろを開けて手にしていた荷物を押し込み始めた。

とそこに、少し遅れて芳野さんがビルから出てきた。芳野さんも私との思わぬ遭遇に少し驚いていた。

「やあ。汐ちゃん」

「芳野さん。こんにちは」

「なんだ、今日は友達を引き連れて、こんなとこまでぶらりと寄り道か？」

「今日はぶらりじゃないんです」

私の寄り道はわりと有名だったりする。ただしそれは、主にお母さんとお父さん繋がりの人たちの間で。

「それで、三人ともこれから帰るところかい？」

「はい」

「そうか。こつちも事務所に戻るところだから、途中までなら乗せていってあげられるが、どうする？」

芳野さんのこの提案に、お父さんは渋い顔していたけど、亜矢ちゃんと美樹ちゃんがいる手前、はっきりと反対するわけにもいかなかった。私としても、二人がいる手前、はっきりと遠慮するわけにもいかない。

なので、とりあえず二人に確認を取ろうとした。でも二人とも、聞くまでもないでしょと訴えるような顔を私に向けていたので、回れ右をするように視線を芳野さんに戻した。

「いいんですか？」

「ああ。ただし先客が一人いるが、それでも構わなければ、だが」
「先客？」

私はバンの窓から車内を見る。

その先客とは、なんと一匹の犬だった。

しかも、今朝見た犬と同じ犬のような気がしてならない。毛色とか首輪とか、外見的な部分でそう思えるのだけど、でもそれ以上に、さもここにいることが当然のことのように、悠然とシートに座って

いる姿が、呑気に雨の中を歩いていた姿とどこか重なり、私に強くそう思わせた。

ただ、あのとき間近で見ていたわけじゃないから、あくまでも似ているとしか言い様がないし、芳野さんが「ナオジ」と呼んだこの犬が、あの時の犬と同じだと確認する術は何一つない。けど、きつとあのときの子だと思う。そう思うことにしよう。それで誰が迷惑するわけでもないのだから。

というわけで、君はあのときの子に決定です。

なお、このナオジくんは、社長さんのお知り合いの犬で、勝手に家を出てそのまま迷子になっていたらしい。もし捕獲したら、連れて帰ってきて欲しいと社長さんに頼まれていて、仕事していたところ偶然通りかかったところを捕獲。この子がナオジくんかどうかは、首輪に書いてあるナオジくんの名前と住所、その他諸々の事前情報で確認できたそうだ。

そんなナオジくんは、私たち三人が乗った為に狭苦しくなってしまうた後部座席で、隣に座る私にときおりわしゃわしゃされては、大きな欠伸をしていた。そして亜矢ちゃんと美樹ちゃんは、ときおり芳野さんをちらりと見ては、私に「恵まれすぎだよ」と文句を言っていた。

何が言いたいのかわからない私は、あえて二人に問い質そうとはしなかった。聞いてしまったがために、この空間で変な話題に広がるのが恐かったから。

その後、亜矢ちゃんと美樹ちゃんが降り、私も家の近くで降り、ようやくドタバタな一日が終わろうとした。

家に着くと真つ先にお風呂に入り、あとはこのまま平穩に一日が終わるだけ。だけど、まるで嫌味のように最後の一幕が残っていた。というか完璧に油断してしまっていた。

自室でおまじないをしているところを、私の声を聞いて何事かと戸を開けたお父さんに目撃されてしまったのだ。しかも、悲しそうな目を私に向けたまま無言でその戸を閉められてしまった。

ああ、なんて一日だろう。

Episode「雨の日の出来事」
了

雨の日の出来事 その3（後書き）

エピソード6終了。

有紀寧再登場。

今エピソードは5と7の幕間といった意味合いで着手したのですが、ほんと難産で、筆がちゃんと動き出すまでけっこう苦労しました。しかも、特別なことがあるわけでもないお話で……。まあ、こういうのもあるさ。

さて、次は誰が登場するでしょう。

天才博士の終わりなき挑戦 その1

その手紙が届いたのは、夏休み前の期末試験がいよいよ明日からと目前に迫った日のこと。

学校から帰った私を玄関で出迎えてくれたお母さんが、封の開いた一通の封筒をにこにこ顔で差し出してきた。見た瞬間に国際郵便と分かるその封筒から、誰からの手紙かはすぐに想像がついたし、直後、封筒に書かれている文字の筆跡から容易に特定できた。ついでに、既に手紙を読み終えているだろうお母さんの表情から、嬉しい便りであることも分かった。

ここまで分かったうえで、呑気に落ち着いていられるはずもない。私は慌てて足元に鞆を置き、というかぼとつと下に落とし、差し出されたお母さんの手から奪い取るような勢いで受け取り、封筒から便箋を引っ張り出し、きれいな文字で書かれているその手紙にさっそく目を通した。

そんな私に「お行儀が悪いですよ」と注意しなかったのは、きっと私がこういう反応をするだろうことを承知の上で差し出したから。それと、靴を脱いで上がったばかりのこのタイミングで見せてくれたのは、私に教えたくて仕方なかったから、だと思う。

さて、肝心なその手紙の内容だけど、極限まで要約して書き直すところなる。

『再来週、お仕事とサマーバケーションで、家族と一緒に日本に帰ります。その時、またみんなに会いたいです。ことみより』

これを読んだ私は、当然その場で大喜び。お母さんも嬉しそうに楽しみですねと言っていた。

基本、ことみちゃん海外で生活しているから、年に数回、日本に帰ってきたときぐらいしか会う機会がない。そして今回の帰国は

およそ一年半振り。それに加えて家族を一緒。そのご家族と実際に会えるかどうかはまだ分からないけど、もしも会えたとしたら、こんな素敵なことはない。

この心躍る手紙は、期末試験という憂鬱な気持ちをきれいに吹き飛ばし、その余韻は夜になっても一片たりとも霞むことなく、私は仕事から帰ってきたお父さんをにやけ顔で出迎えていた。そのときお父さんに「気持ち悪い顔して、何かあったのか？」なんて失礼なことを半笑いで言われたけど、何かを期待するようなちよつと楽しそうな顔していたから許してあげた。

それはともかく、ことみちゃんからの手紙にお父さんも大いに喜んだのは言うまでもない。そしてこの手紙のことは、この日のうち杏先生や棕ちゃん、智びょん、陽平おじちゃんなどへと駆け巡り、みんなことみちゃんの帰国を喜んでいた。ちなみにこの連絡網の発信元は、真つ先に手紙を読んで、いてもたってもいられなくなったと証言したお母さん。

それからの日々は本当にあっという間で、特に試験期間と答案用紙の返却期間が、自分でも驚くほど早く感じられた。ことみちゃんからの手紙がなかったら、試験期間を憂鬱な気分で過ごしていただろうことはまず間違いない、テストの答案用紙が次々と返されていく日々も同様に、一日一日がとても長くそして重く感じていたはず。事実、去年がそうだったし。

と言うと、なんだか私が勉強苦手で、成績もあまり良くないように聞こえるけど、自分で言うのもなんだけどそう悪くはない。この前の中間テストでは、学年で二十一番だった。でも、だからといって学校の勉強が大好き、というわけではないし、試験なんて代物はまったくもって論外。だから、ソフトボールの試合の時みたいに「さあ来い！」という気構えで土気高々に迎え撃てる相手じゃないし、どちらかといえば後ろ向きになりがちになる。

そうなるはずだった私を、ことみちゃんが救ってくれたというわけ。

そうして、答案用紙が次々と帰ってきて、喜んだりちょっと落ち込んだりほっと胸を撫で下ろしたりしつつ、二学期も残すところあと二日となったとき、ことみちゃんから再び手紙が届いた。

その手紙によると、来週の木曜日に日本に帰ってきて、翌々日の土曜日に一度こっちに帰ってくるそうだ。ただし、日曜日にはお仕事で人と会わなければならなくて、その日のうちにホテルに戻らなくちゃいけない。さらに、週明けの月曜からはスケジュールがぎっしりで、しばらくは忙しくてこっちに来られないとのこと。

まあ、帰ってきた理由の半分はお仕事なんだから仕方がない。それに、あとの半分はバケーションだと手紙にもしつかり書かれている。そのときにまた会えるのだから、残念がる必要はない。

そして、私的にまずまずの数値が並ぶ成績表を受け取って一学期が終了し、同時に夏休みに突入。まず私がしたことは、夏休みの宿題をおおかた片付けること。夏休み前から手をつけている宿題もいくつかあったことが功を奏し、突入三日目ではほぼ終了していた。

こんなやり方は今年初めて。いつもは八月中旬からちまちまと手をつけ始め、夏休み最終週に「こんなことならもっと早くからやるとけば良かった」と後悔しながら終わらせていた。なんで今年からこうしたかというところ、今年こそ最後の一日まで夏休みを満喫してやると一念発起したから。それと、後に残してお父さんからかわれるのもそろそろ卒業したいから。

ていうか、高校のとき宿題をことごとく無視していたお父さんだけに言われたくないよ。

宿題がほぼ終われば、あとは思いっ切り満喫するのみ。その第一弾となる大イベントが、ついにやって来た。そう、今日はことみちゃんがこの町に帰ってくる日です。

ことみちゃんを出迎える場所は地元の駅。というわけで、時計の針が一時を過ぎた頃、私はお母さんとお父さんと一緒に駅へとやって来た。私がまだ小さい頃は、都会に比べればまだまだ田舎の駅と

いった雰囲気があり、人の乗り降りもそんなに多くなかったのだけど、今では利用者もだいぶ増えていてるらしい。それだけ町の人口が増えていくということ、喜ばしいことなのだろうけど、変わっていくその姿に寂しさを感じてしまうのは否めない。

駅の改札前には、私たちより一足先に来ていた杏先生と棕ちゃん、そして棕ちゃんの一人娘ゆかりちゃんがいた。

「遅いつ！」私たちに人差し指をビシツと向けて杏先生が一喝。遅いと言われても、到着予定時刻までまだ二十分近くある。つまりこの場合、挨拶代わりに言葉ということ。

「あんたたち気合いが足りないわよ！」

「どんな気合いが必要なんだよ」

そんな他愛ないやり取りをしてからみんな挨拶を交わした。四歳になつたゆかりちゃんも、棕ちゃんの足に掴まって「こんにちは」と、私たちに向けて気恥ずかしそうにちよこんとお辞儀をする。その姿がどうにも可愛すぎて、会うたびに私の顔は崩壊していた。

棕ちゃんが小さかった頃もこんな感じだったのかと思うと、さらに顔面がにへらと崩壊したし、小さかった頃の杏先生を想像するについつい笑ってしまいそうになっていた。もちろん、微笑ましいという意味で。

私は、膝を折って目の高さをゆかりちゃんに合わせて、崩壊した顔で「こんにちは」とご挨拶。ゆかりちゃんも照れくさそうな笑顔を見せてくれた。

「うお、お持ち帰りしたい。」

そんな私のすぐ側では、お父さんと杏先生がさっそく漫才を始めていた。

「ちよつと朋也、毎度毎度ゆかりを怯えさせるの、やめてくんない？　こんなに怯えてるじゃない」

「俺がいつゆかりちゃんを怯えさせた。つか、鎖に繋がれていない猛獣がそばにいれば、そりゃビビらないわけないだろ」

「だったらあたしがあんたの首に鎖つけてあげるわ」

「俺につけてどうする。猛獣につけなきゃ意味ないだろ」

「あつははあ。じゃあ、だあれが猛獣だって言いたいのかなあ？」

「その猛獣の心を傷つけないから、口にするのは止めておこう」
お母さんと椋ちゃんも、二人の間にいるゆかりちゃんに目を向けながらお喋りをしている。

「ゆかりちゃんも来年から幼稚園ですね」

「ついこの前までよち歩きしてたと思ったら、もうそんな年になって。子供の成長の早さって、ほんとびっくりですよね」

「ほんとです。しおちゃんも、ついこの間までこんなちっちゃかったのに。今じゃこんなに大きくなって。来年には、身長で並ばれそうです」

ついこの間って、お母さんの手の平の高さ、私がまだゆかりちゃんぐらいの時のじゃない？ なんていうか、大人の時間感覚にはいつだってついていけないな。

と、こんな具合でいつもと変わらない和やかな空気をわいわいと醸し出している中、一台のタクシーが駅のロータリーに入ってきた。何の気なしに目の端で追っていたそのタクシーは専用の降車場にゆつくりと止まり、少しの間を置いてからドアが開くと、黒革のシヨルダーバックを肩から提げたスーツ姿の女性が一人降りた。

その女性の姿に、私は即座に「あ、智びょん！」と声を上げた。

智びょんは私の声に、だからその呼び方は止めてくれと言いたげな表情でこちらへと歩き、お母さんたちはそんな智びょんへ一斉に視線を向け、杏先生は、「遅いつ！」とビシツと指さした。時間は、十分以上の余裕がまだある。それは自分の腕時計で確認した智びょんも分かっているはずなのだけど、「すまない。三十分前には来る予定だったのだけど、会合が少しばかり長引いて」と謝っていた。

これで全員集合。なお、陽平おじちゃんはこの日お仕事。昨日から猫田さんと一緒に接待でどっかに行ってる。

接待がどういふものかなんて私に分かるはずもないけど、いつも調子の陽平おじちゃんと、汗をかきながらあたふたと苦労する猫

田さんが思い浮かんだのは、たぶん間違っていないと思う。なぜなら、陽平おじちゃん接待でどっかに行ってることを今知った智びよんが、「あいつの会社は、そことの取引を停止させるつもりなのか？」と真剣な顔で考え込んでいたから。

さて、あとはことみちゃんたちが来るだけ。

いつもより何倍ものワクワクのドキドキでその時を待つ。なんと言っても今回、スペシャルゲストてんこ盛りと言っても過言じゃない。それゆえ、どんな展開になるのか予想しにくい。けどだからこそその高揚感。そこには一片の不安もなく、あるのは、とにかく楽しいことになるだろうという期待だけ。

そして、電車二本分肩すかしをされたのち、ついにそのときを運ぶ電車が到着した。

電車から降りた人たちがぞろぞろと改札口へやってくる。二度ほど期待を裏切られていたこともあって、二度あることは三度あるかもなどと冗談を言いながら見守っていると、まず、小さな子供を抱きかかえた、周りの人より頭一つ半抜きに出た茶褐色の外人さんを発見。

その外人さんは、私たちに向けて片手を上げて大きく振ってきた。私たちも手を振ったりぺこりと小さく頭を下げたりして応える。次いで、外人さんはすぐ横に視線を落として何やら喋りだした。その相手が誰かは、前を歩く人たちに隠れて見えなかったけど、改札までの連絡路がさして長くないということもあって、すぐに判明。

そこにいたのは、両の手をそれぞれ二人の小さな女の子に握られた、満面の笑みのことみちゃんだった。そしてその後ろでは、ことみちゃんのお父さんとお母さん、つまり隣にいる旦那さんのお父さんとお母さんが微笑ましそくに頬を緩めていた。

天才博士の終わりなき挑戦 その2

「みんな、ただいまなの」

一年半振りに聞くことみちゃんの声。私は嬉しさのあまり、誰よりも大きな声で「おかえりなさい！」と応えた。となれば近くにいない見ず知らずの人たちがこちらにちらりと視線を向けるのは当然のこと。そうなることは百も承知でしたことなので微塵も気にならなかったのだけど、スペシャルゲストの存在にやや尻込みをしていたゆかりちゃんをビクリと驚かせてしまったのには、ちょっとハシヤギすぎたかなとこっさり反省していた。

そしてお母さんたちはというと、やれやれと苦笑していた。

「汐ちゃん、相変わらずとつてもとつても元気なの」

「それだけが取り柄だから」

「ううん。そんなことない。汐ちゃん、素敵なものいっぱい持つてるの」

そうかなあ。

なんて思ったのがそのまま口に出してしまった。そうしたら、お母さんが私の肩にそつと手を置いた。お母さんが今なにを考えているかなんて考えずとも分かるから、「それじゃあ、例えば？」と聞くうと顔を向ける。お母さんはそれに応えて何かを言おうとしたのだけど、それに先んじてお父さんが口を開いていた。

お父さんには聞いてないのに。

「ああ。そりゃああるさ。例えば大飯喰らいなところとかな」

それ全然素敵じゃない。ていうか思いつ切りイメージダウンじゃない。

でも、ご飯をたくさん食べている自覚はあるから、その言葉を完全否定できない。むう、なんかちょっと悔しい。

「部活けっこうハードなんだから、食べなきゃやっていけないのっ。それに、今は育ち盛りなんだからっ」

「それは認めるけど、にしてもだな」

とここで、杏先生がやや呆れ気味に「はいはいそこまで。親子漫才はあとで好きなだけすりゃあいいから、今だけは大人しくしてなさい」と割って入り、お母さんたちは同意するようにクスリと笑みをこぼしていた。

まあ確かに、ここは杏先生の言うとおり。まさか、スペシャルゲストを無視して喋り続けるわけにもいかないから。

ということでも私もお父さんもすぐに無駄話を止めた。

そうして場がひとまず落ち着くと、ようやくことみちゃんの家族の出番がやってきた。

「みなさん、お久しぶりです。相変わらず、とっても賑やかですね」
微妙にイントネーションが間違っている日本語でそう言ったのは、旦那さんのオブライエン・ラインバックさん。

実はオビーさん、日本語が喋れるのです。イントネーションに若干問題があるけど。ちなみに日本語を覚え始めたのは七年前。なんでも、ことみちゃんのことをもっと知り、もっと理解したかったからだとか。

そしてもう一点。オビーさんの言葉どおり、私たちと会うのは今回が初めてじゃない。一度目は二人が結婚した七年前、そのお披露目で。それから四年前に一度、三年前に一度と、計三回会っている。どれもことみちゃんと一緒に。

というわけなので、自己紹介の必要もなく、オビーは私たち一人ひとりとハグして再会を喜んだ。もちろん、私とも。

「汐さん、前会ったときよりもずいぶん大きくなりましたね。それに、もっとチャージングになってます」

「まあ、一年半振りですから」

チャージングという部分は照れくさかったのでスルーしたつもりだけど、なんとも微妙。それに、顔はきつとにやけている。だって、チャージングだなんてそうそう言ってもらえる言葉じゃないし、言われて嬉しくなっちゃうのは女の子の性なんだから。

オビーさんの次は、お義父さんのシヨーンさんとお義母さんのメアリさん。お二人の顔は、ことみちゃんが毎年送ってくれる写真で知っているけど、会うのはこれが初めてなので、ことみちゃんがまず紹介してくれて、それからシヨーンさんとメアリさんが挨拶した。こちらは英語で。

” Hello , I'm Sean . nice to meet you . ”

” I'm mary . I've been looking forward to meeting you . ”

シヨーンさんのは分かったけど、正直メアリさんが何て言ったのかは分からなかった。それはお母さんもお父さんも、杏先生も同じでも智びよんは、言わずもがな。加えて、外人さんの患者さんと接することもあつて、単純な会話ならどうにかなると言っている棕ちやんもちやんと理解していた。その証拠に、後で私に教えてくれていた。

そして最後は、可愛らしい子供たち。ことみちゃんの手を握っている、長女のシャーリーちゃんに次女のベティちゃん。それと、オビーさんに抱きかかえられている末っ子のトマスくん。トマスくんはまだ二歳とあつて、お父さんの胸の中でこちらをきよるきよると見るばかりだったけど、六歳のシャーリーちゃんと五歳のベティちゃんは、しっかり挨拶していた。しかも日本語で。

数年前から子供たちがいくらか日本語を話せるようになったということは、ことみちゃんからの手紙で知っている。だから、そう驚くこともない。

のだけど……。

「はじめまして、シャーリーですノ」

「ベティですノ」

二人の発音はしっかりしていて、オビーさんみたいなアクセントの癖はない。それに、日本語で挨拶する二人はとても可愛い。それだけに、なんていうか余計に気になるんですけど。

でもここはまず、二人の挨拶に笑顔で答えるべきところ。もし変なこと言つてこの子たちを傷つけでもしたら、それこそ最悪。

あ、でもその前に、余計な一言が得意な誰かさんがここにいるんだ。早くお父さんの口塞がなきゃ。

などと反射的に逡巡したのもほんの一瞬。子供たちに英語で答える智びよんの声で我に返つた私は、とにかく言葉を返してあげなきゃと、「はじめまして」と笑顔を応えた。お母さんたちも、私と同じ微妙な間を置いてにこやかに返事をしていた。ちよつと心配だったお父さんも、何か言いたげだったけど、そこをグツと飲み込んで応えていた。

杏先生も堪えていたつばいから、とりあえず細かいことは後にしておこう。

トマスくんについては結局、オビーさんの口から紹介された。そんな三人の可愛らしい子供たちに、何はともあれ和やかな歓声が上がらないはずはなく、特に杏先生が瞳をきらきら輝かせて歓声を上げていた。

「うっはあゝ、小憎らしいうちの園児らと違つて、かわいい」
その発言、保育園の先生としてどうかと思うけど、当時の自分と
いうか情景を思い返せば、先生の大変さは想像に難しくないだけに、
元教え子の私としては半分申し訳ない気持ちで苦笑せざるを得ない。

この歓迎ムードに子供たちの緊張がいくぶん和らいだようで、こ
とみちゃんに笑顔で何やら話し掛けている。ここはさすがに英語。
私は、やっぱり子供の外人さんなんだなあと当たり前前の事ながらし
みじみ思いつつ、所々聞き取れる単語を拾つて、なにを喋っている
のか推測しようとしていた。結局、拾った数少ない単語と雰囲気か
ら何となく想像することしか出来なかつたけど。

こうしてことみちゃんの家族の紹介が終わると、今度は私たちの
番。私たちは一人ずつ順番に、自分の名前を言つてはショーンさん
とメアリさんと握手していった。

お父さんより少し背の高いショーンさんの手はとても大きくて、

お父さんよりもずっとゴツゴツしていて、お父さんとあまり変わらない背丈のメアリさんの手は、ちよつとだけ硬い感じがしたけど、とつても温かかったのが印象的だった。

ゆかりちゃんが椋ちゃんに励まされながらご挨拶をして、智びよんが英語で歓迎の言葉を言うと、とりあえずのご挨拶は終了。総勢十四人もいると、名前もそうだし顔もそう、これだけで記憶しておくのは一苦労なんだろうけど、お互いに話や写真では知っていたので、改めての自己紹介という感があり、誰が誰だったっけ、といった雰囲気はほとんどなかった。

もちろん、ゆかりちゃんやことみちゃんの子供たちは別として。

ただここで、私たちのことがことみちゃんの家族にどう話されているのか、と言うよりオビーさんがどう話し伝えているのかを考えると、ちよつと恐くもなる。いかんせんオビーさんは、お父さんと陽平おじちゃんと杏先生の三人の、ある意味壮絶な漫才を、日本に来るたびに目の前で見ていただけに。

悪い評価じゃないとは思うけど、変な人たちという印象を持たれている可能性は十二分にある。それどころか、その可能性が非常に高いと考えるべきかも知れない。まあ、その印象は間違っていないだろうけどね。

ようやくお互いの挨拶が終わると、間髪入れず「ところで」とおオビーさんが言った。

「スナハラさんは、今日はいらっしやらないのですか？」

「ああ、スニハラなら、今日は仕事です」とお父さん。

「そうですか。スルハラさん、ジョブですか。ちよつと残念です」

「ということだ、ことみ。アホアホ病のスラハラは、アホアホ病撲滅のために自ら出向いて」

とここで、杏先生が「アホアホ病はあんたも同じでしょうがっ！」と鋭いツッコミ、というか延髄への回し蹴りという激しいツッコミを入れた。それをまともに受け、もの凄い勢いで見事に倒れたお父さんは、その衝撃を物語るかのように後頭部から煙を立てている。

この光景に、棕ちゃんが「お姉ちゃん！」と慌てて咎め、智ぴよんは深いため息とともに額を押さえ、お母さんかというと、ちよつと困った顔で「パパってばもう……」と苦笑い。私は当然、いつものことと小さく笑った。一方ことみちゃんの家族は、初めて見るこの光景にてつきり唾然としているかと思いきや、シヨンさんやメアリさん、それに子供たちも大喜びしていた。

” Oh! Japanese KARATE! Fantastical!”

なんて言いながら。

そういえば、オビーさんも初めて杏先生の殺人的なツツコミを目前で見たとき、お父さんの心配よりも、杏先生の蹴りに拍手喝采で喜んでいたっけ。これは外人さん特有の感覚？ それともオビーさんのご両親と子供たちだからこそその感覚？ まさかとは思っけど、これが普通のリアクション？

といった、私にとっては毎度お馴染みのカオスチックなこの状況の中、ことみちゃんが残念そうにぼつりと呟いていた。

「杏ちゃんに、先越された……」

ええと、とりあえず深く考えないようにしよう。うん。

天才博士の終わりなき挑戦 その3

総勢十四名の大集団が、改札前でいつまでもお喋りし続けるわけにもいかない。というところで、駅前での挨拶を終えた私たちはひとまず場所を移すことにした。

その道すがら、オビーさんから素朴な疑問が飛び出た。

「ところで、スノハラさんはどうして "simple fracture" したのですか？」

「シンプル・ふらくちゃあ？」と私。すると棕ちゃんがすかさず「単純骨折のことです」と教えてくれた。

陽平おじちゃんが骨折したというのも、およそ一月で退院したことも、私たちとの手紙でことみちゃんたちも知っている。ただ、事の真相までは手紙に書いていないので知らない。あまりにも陽平おじちゃんらしすぎて、書く気になれないというのがお父さんの言い分。

オビーさんの質問の内容が分かると、私やお父さん、杏先生の表情は、さぞかし複雑なものに変わっていたことだろう。だから、私たちの無言の返事を受けて言ったオビーさんの言葉が、とても気まぐすそうだったのだと思う。

「聞いては、いけなかったですか？」

「いや、そんなことはないんだけど……」と、やむなく歯切れの悪い返事したのはお父さん。その後を引き継ぐように、杏先生がどこか遠い目を誰もいない方へ向けて「あまりにもアホすぎて……」と呟いた。智びょんも、「まったく、本当にあいつは日本の恥だ」と独り言をこぼしている。

智びょん、それはさすがに言い過ぎなんじゃ。

などというリアクションを私たちがしたところ、気まずそうだったオビーさんの表情が、途端になるほどと納得したようなものになった。

「つまり、彼らしい理由で、ということですか」

オビーさんにもこう言われる陽平おじちゃんって……。

「春原くんらしいって言われても、やっぱり原因が気になるの。いったい何があったの？」

「口にするのもアホらしいんだが……。一言で言っちゃえば、単なる自爆だ。スネで車を思いつ切り蹴って、んで病院行き」

「それだけじゃ、ぜんぜん訳が分からないの」

そりゃ分かんないよね。

真相はこう。

取引先との商談が終わった陽平おじちゃんと猫田さんが帰ろうとしたら、自分たちの車のすぐ横に車が止められていて、車が出せない状態になっていた。いわゆる、縦列駐車されて身動き取れないって状況。そのことに腹が立った陽平おじちゃんが、邪魔している車の後部バンパーを思いつ切り蹴ろうとした。ところが目測を誤って自分のスネで蹴ってしまったという次第。

お父さんと杏先生からそれを聞いたことみちゃんは、心底痛そうな顔をしながらも「確かに、春原くんらしいの」と納得し、オビーさんは「さすがスノハラさん、とつてもミラクルです」とやたら感心していた。

なお、この話にはまだ裏があったのだけど、さすがにそこまでは身内として情けなさ過ぎて言えないと思ったのか、お父さんも杏先生も口にしなかった。

その裏というのがこれ。

猫田さんから得た証言によると、蹴ろうとする陽平おじちゃんを、猫田さんは慌てて「訴えられでもしたらどうするんですか」と止めようとしたのだけど、陽平おじちゃんは「どうせこれ運転してるの女だろ？ 騒がれそうになったら、ボクの迫力で向こうが全面的に悪いことにさせりゃいいんだよ。つうか、そもそもこんなところに車を止めたヤツのが悪いんだから、当然の権利さ」と、猫田さんの忠告を無視。

陽平おじちゃんがなぜ運転手は女の人と断定したのかというと、その車が丸みのある真っ赤な小型車で、いかにも女性が乗りそうな車だったから、というのが理由だそうだ。

結局、車を傷つけるどころか、自分の足を折っただけの陽平おじちゃんは、その場で救急車を呼び、病院に担ぎ込まれた。

ただこの自爆、不幸中の幸い以外の何者でもなかったりする。実は、その車の運転手は確かに女性ではあったのだけど、一緒にいた人がいかにもそのスジの人っぽい男の人だったそうさ。救急車が到着する前にその事実を目の当たりにした陽平おじちゃんは、蒼白な顔で激痛に耐えながら、営業スマイルで「行つてらっしゃいませ、どうぞお気を付けて」とお見送り。そして猫田さんは、陽平おじちゃんが自爆したことに對して、心の底から神様に感謝したとか。

自爆してなかったら、なんて、私だつて考えたくないもの。

そんな陽平おじちゃんの話をしているうちに、目的地に到着。智ぴよんに案内されるままに私たちはレストランに入った。ひとまず落ち着ける場所が必要だろうと、智ぴよんが事前に予約しておいたのだ。

夕方になるといつも満席になるようなこのお店も、お昼時を過ぎていることと、加えて十四人分の予約が入っていたこともあり、数人のお客さんがいるだけで、閑散とした印象があった。

テーブルに着くと、飲み物やちよつとした食べ物、例えばケーキだとかを頼み、お喋りをしながらとても賑やかに過ごした。その間、私はできるだけシャーリーちゃん、ベティちゃんと仲良しになろうと、頼りない英語を織り交ぜ、所々ことみちゃんの助けも借りて、いろいろと話し掛けた。その甲斐あって、シャーリーちゃんとは打ち解けることが出来た。ベティちゃんとは、もうちよつとだけ時間が必要かな。このあたりは、ことみちゃん曰く二人の性格の違いによるものだから、まあ焦らずじっくり行きましょう。

トマスくんともここで仲良しになりたかったけど、座った席がちよつと離れていてそうもいかなかったから、お店を出た後だ。

そうして一時間ほど経った頃、そろそろ出発しようかとお店を出た。

棕ちゃんとゆかりちゃんとはここでお別れ。最初こそことみちゃんのご家族におっかなびつくりといった様子のゆかりちゃんだったけど、レストランの中でほんの少しだけお話することが出来たことで、その緊張感がいくぶん解けたようで、別れ際に「ばいばい。またね」と笑顔で手を振っていた。

そして私たちは、町の散策を始めた。

実は、ことみちゃんの家族が揃ってこの町を訪れた理由の半分が、これなのだそうです。ことみちゃんの生まれ育った町を、ご両親と子供たちにも見てもらいたいというオビーさんの強い希望で。

残りの半分はというと、私たちとこうして直接会うことだったので、すでに果たされている。

さて、その散策のコースなのだけど、基本、智びよんがガイド役になっていた。といっても、あくまでもことみちゃんのいくつかの希望を踏まえてのコースとなっている。

観光地でもないし、観光スポットと呼べる場所もないこの町を歩いて、実際のところシヨーンさんにメアリさん、それに子供たちも退屈なんじゃないのかな、なんて散策を始めたばかりの頃はそう思っていたけど、それは無用な心配だった。

シヨーンさんもメアリさんも、この町の風景を楽しんでいるようだし、すっかり仲良しになった私の手をしっかりと握って、きよろきよろと視線を移ろわせているシャーリーちゃんも、楽しそうに目を輝かせていた。また、寄り道好きな私としても自然と心が弾み、杏先生も「こうして改めて自分の町を歩くっていうのも、けっこういいものねえ」と、満足している様子。お母さんやお父さんも同じ。しかも、ときおり「ここ、こんな風になってたんですね」というお母さんの声や、「ここは変わらないわねえ」という杏先生の声も聞こえる。

そして、ことみちゃんもまた、気付かなかった町の変化に少し驚

いていた。

とここで、今なら私がついつい寄り道したくなってしまふ気持ちも分かってくれるかも、というほのかな期待が、ふっと湧き上がった。

よし、今がチャンス。

「ねえお父さん、こういうのっていいよね」

「ん？ ああ、そうだな。車でよく通るような道も、こうしてゆっくり歩きながらだと、随分と違って見えるもんだ」

「うん。町の色んな風景を、こうやってじっくり眺めながら歩くって、すごく楽しいね」

「ああ。でもな、汐」

「うん？」

「これと寄り道は、まったくの別物だからな」

いつもはこつちが心配するほど鈍感なお父さんなのに、このときばかりは何故か私の思惑はバレていた。しかも、「同じだよ。ていうか、寄り道三昧だったお父さんにだけは言われたくない」と抗議する私に、お母さんまで「しおちゃんの場合、散策じゃなくて探検ですから。それに、パパのことはともかく、学校が終わったらなるべく真つ直ぐ帰らなくちゃ」と笑顔で参戦。

むう、二対一なんてずるい。それに、お父さんはともかくっていうのも理不尽だ。

「これは勝負あつたわね、汐ちゃん」

うわつ。杏先生まで。三対一じゃ多勢に無勢すぎるよ。これで智ぴよんまで敵に回ったらたまったものじゃない。とそれよりも、こつちも味方を集めなきゃ。

ということ、私たちの会話を聞いていたシャーリーちゃんに早速援軍要請。

「シャーリーちゃんは、お姉ちゃんの味方だよな」

” Mikata? ”

ああ、英語が話せないのがもどかしい。けど私には心強い味方が

いる。

「ことみちゃん、味方って英語で何て言うの？」前を歩くことみちゃんに、間髪入れず聞いた。

「この場合は、”A l i e y” なの」
なるほど。

「シャーリーちゃんは、私の ”A l i e y” だよね」

”Y a h ! o f c o u r s e ! ”

嬉しいことに、満面の笑みで答えてくれた。しかも、ことみちゃんの手を握って歩いていたベティちゃんも、”M e t o o . ” と私の味方になってくれた。

「ほらあ！」

「いや、何が『ほら』なのかまったく分からんのだが」

ともかくにもこれで三対三。あとはことみちゃんとオビーさんを味方に付ければ。と考えている隙に、シヨーンさんとメアリさんと並んで先頭を歩いていた智びよんが「学校帰りの寄り道は、私としても到底容認できることじゃないぞ」と振り向いた。

これで一步後退。むむむ、ことみちゃんとオビーさんが敵側に引き込まれる前に手を打たないと。

「ことみちゃんは？」

「私？ 私は、みんなと学校の帰りに寄り道するの、とても楽しかったから」

「よしっ！ オビーさんは？」

「はっはっは。私はいつだって汐さんの味方です」

「やったあ！」

ついでに、当人の意志なんてまったく関係なくトマスくんも味方について五対三。これで、例えシヨーンさんとメアリさんがお父さん側についても負けはない。私は意気揚々と「どう？」と胸を張った。

「……汐、なんか主旨が変わってないか？」

「いいのっ」

「やれやれ……」

そんな光景に、智びよんが半分呆れた様子でこんな感想をこぼしていた。

「せつかく春原がないというのにこれだ。結局、誰かが欠けても騒がしくなるのだな。こいつらは」

こうして賑やかに散策を楽しむ私たちは、やがて光坂高校へと続く坂の、桜並木へとやって来た。桜のシーズンならとてもきれいなこの並木道も、八月の今はとうぜん花は咲いておらず、青々と葉が生い茂っている。

以前私たちが送った写真で、満開に咲きほこる桜並木を知っているだけに、実際に見ることが出来るのかと密かに期待していたらしいシャーリーちゃんは、私の手をぶんぶんと振って「Cherry blossoms tunnel」ないの」と私に訴えた。

「ごめんね、桜が咲くのは春、スプリングなの。今は夏、サマーだから、ノー・チェリー・ブロッサム」

「ノウ。とつても悲しいノ。とつても見たかったノ」

残念がるシャーリーちゃんに、私は「それじゃあ、今度は桜が咲いている頃においでよ。私が案内、ガイドしてあげるから」と励ました。すると、この日本語はちよつと難しかったようで、私たちの後ろを歩いていたオビーさんに、私がではなく、シャーリーちゃんが助け船を求めた。

”Daddy, What did she say?”

”She said, if you visit this town when cherry blossoms bloom, I will guide you.”

すると、シャーリーちゃんは、”Really?” と顔を綻ばせ、私に「次、絶対見るノ」を満面の笑みを見せてくれた。すると、この会話を背中越しにしっかりと聞いていたベティちゃんが、握っていることみちゃんの手をぐいぐい下に引つ張って、何やら訴え始めた。聞き取れる単語から、またここに来たいとせがんでいる模様。

ことみちゃんの笑顔とベティちゃんのはしゃぎっぷりから、ベティちゃんの願いは通ったようで、次いで、ことみちゃんの手を放しオビーさんの元へ。こちらでも良い返事をもらえたようで、今度はシャーリーちゃんも加わっての大盛り上がり。そして最後に、ションさんとメアリさんの元に駆け出し、大はしゃぎで報告していた。ションさんもメアリさんも、それを一緒に喜んでいた。

なんとも微笑ましいその光景に、私も楽しい気持ちでいっぱいになったし、そのときが今から待ち遠しくもなる。

そんな私に、お父さんが「汐。約束したからには、そのときはしっかり案内するんだぞ」と、お父さんもまたどこか楽しそうな顔で言った。

「もちろん!」

夏の日差しを桜の葉が柔らかく受け止めているトンネルの下、私は高らかにそう宣言した。

天才博士の終わりなき挑戦 その4

ことみちゃんが家族と一緒にこの町に帰ってきた日からおよそ一週間経った金曜日の夜、我が家の玄関には六人分の靴が並んでいた。そして我が家の食卓には大量の料理がぎっしりと並んでいて、その料理に箸を付けずにわいわいと賑わう六人がいる。

私、お母さん、お父さん、杏先生、陽平おじちゃん、そしてなんと御久島さん。

病院で初めて会ったときは、正直、陽平おじちゃんのテンションについていけるかなとちよっと心配になるような、とても大人しい人という印象が強かった。でも、その点については心配無用だったみたい。大人しいことには変わりないようだけど、御久島さん曰く「色々なタイプの人とお付き合いしてきましたから」だそう。ついでに、「すでに耐性が出来てるってことが。なんて不憫な子なの」とは杏先生のコメント。

そして陽平おじちゃんと御久島さんは今、この場所で並んで座っている。その光景を見るのはこれで二度目だけど、やっぱりなんとも不思議な感じがしてならないのは内緒。お父さんや杏先生は、不思議な感じとかそれどころじゃない違和感を感じているようで、それを陽平おじちゃんに向けて容赦なく言ってたけど。

で、今の話題は、私が桜並木の下でシャーリーちゃんたちとした約束。

「ふうん。それじゃあ、いくらか英語喋れるようになってかないとマズインじゃない？」

「あう、それは言わないでよお」陽平おじちゃんの指摘に、現実の厳しさがもくもくとたち上る。

「ははは。まあでも、汐ちゃんなら大丈夫でしょ。渚ちゃん似で、がんばり屋だから」

「そうね、朋也似だったら到底無理でしょうけど」

「ほつとけ」

「がんばり屋さんなのはパパ似です。私なんかじゃありません」

娘の私としては、お母さんもお父さんもとつてもがんばり屋さんだと思う。まあ、お父さんの場合、普段の言動や態度からそういうイメージを持ちにくいのは確かだけど、お父さんががんばり屋さんなのは杏先生も陽平おじちゃんも知っている。その上でのこうした冗談だから、なんかこっちまでこそばゆくなってくる。

そしてこの話の矛先は、そんな私に向けられた。

「しおちゃんも、お父さん似だと思えますよね？」と、どこか懇願するような目でお母さんが私に聞いてきた。

「半分半分つてとかな。半分はお母さんで、半分がお父さん」

「おっと、随分と無難な答えに逃げたね」と陽平おじちゃん。

「汐ちゃん、こんなヤツの気なんて使わなくていいのよ？」とは、お父さんに指を差す杏先生。

このコメントに、お父さんは「こんなヤツとはなんだ」と顔をしかめ、すぐに真面目な顔でこう言い出した。

「汐、それは違うぞ？ いいか？ お前のがんばり成分は、渚のがんばり成分と、そして猛烈頑固成分を足して出来ているものだ。つまり、遙かに渚の成分の方が多いということだ」

猛烈頑固成分つて、なんか悪い成分みたいに聞こえるんですけど、それはお母さんも同じだったようで、「なんだか感じ悪いです」と不満げに呟いていた。

「朋也の口の悪さは昔からだからねえ」

「そう言うお前の凶暴さもな。それと、俺はただ単に正直者なだけだ」

「へえ、随分とへその曲がった正直者もいるものね。それと、こおんな優しい保母さん、世界中どこ探してもいないわよ？」

「随分と狭い世界なんスね。あんたの世界は米粒なみですか」

「あん？ 陽平、何か言った？」

「……いや、あ、あはは！ 杏さまは、ワールド・ワイルドなみに

心優しいなあつて感動していただけですよ！」

言いたかったことは分かるけど、もう少し英語勉強しようよ。これは勉強以前の問題だけど。と心の中でツツコミを入れ、お父さんたちも毎度の事ながら呆れる中、御久島さんが陽平おじちゃんの間違いを指摘した。

「陽平さん、それを言うならワールド・ワイドです」

「え？ ああ、そうとも言うよね」

言わない言わない。

とここで、どこかのんびりした呼び鈴の音が来客を告げた。この音に、待ち人來たるといった色がみんなの顔に浮かび、そのお出迎えにお母さんが玄関へと向かった。そんな中、陽平おじちゃんが「これが智代だったら凄いよね。空気読めない女っていうの？ グランプリに出たら、間違いなく世界一だよ。そうだったら、あいつの頭ぺしぺし叩いて祝福してやるかな」と大きな声で笑った。

このとき、陽平おじちゃんは大きな勘違いをしていた。

この日の出席者に智びよんが含まれていないのは事実。でもそれは、仕事の都合でたぶん来られないだろうから、欠席扱いにして欲しいと言われたから。裏を返せば、都合が合えば来られるということ。

そして運命は、いつだって笑い、じゃなくて嵐を吹かせる。

「空気が読めない女で悪かったな。春原」

智びよんの低い声が、座敷の入り口から蛇のように聞こえてきた。こうなるような予感はしていたので、私は智びよんの登場に驚きはしなかった。けど陽平おじちゃんにとっては予想外の事態、というか緊急事態。ギリギリと軋む音が聞こえそうな動きで首を回し、儼然と見下ろす智びよんを見た。

「あ……、あれ？ ど、どうして智代さんが？」

「会議が予定より早く終わってな」

「あ、ああ、そうなんスカあ。それは何よりでした」

「ああ。それで、空気の読めない私の頭をぺしぺし叩いて、祝福し

てくれるそうだな」

「あ、あはは！ ペしぺしっていうか、なでなでしてあげたいなあ
と……」

「そうか。なら、遠慮なくなでなでしてもらおうか。ただし、その
後お前がどうなっても知らんが」

陽平おじちゃん、絶体絶命のピンチ。

と思いきや、一番意外な人が割って入った。

「智代、春原を病院送りにするのは後回しにして、とにかく中に入
って座れ」

なんとそれはお父さん。ピンチの陽平おじちゃんに助け船を出す
なんて、こんなこともあるんだあと意味なく感動しかけた私だった。
けど、「でないと、いつまで経ってもことみが入れないだろ」とい
う言葉で、ことみちゃんも一緒に来てたことを知ってちよつと驚く
と同時に、ああなるほどと納得して、感動は塵一つ残さず消えた。

智びよんがお父さんの言葉に頷き部屋の中へ入ると、続いて、今
夜の主賓であることみちゃんが現れた。

「みんな、こんばんはなの。それと、春原くんとはこの前会えなか
ったから、お久しぶりなの」

「久しぶりっ。元気そうだね」

「うん。春原くんも。足はもう大丈夫なの？」

「ああ、もう平気さ。なんたって、ボクは不死身の男だからね」
確かに。

そしてことみちゃんの視線は、初対面の御久島さんへ。

「それと……、そちらの方は？」

「あ、はじめまして。御久島朝子です」

「ことみ・ラインバックです。はじめまして」

これで一通りの挨拶が終わり、お父さんが「と挨拶はそこまでに
して、ことみもとりあえず座れよ」と言って、ことみちゃんを座ら
せた。

これで全員集合。となれば、あとは始めるだけ。

「んじゃまあ、みんな腹も減ってるだろうから、とつとと始めるか」という、なんともお父さんらしい号令に続く乾杯で、ことみちゃんお帰りなさいパーティーの幕が切って落とされた。

するとその途端、私の隣に座った智びよんが、対面に座る御久島さんに自己紹介して、ちよつと躊躇い気味に質問をした。陽平おじちゃんに彼女が出来たことは、その彼女の名前が御久島朝子さんだという話は聞いている智びよんだけど、やっぱり信じられなかったみたい。

「あの、失礼ですが、あなたと春原がお付き合いをしているという話を聞いたのですが……」

「はい。陽平さんとは、お付き合いさせてもらってます」

「よ　っ!?!?　う……へ……」

明らかに、智びよんの足の先から頭のとっぺんまでぞわぞわわってなった。それを見ていた杏先生が、「やっぱそうなるわよね。普通」と腕組みしながら激しく頷く。そして智びよんは、無理に作った笑顔をお父さんに向けた。

「お、おい、岡崎。こんな冗談企画、とても笑えないぞ?」

「気持ちには分かるが、冗談ではないんだ」

「そんなわけないだろ!　春原の相手が、人間以外の生き物なら納得できるが、こんなに若くて綺麗なお嬢さんが相手というのは、あまりにも現実を無視している!」

ここで、陽平おじちゃんが「ふふん、それはな、朝子ちゃんが、ボクの魅力をちゃんと分かってくれたからさ。見る目のないお前と違ってな」と自慢げに鼻で笑った。こんなに自信に満ちた、智びよんに対する陽平おじちゃんのこういう言葉、初めて聞いたかも知れない。でも、悲しいかな智びよんに一刀両断。

「冗談はお前の顔と頭の中だけで十分だ!」

この言葉に、依然として得意げな様子の陽平おじちゃんは「ふつ。負け犬の遠吠えは、本当にみつともないねえ」と余裕の発言。

そしてこのとき、私は見逃さなかった。智びよんの一刀両断発言

の直後、ことみちゃんがすごく感心したような表情をしたことを。

「智代さん、冗談でも何でもありませんよ？」

「な、渚さんまで……！　しかし、こんなことが許されては」

「お二人は、とてもお似合いのカップルです。それにです。幸せかどうかを決めるのは、周りの人ではなく、その人たち自身です。その幸せを、周りがあまり口出しして、もしも壊してしまうようなことがあったら、それはとても悲しいことです。ですから、今はお二人を温かく見守りましょう」

うおお。さすがお母さん。私の心まで洗われていくような気さえしてくる。

「う……、そ、そうだな……。私が決め付けることでは、ないのかもしれないな……。うん、渚さんの言うとおりだ。すみませんでした、御久島さん」

「いえ、氣遣つてくれてありがとうございます。でも、心配には及びません。陽平さん、とても優しくしてくれていますから」

「優……しい……？　こいつがか？」　信じられないという顔を陽平おじちゃんに向ける智びよん。

「はい。それに私、陽平さんとお付き合いするまで、色んな経験をしてきましたから。滅多なことでは堪えません」

え、と……、それは陽平おじちゃんをフォローする言葉、だよな？　とにもかくにも、不安を拭えない智びよんは、これで本当に良いのかと深刻な面持ちでぶつぶつ自問自答したあと、「もし彼女を不幸にするようなマネしたら……、分かっているだろうな？」という、殺気を感じる脅し文句で鞘を収めた。

お母さんの後光輝くお言葉にあてられてた私は、自分も何か言わねばと思っていたので、「大丈夫だよ、智ちゃん。ほら、カップルにもいるんなのあるでしょ？　ツツモタセとか」と笑顔で言った。

そしたら何故か、ほんの一瞬だけこの場の時間が止まった。

ええと、また私、変なこと言った？　意味はよく知らないけど、ツツモタセってというのがいけなかった？

と困惑した私に、お父さんが「汐、なんて上手いこと言うんだ」と感心したような声で言い、杏先生や智びよんまで私を褒めたりしました。対照的なのは陽平おじちゃん、「まさか、僕たちのこと言ってるわけじゃないよね」と笑顔をひくつかせている。御久島さんは、どう受け止めればいいのかよつと困ってるっぽい。お母さんは「しおちゃん！」と責めるような声を出している。

そんな中、ことみちゃんは真剣な表情で「みんな、レベルがとつてもとつても高いの……。でも、私負けないの」と呟いていた。

何に？

と思つていたら、ことみちゃんがすつくと立ち上がった。

この突然の行動に、みんながことみちゃんに注目する。最初は、おトイレにでも行くのかな程度の視線だったけど、ことみちゃんの真剣な眼差しに何かを感じた私たちは、次に起こることに自然と身構え、一瞬の間が出来た。

そして、ことみちゃんは言った。

普段のゆったりしたりリズムで、あまり抑揚をつけずに。

「鉄砲持たせて、どないするつもりやねーん」

え……。

あの、なに？ ど、どうすればいいの？ 私。

理解できない今の一言と、やりきった感のある安堵のため息をゆつくり吐き出すことみちゃんに、私は思わず助けを求めるように視線を周囲に流した。そしたら、みんな私と同じ状態だった。お互い目が合うと、困った笑顔を向け合い、なんとも表現しがたい微妙な雰囲気や部屋全体を覆った。

この状況に、ことみちゃんの表情は瞬く間に動揺の色で覆われた。ただし、なんでこうなったか分かっていないようだけ。

「あれ……、みんな、なんで？」

「なんでと聞きたいのは、こつちの方なんだけど……」と杏先生が半眼で聞き返す。

「え、と……、分かりにくかった？」

「それ以前の問題よ……」

「これは、美人局の“つつ”と、鉄砲の異名である“筒”を掛けているの」

ひよっとしなくても、私が言った“ツツモタセ”っていう言葉に對する、ことみちゃんのツツコミだったらしい。けど、あまりにも分かりづらかったし、それ以前にタイミングやらツツコミ方やら問題だらけで、どうにも困ってしまう。

杏先生なんて、容赦ない言葉を浴びせかけていた。

「ことみ、その程度のツツコミが通用すると、まだ思ってるの？
ていうかちつとも進歩してないじゃない。素振りでもして、反省してなさい」

「杏ちゃん、とつても厳しいの。でも、私負けないの。次こそ、みんなをどっかんどっかん笑わせられるようなツツコミをおみまいするの」

いや、負けてもいいんじゃないのかなあ……。

その後、ことみちゃんはめげずに二度ほど挑戦したけど、どれも不発に終わり、この日のパーティーは終了。杏先生たちはそれぞれ自宅へと帰り、我が家に泊まることになっていたことみちゃんは残り、四人で少しだけパーティーを続けた。そこでも一度挑戦したのだけど、これも失敗。

ことみちゃんの挑戦は、どうぶん終わりそうにない。

っていうか、終わる日が来るのか、とても疑問です。

Episode「天才博士の終わりなき挑戦」 - 了 -

天才博士の終わりなき挑戦 その4（後書き）

ことみ編終了。

やっとの登場です。両親を失ってから朋也と再会するまでの間、ずっと独りぼっちで寂しい思いをしてきた彼女だけに、優しい旦那さんと、たくさんの可愛い子供たちに囲まれた、幸せな彼女になって欲しいという願いも込めて、こういう設定にしました。

ところで、英文の表記というか挿入の仕方は、これで良かったのでしょうか？

ステージは燃えているか その1

朝一番から友達三人と市民プールで遊んだ私は、お昼に切り上げ、その友人らを引き連れてお気に入りのお店へと向かった。その道中、夏休みに入ってからはまだ足を運んでいなかったもので久しぶりな感じがしていたのだけど、お店に着いておばあちゃんの顔を見ると、昨日もここに来たような錯覚をしまいそうになっていた。

「こんにちは。おばあちゃん」

いつものシワだらけの笑顔にそう声を掛けたのは、私だけではなかったりする。友達もおばあちゃんとは顔見知りになっているので、親しげに声を掛けていた。もちろん、店の奥でパンを焼いているおじいちゃんとも顔見知り。そしてそんな友達にこのお店、『おおきばん』を紹介したのは、他ならぬ私。

さしずめ、私はおおきばんの宣伝部長ってところかな。もちろん、古河パンの宣伝部長もちゃんとやっています。ただ、古河パンの場合、学校の帰り道に立ち寄れる場所がないので、残念ながら私の宣伝はあまり効果がないみたい。

「いらつしゃい、お嬢ちゃんたち。今日も暑いねえ。これから遊びに行くのかい？」

「ううん、プールで遊んできたところ」と私。

「そうかいそうかい。こっ暑いと、なおさら気持ちよかつただろう」「そつれはもうっ！」

誰よりも早くそう力を込めて答えたのは、四人の中で一番の元気印の右藤こよりちゃん。私や他の子も、負けじと後を追って盛大に同意した。なんだか、我こそが一番と祖母に自慢合戦する孫娘たちって感じの勢いで。それから、おばあちゃんはもう何十年も海にもプールにも行っていないという話になり、完全に井戸端会議と化した。

この状況を、私たちは本来の目的を忘れて楽しみだしていた。で

も、私たちの胃袋は楽しんではいなかった模様。おばあちゃんを海に連れて行っていないおじいちゃんに抗議し、おじいちゃんがおばあちゃんに「お前が変なこと言うから」と文句を言ったところで、四人の胃が揃って抗議の音を鳴らした。

こつもびつたり音が揃うと、私たちは実は血のつながった姉妹なのかも、などと本気で思ってしまったいそうになってしまふ。ほら、例えば、双子は感覚を共有する時がある、なんて話があるし。

とにもかくにも、私たちの胃の抗議は無事、私たち自身に聞き届けられて、ついでにおばあちゃんたちにも聞き届けられ、ようやく本来の目的を果たすこととなった。

「おやまあ、お昼まだなのかい？」

お昼時に来た私たちにこの台詞というのも、普通に考えればちよつと変だけど、店先で近所の人とよく井戸端会議をするおばあちゃんらしい言葉とも言える。私たちも私たちと言われてしまえばそれまでだけど。

「あはは……、聞かれちゃったとおり、まだなんです。だから、私はコロッケパンとやきそばパンと、それと……、チョコクリームパン！ あと飲み物は……、オレンジジュース！」

私がそう言つて、照れくさを誤魔化すように後半勢いをつけて自分の分を注文すると、間髪入れず友達も頼んでいった。そうして私たちが矢継ぎ早に注文していったために、おばあちゃんに「そんないっぺんに言われてもねえ。年寄りの頭じゃあ覚えきれないよお」と苦笑され、おじいちゃんにもこつそり苦笑するかのよう目尻を細められて、恥ずかしさが少しばかり増してしまっていた。

こうして、私たちはようやく目的の第一段階を終え、おばあちゃんがパンを一つ一つショーケースから取り出していくのを眺めながら、まったく気の利かない胃袋なんだからと我らが胃袋たちを笑い合った。もしもお腹が鳴ったのが一人だけなら、その一人が自分だったら、そんなちよつとばかりゾツとする思いをその表情なり言葉尻なりにちらつかせながら。

そして一人ずつ会計が始まり、お金を支払っているところに、四〇過ぎだと思われる一人のおばさんがお店にやって来た。お客さんと断定した言い方をしないのは、なにぶん『おおきばん』は井戸端会議の会議場でもあるわけで、訪れる人すべてがお客さんとは限らないから。それにこのおばさんは、順番待ちの暇つぶしかもしれないけど、「ちょっとおばあちゃん、聞いた？」と、古めかしいレジスターを丁寧に操って、小銭を出し入れしているおばあちゃんに向かって、口調も表情も少々興奮気味に話しかけていた。

私たちにとっては「何を？」と言いたくなるようなおばさんの切り出したけど、おばあちゃんは即座に思い当たったようで、「たぶん、聞いてると思うよ」と、言葉は曖昧でも自信ありげに答えていた。どうやらおばさんは話が一致したと確信したようで、「誰から聞いたの？ 私はついさっき志田さんから聞いてさあ」と話し始める。

「そんなことより、私も話も逃げやしないから、もう少し落ち着きなさいな。はい、三〇円のおつりね」

「落ち着けて、これが落ち着いていられますか」

「でもねえ、今からそんな慌てたところで、何がどうなるっていうんだい？」

「んもうっ！ おじいちゃん！ おじいちゃんだって困るでしょ？」

「困ってるのは、お前さんの横のお嬢ちゃんたちだ」

「は？」おばさんは、やれやれといった顔のおじいちゃんの指摘にくるりと私たちに視線を向けた。自分たちに振られるとは夢にも思っていなかった私たちは、四人とも間の抜けた顔で「へ？」と呟いてしまった。

「あ、ごめんなさいね。私ったら」

「い、いえ、全然大丈夫です」などと、不意打ちを食らった私たちは動揺も露わに答えることとなった。

「はい、九〇円のお釣りがおつりね。いつもありがとうね」

璃香ちゃんがお釣りを受け取り、これで全員、お会計終了。当初、

お店の軒先で食べようかという話になっていた。でも、なんとなく退散した方が良さそうな雰囲気ということもあり、次に向かう場所の検討会を始めた。そしておばさんは、やっと自分の番だとおばあちゃんに話し始めた。

「もし本当にそんなことになったら、どうなっちゃうのかねえ」

「どうなるも何も、なるようになるしかないさね」

「またおばあちゃんたら。そんな悠長なこと言ってるよ、いざそうなった時に困るよ？」

「と言われてもねえ。そういう話が出たっただけでしょう？ 今日明日で決まるようなもんじゃあないし、だいたい、具体的にどこをどうつてのが、まだなあんにも無いって話じゃないか」

「らしいけどさあ……。でも分かんないわよお？ 裏で誰が何をしてるかなんて分かったもんじゃなしさ。それに、政治家とかおっきな組織とか企業とかが絡んでたら、それこそ明日の朝には決定事項にされてるかもしれないじゃない」

何の話をしてるのか分からないけど、なんとなく、それテレビドラマの見過ぎ、と心の中で呟いていた。

妙に真剣味のない検討会の末、とりあえず近くの公園に行こうという結論を出した私たちは、おばあちゃんとおじいちゃんに手を振ってお店を後にした。

個人的には、おばあちゃんたちが何の話をしていたのかとちよつと興味があったので、立ち去ることに後ろ髪を引かれる思いが少しだけあり、私の耳は、瞬く間に遠ざかっていく会話が完全に聞こえなくなるまで、おおきばんに向けられていた。

そしてついに聞き取れなくなり、耳に届くのは自分たちの足音だけとなったとき、あれ？と思い、お店を離れてから今まで、誰も喋っていないことに気が付いた。どうやら、みんなも気になっていたらしい。

「あれって、どんな話だったんだろうね」

いくらか独り言のような口調で璃香ちゃんがそう言うと、私も含

めて「あ、やっぱり気になってた？」といった、同意の言葉が口々に出て、それぞれの勝手な推論が飛び交いだした。それはまるで、息を潜めて獲物を狙っていたライオンの群れが、静かな号令のもと訪れたチャンスに飛びつき、見事しとめてその獲物にかぶりつくようになった。

四頭の肉食獣たちのそれは公園に着いても熱を帯びたまま、というか時間的な意味でも始まったばかりで、示し合わせたように何の迷いもなく公園のベンチに腰を下ろし、パンを食べながら続けられ、食べ終わってもまだ続いていた。

推論は主に、政治や経済に関する最近の大きなニュースをもとにしたもの。ただし、それらのニュースに対する知識は悲しいかなとても浅く、「で、そうなるかどうか？」といった指摘が入ると大抵「そこまでは知らないよ」と尻切れトンボになり、徐々に身近で小さなニュースが挙げられて、最後に出てきたのは、まさに今日この日に行われる、『光坂納涼祭』について。

これについては、四人には温度差があり、もしも祭がなくなったらという話になったとき、一番寂しいと感じたのは私だった。

そしてこのお喋りは、途中から趣旨が大きく逸れて、いつものような長話になると思いきや、意外なことに開始わずか一時間で一区切りついた。ただでさえプール帰りで火照り気味だった身体が、真夏のお昼時、日除けになるものが一切ない公園のベンチに座り、直射日光を浴び続けていたことで更に火照り、「場所、変えない？」という提案が出たのだ。

耐えられないほどの火照りではなかったけど、気が付けばみんな汗だくだったし、別に我慢大会をしているわけじゃないから、そうだなと立ち上がり、お尻を軽くはたいて場所を移した。

向かったのは、私の家。四人の中で一番近いというのが最大の理由。これに私もすぐに同意した。反対する理由もなかったし、早いところ涼みたかったし。

途中のコンビニで飲み物とお菓子を買って、我が家に到着。

「ただいまあ」と先陣を切って玄関の扉をガラガラと開けると、お母さんが居間から「お帰りなさい」と出迎えに出てきた。そして汗だくの私たちの姿を見た途端、あらまあと言わんばかりに口を開け、続いて、にこやかに「いらつしゃい。それじゃ気持ち悪いでしょ。」

お風呂は沸いてないけど、シャワーだけでも浴びたら？」と言った。

それ、ナイスアイデア！

私たちは、さっそくそろそろとお風呂場へと向かう。

その途中、居間の前を通ると、そこにはお父さんがいて、「ただいま」と声をかけた私の姿を見た瞬間、なんだか失礼な顔をしてきた。こういう時のお父さんは、まず間違いなく失礼なことを言うてくる。

「なんだ、その格好でプールに入ってきたのか？」

とか、そんなところを言いたそうな感じ。

それはそれで、いつものことと流せるのだけど、友達もいることだし、ここは相手にしないでさっさと通り過ぎた方が良さそうだと瞬間的に思った。けど、そのために居間にいるお客様までも無視するなんて私には出来ない。そのお客様が、私の大好きな人の一人であれば尚更のこと。

「いらつしゃい、ことみちゃん」

「こんにちはなの、汐ちゃん」

ことみちゃんが日本に帰ってきて三週間近く経つ。相も変わらず忙しい中、今日この町、そしてこの家に来たのは、お祭りのとあるイベントに参加するため。もともと参加予定などなかったのだけど、ことみちゃんお帰りなさいパーティーの時にそのイベントの話が出たところ、ことみちゃんが「私も、出来たら参加したいの」とぼつり。そこに智びょんが「難しいとは思うけど、聞いてみましょうか？」と申し出て、途中なんやかんやあり、ここに至っている。オビーさんたちもいれば私的にも更に盛り上がるころだったけど、既に数日前に帰国している。オビーさんの仕事の都合で予定通り帰らざるを得なかったそうで、子供たちと同様にオビーさんもひどく残

念がっていた。

イベントの様子は私がビデオカメラに撮って、それをディスクにして送ることになっていて、それが唯一の救いかも知れない。でもそれはつまり、カメラマンとなる私の責任は重大ということだ。

うう、なんかプレッシャーを感じてしまう。

後ろで友達が足を止めていることもあったから、ことみちゃんとひとまずの挨拶だけにして、私は再びお風呂場へと歩き出した。友達も、お父さんとことみちゃんにちよつと浮き足立ってるっぽい挨拶をしながら私に続いて脱衣室に入った。そして戸を閉めると、「やっぱかっこいいよねー」とか「私初めて見たー、マジでうちのお父さんと取っ替えて欲しー」などといった、お父さんへの感想を経てから、ジャンケンで勝った人から順番に軽く汗を流していくことになった。

そのルールは、二番目のはずのこよりちゃんが、一番目である私がシャワーを浴びている最中に乱入してきたことよって破られ、早々に何でもありのハチャメチャ状態になっていた。そんな私たちに、バスタオルと私のＴシャツ四枚を持ってきたお母さんは「楽しいのは良いことだけど、ほどほどにね」と苦笑していた。

ステージは燃えているか その2

午後四時。

朱鷺色の生地白い花をたくさん咲かせている浴衣に着替えた私は、水色の生地数匹の鯉がゆつたりと泳いでいる浴衣を着たお母さんと、地味でも派手でもないTシャツにGパンというまったく協調性のない出で立ちのお父さんと、三人でお祭りの会場へと向かった。

私がまだ小さかった頃は、私の要望でお父さんも浴衣を着てくれていたのだけど、いつの頃からか着なくなり、私も懇願しなくなり、そして今に至っている。どうしても着て欲しい、なんてこの年になって思うはずもないけど、少しは空気を読もうよとは言いたくなる。ちなみに、友達とはすでに解散となっていて、それぞれ自分の家に帰ったり、別の友達のところにいる。ことみちゃんたちも、イベントに備えて出立していた。

『光坂納涼祭』へと続く道には、楽しげな人たちの姿がいくつもあり、会場に近づくにつれて、その数は次第に増していく。そしてその数に比例して、私のテンションも自然と上がっていった。

何から攻略していこうかと相談しながら歩いている子供たち。

缶ビールを片手にお喋りしながら歩いている大人たち。

その他諸々。

それらの中でやっぱり目が向いてしまうのは、いちゃいちゃしながら歩いている若いカップルもそうだけど、やっぱり小さい子供とその両親との風景。五歳ぐらいの子供がお母さんとお父さんの手を引っ張りながら先を急ごうとしていたり、着いたらあれ買いたいこれ買いたいと早速おねだりをしていたり、はしゃぐ幼い子供たちに困った様子の母親を、その父親が傍観していたり。そんな様子を見ていると、微笑ましくて心がほっこり温かくなるし、懐かしい気持ちになる。

私も散々、同じことをしてきたからね。

そんな感傷的な気持ちで、目の前を歩いている親子を眺めていると、横から不意にお父さんの声が飛んできた。

「なんだ、お前もああして欲しいのか？」

「へ？」

まさか、目の前でお父さんに肩車してもらっている小さな女の子と同じことをして欲しい、なんてこの年で思うわけない。さてどう切り返そうかと逡巡して、こう答えた。

「お父さんがそうしたいんでしょう？」

「ああ」と笑顔で即答。むう、そうきたか。

「そんなに自分の娘にセクハラしたいの？」

「馬鹿だなあ、こういうのは、親子のスキンシップって言うんだ。

さあ、遠慮なんてしないで」「爽やかにそう言ってくるお父さんに、私は「お母さん助けて！ お父さんが私に変なことしようとするうっ！」と、お母さんの陰に隠れた。

「こらこら、人聞きの悪い言い方するな」

「お父さんの変態っ。こつち来ないでっ」

「へ！？ へん……たい……！？」

まさに雷に打たれたような顔で呟くお父さん。そしてがっくりと項垂れ、虚ろな声でぼそぼそと呟きだした。ちらりとその横顔を見ると、不気味な笑顔を浮かべている。

「言われちまった……、娘に変態って、言われちまったよ……、娘を持った父親って、結局、こんなもんなんだなあ……、なあ、父さん……、俺さあ……、俺さあ……」

うーん、状況が許してくればこのまま放って、傍観していてもいいんだけど、見ず知らずの人たちからの変な視線が私にも向けられたままでは、ちょっときついなあ。などと考えている間に、お母さんがお父さんに救いの手を差し伸べた。

「パパ、大丈夫ですよ。しおちゃんもパパのこと、大好きですから」「でも、俺のこと、変態って……」

「それでもしおちゃんは、パパのこと大好きですから。だから安心してください」

ちよつと待った。お母さん、それじゃあお父さんが変態さんだつて認めることになるんだけど。

「そう、なのか？」

う、なんか悲しそうな目でこつち見てる。ていうか、そろそろ終わりにしないと、周囲の視線がちよつと痛い。

「変態じゃないお父さんは、ね」

てつきり、自信に満ちた顔で元気に「なんだ、なら大丈夫だ」とか言ってくるかと思いきや、視線を地面に落とすと深い深いため息を一つついて、「やつぱり、俺のこと嫌いなのか……」と呟いた。

ここで認めないでよ。話が終わらないでしょうが。まさかと思いたいけど、まだまだ引つ張る気なの？ 仕方ない、負けを認めるみたいでちよつと悔しい気もするけど。

「もういいから、そろそろ終わりにしようよ。みんな見てるんだから」

「見たいヤツは、見ればいいさ……、この、哀れな父親の末路を……」

「だあかあらあつ！」

杏先生か智びよんだつたら、悪のりを止めようとしなないお父さんに回し蹴りでもして、言うことを聞かせるのだろうけど。

あ、もう一人いた。ジャーマンスープレックスってプロレス技で言うことを聞かせる人が。

と思つた瞬間、まさにその人の声が後ろから聞こえてきた。しかも、語尾にはつきりと音符マークが見えるほど楽しげな声色で。

「んじゃあ、私が更に哀れな末路を提供してあげようか」

足を止めて振り返ると、相楽美佐枝さんがいた。それと、美佐枝さんに抱っこしてもらつてる猫さんも。

「こんばんはです、美佐枝さん」そう挨拶するお母さんに続いて、私もご挨拶。そしてお父さんかというと、さすがに身の危険を察知

したみたいで、元気な声で「ちーっす」と挨拶した。

「なあにが『ちーっす』よ。たくこいつは……。渚さんも汐ちゃんも大変ねえ、毎日こんなの相手しなきゃなんないなんて」

「パパの悪ふざけは、昔っからですから」

「そりゃあまあ、そうだけどさあ……」美佐枝さんはため息混じりにそう言ってお父さんをちらりと見る。そして一言。

「はあ……、二人が不憫だわ……」

「……本気で不憫そうに言わんでください」

「あら、私は本気で不憫に思ってるんだけど？」

「……」

「んで？ どんな末路がいい？ とりあえず、もうこれ以上ないっでぐらい哀れな方が良くいわよね」

「なんでそんな楽しそうなんスか。てか、良いわけないでしょ」

「何言ってるの、中途半端が一番良くないのよ？」

「過激すぎる方がよっぽど良くない！」

お父さんはそう言うと、「渚、汐、このお 姉さんに殺される

！」と必死の目で訴えてきた。それはいいけど、その間はわざと掘ったの？

「もう恥ずかしい真似しないなら、助けてあげてもいいよ？」と、仕方ないといった仕草で応える私。

「しない、もうしないっ」

「本当だよ？」

「本当だ！」

「だ、そうなんで」

「汐ちゃんにそう言われたらねえ。引っ掛かるところもあつたけど、勘弁してやるか。たく、これじゃどっちか親でどっちが子供か分かんないわね」

こうしてこの一幕は終わり、私たちは、一緒にお祭りの会場へと歩き出した。

改めて思ったけど、周囲の視線をものもしない陽平おじちゃん

とか、色々な意味で凄いなあ。

騒がしい一時が過ぎると、一転して穏やかな空気が流れる。私はお母さんと並んで歩き、その前をお父さんと美佐枝さんがお喋りをしながら歩いている。そして私の腕の中には、美佐枝さんの猫さんがいた。気持ちよさそうに目を閉じて丸まっているその姿は破壊力抜群で、あまりの愛らしさに、どうしたってにへらつと顔を緩めてしまう。何度こうして抱こうとも。

初めてこの猫さんを抱っこしたのはもうずっと昔で、私の記憶に残っていないほど幼い頃。だから、気が付いたら当たり前のように抱っこしていたというのが私の感覚。お母さんたちの話によると、猫さんを抱く美佐枝さんの姿に、私も抱っこしたいとせがみ、まだ加減が分からないだろうからと少し心配気味のお父さんに、美佐枝さんが「大丈夫さ。岡崎の子なんだから」と言っつて、私に抱かせてくれたらしい。そのとき猫さんはとても大人しくて、嫌がる素振りは何一つなかったそうだ。

余談だけど、この猫さんで変な自信を持ってしまった幼い私は、目に付いた見ず知らずの猫さんを半ば無理矢理に抱こうとして、思いつ切り嫌がられて、しかも見事に引つ搔かれ、しばらく盛大に泣き続けたらしい。しかも、懲りずに何度か挑戦していたそうで、そんなめげなかった自分を褒めていいのか呆れていいのか、正直、今でも迷うところだったりする。

そしてこの猫さんのことでも一つ。

正確な年齢は美佐枝さんも知らないとのことだけど、少なくとも二〇歳ぐらいにはなっているらしい。人間に例えれば九〇歳ぐらいおじいちゃんもおじいちゃんなのだけど、全然そんな雰囲気がないところが凄いというか何というか。

たまに、この子は本当に猫なんだろうか、ひよつとしたら、見た目は猫だけど全く別の動物なんじゃないのだろうか、しかも寿命がすごく長くて、などと思いい、お父さんにそのことを言ったことがある。

そしたらお父さんは、「美佐枝さんの側にずっと居たいって思いが、あいつをそうさせてるんだよ。だから、不思議なことなんてないのさ」と説明してくれた。普通だったら、この説明に納得する方がおかしいのかもしれないけど、私はすっかり納得してしまった。だって、強い願いや思いが、ときに信じられない奇跡を生み出すって、本当に思えるから。

そんなことを思い出していたら、腕の中の猫さんに「君は、本当に好きなんだね」と口にしていた。それを聞いたお母さんが「よっぽど気持ちいいんですね」と微笑んだ。

「え？ あ、そういう意味じゃなくて」

「違うの？ それじゃあ、しおちゃんのことか？」

「じゃなくて」

「えと、それじゃあ……」お母さん、なんか悩み始めてる。

「美佐枝さんのことが」

「美佐枝さん？ それはそうだと、私も思うけど……」

当たり前だけど、私の心の中での話の流れを知る由もないお母さんは、それ以上の言葉を見つけれない様子。その代わりというわけじゃないけど、前を歩く美佐枝さんが振り返って、「私がどうかした？」と話に加わり、その隣のお父さんもまた振り返ってきた。

「いえ、猫さん、美佐枝さんのことが好きなんだなって、なんとなくそう思ってる」

「そりゃ、まあ……。でも、どうして急に？」

「なんとなくです。ほんと」

「そう……？」

美佐枝さんは怪訝な顔をしていたけど、まあいいかと前を向いたお父さんもすぐに前を向いたけど、そのとき一瞬見せた横顔は、私が何を考えてそう言ったのか分かったっぽいものだった。そしてお父さんと美佐枝さんは、再びお喋りを始めた。最近の寮生は根性というものがまったく足りないとか、寮生活に根性があるのかとか、タップするのが早すぎるのよ、とか。

学生寮で、格闘技の大会でもしてるのかな。

お父さんから聞いた昔の話を思い出すと、そんな馬鹿なと笑いながら切って捨てられない。まあ、お父さんと陽平おじちゃんの話がどこまで事実かという問題は拭えないし、ここは一つ、美佐枝さんと一緒に寮の管理人室で暮らす猫さんに聞いてみようかしらと、胸元の猫さんに視線を落とす。もともと冗談のつもりで、加えて、どうせスヤスヤと目を閉じているのだろうと思っていたので、目を開けていたことにちよっただけ驚いてしまった。

「なんだ、起きてたんだ」

私は独り言のように、猫さんに言った。猫さんは耳をちょこんと一度動かしただけで、その目はじっと空に向けられている。その揺るがない眼差しに、「何か見えるの？」と私も空を見上げてみた。けど、これといって興味を引くようなものは何一つない。

「しおちゃん、前を向かないと転んじゃいますよ」

「うん……」と生返事ひとつ、目は空に向けたまま。そしていったん猫さんに視線を戻して、「ねえ、何を見てるの？」と質問。けれど猫さんは黙ったまま、じっと空を見据えている。もう一度、猫さんの視線を追うように空を見上げる。

広い空に、雲がところどころ浮いているだけで、これといって目に付くものはなく、それとはまるで対照的に、お祭りの会場がもうすぐそこだということを盛大に告げようとする賑やかな音が、乱雑に、そして軽快に踊り出していた。

ステージは燃えているか その3

入り口の向こうに見えるお祭りの風景に、美佐枝さんは「四度目ともなると、さすがに見慣れてくるもんだねえ」と、どこか感慨深げに漏らした。私たちの頭上には今、『光坂納涼祭』と大きく書かれた看板が掲げられている。

夏祭りの会場がこの広い自然公園に移ったのが四年前。そしてこの自然公園ができたのがその前の年。場所が変われば風景も変わり、出し物も変わる、というか規模が大きくなつたぶん露店の数と種類が増え、それまでなかったイベントも加えられた。

その最たるものが、自然公園の中にある多目的広場に特設されたステージでのイベント。八歳ぐらいまでの子供とその親を対象とした第一部と、中高生以上を対象にした第二部に別れていて、それぞれ二時間ずつ行われる。子供部門と一般部門と言った方が分かりやすいかな。

ちなみにこの時間だと、第二部の準備をしているところ。

この変わりように、最初は戸惑う人が多かつたらしい。私も昔の風景と比べたりしていた。そして結果は上々の評判だった。評判が良ければ評判を呼び、町の外の人も呼ぶ。お祭りに来る人の数は年々増えているようだ。昔の方が、と明け透けに文句を言ったり辛辣に批判する人も中にはいるけど、それは仕方のないこと。変化を受け入れられない人が存在するのは自然なことだから。

「さて、美佐枝さんはこれからどうします？」

丸めたパンフレットでぼんぼんと自分の肩を叩くお父さんが、美佐枝さんに尋ねた。

「とりあえずこの子と、あいつらの陣中見舞い。正直、あんま行きたくないんだけどね」

美佐枝さんはそう言いながら、私の腕の中の猫さんを抱き上げる。猫さんの温もりが途端に消えて、ちょっとだけ寂しい気持ちになっ

てしまった。

「ありがとね、汐ちゃん」

「いいえ」

名残惜しさから、美佐枝さんの腕の中に居場所を移した猫さんの頭をそつと撫でる。猫さんはそれに答えるように目を細めて喉を鳴らした。

「あなたたちは？」

「俺たちも、ことみたちの所に」

私たちは、意地でも足止めしてやると言わんばかりにずらりと立ち並んでいる露店の間を通り、特設ステージの裏手にあるプレハブの控え室へと向かった。これでもかと思えるいい匂いを振り切つては、間髪入れず別の匂いが私を捕らえようとする。気を緩めればふらりと吸い込まれてしまいそうなこの誘惑。

まあ、一つぐらい買つても誰も何も言わないのだからうけど、今一つでも買つたら、その瞬間わたしの中のブレーキがぼきりと折れて、二つめ三つめと暴走してしまいそうな予感がしていたので、ぐつと堪える。

言つておくけど、私、食いしん坊つてわけじゃないから。これはお祭りの魔力のせいだからね。

そんな激しい攻防をくぐり抜け、どうにか特設ステージのある広場に辿り着いた。周囲をぐるりと背の高い木々に囲まれた広場に、たくさんパイプ椅子が整然と並べられていて、それだけでもなかなか壮観なだけけど、その向こうにどんと構えるステージが、さらに壮観なものにしている。電飾や照明、左右に積み重ねられた大きなスピーカーなど、お祭りのイベントとしてではなく、メジャーなアーティストのミニライブイベントを今ここでやっても遜色ないと言つたらさすがに言い過ぎだけど、とにかく、一田舎町のイベント会場で終わらせてしまうのはもったいないと思つてしまうほど。

第二部開始まで一時間近くあるということで空席の目出づ観客席の脇を、二度ほど知り合いにつかまりつつとおり抜け、司会者っぽ

い人とスタッフ数人が最終の打ち合わせをしているステージ脇をとおおり、その裏手へとやってきた私たちは、二棟あるうちの片方、『出場者控え』と紙が貼られているプレハブへと向かう。と、入り口の前に立っていたスタッフの人が、こちらを見るなり「美佐枝さん！」と顔を綻ばせた。

その人は、三年前まで光坂高校男子寮寮生だったそうので、美佐枝さんも懐かしそうに「武原じゃないの」と喜んでいた。

そんな二人は早々に昔話に花を咲かせ始め、私たちは武原さんの了承を得て、二人と猫さんを残し控え室に入った。殺風景な部屋にはたくさんの人がいて、私と同じ中学生から、それよりもずっと大人の人までが、パイプ椅子に腰掛けてお喋りをしていたり、最後の練習をしていたり、全身白タイツを着た男の子の集団が、「いいか俺たちには女神がついている、だから絶対成功する！」と自分たちを鼓舞していたりしている。しかしながら、ことみちゃんたちの姿はこの中にはなく、更衣室として使われている二階に、私とお母さんで上がった。

残念ながら女子更衣室にも姿はなく、仕方ないのでプレハブの外に出る。

「あら、随分と早かったわね」と、入り口で談笑中の美佐枝さん。

「ここにはいらっしやらなかったのよ」

最後にプレハブから出てきたお母さんがそう答えると、美佐枝さんの談笑相手の武原さんが、どなかたお探しですかと尋ねてきた。

「ことみ・ラインバツクさんと、仁科りえさんを」

「ああ、でしたら隣のプレハブにいらっしやると思いますが」

そう言われて隣のプレハブを見る。入り口には『事務局』と張り紙されていて、周囲ではスタッフの腕章をつけた人たちが忙しげに自分たちの仕事をしている。ということとは、ことみちゃんたちは今あそこで打ち合わせでもしているのかな？

武原さんは、案内しますよと言って、私たちを連れて隣のプレハブに向かい、美佐枝さんは控え室の中に入っていった。その際、背

中越しにこんな声が聞こえてきた。

「皆の者！ 女神様のご降臨じゃあ！」

「うおおおっ！」

「こんな場所でなに恥ずかしいこと言ってるのよアンタらはーっ！」
そっか。あの白タイツの人たちが。

思わず、クスリと苦笑してしまった。

事務局のプレハブに入ると、外ほどの慌ただしさはなく、ちょっと意外だった。けどそれ以上に意外だったのが、奥のソファにスーツ姿の智びよんが座っていたことだった。そしてその智びよんも、私たちの登場にちょっと驚いていた。ただし、ここに来た目的はすぐに理解していた。

「こんにちはです。智代さん」

「こんにちは、智ちゃん」

「こんにちは」

「智代、お前もスタッフだったのか？」

「いや。陣中見舞いみたいなものだ」

そういえば、スタッフの中に、智びよんが生徒会長やっているときに生徒会役員をやった人が何人かいるって言ってたっけ。

「で、岡崎たちもだろ？ ことみさんたちなら二階の一番奥の部屋にいる。いつもみたいに馬鹿騒ぎして、他の人たちに迷惑かけるなよ」

「んなことするわけないだろ」

「どうだか」

「大丈夫だよ智ちゃん。恥ずかしい真似しないって、私と約束したから」

「ほう。なら、いくら岡崎でも自重しないわけにはいかないな」

「ずいぶんと引つ掛かる言い方だな」

「なんだ。もつとストレートに言って欲しいのか？」

「いや、遠慮しておく」

武原さんとはそこで別れ、私たちは二階に上がった。智びよんの

言ったとおり一番奥の部屋の薄いドアをノックする。「はい」と返事が返ってきて、ドアがかちやりと開いた。

「あ、岡崎さん」

「よお。また会ったな」

「そうですね」

杉坂さんがクスリと笑いながら答えた。また会ったも何も、数時間前まで我が家にいたでしょ。

「さ、どうぞ」と、今回出演者としてではなく、マネージャーとして参加している杉坂さんに招き入れられると、ことみちゃんが「みんな、来てくれて嬉しいの」と笑顔を咲かせ、仁科さんも「先ほどはどうも」と笑顔で迎えてくれた。そして、同じく数時間前まで我が家でキーボードで演奏していた叶さんも。

実はこの日、我が家でちよつとした演奏会があった。間近で聞かせてもらった私も友達も、それはもう感動ものだった。

何故そういうことになったかを順に説明すると、出来たらイベントに参加したいということとみちゃんの希望を叶えるべく、智びよんは運営委員の人に相談。小さい子供相手の第一部にはさすがに出る幕はなく、第二部のパフォーマンス大会にと。しかし、参加申込の締め切りはとうに過ぎ、しかも予選会も終わっていて、断念せざるを得なくなった。お父さんは、こういう時こそその国家権力だと冗談を言っていたけど、智びよんがそんなことするはずもない。

そこに、まさに救世主が現れた。

たまたまこの話を耳にした仁科さんが、もし良かったら、スペシヤルゲストとして一緒に演奏しませんかと言ってくれたのだ。さすがに最初から最後までというのは無理だけど、一曲ぐらいなら問題ない。

仁科さんが出るのは、一般参加のパフォーマンス大会の後のヴァイオリンとピアノによる生演奏会。しかも運営委員に依頼されたの参加。これがパフォーマンス大会だったら、予選会で落選したけっこうな数の人たちのことを考えれば、やっぱり参加することは出来

なかつただろう。

運営委員としては、最初は難しい顔をしていたらしいけど、仁科さんの強い要望に、当初の予定時間内に終わるのならとOKしてくれた。

こうしてことみちゃんの参加が決まり、光坂高校の音楽室を借りて二度ほど練習。そして今日、最後のチェックをする場所として適しているという理由で我が家が集場所に指定されて、叶さんがピアノの代わりにキーボードを持ってきて、気が付けば本番関係なしの演奏会に。

我が家のどこが適していたかということ、まず一軒家であるということ。そして会場に近いということの二点だそう。

そうそう。お父さんの話だと、昔のことみちゃんの演奏は、それはもう大変だったらしい。ある意味殺人兵器だとも言ってた。私の記憶にあることみちゃんの演奏はとっても上手で、とても想像できない。

それと、仁科さんは一時期ヴァイオリニストの道を完全に諦めていたのだけど、学園祭でのお母さんたちのお芝居を観て以来、例え叶わなくてもいいから、自分ももう一度挑戦してみようという気持ちになり、今ではヴァイオリニストとしてその世界では知られるようになってきていた。合唱を続ける傍ら、握力を取り戻すためのリハビリから始まり、最初の数年はその成果を感じることが出来ず、杉坂さんは何度も辞めさせようと思ったそう。また辛い思いをするのではないかと心配して。

そして挫折することなく積み重ねられていった日々は、やがて実を結び、以前にも増して素晴らしい演奏が出来るようになる。周囲から徐々に認められ、やがて音楽界でも認められるようになり、今に至っている。

なんていうか、かつこいいな。加えて美人だし。そのうち絶対に超有名人になるよ。

「私の顔に、何かついてる？」

おっと。

「いえ、その、美人だなあって」

「そんなことないですよ」

仁科さんはにこりと笑みを浮かべてあっさり否定。でもその笑みがまた。だもんで、力説するように「そんなことあります！」と主張。しかしながらこれも大人の対応でいなされてしまった。

「それでは、そういうことにおきましようか」

納得は出来ないけど、これ以上言い張るのは本当に迷惑になりそうなので、渋々ながら「うう、じゃあそういうことで……」と口をすぼめた。すると、叶さんがにしと笑って、「私はどう?」と聞いてきた。

私は迷うことなく、「もちろん美人です」ときっぱり答える。そのとおり美人だから。すると叶さんは、お父さんに「ほんと、出来た娘さんですねえ」と笑った。とても陽気な性格の叶さん。なんとなく、お父さんと馬が合いそう。事実、お父さんと叶さんとのやり取りに違和感を感じない。

むう、お父さんの周りにまた一人美人さんが。ひよっとして、お父さんってプレイボーイ? ボーイって言うには無理があるけど。お母さん、よく平気でいられるなあ。

おっと、大事なこと忘れるところだった。

私はポーチから携帯電話を取りだし、ことみちゃんに近づいてカメラを向ける。

「うん?」

「ただいま、出演前の控え室にきています。ことみちゃん、今の心境は?」

「え? あの、えと」

突然のことにとことみちゃんがまごついていっていると、お父さんの「何やってんだお前?」というツッコミが入った。

「見れば分かるでしょ。インタビュ―」

「インタビュ―って、なことより、ことみが困ってるだろ」

「そうよ、しおちゃん」

お母さんからも入れられてしまった。でも諦めるわけにはいかない。オビーさんたちの為に。仕方なくインタビューを中断し、二人に事情を説明。すると、二人はなるほど納得してくれて、ことみちゃんも「ちょっと恥ずかしいけど、がんばるの」と了承してくれた。

そしてインタビューが再開され、もう一度今の心境を聞いた。するとことみちゃんは、日本語ではなく英語でコメントした。考えてみれば、家族に向けてのコメントなのだから当然なだけ。悲しいことに、ことみちゃんの言っていることが私には分からず、インタビューとして困ってしまうと、ことみちゃんが日本語に訳してくれた。ついでに周りから笑い声上がり、お父さんの「しっかりしろインタビュー」といった小声での野次までついてきた。

むう、こんなことでめげる私じゃないもん。

そして、どうしてだか、ことみちゃんではなく私が温かい目で見られる中、インタビューはとても和やかな雰囲気で行われた。

ステージは燃えているか その4

「以上、ことみちゃんでした」という私の言葉でインタビューが終わると、拍手と歓声が起こった。本来、ことみちゃんだけに向けられるものなのだけど、私にも向けられているような気がする。ん、気のせい気のせい。

「ちょっとだけ緊張しちゃったの。でも、とっても楽しかった」

ことみちゃんがふわりと微笑むと、聞いてたこっちも楽しかったという声が続いた。それは茶化した意味ではなく、ことみちゃんのコメントが良かったという意味で。何と言っても、家族へ宛てた言葉の締めくくり。気持ちのこもった、家族全員への "I love you." は、なんかジンときた。

控え室にお邪魔して早二十分以上。インタビューの終了で一区切りつき、私たちは引き上げることにした。

「それではみなさん、演奏がんばってくださいね」お母さんがそう言うと、頼もしい言葉が返ってきた。

「期待してください。汐ちゃんのおかげで、テンションもこのとおりばっちりですから」これは叶さん。なぜに私？

仁科さんも「そうですね。いい具合にリラックス出来ましたし」と笑顔で答えて、ことみちゃんも「家族のためにも、絶対に良い演奏するの」と気合い十分といった感じ。杉坂さんも、「ありがとうございます」とぺこりとお辞儀していた。

控え室を出た私たちは一階に降りた。智びよんの姿はなく、お父さんがそのことを口にする、少し前に出たとスタッフの人が教えてくれた。プレハブを出て、隣のプレハブの控え室を覗き、美佐枝さんがいないことを確認すると、三人分の席を確保すべく観客席に向かう。

私としては、ことみちゃんを撮すことを考えると、ステージに近ければ近い方が好ましい。そのぶん撮影時の障害が減るから。そし

て、そういう意味で特等席とも言える最前列中央に、美佐枝さんの姿があった。その周囲に陣取っているのは、たぶん男子寮関係の人だろう。美佐枝さんを中心に盛り上がっている。

ステージに近い列で三つ並んだ空席は見当たらず、ぽつりと一つ空いている席がちらほらと点在しているだけ。こんなことなら先に確保しておけば良かったかなと少し後悔した。まあでも、後方にはまだまだ空席があり、三人バラバラになることはないし、例え前の方に座れたとしても、目の前に背の高い人に座られてしまったり、ことみちゃんたちの演奏中に、周りの人たちががやがやと音を立てられたりしたら、きれいに記録するのは難しくなる。

つまり考えようによっては、どこに座ろうと確実に撮影できるとは限らないわけで、確率の問題になってしまうということ。なら、少々後ろの方に座ったからといってがくりと落胆するほどのものでもない。

ということですのですぐに気を取り直し、席を探していると、芳野さんと奥さんの公子さんを発見。二人が座っている数列前にも三つ並んだ空席はあったけど、たかだか数列、撮影に大きく影響するわけではないしと、二人のすぐ後ろの空席に座ることに決定。ここでいったん、お留守番担当のお母さんにポーチを預け、お母さんは席へ、私とお父さんは露店へ足を向けた。

第二部開始まで三〇分以上ある。何を買つか目星つけているから、どれにしようか迷いながら露店を渡り歩くこともなく、食べ物と飲み物を買う時間としては余裕。四方八方から漂う誘惑の香りと再び対峙しなければならぬという問題は、まあ大丈夫でしょう。何と言っても、さつきと違って指をくわえて見るだけじゃないから。

戦利品が約束されていれば、気合いだつて入ります。

「おーっ！」

「なに気合い入れてんだ」

「美味しい食べ物の前にした女の子は、誰だつて自然と気合いが入るものなの」

「自分がそうだからって、周りの女の子を巻き添えにするのはどうかと思うぞ？　まあそれはともかく、気合い入れるのは良いが、早すぎるんじゃないのか？　本番は第二部の後だろ？」

確かにそのとおり。第二部が終わったあと、ことみちゃんも一緒に露店巡りをする事になっていて、そこで思いつ切り食い倒れをしようということになっている。でも。

「それはそれ。これはこれ」

「たく、汐のこの食い意地は、誰から受け継いだんだか」

私の食い意地云についてはさておき、「お父さん！」と指をびしりと向けて即答。

「俺はお前ほど、食い物に執着心はないつもりだが？」

う、否定できないところが悔しい。かといって、お母さんというわけでもない。とすると、アッキーか早苗さん？　直幸おじいちゃんという線も。意外なところで志乃おばあちゃんとか。

などと考え込むうちに、最初の目標地点となる焼きそばやさんの前に来た。香ばしい匂いと音を前に、考えることをすぱっと捨てて、「焼きそば二つ！」と力を入れて注文した。

その後、次の標的、もといたこ焼きの露店に移動。その途中、イ力焼きのお店の前でお父さんの足が止まり、一つお買い上げ。そしてたこ焼き屋さんの前に到着。作り置きは売れてしまい、しばらくお店の前で待つ。

いつも思うけど、たこ焼きを作るときの、くるりと回転させてきれいな球形にする技には感心してしまい、ついつい見入ってしまう。と、唐突にお父さんが「もしかしたら」と私に話しかけた。たこ焼きが出来上がっていくその光景を食い入るように見つめていた私は、「ん？」と振り返る。

「渚かもな」

「何が？」

「お前のその、お祭りのときの気合いの原因」

私のお祭りに対するテンションの高さは恥ずかしながら認めるけ

ど、それがお母さんから引き継いだものと思えるはずもない。お祭りにはしゃぐお母さんの姿なんて、一度も見たことないもん。

「それはないでしょ」

「いや、そうでもないと思うぞ？」

またお父さんの冗談が始まったのかなと一瞬だけ思った。けれど、冗談を言っている顔には見えないし、ましてや私をからかっているようにも見えない。優しく、真っ直ぐな表情をしている。

「でも」

「お前が叶えているからなのかもしれないからな。渚の、子供の頃の夢を」

お母さんの、子供の頃の？

え〜と、それはつまり……。

お母さんは、私を産んでからは体調を崩すことがほとんどなくなっただけ、それ以前はよく体調を崩して、長いときは数ヶ月も続いたそう。だから友達と遊ぶこともあまりなく、友達そのものもあまり作れなかった。

そして、お祭りを楽しむことも。

しかもお母さんは、自分からお祭りに行きたいとは言わなかったらしい。体調に問題なくても。きつと、アッキーと早苗さんに迷惑がかかると考えてのことだろうとお父さんは言っていた。私もそう思う。お母さんのことだから。

そしてお母さんは、お祭りへの期待や夢を、心の奥に押し込み続けた。

そしてそのときの想いを、私が代わりに叶えていると。

私、お母さんの役に立ててるんだと。

「なるほど。お祭りに気合いが入るのは、子供の頃のお母さんの夢を叶えるため、ね。うん。そうだね。絶対そうだよ！」

なんか、すっごく嬉しくなった。嬉しくて嬉しくて、その嬉しさを爆発させたくて、思わず「さっすがお父さん！ いいこと言うー！」とお父さんの太い腕をバシンと力一杯叩いた。

「いつてえっ！」

「あ、ごめんごめん」お父さんの本気の叫びと、腕についた真っ赤な跡に、我に返る。そして、智びよんの感心した声が聞こえた。

「たまには良いこと言っじゃないか。岡崎」

「あ、智ちゃん！」

「汐ちゃん、お母さんの夢を叶えるのはいいけど、たこ焼きはいいの？」

「へ？」

その言葉に誘導されるように視線を露店に戻す。たこ焼きはすでに出来上がっていた。我に返っても嬉しさはまだまだ私の中に充満していたので、満面の笑みと大きな声で、「おじさん、たこ焼き二つ！」と注文した。お母さんの願いを叶えるべく。

おじさんは手際よくプラスチックパックにたこ焼きを詰め、たっぷりのソースを刷毛で塗り、青のりをまぶし、鰹節をぱらぱらと落とす。そしてパックは閉じられ、輪ゴムが掛けられ、最後に紅生姜の入った袋をパックと輪ゴムの間に挟む。それをもう一度して、「はい、たこ焼き二つ」と、たこ焼き用のプレートの前に置いた。

本日三つ目の戦利品。私は焼きそばの入ったビニール袋の中に入れた。その隣では、お父さんがお金を払っている。そこで、ふと思っ

た。お母さんの夢を叶えているのは、ある意味、お金を払っているお父さんなのでは？

むっ、とりあえず考えなかつたことにしよう。

「さて、あとは飲み物か。智代はイベント見ていくのか？」

「ああ。そのつもりだ。悠二さんと晴樹が来ているしな」

晴樹くん来てるんだ。これは是非とも会わねば。と思っていたところで、またも知り合いの声。所詮は田舎町のお祭りだから、知り合いとバタバタ遭遇するのは別段不思議なことではないのだけど。

「うーしおーっ」

変な節を付けてそう言ってきたのは、今日プールと一緒に遊んだ右藤こよりちゃん。ノースリーブのシャツにショートパンツ姿のこよりちゃんは、私の側に来るなり「謎が解けたぞ!」と言ってきた。「って言われても、何の謎?」

「おおきぱんのおばあちゃんたちの会話だよ!」

そう言えば、そんな話をしてたっけ。どうでもよくなってたから、すっかり忘れてた。

「それで、解けたって?」

「区画整理だ!」

「クカクセイリ? ああ、区画整理ね。……え?」

私の心は、しばらく大きく波打つこととなった。

そして今、打ち返されたさざ波の中で揺れていた。

ステージでは、厳しい予選を勝ち抜いた人たちが、一生懸命パフォーマンスを披露している。色々と趣向を凝らしてジャグリングをする人たち。コント風にアレンジしたコミカルな、そして華麗なラップダンスをする人たち。アコースティックギターを弾きながら、サラリーマンや主婦をテーマに替え歌を披露する人。何故かラジオ体操をBGMに、人間ピラミッドの限界に挑戦する人たち。どれも驚いたり笑ったりで、みんな素人のはずなのにと、そのレベルの高さに驚かされてばかり。

ただし芳野さんに関しては、替え歌のとき「ギターの弾き方がなっていない」と苛立たしげに貧乏揺すりをしていたけど。

そして、ステージに全身白タイツ集団が現れた。白タイツ集団と美佐枝さんのやり取りを、少し前に芳野さんと公子さんに話していたので、「あの子たちが、相楽さんの?」と公子さんに改めて質問された。

直接目で確認したわけじゃないから、「のはずです」と答えたのだけど、その直後、白タイツ集団がそれを証明してくれた。パフォ

「マンスを始める前に、「光坂高校男子寮寮生を代表して、相楽美佐枝さんに捧げます！」と声高らかに宣誓したからだ。

きつと美佐枝さん、最前列の席で凄いことになってるだろうなあ。凄すぎて想像できないほどに。お祭り会場に来る途中、本当は来たくなかったと言っていた意味が、今よく分かった。

でも、この光景が芳野さんには違つて見えていた模様。

「相楽は相変わらず寮生に慕われているようだな。これは、寮母見寄に尽きるというものだ。きつと、心から喜んでることだろう」「そう、かなあ」少し困つた笑顔で疑問の声を投げかける公子さん。なんとなく、公子さんの苦勞がちよつとだけ垣間見えたような気がしてしまつた。

なお、白タイツ集団のパフォーマンスは、寮則と時事ネタを掛け合わせたネタを、オチをつけて応援団風に声を張り上げるといふもの。

「ひとつつ！ 寮生たる者！つ」と先頭に立つリーダーが言うつと、後ろにずらりと並ぶ人たちが復唱。そしてリーダーがネタを言い、やはり後ろの人たちが復唱。しかも、ちよいちよいミニコントを挟みながら。

それがとても面白くて、私は大いに笑い、観客席も盛り上がった。そして盛り下がった人が確実に一人。というか頭を抱えているであろう人が。あの人たち、無事家に帰れるのかな。とちよつと心配になる。

白タイツ集団のパフォーマンスが終わると、拍手と歓声が沸き起こつた。私も盛大に拍手を送る。ところで、白タイツに何の意味があつたの？

パフォーマンス大会は順調に進行し、およそ一時間強、全出場者のパフォーマンスは終了した。このあとは和太鼓の演奏。その次にいよいよ仁科さんと叶さん、そしてことみちゃんの登場となる。それが終わるとパフォーマンスの審査結果が発表されて、第二部の幕が下りる。

ステージに和太鼓が次々と並べられる間、観客席は一息入れるざわめきで騒がしくなった。私も、「ふう」と一息つき、お父さんも一息つくと、前に座る芳野さんに冗談めいた声で「芳野さんも、来年出場してみたらどうですか?」と言った。するとお母さんが「それは素敵です」と笑顔で反応。お父さんの冗談本気はわりと分かりやすいんだけど、お母さんのそれって、すごく分かりづらいんだよね……。

一方公子さんは、「祐くんの場合、別の舞台の方が良さそうな気がしますけどね」と笑顔でもっともな反応。でも、あのステージでシユールなギャグを淡々と披露する芳野さんも見てみ……、たくないかも……。

そして当の本人はと言うと、顎に手を当てて真剣な表情で考え込み始めた。これにはお父さんも「あの、芳野さん?」冗談で言ったんですけど」と慌てて補足。それを聞いたお母さん。「え、冗談だったんですか?」

やっぱり本気で言ってたんだ……。

そんなことをしているうちに和太鼓の準備が終わり、演奏が始まった。威勢の良い掛け声とともにバチが一齐に振り下ろされ、太鼓の音が鳴り響いた。その大きくて力強い響きは、会場の大気をビリビリと震わせて、聞く人の耳を揺さぶり、耳だけでなく目も、肌もそして心臓も揺さぶった。巨大なエネルギーの固まりをぶつけられるような感覚に、私は思わず「おおお」と声を上げる。

大音量の和太鼓の音を聞くのはこれが最初というわけじゃないけど、ここまで圧倒的な迫力を持ったものは、初めてかもしれない。私の座っている場所でのうなのだから、もしかしたら猫さんは逃げ出しているかもしれない。なんせ、最前列だから。

太鼓の音は、ときに激しく、ときに軽快に、大気を駆けめぐる。太陽はそれから逃れるかのように、西の地平線にその姿のほとんどを隠し、替わりに、暗転した空できらめく星々が耳を傾けている。

そして子供たちは、呆然とした顔でステージを見つめたり、目と

耳をぎゅっと塞いだりしている。

私たちが今こうしているこの世界が、目の前でうねり狂う巨大な渦に巻き込まれ、その世界を、別の世界が天上から静かに眺めている。

結ばれた、異なる二つの世界。

そして世界は、掛け声とともにバチが中空でぴたりと止まると同時に、残り香のように残響音に覆われた。でもそれは本当に一瞬。まるで薙ぎ払われるかのように、わっと拍手が湧いた。私も拍手を送り、和太鼓の演奏が終わった。

さて、次はいよいよ。

太鼓が速やかにステージの端に移動されると、入れ替わって、漆黒のグランドピアノと椅子が運び込まれた。

しばらく会場はざわつき、それが落ち着いてくると、タイミングを見計らっていた司会の人がいやあ、迫力のある、素晴らしい和太鼓の演奏でしたね。さて次は、一転して優雅な時間をお届けしたいと思います」と、仁科さんと叶さんを紹介した。私はすかさず、白を基調とした、肩口に花飾りの付いたドレスを纏った仁科さんと、淡い紫色を基調とした、やはり肩口に花飾りの付いたドレスを纏った叶さんがステージに上がる様子に、携帯のカメラを向けた。

二人の登場に、歓声が上がった。どんな歓声かは考えるまでもない。ドレス姿の美人二人が登場すれば当然のものだったから。

そして司会者との短い掛け合いをしたのち、二人は演奏を始めた。司会者が言ったとおり、和太鼓とは打って変わった、叶さんの軽やかなピアノの音と、仁科さんの伸びやかで優雅なヴァイオリンの音が、まるで清流のように会場を流れ始めた。つい今し方の興奮が、涼やかな音色で静まっていくように感じる。

動から静へ。

もしくは、太陽から月へ。

世界は、僅かな合間でその場所を移した。

一曲目が終わり、拍手が起こる。仁科さんと叶さんが笑顔で答え、

「それでは次に、楽しい気持ちになるような曲をお贈りしたいと思います。この曲を一度は耳にしているという方は、けっこういらっしやると思います」という仁科さんの曲紹介で、二曲目が始まった。私もこれは知っていた。ただ、仁科さんに『ビゼーのカルメン序曲』だということを教えてもらうまでは、映画音楽だと思っていた。『がんばればアース』という、もうずっと昔の、問題児だらけの弱小少年野球チームの映画だ。私が小学生の頃、アッキーと近所の野球少年たちとで一緒に見た。そのときは今でもよく覚えている。

「こんなヤツいないよ、なんてみんな言いながらも、釘付けになって見ていた。

たくさんの楽しげな声と、たくさんの楽しげな笑顔がそこにあった。

それがきつかけかどうか分からないけど、ふと、私は思い出した。露店の前でこよりちゃんから聞いたこと。そして、智びよんのことを。

「区画整理という言葉の意味を、何となくは分かっているけど、具体的な説明を求められると、やっぱり何となくしか答えられない。私はこよりちゃんに、さらなる説明を求め、「つまり、あの辺り全部なくなっちゃうかもしれないってこと！」と答えた。

「なくなる？」

「ということば、おおきぱんもなくなっちゃうっていうこと？ 牛みたいな猫さんも、どこかに行ってしまうということ？」

「智ちゃん、本当っ？」私は思わず、飛びつくように、側にいた智びよんに聞いた。

「議案としてね。でも具体的な内容はまだ何一つ決まっていらないから、再開発を視野に入れた大規模なものになるかもしれない、小規模な部分的措置で終わるかもしれない。議案そのものが白紙撤回される可能性もある。それは、これからの話し合い次第になるわね」

「でもさ、大規模にやるってなったら、なくなっちゃうんだよね」
「一旦はね。そこに住んでいた人たちが、できるだけ以前と同じような生活が出来るように配慮はされるだろうから、何もかもがなくなるというわけじゃない。でも、風景はどうしたって変わるし、余所へ越す人もたくさん出るかもしれない」

そして越してしまう人たちの中に、おおきぱんのおばあちゃんとおじいちゃんも含まれるかもしれない。そんなの嫌だ。

そういえば前に、お父さんが言ってたっけ。

町の風景が変わっていくことに、大切な思い出が根こそぎ奪われてくみたいに思えたって。実際におばあちゃんたちがいなくなったら、私もそう感じるのだろうか。

「なんで、そんなことするの？」

別に、智びよんを責める意味で言ったわけじゃない。そもそも、誰に向かって言ったのか、私にも分からない。でも、言わずにはいられなかった。

そんな私を、お父さんは「汐」と諭すような声で止めようとした。「いいんだ岡崎。汐ちゃん、この議案はね、以前からずっと話には上がっていたの。ただ、議案として提出されていなかっただけ。あの辺りは古い建物が多くて、耐震補強が不十分な建物も多いらしい。救急車や消防車が通れない狭い道も多いし、袋小路もたくさんある。もしも災害が起きたら、大惨事になってしまいう危険性が、低いとは決して言えない。たくさんの住民の命が失われることになるかもしれない。それを見過ごし続けるわけには、どうしたっていかない」
それはそのとおりなのだと思う。

でも、それでも納得できない。

うっん、違う。納得したくないんだ。おおきぱんのおばあちゃんとおじいちゃんのことを考えると。

五〇年以上、二人はあの店で毎日パンを焼いてきた。二人にとって、楽しかったことや辛かったことがぎっしりと詰まった、大切な場所だと言ってた。おばあちゃんたちだけじゃない。あの場所で何

十年と暮らしてきた人たちがたくさんいる。そしてその場所には一人一人のたくさんのお父さんの思い出が詰まっている。

私が引越したとき、一四年間暮らした家から離れることを辛く思った。私はお父さんの言葉で、それを受け入れることが出来た。笑顔でいばいと言うことが出来た。でもこれは違う。思い出の場所が消えてしまうのだ。跡形もなく。

それに、思い出を失うのは“町”も同じ。

もしも大規模な再開発をすることになって、もしも、それを“町”が望んでいなかったとしたら、やっぱり悲しいと思うのではないだろうか。そしてその悲しみを、誰が癒してあげられるというのだろうか。

そう思うと、「町」は？」という言葉がぼとりとこぼれた。

「え？」

「もしも“町”が、変わりたくないって想っていたら、それでも変えちゃうの？」

「そうね……」

智びよんは少し間をおいてから、迷いや戸惑いのない声で言葉を続けた。

「私はこう思うわ。きっと私たちは、“町”の願いのとおりのことをすることに……」

「どんな願い？」

「もちろん、この町に暮らす人たちが、平和で安全な日々の中で、幸せでいられること」

そんなことは分かってる。そして、今の自分が如何に子供じみたことを言っているのかも分かっている。まるで、引越しに反対したときの自分のようだという事。だから、「それはそうだけ……」と口を閉じるしかなかった。

こよりちゃんとはそこで別れ、それから観客席に戻るまでの間、私は気持ちと頭の中を整理することに努めた。もしもあの辺りの家が全て薙ぎ払われたらと考えると、どうしても心が揺れた。でも、

智びよんの言つてた言葉が徐々に心に浸透してくると、席に座るときには、完全に割り切るにはまだ時間が必要だけど、今この場においては十分な程度に波を鎮めることが出来ていた。

あの辺りを実際どうこうすることになるとしても、何年も先の話になることは間違いとお父さんも智びよんも言つてたし、何も決まつていない段階であれこれ想像して、一人で落ち込むのも不毛だし、と。

ただ、それとは別のものが、頭の中でぐるぐると回り出してもいい。 “町” のことに考えが至つたときから。

そのことに全ての意識が集中することはなかったけど、頭の片隅にはずつとあつた。 パフォーマンスを見ていたときも、和太鼓を聴いていたときも、仁科さんと叶さんの見事な演奏を聴いているときも、そして、仁科さんの紹介で、淡いピンク色のドレスを着たことみちゃんが、ヴァイオリンを手にステージに現れた今この瞬間も。

美女三人の共演に、またも歓声が上がる。

ことみちゃんはぺこりとお辞儀をすると、ヴァイオリンを構え、叶さんのピアノから三人の演奏が始まつた。

“町” の願い 。

そこに暮らす人たちが、平和で安全に、幸せであること。

でも、全ての人が同じように幸せになれるわけじゃない。どんなことにも、喜びを得られる人がいれば、対照的に苦しみや悲しみを強いられる人がいる。例えば、区画整理のことでも。

それが現実。

なら、幸せでない人を見て、“町” はどう思うだろう。仕方がないと諦めるだろうか、それとも、悲しいと涙するだろうか。

もしも悲しんでいるとすれば、それはなんて、残酷なことだろう。

叶わない願い。それでも願い続け、その先にあるのは、やっぱり叶わない現実。

だから私は願わずにはいられない。

私たち一人一人が幸せを得られるように、“町”も、幸せになりますようにと。幸せの中で、笑顔を咲かせられますようにと。

ことみちゃんに仁科さん、そして叶さんの奏でる音色は、そんな私の願いを届けてくれようとしているかのように思えた。

Episode「ステージは燃えているか」 -了-

ステージは燃えているか その4（後書き）

やっと美佐枝さんと公子さん登場。あと仁科さんと杉坂さんも。

美佐枝さんは相変わらず志麻ちゃんと寮母してます。会社を起こした友達とOLやってる美佐枝さん（既婚）も考えましたが、寮母の方が”らしい”し、ペットを飼っている一人暮らしの女性（ある意味美佐枝さんは一人暮らしとは言えないかも）は結構（以下自主規制）。

しかし、杉坂さんの扱いは可哀想すぎたかも……。

恩師の長くて短い一日 その1

数匹の蝉の、喧しいほどの鳴き声中、玄関前の門の横にあるドアホンがお父さんの指で押されると、少し遅れてスピーカーから「どちら様かの？」という声が返ってきた。そのドアホンのすぐ横にある表札には、『幸村』という文字が書かれている。

「岡崎です」

「おお、来おったか。開いてるから入りなさい」

その言葉に、私たちはお家の門を開け、ぞろぞろと中に入った。お父さんを先頭に、陽平おじちゃん、お母さん、最後に私といった順で。そして玄関の戸を開けると、ついさっきドアホンの向こうで答えていた幸村先生が出迎えてくれた。

私の先生じゃなくて、お母さんたちの先生だから、本当は私が幸村先生と呼ぶのはおかしいかもしれない。けど、気が付いたらそう私も呼んでいて、いまだ誰も何も言わないから、問題はないでしょう。うん。

七十半ばになる幸村先生は、お母さんたちの演劇部の顧問で、仁科さんたちの合唱部の顧問もしていた人。そしてなにより、お父さんと陽平おじちゃんを引き合わせた人、だそうです。

お父さんも陽平おじちゃんも、幸村先生がいなかったら、間違いなく一年生の途中で高校を辞めていたと今でも断言していて、もしもそのとおり早々に中退していたら、その後の人生はろくでもないものになっていたに違いない、とまで言っている。つまり、二人にとって恩人中の恩人ということ。

だというのに、お父さんも陽平おじちゃんも、その恩人に敬意を払うどころか、失礼な言葉を未だに使っている。例えば、今まさに。

「今年も来てやったぞ、爺さん」

「独り身の寂しいジジイに愛の手をつてね」

でも幸村先生は、そんなお父さんと陽平おじちゃんに、穏やかな笑顔で「毎年すまんなあ」と答えている。

まあ、幸村先生曰く「こやつらに礼儀正しくされたら、ワシの方が気持ち悪くてかなわんわい」だそうで、お父さんたちも「いまさら態度を一八〇度ひっくり返せって言われても、ソナの気持ち悪すぎて出来るか」だそうで、お母さんまで「パパや春原さんにとつても、幸村先生にとつても、今はこれが一番いいらしいから、本人たちの自由にさせてあげましょう」と諦めた様子で言っているから、私は傍観している他ないのだけど、娘としては正直恥ずかしい。

だから、こういうお父さんを見た直後に、丁寧な物腰のお母さんの、「お久しぶりです、幸村先生。これ、つまらないものですけど」と言つて暑中お見舞いの品を幸村先生に差し出す姿を見ると、娘としてホツとする。

幸村先生が暑中お見舞いを受け取ると、やっと私の番。私はわざとお父さんにちらりと目を配つてから、礼儀正しく「こんにちは」とペこりとお辞儀をした。

「はい。こんにちは。汐さんはまた大きくなったみたいじゃのう。

それに、会うたびにお母さんに生き写しになっていくようじゃ」「

そうは言われても、あんまりモテていない現実を考えると、なんとなく弱気な「そうですか?」という返事をしてしまう。

「嘘は言わんよ。お前たちもそう思うだろう?」

「そりゃまあ」とお父さん。

うーん、身内に同意されても。でもまあ、幸村先生の言葉を信じて、ひとまず数年後の私に自信を持つぐらいはしてもいいのかな。

そんな玄関先での挨拶がひとまず終わると、私たちは幸村先生のお家にあがった。

畳部屋の居間に案内されると、真つ先に陽平おじちゃんがどつかと腰を下ろし、お父さんも早々に腰を下ろす。私とお母さんは、「冷たい飲み物と、他に何か持つてこよう。岡崎と春原はビールでよいか?」と言う幸村先生のお手伝いをすべく、後について台所に行

った。

一人暮らしのおじいちゃんのお家らしい小型の冷蔵庫から、幸村先生が缶ビールと麦茶を出し、その間にお母さんと私がコップを五つ、たくさんの種類と数の食器が納められている食器棚から取り出す。

この食器棚を見た人は、このお家には大家族が暮らしていると思うに違いない。現実それだけの食器がずらりと収められている。数種類の大皿小皿、お茶碗にどんぶりなどなど。だけどこのお家の住人は幸村先生ただ一人。奥さんはずっと昔に亡くなっていて、息子さんやお孫さんはいるけど、みんな遠くで暮らしている。

なんとも似つかわしくないこの食器棚の隣にある棚には、コーヒーや紅茶の瓶が数種類置かれていて、これまた似つかわしくなかったりする。というのも幸村先生はコーヒーも紅茶もほとんど飲まないから。

こういった状況の理由を、幸村先生を知る人が聞けばすぐに大きく頷くと思うけど、そうでなければ幸村先生が一人で暮らしていると信じはしないだろう。

それはともかく、飲み物が用意されると、幸村先生はがさごそと何やら細長い箱を取り出した。

「カステラは、好きかの？」
もちろんです！

と声に出る寸前でぎりぎり止めた自分にほっとしている間に、お母さんが「すみません」と答えた。ふう、危ない危ない。

飲み物と食べ物が一揃いすると、それらを私とお母さんで手分けして持ち、居間に戻った。そして私たちは、喉を潤しながらお喋りを始めた。その口火を切ったのは、幸村先生のこの言葉だった。

「ところで春原、足の具合はもう大丈夫なのか？」

陽平おじちゃんの骨折話は幸村先生の耳にもすっかり届いていたみたい。まあ、届いていないはずはないか。

「へっ。不死身の男をなめんなよジジイ」

「確かに不死身だもんな、お前」

お父さんの茶々に、私も「うんうん」と頷く。陽平おじちゃんが不死身じゃなかったら、絶対に今生きてないもの。

「そうかそうか。それは何より。しかし……、車を蹴って骨折とは、お前は本当に相変わらずじゃなあ。そういった部分を少しは成長させられんもんか？」

「ほんと、アホな自爆してないで、いい加減一ミクロンでも成長しろよ。春原」

「あれは自爆じゃねえ！ 名誉の“不死鳥”だ！ それに岡崎、テーマだつて成長してねえだろうが！」

なんて言うか……。せめて、成長してるぞつて否定するぐらいはしようよ。

「つつか！ フン、今の僕が昔の僕と同じだなんて思われちゃあ困るねえ！」

お、急に自信ありげな顔になった。ていうか、成長してないって認めるようなこと言ってなかったっけ？

「ふふん。今の僕にはなあ……、朝子ちゃんっていう可愛い恋人がいるんだぜ！」

確かにそう言う意味じゃあ今と昔は違うけど、でもそれって、環境が変わったつていうだけで、陽平おじちゃん自体は人間的に何も変わっていないんじゃないか？ っていうか、いちいち突っ込むのもここまでにしておいたほうが良さそう。切りがないから。

なんて思っていると、幸村先生が「おお、そうじゃったの。お前に彼女が出来たんだったのお」と話題を切り替えた。

それから御久島さんの話になり、病室での告白から今に至るエピソードを、陽平おじちゃんは自慢げに話した。実際その場に居合わせていたものは無論別として、どこまでが本当でどこからが嘘や誇張かを完全に判別することは不可能だけど、だいたいの話は御久島さんから耳に入れてるし、陽平おじちゃんと御久島さんの性格を考えれば、大きな誤差を生むことなく判別するのは難しくない。

ただ、幸村先生はどうだろう。ひよつとしたら、全部本当のこととして聞いているかもしれない。事実、お父さんが突っ込んだり疑念をぶつけたりしない限り、そうかそうかと嬉しそうに聞いているから。

しかもお父さん、早々に疲れてしまって、口を挟むのを半ば放棄してしまっている。それだけ突っ込みどころが多いということなんだけど。

まあ、今のところとんでもない嘘や誇張はないみたいだから、このままでも大きな問題はないと思う。それに、いちいち話の腰を折ってしまうのも、幸村先生にとっては楽しいことではないかもしれない。なら、ひととおり話した後で指摘するのが一番いいのかも。もしくは後日改めてとか。そう考えて、私はあまり余計なことは言わないように意識しつつ、陽平おじちゃんの話に相槌を打ったり笑ったり、ときおり「嘘だあ」とだけ加えてみたりして聞いていた。

御久島さんの話が終わると、仕事であんなことがあったこんなことがあったという話に移り、それにお父さんも加わり、賑やかな時間はいつまでも続きそうな気配を見せていた。ただでさえ陽平おじちゃんは話題の宝庫のようなものだし。

そんな会話を聞いていて、もちろん私も楽しい。けど、幸村先生とお話したい気持ちはある。それに幸村先生のお話も聞きたい。ということ、話しが一旦途切れる瞬間を狙うことにした。強引に割り込むようなことはない。

私は、虎視眈々とそのチャンスを狙った。ついでに、お話があまりにも面白くてチャンスを数度見逃してしまい、その度にしまったと僅かに遅れて後悔していた。そして、幸村先生のお家にお邪魔しておよそ二時間半、幾度目かのチャンスが、それも今回はビククチャンスがやってきた。

話が一段落したところで、陽平おじちゃんがトイレに行く立ち上がり、そしてそれに合わせたかのように、お父さんの携帯電話が鳴った。たぶん会社の人からだろうと思っていると、やっぱり会社

の人だったようで、お父さんも席を外した。

これで、今この部屋にいるのは私とお母さんと幸村先生の三人。まるで私のためにお膳立てしてくれたようなこの展開に、心の中で神様ありがとうと感謝する私の横で、お母さんが「すみません、幸村先生。来るたびに騒がしくしてしまつて」と苦笑いをした。

「はっはっは。かまわんよ。それどころか、有り難いくらいじゃ。教え子の笑顔というものは、本当にいいものだからのお。それと、その教え子の家族の、幸せな笑顔も、の」

「私も、幸村先生の笑つてる顔見ると、すごく嬉しくなります」私に向けてくれた笑顔に、私は満面の笑みでそう答えた。

「さあ、お父さんと陽平おじちゃんに戻ってくる前に、お話を始めてしまおう。」

「幸村先生」

「うん？」

「今度は、幸村先生のお話が聞きたいです」

「わしの話？」

「はい！」

私がそう言つと、お母さんも「私も、ぜひ聞きたいです」と言つてくれた。

「そう言われてもお、汐さんを楽しませられるような話が、あるかどうか」

幸村先生はそう言いながら、さてどんな話をしようかと思案げに腕組みをし、それじゃあと話し始めようとした。そして次の瞬間、それを遮る音がした。

恩師の長くて短い一日 その2

おトイレから戻ってきた陽平おじちゃん、自分が座っていた場所にどつかと腰を落とし、飲みかけのビールをグツと飲み干し、「くーっ！ 一仕事した後のビールはまた格別だねえ！」と爽快な表情で言い放ち、それからようやくと気付いた。

この居間には、私にお母さん、お父さん、陽平おじちゃん、幸村先生、そしてもう一人、とつても体格が良くて、強面といった感じで、白髪を短く刈り込んだ、六〇過ぎのおじさんがいた。

話を戻すと、それは五分ほど前のこと。

幸村先生が話し始めようとしたところで、ドアホンの呼び鈴が鳴った。幸村先生はドアホン用の受話器を取り、「どちら様で？」と尋ね、返ってきた名前に、少し驚きながらも嬉しそうに声を弾ませて「本当に久しぶりじゃのお」と返した。そして「ちよつとすまんが、しばし席を外させてもってもよいかな？」と私たちに聞いたので、お母さんが「はい。私たちのことは気にしないでください」と答えた。

幸村先生が居間から出ていくと、私はさっそくお母さんに言った。「きつと、幸村先生の教え子だった人だよ」

そして、携帯電話でお話しているお父さんの声と混ざって聞こえてくる玄関での会話から、お客様が私の予想通りだったことが早々に分かった。他にも、近くに用事があつて、せつかくだからと立ち寄ったというのも聞こえたけど、大半は聞き取ることが出来ない。意識を集中して聞き耳を立てればずいぶん違ってくるのだからうけど、それじゃ盗み聞きになってしまうし、そんなことすべきじゃないことも承知している。

なので、半分冗談で「もしかしたら今来てる人、知ってる人かも」と言いながら、意識を玄関から切り離れた。半分冗談、ということはずつたり半分本気という意味。なにせ、幸村先生の元教え子という

知り合いは少なくなかったりするから。

すると、幸村先生が居間に戻ってきた。お客様が帰った気配はなかったから、何か取りに来たのだろうかと思っただけ、そうではなかった。

「いやあ、実はのお。今そこにおる客が、是非とも会いたいと言っておるのだが。構わんかな？」

「あの、私とおちゃんは構わないんですけど……」

たぶんお父さんも同じだと思うよ。陽平おじちゃんは微妙なところだけど、きつと、お父さんの意見で陽平おじちゃんの意志は関係なくなるでしょう。というかそんな光景しか思い浮かべることが出来ません。

そしたら、電話しながらこの会話をしっかり聞いていたお父さんが、電話相手に「ちよつと悪い」と携帯から顔を離し、自分も構わないし、せつかくだから上がってもらおうと言ってくれた。案の定、そこに陽平おじちゃんの意見が入る余地など残さずに。まさか、おトイレ中の陽平おじちゃんに確認を取りに行くのもなんだし、これで全員承諾ということになり、お父さんは「すまん。で、それが済んだら次はだな」と電話に戻った。

幸村先生も報告のため玄関へと踵を返した。

内心、どんな人だろうとちよつとときどきしながら待つと、すぐにお客様を連れて戻ってきた。その人は、元プロレスラーかと思っ
てしまいそうな体格と顔立ちをしていた。

「どうもすみません、無理にお願いしてしまつて。私、剛田龍三と
います」

「岡崎渚です。はじめまして」

「岡崎汐です」私は、立ち上がって挨拶をするお母さんに倣って立ち上がり、お辞儀をした。そして、顔を上げると剛田さんの顔にク
エスチョンマークが浮かんでいるのが見て取れた。経験上、何を不思議に思っているのかなんてすぐに察しがつく。

「確か、娘さんは一人と聞いていたが……」

お母さんもこういつた展開には慣れていたので、笑顔で「はい、この子が娘です。私は岡崎の妻です」と答えた。

「妻……？ な、なんと……」

なんか色々と考えたりするところがあるようで、剛田さんの口の中で言葉が転がる。でも、幸村先生に促されて腰を下ろしたときには、一通りの言葉を転がし終えたみたいで、「いやあ、話には聞いてましたが、奥さんがこんなに美人で若々しいお方だとは。お嬢さんもとても可愛らしくて、旦那さんが羨ましい限りですなあ」と笑っていた。

それから間もなく、電話を終えたお父さんが戻ってくると、お互いに挨拶して、「すみません。是非とも会ってみたかったもんで」と剛田さんが言った。

実はお父さんとお母さん、幸村先生の元教え子の中ではわりと有名な人だったりする。もちろん、陽平おじちゃんも。

そのことを知ったのは、もう何年も前に、幸村先生の『古希』って言ったかな？ とにかくお祝いをしたときのこと。市民会館の広い会場を使って、幸村先生を慕う元教え子の人たちがたくさん集まったの盛大なお祝いに、私たちも参加したのだけど、その際、お父さんと陽平おじちゃんがしきりに「君が岡崎くんか」「君が春原くんか」と声を掛けられ、幸村先生にとつての最後の問題児として、そして最後の“息子”として知れ渡っていると聞かされた。お母さんも「あなたのことは先生から伺ってます」と声を掛けられていて、娘として誇らしく嬉しかったことを、今でも覚えている。

ちなみに、涼ちゃんことみちゃんはお仕事の場合でそのお祝いに出席できず、とても残念がっていた。

で、そんな私たちがいま幸村先生のお家にお邪魔していることを知った剛田さんが、是非とも会いたいと願い出て、私たちがそれを快く受け、挨拶が終わったところで陽平おじちゃんがおトイレから戻ってきて、剛田さんに気付いて驚いた、というのが今の状況。

というか、おトイレにいても一連のやり取りは聞こえると思うん

だけどなあ。

とにもかくにも、ワンテンポ、いやスリーテンポぐらい遅れて剛田さんの存在に気付いた陽平おじちゃんは、半笑いの引きつった顔で、お父さんに「……岡崎、俺さ、なんか見たこともない人の姿が見えるんだけどさ、気のせい、だよな？」と、やや声を震わせて言った。どうやら陽平おじちゃんは、とんでもない勘違いをしている模様。

でもそれより問題なのは……。

まさかとは思うけど、ここでお父さんの悪戯心が起き上がる、なんてことはないよね？ と少々心配になった私だったけど、お母さんもそれを心配したみたいで、お父さんが陽平おじちゃんに何か言おうとしたところで、「気のせいじゃないですよ、春原さん」と割って入った。

そして私の耳には、お父さんの「ちっ」という舌打ちがしっかりと届いていた。やっぱり余計なこと言うつもりだったんだ。

「幸村先生のお知り合いの方で、剛田さんです」

「へ？ 知り合い？ じゃ、じゃあ、幽霊とか自縛霊とか生き霊とかじゃないの？ な、なあんだ、焦って損し、っていつの間にか！」

「春原さんがおトイレに行ってた間にです」

「え！？ マジ？」

「はい。マジです」

とここで、剛田さんが豪快な笑い声を上げた。そりゃそうだよな。ひとしきり笑うと、「あ、いや、これは失礼」と目尻に笑い涙を残して謝り、「剛田です。私も君たちと同じく、幸村先生に色々教えてもらった一人です。どうぞよろしく。しかし噂通りの男だね君は」と続けた。どんな噂なのかは、実際に耳にしたことも多々あるから考えるまでもない。

その後、剛田さんを交えてのお喋りが始まった。最初は、剛田さんのリクエストでお父さんと陽平おじちゃんの高校時代のエピソード

ドがいくつか披露されたのだけど、その最後に剛田さんはこう言った。

「君たちのときは先生もすっかり穏和な人になってたみたいだけど、昔は無茶苦茶熱血教師だったんだぞ？ そりゃもう、腕っ節に自信のある問題児と真っ向からやりあうぐらいに」

これは、お父さんと陽平おじちゃんの幸村先生に対する失礼な言い方からのこの発言でしょう。

正直なところ、私の中の幸村先生は、とても穏やかで優しく、喧嘩とか暴力とかには無縁の人というイメージが強い。それはお母さんやお父さんたちもそう。けど、五〇歳あたりを越える元教え子の人たちの話では、それはそれはおっかない先生だったそうで、先生と殴り合いをした人も少なくなかったりする。

なので、その事実を知ったときの陽平おじちゃんは、かなり引きつっていた。ただし、喧嘩が強かったのはずっと前とあって、すぐにいつもの失礼な物言いに戻っていたけど。

お父さんと陽平おじちゃんの話が終わると、次は剛田さんのエピソードが披露されることになった。

「恥ずかしい話、ガキの頃から両親の仲が異常に悪くてね。しかも、二人とも俺に八つ当たりしてくるしで、だもんだから小学生の頃からけっこう荒れてたんだ。中学時代なんか、毎日のようにマッポの世話になってたよ」

「マッポ？」と、つい口に出して聞いてしまった。

「お巡りさんのことだよ」

「あ、ごめんなさい。お話の邪魔しちゃって」

「気にしなさんな。それで、そうなれば当然、つるんでた仲間以外は俺に喧嘩を売るか、俺を避けるかしかなくなって、それがまた余計にイラついてね。そんな感じで高校に入って、やっぱり毎日毎日喧嘩して。先生とも何度も殴り合いの喧嘩をしたよ。」

そんなある日だった。でかい喧嘩をしてたらマッポが来て、ドジこいて捕まってしまうって。マッポは俺を引き取らせに親を呼んだん

だけど、そんなヤツ知らないって拒否られて、困ったマツポが代わりに先生を呼んだんだけど、そうしたら先生、来るなりこれから家庭訪問するぞってすごい剣幕で言い出してね。

こっちは冗談じゃないって抵抗したけど、先生の迫力に押し負けて。その腹いせに、親の前で暴れ回ってやれって思いながら、ボコボコの顔で先生と家に帰ったんだけど。いやあ、まさか俺の代わりに先生が暴れるとは、あのときは夢にも思わなかったよ」

つまり剛田さんのご両親とやり合ったってということだろう。生徒さんの親と大喧嘩したという話はいくつも聞いているし、乱闘騒ぎになったことも一度や二度じゃないと聞いているから、驚きはしない。「てつきり、親の前で俺を怒鳴りつけるのかと思ったら、俺の前で親を怒鳴りつけ始めて。あんたには自分の子供を幸せにする権利はあるが、不幸にする権利はない！　なんて言いながら。他にも色々言って、そうしたら父親が、他人にお前にそんなこと言われる筋合いはないってすぐに激怒して、そこで取っ組み合い殴り合いの大乱闘さ。で、先生と親父だけならまだしも、間に入った俺まで警察に連れてかれて。」

あのときのマツポたちの呆れた顔は、なかなか傑作だったなあ」
「お前さんは笑えても、ワシは警察の人にこつてり絞られて、とても笑えるものではなかったぞい？　あなたはそれでも教師ですかと」

「やあ、迷惑かけました」
「まったくじゃ。でもまあ、あれからお前さんもあまり喧嘩しなくなったから、甲斐はあったけどの」

「ということは、ご両親は分かってくれたんですか？」とお父さん。「そういうことなんだろうな。そのあとすぐ、親がすっぱり離婚してくれて、八つ当たりされることもなくなったからね。離婚したあのお袋は、そりやもう別人みたいにならつと変わったよ。明るくなったし、よく笑うようになったし。」

親父もさっさと別の女作ってよろしくやって、俺はすぐには変われなくて、しばらく先生に迷惑かけ続けたけど、最後は万事解決さ」

両親が離婚して万事解決、というのには素直に喜べないけど、色んな人がいて、色んなケースがあつて、色んな解決方法があつて、その中に私には納得できないものもたくさんあることを、幸村先生の教え子だった人の話を色々と聞いているからこそ理解はしている。そして、こういうお話を聞くたびに必ず思う。私がどれだけ恵まれた環境の中にいるのかを。

恩師の長くて短い一日 その3

剛田さんが加わったの賑やかな時間の中で、気がつくくと、時計の針は五時半を少し回った時間を示していた。当初の予定から三〇分ほど長居していることになる。お母さんがお父さんに「パパ、そろそろ」と言うと、そこで時間に気付いたお父さんが、幸村先生と剛田さんに「すみません、俺たちはこれで帰ります」と告げた。そのとき、幸村先生のお家の電話が鳴った。

なんとなく、これってデジャヴ？と思うと同時に、まるで、私たちが帰るのを引き留めるようなタイミングのこの電話に、「なんだ、もう帰ってしまうのかい？ そいつは残念だなあ」と心底残念がる剛田さんと、正直ちよつと残念に思っている私の気持ちが届いたのかな、などと冗談で思った。

そして、なんとそれは、冗談ではなく本当のことだった。「もしもし、幸村ですが。おお、大森か。どうしたのじゃ？ こんな時間に。ん？ まあこちらは問題ないと思うが、ちよつと待ってくれんか？」

そこでいったん受話器から顔を離し、「これから大森が来るんじゃないが、剛田はかまわんだらう？」と尋ねた。返事は満面の笑みによる「もちろんですよ。大歓迎です。やあ、大森くんに会うのも久しぶりだなあ」という言葉。

「こちらは大丈夫じゃ。うん？ ああそうじゃよ。剛田がおる。岡崎と岡崎のご家族に、春原もおるが、そろそろ帰るらしい。おいおい、そう言われてもお。無理強いするわけにもいかんだらう。うん？ ああ分かった分かった」

幸村先生は、やれやれといった様子で「岡崎、大森が代わってくれと言っておるが」とお父さんに言った。

電話の向こうの大森さんがどうしたいのかは考えるまでもない。なので、大森さんがなればれと内心でこっそり呟いていた。

ちなみに、大森さんとは何度か会っていて、お父さんは私やお母さんよりも会っているらしい。初めて会ったのは、幸村先生のお祝いのとき。大森さんもお父さんたちのことは知っていて、他の人たちと同じように「君が岡崎くんか」と握手していた。お母さんたちより一五歳ぐらい年上で、とても面白い男の人。

「お久しぶりです。え？ はい、そのつもりですけど。いや、そう言われても……。な、なんスかその笑いは……。え、ええっ！ ちよつと待て！ なんでそれ知ってんですか！ 情報網なめるなつて、んな迷惑な情報網なんて今すぐ壊してください！ てかなんてことしてんスかあんたらは！ しかも笑いながらもう遅いとか言うな！ てかまさか　！」

お父さんはそこでハツとしたように言葉を切り、ごくりと唾を飲み込み、ちらりとお母さんを盗み見した。

「なんでしようか」

「な、なんでもないなんでもない……」にこやかなお母さんの返事に対して、お父さんも笑ってはいるけど引きつっていて、あからさまに動揺の色を見せている。そんなことされると、私だって更に気になるじゃない。大森さんが何を言ったのかを。

「だ、大丈夫って……、全然信用できないんですけど。まあ、そう言われればそうですけど……、はあ、分かりましたよ。そうします。はいはい。は？ そりゃいいですけど……、絶対に余計なこと言わないでくださいよ」

お父さんは釘を刺すように最後にそう言うと、「春原」と陽平おじちゃんに受話器を渡した。陽平おじちゃんは「ども、久しぶりッス。はい、はい。分かりました。任せてください」と電話の向こうの大森さんと話し、お父さんは。。。

「たく、ろくでもない大人たちだ……」

深いため息混じりの呟きをこぼした。想像するに、お母さんをちらつと見て、しかもあの動揺を考えると、お母さんに対して何か後ろめたい弱みを突きつけられたっぽい。むむ、気になるなあ。あの

様子だと、お父さんに聞いても絶対に教えてはくれないだろうから、大森さんが来たらこっさり教えてもらおう。

なお、お父さんの言っていた情報網とはまず間違いなく、幸村先生の元教え子で作る『幸村先生を慕う会』の情報網のことでしょう。とにもかくにも、大森さんの途中参加により、急遽幸村先生のお家で晩ご飯を食べることになった。しかもみんなで。ちよつと迷惑かなとも思っただけど、幸村先生はむしろ喜んでいたようだった。

ということ、こちらに向かっている最中の大森さんとも携帯電話を使って、晩ご飯のメニューをどうしようかと相談した。一番簡単な方法は、店屋物をとってしまうこと。幸村先生も、お寿司でもとろうと提案してくれたし、お父さんたちもそれでいいんじゃないかと言っただけど、お母さんがそれを許さなかった。

「たいしたものは作れませんけど、せつかくですから、何か作らせてください」

お母さんはそう言って頑と譲らず、結局みんな折れ、献立はお母さんに一任された。手の込んだ物を作る時間はないので、ひとまず冷蔵の中を確認し、それから何にするかを考え、足りない分を買い足しに私とお母さんと駅前スーパーへと向かう。お父さんたちも荷物持ちとして一緒に行こうかと言っただけど、そんなに買う物はないし、自転車を貸して頂けるから大丈夫ですと断っていた。実は私のこともお母さんは断っていたのだけど、こればかりは私も頑として譲らず、半ば問答無用で同行した。

そんなに買う物はないと言われても、結構な量を買わないと間に合わないことは明白だから。

お母さんは何度か「本当に私一人で良かったのに」と、自転車の荷台でぼやいていたけど、私は聞こえない振りをして自転車を漕いだ。

スーパーに着くと、カートのカゴに品物を入れながら、お客さんで賑わう店内をぐるりと回る。そしてレジに並んだときには、品物が山と積まれていた。思ったとおり、とても「一人で良かったのに」

なんて言える量ではない。

「お母さん。本気でこの量を一人でどうかしようって考えてたの？」
「まさか。しおちゃんも一緒だと思ったら、ついつい余計に買ってしまっただけです」

嘘だあ、とちくり言おうかと思ったけど、お母さんの笑顔に負けて、そういうことにしてあげた。

買い物を終えた私たちは、荷物の三分の一を自転車の前カゴに入れ、三分の一をハンドルにぶら下げ、残りは自転車の荷台に手で押さえながら置き、来た道を歩きで引き返した。

幸村先生のお家に戻り、荷物を抱えて上がると、居間に大森さんがいた。私たちが戻ってくるちよつと前に来たそうさ。さっそく、お母さんからご挨拶。

「こんばんは。お久しぶりです、大森さん」

「こんばんは。やあ。すまないねえ、帰ろうとしていたところを引き留めてしまって。せつかくの機会だったから」

「いえ。いいんです」

そんなごく自然なやり取りを、お父さんが不安の色をにじませて眺めている。

だからそういう風にされると、どんどん気になっちゃってば。

大森さんが電話越しに何を言ったのだろうかという興味が膨れあがるのをどうにか抑えつつ、お母さんの次に私をご挨拶。

「こんばんは」

「やあ。しばらく見ないうちに大きくなったねえ。何歳になったんだっけ？」

「一四です」

「それじゃあ中学生か。うん。だから前会ったときよりも、ぐっと大人っぽくなったわけだ」

こう言われて嬉しくないわけではないけど、いかんせん、身長伸び具合と比較して、胸の成長がやたらものんびりしている気がしてならないので、喜びもその分差し引かれてしまっていたりする、とい

う事実を知っているのはお母さんだけ。

手に荷物を持っているので、大森さんのご挨拶は早々に終わらせて台所に行き、すぐにお料理開始。私もお野菜を洗ったり皮を剥いたり、調味料を手渡したり、お皿を出したり、茹で上がった麺をお水で冷やしたりと、お母さんを手伝う。

中学に入ってから、部活で帰りが遅いことが多いから手伝う機会がぐんと減ってしまったけど、それまでは毎日のように手伝っていたので、事細かく指示してもらわなくても、やるべきことはだいたい分かっていて。なので、お母さんも次あしてとかあまり言わなかった。

それはいいのだけど、ただ、今立っている場所は勝手知ったる我が家の台所ではないので、諸々の置かれている場所を探さなければならず、それが一番の苦労となった。なにせ、一人暮らしだというのにモノが豊富にあるから。

今夜のメニューは、そうめんと天ぷら。あとスーパーで買ったお総菜がちらほら。

天ぷらなら、揚がったものを順次テーブルに運ぶようにすれば、晚ご飯の時間が遅くならず済むという理由での採用だった。

ということ、サツマイモやら人参やらカボチャやらごぼうやらピーマンやらと、何種類もお野菜を次々と仕込んで、衣をつけて油の海に放り投げていく。その隣では、沸騰したお湯の中で麺がゆらゆら揺れ、天ぷらと同様に、頃合いを見てすくい上げていく。

そして第一弾の分が揃うと、せつせと居間に運んだ。この第一弾でもけっこうな量に見えたけど、ちゃぶ台を囲む顔ぶれを見れば、すぐになくなってしまふのは目に見えている。カートの積まれていたときの光景を思い出すと、あときは多すぎなんじゃないかと思っただけど、今ここで改めて考えると、お母さんは間違っていなかったと断言できた。

さすがお母さん。参りました。

そうめんと天ぷらは、案の定次々とみんなの胃の中に消えていっ

た。私はというと、台所でひたすら天ぷらを揚げ、そうめんを茹で続けるお母さんのお手伝いをしながら、揚がったばかりのさくさくの天ぷらをつまみ食いしていた。

そうして、もう十分だろうというところで、ようやく私とお母さんは居間に戻った。お父さんたちの手は止まっていかなかったけど、そのスピードは明らかに落ちていて、これ以上作る必要はないことを物語っていた。

晩ご飯の時間は瞬く間に過ぎ、やがて「ごちそうさま」の声が上がった。ついでに、お腹いっぱい「当分動けない」という声も。もちろん、「美味しかった」というみんなの感想も。

食事が終わると、食後の歓談。わいわいと昔話が再開された。そのほとんどが、過激というか洒落になっていないというか、友達が聞いたらちよつと引いてしまうかもしれない内容だった。

やがて、時刻は九時を大きく回った頃。

「すみません、私とおちゃんはそろそろ帰りますね」

「そうだな。俺もそろそろ」お母さんの言葉に、お父さんもそう言った。

「ワシならかまわんぞ？ 剛田も大森も、まだおるんじゃろ？」

「先生がいつて言ってくれるなら、朝までだっていますよ」と笑いながら剛田さん。

「なら、まだゆっくりしていてもいいだろう」

「そういうわけにもいきませんので」

お母さんが頑固モードに入ったらテコでも動かないことは周知の事実となっているので、ここで押し問答になることはなく、「それじゃパパ、春原さん、お酒を飲み過ぎてみなさんに迷惑を掛けるよ。うなことはしないでくださいね」と席を立ち、私もぺこりとご挨拶して玄関へと歩いた。

正直、大森さんから電話が掛かってきたとき、お父さんは何て言われたのか、それを聞き出すチャンスがないまま終わってしまったのがとても心残り。だから、という部分も多少あり、帰る間際、玄

関まで見送りに来てくれた幸村先生に、一度聞いてみたかっことを尋ねてみた。

「あの、幸村先生。変なこと聞いていいですか？」

「なんだね？」

「幸村先生は、怖くなくつたんですか？ その、怖い教え子がたくさんいて」

そう。元教え子の人たちの話を今までいくつも聞いてきて、相当怖い人も少なくなかったことは知っている。いくら血気盛んな頃の幸村先生でも、怖いモノは怖いだろうし。というか、怖いと思うのが普通だと思う。それでもまつすぐ立ち向かっていけたことが、私には不思議でならなかった。

そんな私の疑問に、幸村先生は当たり前のように答えた。

「ははは。今にして思えば、相当無茶をしてきたなと驚いたり呆れたりすることもあるが。あのときは、ただただ必死だったからのお。子供らの粗暴さに怖いと感じたことはなかったわい」

「それじゃ、怖いモノなんて何もなかったんですか？」

「そりゃあワシにだって怖いモノはあつたさ」

でも、他に怖いモノなんて存在するのかな。

私は少し考えてみた。これだろうかと思つたものもいくつかあつたけど、きつとそうだと思えるものは一つも浮かばない。私は降参したように、「それって、何ですか？」と聞いた。幸村先生はふうと一息ついて、教えてくれた。

「ワシが一番怖かつたことは、道に迷つたり、道を踏み外している子らを、卒業までにちゃんとした道に導いてやれないことさ」

私はごつんと衝撃を受けた。誰よりも子供たちのことを真剣に想い、考え、実行してきた幸村先生。だからこそ、この言葉。

「じゃから、いつも頭から離れなかつた。今ワシが子供らにしていることは、間違っていないのだろうか。今までワシがしてきたことは、本当に間違っていないのだろうか。もっともつと、良い方法があつたのではないか、とね。それは、今でもここにあるよ」

幸村先生はそう言って自分の頭を指でちゃんと指し、小さく笑った。

その表情に、どうにも切ない気持ちが疼いて。
「まあ、職業病みたいなモノだから。死ぬまで居座り続けるんじゃないかな」

私ができる、精一杯の言葉を伝えたくて。
「間違ってます！ だって、みんな幸村先生のこと大好きじゃないですか。今日だって」

私は言った。少しばかり感情的な声であることは喋りながら分かってはいたけど、これでも抑えたつもり。とは言え、平静な声ではないのだから、驚かせてしまったかなとちょっと心配になった。でも幸村先生は、穏やかな笑顔をしていて、驚いてはいなかった。

「ありがとうの。そうじゃな、汐さんの言うように、ワシは間違っていないかったのかもしれない。現に、これだけの月日が流れていても、こうして教え子たちが来てくれとるし。今日に限らず、色々な教え子が遊びに来てくれとるしな」

「そうだよ！ だから、心配する必要なんてどこにもないよ！」
「うむ。それじゃ、今日からはもっと自信を持って生きていかなばな」

幸村先生はそう言って、私の頭をそつと撫でてくれた。お父さんとは違った手。それはとてもこそばゆいものだった。

そうして私とお母さんは幸村先生のお家を後にした。お父さんが帰ってきたのは、なんと翌日のことだった。ついでに言うと、二日酔いで一日頭を抱えていたお父さんは、その日の夜、お母さんにたっぷり怒られた。

恩師の長くて短い一日 その3（後書き）

書きたく書きたくてしかたのなかった幸村先生のその後のお話。や
つと登場させることができました。

当初は『その1』だけのショートエピソードで書き上げるつもりで
したが、終わってみれば『その3』まで。まあ、元教え子に囲まれ
た、幸村先生の笑顔をそれだけ長く思い浮かべ続けられたので、問
題なし。

そうそう。活動報告にも書きましたが、『その1』を改訂、という
か修正しました。幸村先生には子供もいるし孫もいることをスコン
と忘れてました。

台風、襲来 その1

「太平洋にあるこの大きな高気圧がぐつと北上して、明日明後日とこの週末は、全国的に晴れ間が広がるでしょう。夏休み最後の思い出作りをするには、最高の天気になると思います。ということので、まず九州沖縄からもう少し詳しく見ていきましょう」

テレビから聞こえてくる声に耳を傾けながら朝ご飯を食べていた私は、この天気予報に、心の中で小さくガッツポーズをすると同時に、耳にしたくない現実を朝から突きつけられ、小さなため息もついていた。

きつと、今まさに私と同じような気持ちになっている人はたくさんいると思う。とりわけ、長いお休みを謳歌している私たち学生はそんな私に、目の前で一緒に朝ご飯を食べているお父さんがくすりと苦笑していた。

そう。夏休みももうすぐ終わり。それを残念に思わない人はいないはず。まあでも、正直言うと、夏休みが終わればまた友達と毎日会えるという楽しみがあるから、心底落ち込むほどのダメージではない。それに、夏休み最後のイベントとなる、明日からの三泊四日の旅行が天気に恵まれることを思えば、ため息なんてすぐに消えてしまう。

重たい気持ちは、楽しみな気持ちの前ではいつだってたいして強くないのだ。

気を取り直した私は、必要なことは聞いたから耳を傾ける必要はもうないと、テレビから流れる音を意識から遠ざけ、旅行のことを考えつつもぐもぐとご飯を食べた。呆れ顔混じりの笑顔をお父さんに向けながら。

私より一足早く「ごちそうさま」と朝ご飯を食べ終えたお父さんは、新聞を手に取るとばさりと広げた。そしてしばらく黙って読んでいると、不意に、ほんの少し驚いたような声を上げた。

なんだろうと思った私はお父さんを見た。一緒に朝ご飯を食べているお母さんも「どうかしたんですか？」と不思議そうに尋ねる。「ああ、これ」ちよつと嬉しそうな表情のお父さんは、注目する私たちにそう言うと、その記事が見やすいようにと新聞を四つ折りにして、ちやぶ台越しにお母さんに渡した。そしてその記事を見たお母さんが、「まあ」と小さな歓声とともにぱつと笑顔を咲かせて、記事に目を走らせた。お母さんまでそういう反応をすると、私だつて是非とも知りたくなるというもの。

「なにになに？」

「これ」お母さんは、ひとまず箸を置いた私に新聞を差し出した。何が書いてあるんだろうと期待を持って受け取り、すぐさま紙面に目を向ける。そして、ぱつと目に飛び込んできた『今注目の美人ヴァイオリニスト』という太字の見出しと、そのヴァイオリニストの名前と小さな写真に、私は「あ！ 仁科さんだ！」と喜びの声を上げた。

記事そのものはそう大きくはなく、簡単なプロフィールが主で、期待を込めた激励と、仁科さんの言葉がちよつと添えられているといった内容だ。どうせならもつと大々的に書いてくれればいいのにとちよつと不満に思ったけど、とにもかくにも、こうして新聞に載ったというのは喜ばしいことに変わりない。なので、まだ食事中だということ完全に忘れて、三回その記事を読み返し、仁科さんの『聞いてくださる方々の心に、ほんの少しでもいいから温かいものが灯ってくれたらと、いつもそう思つて演奏しています』という言葉を、我ながら気持ち悪いほどにやにやしている自分を自覚しながら、本当に穴が空いてもおかしくないほど見入った。

まさに、釘付けになった私。とそこに、お父さんの声が。

「汐」

「ん？」

「そろそろいいか？」

「何が？」お父さんが何を言っているのか分からず、首を傾げてお

父さんを見た。

「何がって……、まだ読み終わってないんだけど」

一瞬、何が読み終わっていないのか理解できなかったけど、手にしている新聞のことだと気付くと、半分呆れ顔のお父さんに「あ、ごめんなさい」と返した。

「仁科さん、そのうちテレビにも出るようになるのかなあ」

「きつと、そうなると思いますよ。それよりしおちゃん。喜びに浸るのもいいけど、朝ご飯もちゃんと最後まで食べないとね」

「そうだった」

すっかり忘れていた朝ご飯を思い出し、食事を再開する。一方、お父さんは「智代から聞いたんだが」とこの話題を広げた。

「この前の夏祭り以来、仁科と叶さんが急激に注目されだしてるんだってさ。夏祭りの実行委員会にも問い合わせが来ていて、その数も日に日に増えているそうだ。なんでも、あの演奏を実際に見て聴いていた人たちがブログに書いて、そこからあつという間に方々に広まって、話題になってるらしい。」

ま、音楽界以外でも注目される要素はもともとあったから、どのみちこうはなつてたんだろうけど。まさか、こんな田舎町の夏祭りがきっかけになるなんてな。世の中、何がきっかけになるか、分からないもんだ」

私も、この夏祭りがきっかけで、仁科さんたちがもつと有名人になつたらいいなとは思っていたけど、本当にそうなると確信するまでには及ばなかったので、驚き半分、喜び半分といったところ。そしてここで、ふと思ったことを、最後の一口をぐくんと飲み込んでから言った。

「ことみちゃんは？」

あの場にことみちゃんもいたんだから、話題になつていても不思議じゃない。

「ああ。ことみもそれなりに話題になつてるらしい。でも、仁科たちと違って、新聞やらテレビやらに大きく取り上げられることはな

いんじゃないか？」

「なんで。そんなのずるいよ」

「俺に文句言われてもな。そもそもことみは学者だから、騒ぎ立てる対象にはなりにくいだよ」

「それはそうだけど」

「それにだ、芸能人みたいな世間の騒がれ方するの、ことみは好きじゃないだろうし、むしろ迷惑に感じると思うけどな。俺は」

そう言われて、テレビのワイドショーとか芸能ニュースなんかでよく見られる光景を参考にして想像してみた。

ところ構わず四方八方から向けられる、無数のカメラやマイクやライト。それらを手にしている、礼儀知らずで無責任な人たち。好き勝手に言い捨てていくテレビの中の人たちや、インタビューに答える興味本位の一般人。そして、どれだけ声を上げてても聞いてもらえず、一方的に言葉の暴力を受けるしかない、その中心にいることみちゃん……。

むう。とつても嫌だ。それに、無性に腹が立ってくる。この想像が極端すぎるものと理解していても。

ということ、あっけなく前言撤回。騒がれない方がいい。でも仁科さんたちは、もっともっと注目されて欲しい。そうなれば、コンサートとかに足を運んでくれる人が増えるだろうし、仁科さんも叶さんも絶対に喜ぶから、と思うも、今し方想像した光景の中心にいたことみちゃんを、仁科さんや叶さんに置き換えた途端、果たして注目されるのが本当に喜ぶべき事なのかと、ちよつと疑問に感じた。

「やっぱり、ほどほどが一番だね」

「そこまで一気に飛ぶか。ま、想像力が逞しいのは悪いことじゃないが、それもほどほどにしておいた方がいいと思うぞ」

どうやら、頭の中で描いていたこと全部、筒抜けだったみたい。

「私にそう想像させたのはお父さんでしょ」私はそう切り返して、同意を求めようにお母さんに顔を向けた。そして、すでに同意し

ていることを告げるような顔をしていた。というか、リアクションをしていた。

そこにある感情は私とはある意味違うけど、お母さんも私と同じ想像をしていた模様。

「ことみちゃん、可哀想です……」

「おまえまで遅しい想像するなよ……」

お父さんが脱力感のある声でそう呟くと、「ほらね！」と高らかに言うタイミングを一瞬にして失ってしまった私は、言い忘れていたごちそうさまを言って、食べ終えた食器を台所に運ぶことにした。まさか私の上をいってたとは、なんて、お母さんに対する感想を抱きつつ食器をまとめていると、電話が鳴った。

こんな時間に電話が掛かってくるなんて珍しい。いったい誰からだろう。

電話に出たのは、お父さんではなくお母さん。

「はい。岡崎です」その声はちょっと潤んでいた。さすがに、早苗さんのようにはいかないようだ。お父さん曰く、早苗さんの立ち直りの早さは人智を越た領域だそうで、いわゆる“神の領域”にいる早苗さんと比較するのは可哀想かもしれない。

それはともかく、電話を掛けたら相手の声がちょっと涙声、となれば何事かと驚くなり心配になるのは当然。きつと、電話を掛けてきた人はこんなようなことを言っただと思う。

何かあったの？

その証拠に、お母さんは「え？ あ、いえ、何でもないんです」と慌てて答えていた。そこへ、タイミングが良いのか悪いのか、玄関の呼び鈴が鳴った。

誰からの電話か興味があった私は、すっかりそちらに意識が向いていたために、呼び鈴に対応するのが遅れ、その隙に「今朝は随分と忙しいな」とお父さんが立ち上がった。

「あ、私が出るよ」

「いいよ。片づけの最中なんだし。立ってる者は親でも使えって言

うだろ？」

知っててわざと言ったことは分かっていたけど、あえて「この場面での台詞を使うの、お父さんじゃなくて私なんだけど」と指摘お父さんは、「俺は春原じゃないんだぞ」と不満顔で一言抗議して、そのまま居間を出ていった。

となれば、私は素直に食器を片付けるしかない。のだけど、その手はともノロノロとしたもの。慎重にやっているわけじゃない。単に、意識が相変わらず電話と、加えて玄関にばかり向いてしまつて、片付けどころじゃないから。

「本当ですか？ 良かったですね、公子さん」

しまった。お父さんと喋っている間に、お母さんの方の話が進んでる。何が良かったのか分からないよ。でも、僅かに鼻声混じりながらもお母さんの弾むような声から、明るい話題であることと、電話を掛けてきたのが公子さんだということは分かった。

そして間髪入れず、玄関の扉が開く音がした。

誰だろう。この時間からして、お隣さんが回覧板を持ってきたのかな。もしくは郵便屋さんとか宅配とか？

と逡巡した途端、お母さんの声が頭の中を占めた。

「え？ いえ、まだ来てませんけど。はい。分かりました。来たらすぐに電話します」

来る？ 誰が？ 芳野さん？ お父さんを迎えに？

「そうだ、せつかくだから、公子さんもいらっしやいませんか？」

あ、それいい。私も大歓迎。

「そんな、迷惑じゃないですよ。大歓迎です。しおちゃんも喜びますから、是非そうしてください」

うんうん。がんばれお母さん。

「え？ あ、はい」そこで少しばかり間が空いてから、「ありがとうございます。あ、そうですね」と苦笑し、「はい、お待ちしています。それじゃ、またあとで。はい、失礼します」と頭を下げて、電話を切った。

すかさず私は、誰が来るのかお母さんに尋ねようとしたのだけど、そこでようやく、戸を開ける音がしてからずっと、玄関の方から物音一つ聞こえていかなかったことに気付いた。お父さんの声も何も、戸を閉める音も。

えと、どういうこと？

と、あれこれ推測してみようと思った、まさにその時だった。いかにもげんなりとした声が玄関から声が聞こえてきた。お父さんの、ではなく。

「最悪です」

この声って……、え……、ええっ!?

と私が息することを忘れそうになるぐらい驚いているうちに、お父さんのげんなりとした声が続いた。

「気が合うな。俺も、お前を目にした瞬間から、ずっとそう思っていたところだ」

「そんなっ！ 岡崎さんと気が合ってしまったただなんて、最悪のさ。らに最悪です！ どうしてくれるんですかっ！」

「今すぐ帰って寝てしまえ」

なんと……、風ちゃんだあっ！

台風、襲来 その2

聞こえてきた風ちゃんの声に、私は跳ね上がるように立ち上がり部屋を飛び出す。そして玄関にいる、薄いピンク色の花柄が白い生地にびっしりと描かれているチュニックブラウスに、ダークブルーのショートパンツを穿き、右手に紙袋、左手に真っ白いヘルメットを持ったその人に向けて、私は歓喜の声を上げた。

「風ちゃん！」

駆けだした私の足音とその声に反応して私を見るや否や、お父さんと対峙していた風ちゃんの顔がぱつと花開き、「汐ちゃん！」と、手にある荷物を問答無用でお父さんの胸にどんと押しつけ、手を使わずに器用に靴を脱ぎ捨てて家に上がり、駆け寄る私を抱き止めた。「会いたかったです！」

「私もだよ！」

お互いに喜びを確かめ合うようにしっかりと抱き合う。風ちゃんは昔から、会うと必ず私をぎゅっと抱きしめてくれた。子供の頃からそれが嬉しくて、今でもこうして風ちゃんをぎゅっと抱きしめ返している。昔と違うのは、当たり前の話だけど私が成長することによる、ハグしたときの体勢ぐらい。今では風ちゃんとほぼ同じ背丈だ。

「ん〜、汐ちゃん匂いです〜」

耳元の風ちゃんの声。およそ七ヶ月ぶりに聞く声。そして温もり。風ちゃんが帰ってきたことが実感となって染み入ってきた。こうしてしばし喜びを分かち合うと、今度はお母さんが喜びを分かち合う番。と言っても、お母さんと風ちゃんが抱き合うわけではない。

「お帰りなさい、風ちゃん」

「ただいまですっ！ うっっ！ お二人にまた会えて、風子、とっても感激ですっ！ 感激しすぎて、もうどうかなっちゃいそうです！」ハグしあっていた私たちはひとまず離れ、喜びをぎゅっと握り

しめるように両の手を強く握る風ちゃん。

見る人によつては、七ヶ月ぶりの再会にしては大袈裟に感じるかもしれない。なにぶん、七ヶ月前までは、少なくとも二、三ヶ月に一度は会っていたし、数年前までは、多きときは月に数回うちに遊びに来ていた。もつと昔は毎日のように。

お母さんはそんな風ちゃんの手をそつと包むように握り、「私も嬉しいですよ」と満面の笑みで答えた。そして、歡喜の声に湧く中でただ一人、お父さんだけが声を荒げていた。

「俺とは嬉しくないのかよっ！　つか、年中どうかなつてるだろうが！　お前の頭はっ！」

「なに言ってるかさっぱりです。それに、嬉しくないからさつき最悪と言ったんです」風ちゃんは身体の向きと表情をくりと変えて不機嫌そうにそう言つと、「そんなことも分からないのですか。はあ、困つたものです」と、呆れるように両の手のひらを上に向けて、やれやれとため息をついた。

「困つてんのはこっちだ！」

「ああ言えばこう言う。まったく、岡崎さんは相変わらず失礼です。今度は腹立たしげに両の拳を腰に当てて言った。

「こんな朝っぱらに連絡なしでやって来て、俺の顔見るなり露骨に『うわ、最悪』って顔をして、口を開いたと思つたらそのまんま『最悪です』なんてぬかすヤツの方が、よっぽど失礼だろ！』」

「岡崎さんが失礼だからです」

「どつちがだ！」

うっん、二人ともどこまで続ける気なんだろう。と、一観客気分だと思っていると、風ちゃんが突然、何か重要なことを思い出したかのように「はっ！？」と口を開いた。私もお母さんも、どうしたんだらうと見守り、お父さんはやや疲れたように、今度は何だと怪訝な顔をした。

私たちが見守る中、風ちゃんは腰に当てていた手を前に出して、見つめる自分の空手を二、三度にぎにぎした。そして再び顔を上げ、

お父さんを見るともう一度びっくりした。

いったいどうしたのか、何となく察しがついた。それはお父さんも同じで、心底疲れた顔をしていた。

風ちゃんは、びしりと指さした。お父さんに向けて。正確に言えば、お父さんに抱きかかえているヘルメット、ではなく紙袋へ。

「イリユージョンですっ！ 岡崎さん、いつの間に風子のおみやげを猫ばばしたんですかっ！」

「お前の頭の方がイリユージョンだっ！ お前が俺に押しつけたんだろっがっ！ ついさっき！」

「は？ 汐ちゃんに抱きつくのに邪魔になったからといって、目の前にいた岡崎さんに押しつけたりなんか、私がするはずないじゃないですか」

「……すっかり覚えてんじゃねえか。しかも具体的に」

「とにかく、人のモノを無断で取っては駄目です。それと、うるさくして風子たちの邪魔をしないで下さい」

あ、なんかお父さんの表情が変わった。なんていうか、ハイテンションな怒りから、氷原のすぐ下のマグマが、ゴゴゴと音を立て始めているような。といっても、いかにも怒っているようでその実、本気で怒ってはいないんだけど。言ってしまうえば、こうしたやりとりがお父さんと風ちゃんの日常会話みたいなものだから。

そして、お父さんがゆらりと言った。

「……なら、うるさく思わないようにしてやるっじゃないか」

その声に本気を感じるのには気のせい？ 日常会話、だよな……？ 本気が冗談か、半分本気で半分冗談かはさておいて、どうやら実力行使に打って出ることにしたお父さんが、ヘルメットと紙袋を床に置いた。お母さんはすぐさま「パパ、乱暴は駄目ですっ」と機先を制するように言い、私も「そっだよお父さん」と注意する。でも、そこは風ちゃん。

「まさか……、風子を襲う気ですか！ 風子があまりにも魅力的だから、めろめろになってしまって、女の人に飢えた獣になってしま

つたんですか！ ああつ！ 風子は、とても罪な女ですつ！」

風ちゃんのこの返しに、氷原を割ってマグマを吹き出す、のではなく、割れた氷原の隙間にずぶずぶと落ちていくような感じで、お父さんの体勢が崩れかけた。危うくそのまま両膝を付きそうになったお父さんだつたけど、ぎりぎりのところで踏ん張り、堪えきつた末の渾身の一言を放つ。

「なるかあつ！」

その直後、力を使い果たしたかのようについに膝が完全に折れて床につき、両の手のひらもぺたしと床につき、ため息を一つこぼしてからぼつりと呟いた。

「なんで朝っぱらから、こんなに疲れなきやならないんだ……」

さすがのお父さんも、この時間からハイテンションを維持し続けるのは厳しかったみたい。ということで勝負あり。お父さんの戦意喪失により、風ちゃんの勝ち。

こうして、お父さんと風ちゃんの日常会話が一区切りつくと、ここで立ち話もなんだから、居間に行きましょうというお母さんの提案で、私たちは移動した。その最中、風ちゃんはきよきよと家の中を観察していた。新しい我が家に来たのは、今日が初めてだからね。

居間に入ると、例外に漏れず風ちゃんは感嘆の声を上げた。ただしその声は、純粹な喜びに満ちたもの。たいていの人は、喜ぶにしろまずはこの光景に驚く。気持ちには分かるけどね。

「うわあつ！ だんご大家族が大家族ですつ！」

「うん。やっと一つ屋根の下で一緒になれたんだ」

「そうですかあ。良かったですねえ」だんご大家族の前に駆け寄って、どこかうつとりとした声と眼差しの風ちゃん。その言葉はこの子たちに向けられたものだと思うけど、私やお母さんにも向けられているように感じて、嬉しくて思わず「みんな大喜びしてるよ」と自慢げに言った。

「やっぱり、家族一緒が一番です」

「私もそう思う」私は、ごく当たり前にそう答えた。

二人でだんご大家族を眺め始めてすぐ、お母さんが「風ちゃんは朝ご飯まだですよ」と尋ねた。時刻を考えればそう判断するのは間違っていないけど、やたら断定的な言い方に、あれ?と思った。

「はいっ、まだですっ! とつてもペコペコですっ!」

「胸張って言うな」とお父さん。

「大きなお世話です。それにしても、渚さんすごいです。なんで分かったんですか」

「つい今し方、公子さんから電話があつたんです」

なるほど。聞き逃していた間に、そんなような会話を公子さんとしていたのか。

というわけで、お母さんはさっそく風ちゃんの朝ご飯を作るべく片付け途中だった食器を持って台所に入り、私は運びきれなかった残りの食器を運んだ。そしてお父さんは、「朝からこれ以上疲れるわけにはいかない」と、会社に行くべくセカンドバッグを手にした。「風子が来たというのに、もう行ってしまつのですか。どこまで失礼な人なんですか」

「俺と会って、最悪なんじゃないのか?」

「さっきまではそうでしたが、今は違います」

「じゃあ、今は最悪じゃないっていつのか?」

「はい。“プチ最悪”です」どこか疲れを感じるお父さんとは違って、どうだ、とばかりに満面の笑みで答えた風ちゃん。

「どつちにしる最悪って文字入ってんじゃねえか!」

でもこの場合の“最悪”は、本来の“最悪”という意味とは違うから。というか、お父さんに対して使う“最悪”という言葉は、常に本来の意味では使われていない。まあそれはともかくとして、ある意味コントな会話をする場合、たいていはペースをコントロールできるお父さんだけでなく、風ちゃん相手となるとそうもいかず、ペースを握られっぱなしになるのが常。そんなお父さんの姿を見るのも、正直言つて楽しかったりする。だからもう少し二人の日常会

話を楽しみ続けたいところなんだけど、このままだと本当に遅刻し
かねないし、娘として黙認するわけにもいかない。

いつも出る時間には数分の猶予があったし、その時間を二十分ち
かくオーバーしても遅刻にはならないぐらいの余裕は持っていたけ
ど、再び二人が日常会話が始めてしまえば、その余裕もどこまで信
頼できるか、正直疑問なのだ。

「お父さん、そろそろ出た方がいいんじゃない？」

「ああ、そうしたいんだけど……」そう言っつて、風ちゃんに非難
の目を向ける。

「仕方ありません。汐ちゃんに免じて、許可しましょう」

「そりゃどうも。んじゃ行ってくる」

私もお母さんも「いつてらっしゃい」と言葉を掛け、腕組みをし
て答えた風ちゃんは、ちよつと残念そうな顔で見送る。そしてお父
さんは、居間を出る直前で足を止めると半身を返してにこやかに言
った。

それまで、なにも知らない人から見れば険悪な仲にも見えるよう
なこの日常会話が、まるで嘘のように。

「お帰り、風子」

風ちゃんはその言葉に、「ただいまです！」と真つ直ぐな笑顔で
答えていた。

台風、襲来 その3

お父さんが会社に行ってしまうと、けたたましい日常会話を風ちゃんとする人がいなくなり、居間の中はほのぼのとした空気に包まれた。私もお母さんも、お父さんのようなツツコミは出来ないのだ。基本、私もお母さんも、風ちゃんのペースに合わせて一緒に楽しむ傾向が強いらしい。

私自身、お母さんほどではないと思っているのだけど、お父さんだけでなく、陽平おじちゃんや杏先生も、たいして変わらないと言いつ切っている。ついでに、風ちゃんの扱いが上手いとも言われている。なんと公子さんにまで。

まあ、扱いが上手いという表現に違和感はあるけど、接し方という表現に置き換えれば、風ちゃんとお喋りをしているときのお父さんに陽平おじちゃん、杏先生の姿を思い浮かべれば、そうとも言えるのかなと思う。なにしろお父さんたちは、風ちゃんとはらくお喋りすると、必ず最後は疲れた顔でギブアップしているし、対して私やお母さんは、どれだけお喋りしてもそうはならないから。

そして私は、風ちゃんの朝ご飯を作る音が台所から聞こえてくる中、風ちゃんと二人でお喋りに興じた。

「風ちゃんはいつこっちに帰ってきたの？」

「昨日の夜遅くです。本当は、お昼ぐらいには帰ってくる予定だったんだけど、向こうの天気が悪くて、そのせいで出発が遅れて、空港ですつと待たされてしまいました。もう最悪でした」

風ちゃんは少しばかり頬を膨らませるようにそう答えると、冷たくしたお茶をずずつとすすった。

「大変だったね。それでこんな朝早くうちに来たんじゃ、今すぐく疲れてるんじゃない？」

この質問には、表情を一片の曇りもない笑顔にくるつと変えて「全然平気です。バイクで来ましたから」と答えた。そういう答えを

待っていたわけじゃないけど、とにかく平気なのだそうです。話だけ聞くと、いやそんなことはないでしょと思うところなのだろうけど、いつも元氣いっぱいな風ちゃんのタフネスさを考えると、変に納得してしまう。

「あれ？ 風ちゃんいつの間にバイク買ったの？」私の記憶では、確か風ちゃんはバイク持っていないはず。

「バイクなんて買ってませんが？」

ということは、誰かに借りていたバイクということかな。それとも、公子さんの？

風ちゃんはマンションで一人暮らし。といつても、公子さんの家からたいして離れておらず、なんだかんだと公子さんに世話してもらっている部分は少なくないので、実質的には一人暮らしをしているとは言い切れなかったりする。それはともかく、昨日の夜遅くにマンションに帰った風ちゃんが、朝一番で公子さんの家に行き、スクーターを借りて家まで来た。という推測は非現実的なものじゃない。

でも、風ちゃんのすぐ脇にあるヘルメットが、その推測を全面否定している。白地のオープンフェイスのヘルメットには、『風神参上！』とでかでかと書かれたステッカーと、『ルール無用！』とこれまたでかでかと書かれたステッカーと、『月光仮面』というよく分からないステッカーが、これ見よがしに貼られている。

公子さんがこのようなヘルメットを被っているとは思えない。もしこんなヘルメットを公子さんが被っていたりなんかしたら……。そして、何十キロも制限速度を破ったり、ことごとく信号を無視したり、蛇行したり、走行中に乱暴な言葉を口にしたり、白いマントを翻したりと、嬉々として暴走したりしていたら……。

そんな公子さんは絶対にいやだ。

公子さんは公子さんのままが一番良い。例外は一ミリたりとも認めません。

ということ、なんだかとても悲しい気持ちになってしまったそ

の想像を力の限り振り払い、きつと、こういったステッカーを貼るようなアグレッシブな知り合いに借りていたバイクで来たのだろうと思うことにした。ついでに、実際にこのヘルメットを被ってうちまで安全運転してきた風ちゃんの姿と、大興奮で暴走する姿を想像してみたところ、とてもほわほわした気持ちになった。

バイクについてはここまでにして、私は、向こうで過ごした七ヶ月間の話を聞くこととした。風ちゃんは、途中で朝ご飯をはさみ、全身を存分に使いながら色々話を聞かせてくれた。

公子さんが家に来たのは、アパートメントの一風変わった住人の話で盛り上がっていた、十時を数分過ぎた頃だった。呼び鈴の音にお母さんが出て、お母さんの声と公子さんの声、そして二人分の足音が居間へとやって来た。

「おはようございます、汐ちゃん」といつもどおり爽やかな公子さんは、うつすらと汗を掻いている。

「おはようございます、公子さん」

「ごめんなさいね、朝早くふうちゃんが押しかけたりして」

「そんなことないです」

「駄目でしょ、ふうちゃん。迷惑かけちゃ。それに、何も言わないでおねえちゃんのバイクを使ったりして」

え……。じゃあまさか、あのアグレッシブなヘルメットは……。

い、いやいや、そんなことはない。ヘルメットは他の人のだ。うん。絶対そうだ。

「ちゃんと置き手紙してきました」と不満げに風ちゃんは抗議する。でもその抗議は間違ってますよと言わんばかりに、「あのねえ……」と公子さんはため息混じりに呟き、手にしている小ぶりのトートバッグから一枚のチラシを出した。確かにスーパーのチラシは置き手紙にはなり得ないよ、風ちゃん。と一瞬思ったのだけど、すぐにそれがただのチラシでないことが分かった。商品の小さな写真や値段や宣伝文句がびっしりと埋まっているその上に、大ききの統一されてない四角形の小さな紙片が、間隔を置いて列をなして貼られて

いて、その紙片一つ一つにはそれぞれ一文字ずつ書かれている。

言ってしまうえば、一文字ずつ切り貼りされた脅迫文のような感じだった。残念ながら、台紙がスーパーパーのチラシなので極めて見にくくて、例えこれが本物の脅迫文書だったとしても、きつと気付かずに捨てられてしまうだろう。

そしてこの、脅迫文らしきチラシには、こんなメッセージが切り貼りされていた。

『くすーたーはあずかった。かえしてほしくば』

ああ、その先が思いつかなかつたんだね。もしくはそこで飽きたか。それと、漢字探し出すの面倒だったから、全部平仮名でやったんだね。

「これのどこが置き手紙なの？」チラシ、じゃなくて置き手紙を前にかざし、ちよつとだけ強い口調で叱る公子さんに、風ちゃんは得意げに親指を立てて答えた。

「ばつちりです」

「ばつちりじゃありませんっ！もう。いつの間にか居なくなっちゃったから、おねえちゃん心配したのよ？それにっ！これ作るのはいいけど、今日の朝刊を切り抜いちゃ駄目でしょっ。ふうちゃんが新聞めちやめちやにしちゃったから、祐くん新聞読めなく、て、つて、それっ！」

公子さんは何かに気付いたように話を中断して、風ちゃんの方に指さした。

「どれですか？」

「私のヘルメット！」

ウ、ウソデシヨ？

……公子さんって、ヘルメットに『風神参上！』とか『ルール無用！』とか『月光仮面』っていうステッカーを貼るアグレッシブな人だったの？

そ、そんなの嫌ーっ！

「なんてことしてるのよふうちゃん！おねえちゃんのヘルメット

に変なステッカー貼らないでよお！」

へ？ あ、そうなんだ……。

よ、良かったあ〜。公子さんが貼ったって言われたら、しばらく高熱でうなされるところだったよ〜。

ありがとう、神様。

「何してるの？ しおちゃん」

「神様に感謝してるの」

暖かい光に充ち満ちた中にいるような気持ちで心から感謝を捧げている私に、お母さんは不思議そうに「ん？」と声を漏らしたただけだった。

「変じゃないです。バリバリです。伝説レベルです。それにですね、そもそもお姉ちゃんは、飾り気がなさ過ぎます！」

「そんな飾り気いりませんっ！ あとでちゃんと剥がすんですよ？ いいわねっ？」 さっきよりも強い口調で命令する公子さん。でも風ちゃんには通じなかった。

「分かりました。もっとアグレッシブなシールを」

「何も貼っちゃだめっ！」

「ではサイケデリックな」

「何もつて言ったでしょっ」

「やれやれ、お姉ちゃんは注文がうるさすぎです」

「誰も注文してませんっ！ もうっ。おねえちゃんはふうちゃんと違って、そういう恥ずかしいヘルメットは被れないのっ」

なんていうか、風ちゃんと公子さんの会話を聞くといつも、お父さんと風ちゃんの日常会話に近いものを感じる。でも、決定的な違いが一つある。

「だから一切貼っちゃだめっ。描いたり塗ったりしてもだめっ。い・い・わ・ねっ！」

「仕方がありません。お姉ちゃんを恥ずかしい女の人にするような人は許せませんから」

「……それ、ふうちゃんがやるうとしてたことだって、分かってな

いよね」

そう、お父さんは最後に戦意喪失して敗北するけど、公子さんは戦意を失いかけても最後は勝つ。例え薄氷の勝利でも、勝ち負けは勝ちさすかは風ちゃんのお姉さん。

そして、やっぱりお姉さんだなあと思うようなコメントを、その後再開された風ちゃんのおみやげ話に時折つけていた。例えば、パーティーで明け方まで飲んだという話には「そんな時間まで、しかも酔っぱらっちゃうまでお酒飲んじゃだめだよ」とか。例えば、カジノに行ったときの話には「無駄遣いしすぎなかった?」とか。例えば、街中で会った面白い人の話には「知らない人には十分気をつけなきゃだめよ?」どこかに連れてかれちゃうかもしれないから」とか。

なんていうか、お姉さんというより、お母さん?

そんな感じで風ちゃんのおみやげ話を三人で聞いているうちに、時刻はあつという間に十二時近くになっていた。向こうで仲良くあった六歳ぐらいの女の子の話が終わったところで、風ちゃんのお腹がぐうと鳴った。

「お腹がすきました」

みたいだね。ということ、お昼はどうしようかという話に自然と移り、公子さんは、風ちゃんを連れてそろそろ帰るからと言ったけど、お母さんと私で懇願してどうにか押し切った。

「ごめんなさいね、渚ちゃん」

「いえ、私たちの方こそ無理をお願いしてしまって」お母さんは公子さんにそう答えると、「何かリクエストありますか?」と風ちゃんに尋ねる。

「外国暮らしが長かったので、和風な食べ物がいいです」

七ヶ月も外国にいたんだもんね。

「もうちょっと具体的に言ってもらえると、助かるんですけど」

「ズバリ、和風ハンバーグです!」

確かに“和風”ではあるけど……。と思ったのはお母さんも公子

さんも同じで、公子さんは実際に口にしていた。

「ふうちゃん、それって、和風料理とは言わないんじゃないかしら」
「そうなんですかつ！ それじゃあ……、和風スパゲティで！」

「まさかと思うけど、ふうちゃんの言う和風って、そういう意味なの？」

「他にどんな意味があるっていうんですかつ。というか……、これも“和風”ではないと言うんですか！」あまりの衝撃に変なポーズで固まる風ちゃん。

こんな調子でもうしばらく続くのかと思ったけど、お母さんがこの流れをすぱつと断ち切った。

「とりあえず、シヨップピングモールのレストラン街に行ってみましょうか。あそこなら、いろんな食べ物があるから、風ちゃんの食べたいものが食べられるでしょうし」

これに賛成しない手はない。「私もそれに賛成！」と手を挙げる。そして公子さんも「それが一番いいかもね」と観念した様子で同意。もちろん風ちゃんも同意し、お母さんと公子さんは日傘を手に、私と風ちゃんは帽子を被って、シヨップピングモールへと向かった。

近くのバス停まで行き、たいして待たずにやって来たバスに乗ると、二人掛けの席に私と風ちゃんですり、その後の二人掛けの席にお母さんと公子さんが座った。そして、風ちゃんは座って早々にとうとうとし始め、最初のバス停を通り過ぎたときには寝息を立てていた。その寝息は、バスがぐいんと右折したり左折したりして身体が横に倒れても、ブレーキでぐつと身体が前に押し出されそうになっても、途切れる気配はまったくくない。

全然疲れていないと言ってた風ちゃんだけど、やっぱり疲れてたみたいだね。

私はそつとしておくことにして、ぼんやりと風ちゃんのおみやげ話を思い返すことにして、目を閉じる。そして聞こえてきた声。

「汐ちゃん」

「ん？ なんですか？」私は首をひねって後ろを向いた。

「ふうちゃん、寝ちゃったんですか？」

なんで分かったんだらうと不思議に思いつつ、「はい。気持ちよさそうにぐっすり寝てます」と答える。考えてみれば、バスに乗るまではずっと喋っていた風ちゃんが言葉を発していないし、身体がぐらんぐらん動いているのだから、真後ろで見ているれば気付くのも当然か。しかも今こうして私の肩にこてんと寄りかかっていれば。

「重くない？ 席変わりましょうか？」

「大丈夫です。それに、こうしているとちよっと嬉しいんで」

「そう？ 重くなったら、教えてね？」

「はい」風ちゃんの温もりを感じながら私は公子さんに答え、お母さんは「さすがの風ちゃんも、やっぱり疲れてみたいですね」とくすりと笑っていた。

公子さんの話だと、風ちゃんが帰ってきたのは夜の十一時過ぎ。自宅にはなく、公子さんのお家に行つて、そしてスクーターを拝借したのかと思つたらそうではなかった。そのようにした理由は、大きなトラックの中から家の鍵を探し出すのが面倒だったからとのこと、その気持ちはよく分かる。疲れた身体でぐちゃぐちゃなバッグの中を引っかき回すのって、本當きついんだよね。しかも私の場合なんて、バッグのなか汗臭いし。

公子さんのお家で存分にお風呂に入った風ちゃんは、深夜一時過ぎまでリビングでくつろぎ、公子さんに言われてようやく就寝。で、朝起きたらすでに風ちゃんが起きていて、朝の支度をしているうちにいつの間にか姿を消していた、というのが今朝までの顛末。

「こんなんで七ヶ月も海外生活していたなんて、やっぱり私には信じられません」という公子さんの言葉はとても説得力があった。

でもこれに「公子さんは心配しすぎです」とお母さんが笑顔で異を唱える。公子さんには心配しすぎる傾向があることは誰もが認めるところ。無理もないけど。

ただ、なにも風ちゃん一人で七ヶ月もニューヨークで暮らしてい

たわけじゃない。瀬田さんや他の数人のスタッフさんも一緒だった。だから、信じられないというのはさすがに大袈裟かなと思う。

今回の長期滞在は、主に女性向けのバッグを手掛けているファッションブランド“HSF”の、アメリカ進出の足場を作るためのもの。そして風ちゃんは、そのデザイナーさんだったりする。

ちなみに“HSF”とは、“Happy Star Fish”の略。つまり風ちゃんのファッションブランドのようなもの。といっても、風ちゃんが社長さんをやっているわけじゃない。公子さんの知り合いの瀬田さんが社長を務めている。

風ちゃんがまだリハビリをしている頃、たまたま目にした風ちゃんの自由奔放なセンスに強く興味を持ち、瀬田さんはデザイナーの道を勧めた。その後、日常生活を送れるまで回復した風ちゃんは、これから何をしようかとあれこれ考えた末、デザイン学校に行ってみようと決めた。

学校を卒業した風ちゃんは、瀬田さんの誘いを受けて、瀬田さんが社長を務めるデザイン事務所に入った。その後、研修という名目で一年以上、瀬田さんともう一人のスタッフさんと一緒にヨーロッパに滞在。その間の公子さんの心配ぶりは、見ていて可哀想に思えるほどだった。しかも風ちゃんに、来ちゃ駄目ですと言われていたので、なおさら。

帰国してその二年後、瀬田さんはもとのデザイン事務所を他の人に完全に任せ、新ブランド“HSF”を立ち上げて、デザイナーに風ちゃんを抜擢。当初は、周囲からなんて無謀なと散々言われ、今でもたまに言われているそうなのだけど、面白そうなことに挑戦しない方がどうかしていると笑い飛ばし続け、今に至っていた。

ブランドとしてはまだまだ知られていないのが現状だけど、じわじわと噂になり始めているらしい。特にこの辺りの地域では。

なお、チャレンジ精神旺盛な瀬田さんはとも面白い人で、風ちゃんと互角以上にボケ倒し続けられる強者でもある。それゆえお父さんや杏先生は、奇跡の人と呼んでいた。

当たらずとも遠からず、とはまさにこのことを言うのかな。

という瀬田さん相手でも、公子さん的にはそう笑って済ますことは出来ないようで、「それに、風ちゃん一人というわけじゃありませんでしたし、瀬田さんも一緒にしたから」というお母さんの言葉に、「そうなのよねえ……」と、深い深いため息をついていた。

「ふうちゃんがどれだけ周りの皆さんに迷惑を掛けたかを考えると……、ハア……。あとで皆さんにお礼とお詫びをしなくちゃ。一人なら一人で心配だし、他の人と一緒にしても心配だし。ふうちゃんもつともしっかりしてくれればいいんですけどね。いつまで経ってもこんな調子だから」

これにはさすがにお母さんも苦笑いで返した。「でも、風ちゃんはずごいです。がんばって勉強して、立派なデザイナーさんになって。そのうち、世界的に有名なデザイナーさんになるかもです」

「まさかあ。いくらなんでも、それはないでしょ」

「風ちゃんはとつてもがんばり屋さんだから、夢じゃないと思いませんよ」

「ふうちゃんが、世界的な有名人、ねえ……」公子さんは思案げに呟いた。お母さんと公子さんのやり取りを、ずっと黙って耳を向けていた私も考えてみる。まず、風ちゃんワールドを展開する風ちゃん。そして、周囲に群がる人たちの、疲れきった顔。

これって、どうなんだろう……。

と思つた矢先、公子さんの心のこもつた声が聞こえた。

「なんだか、想像したくないぐらいに気苦労が増えそうで、素直に喜べません……」

「こ、公子さん、大丈夫ですよ、瀬田さんがいますし」

必死になるのは仕方がないとして、お母さんのそのフォローもどうなんだろうと思う。公子さんのため息が一つ増えちゃってるし。

「あ、えと、私たちもいますからっ！」

「ありがとう。渚ちゃん」公子さんはそう言うと、ふうと一息ついた。それで気持ちを切り替えたみたいだったけど、それは明るいも

のではなかった。

「それに、正直言つとね……。本当はこんなこと言つちやいけないんだろうけど……。ふうちゃんががんばればがんばるほど、ちよつと寂しい気持ちになつちやったりもするんです。誰よりも喜んであげなくちゃいけないのにな」

「公子さん……」

「いつだつて私の側にいようとしていたこの子が、自分の意志で私から離れて、自分の進む道を一生懸命走つて、どんどん遠いところへ行つてしまつて……。今じゃ、ニューヨークにまで行つちやうんですものね……」

風ちゃんは事故にあつまで、友達を作ろうとせず、あまり一人でどこかに行こうともせず、いつも公子さんの側にいようとしていたらしい。意識を取り戻してからは、一人で歩き出そうとする姿勢はあつたけど、何年も寝たきりだつた身体はそう簡単には元に戻らず、何年も公子さんと芳野さんの三人四脚でがんばり続けた。

その間、どれだけ辛くて苦しい想いをしていたかなんて、当時の話を少しだけ聞いたことはあるけど、それだけで容易に想像できるものじゃないし、ましてや分かつてしまうものでもない。でも、たとえ暮らす場所が近くて、まめにふうちゃんの世話を焼いていても、遠い場所へと真っ直ぐ走り続けている風ちゃんに寂しく思う公子さんの気持ちを察すると、ほとんど分かつていない私でも切なくなる。私は、何か声を掛けたいと思つた。でも、何て言えばいいか分からず。

「どんなに遠い場所に行つても」と、お母さんの優しい声が公子さんに向けられた。私は言葉を探すことを止め、続くお母さんの言葉に耳を傾ける。

「風ちゃんはいつだつて、公子さんのところに帰つてきます。だつて風ちゃん、公子さんのこと、誰よりも大好きなんですから。だから心配する必要なんてありません」

「渚ちゃん……」

「それに公子さんは、どんなときも風ちゃんのお姉ちゃんです」
公子さんは、その言葉をゆっくりと受け止め、そして照れくさそうに言った。

「……なんだか、いつまで経っても妹離れできないお姉ちゃんみたいですね。私」

バスのエンジン音が足下からざわめき続ける中、公子さんのその言葉は、どこか嬉しそうに聞こえた。そして私の隣では、風ちゃんが幸せそうに眠っていた。

「ジャンボブラザリアンハンバーグをお願いします」という寝言を口にして。

Episode「台風、襲来」 -了-

台風、襲来 その3（後書き）

満を持しての風子編でした。

風子が風子らしくいられる未来、というものを考えた結果、このよ様な設定になりました。まあ、世の中そんな甘くないという声はそこかしこから噴出するとは思いますが、風子らしさは絶対の正義です。だからどんな無理も無茶もオールグリーンです。

まあ、公子さんの気苦労を考えると、ワールドワイドになっていく風子より、ずっと地域限定の風子の方がいいのかもしれませんが……。

再会の大地 その1

私は今、電車の窓から外を眺めている。流れ来ては足早に去っていく風景は、前回来た六年前とたいして変わっていない、と思う。鮮明な記憶が余すことなく残っているわけじゃないから、断言なんてできるはずもない。でも、この風景の中で日々を暮らしているのなら、きつと驚くような変化となって私の目に映っていることだろう。

外の人から見れば、取るに足らない些細な変化でも。

そして視点を、私の座席から通路を挟んだ隣の、向かい合う四人掛けの席へと窓の外から移すと、そこには驚くような劇的な変化があった。

「ダウト」と極めて平静なお父さんの声。その正面に座っているあつきが「な、なんだと小僧！俺が嘘ついても言うのか！」と、動揺を顕わに言った。

「そう言っただけど。つか声でええよ」

「るせー！ てめ、この俺様をバカにしてんのか！俺が嘘を付く人間だと！」

嘘を付くも何も。持っていない数字のカードをさも「持ってます」と言わんばかりに出して、ダウトと言われずに何食わない顔でやり過ごして勝つっていう、いわば、いかにして嘘を嘘と見破られないようにして相手を欺して、いち早く手持ちのカードを全て場に出しきるか、それを競うゲームなんだから。

などと思う間に、あつきーの隣に座る早苗さんが「秋生さん。私は信じてますから」とにこりと一言。

「早苗……。ふっ。さすが俺の女だぜ」

「私はパパを信じます。お父さん、ときどき嘘つきますから」お母さんは隣に座るお父さんに加勢。

「なんだとっ！ 娘よ、お父さんは悲しいぞ」

「だから声でけえって言ってるだろ」

ちなみに私は、もうしばらく外の景色を眺めていたかったので、トランプをやるうという提案に「もうちょっと眺めていたいから」と加わっておらず、よって中立。

「とにかく早く見せてみるよ。オッサン」

「うっせえ！ 誰がためえなんかに見せるか！」

「ガキかあんたは……。ま、てことはつまり、そういうことなわけだな。早く全部持ってけよ」鼻で笑うようにアッキーに言うお父さんも、あんまり人のこと言えないと思うよ。

「ぐぬぬぬっ……。！ 小僧……。ここで俺にダウトしたことを、後悔するなよ！」唸るような声でそう言ったあつきーは、突き合わせているみんなの膝の上に置かれた、特設テーブルという名の早苗さんの大きめなトートバッグの上に重ねられているトランプを、悔しさ満点の顔で全てすくい上げた。それを見た早苗さんが、声を潤ませて悲しげに呟いた。

「秋生さん……。嘘ついていたんですね……」

「早苗よ、男にはなあ、嘘を付いても勝たなくちゃならない勝負があんだよ」

「なんて悲しい勝負なんでしょう……」

格好良く言っただけの顔で言われても、そもそもそういうゲームなわけだから。それに早苗さんも、そこまで悲しそうにしないで。というか早苗さん、すでにお父さんとお母さんに対して計四回ダウトしているんだけど。という私の感想を代弁するかのようにな、お父さんがいつものように呆れ顔で言った。

「お願いですからこんな場所であほあほコントせんで下さい。次は早苗さんですよ」

「はいはい」よよよと悲しげだったはずの早苗さんは瞬時に消え去り、語尾にたくさんの音符をつけたような明るい声と笑顔で答えて、場にカードを出した。

そう。これが劇的な変化。

ちなみに、ローカル線の電車の中でダウトをしていることが、ではない。

毎年この時期、我が岡崎家は家族三人で旅行をする。私がうんと小さい頃からの恒例行事で、私にとって夏休み最大の楽しみでもある。そして今年も、その家族旅行にあつきーと早苗さんが一緒なのです。私の強い要望と策略で。

もともと、二人も一緒になって、みんなで旅行をしたいという希望は子供の頃からあった。この恒例行事もその例外ではなく、まだ小さい頃、一度だけお母さんとお父さんに、あつきーと早苗さんも一緒に頼んだことがあった。二人はあつきーと早苗さんに頼んでくれたのだけど、答えは言わずもがな。私は納得がいかず、直接あつきーと早苗さんに頼み、二人は断った理由を話してくれた。

お店のこととか早苗さんの塾のこととか、お父さんと直幸おじいちゃんのこととか。

二人の話してくれたことをちゃんと理解するには、私は幼すぎた。恥ずかしながら、半ベそをかきながらけっこう駄々をこねたことを今でもうっすらと覚えている。でも結局は、早苗さんのごめんねという申し訳なさそうな顔に、子供ながら諦めるしかないと思っただらしい。そこらへんの感情の記憶はほとんど残っていないので自信はない。

というようなことがあって、以来この旅行に二人を誘うことはしなかったのだけど、なぜか今回は、思い出したように猛烈に二人を誘いたくなり、まずは正面から誘って結果は案の定のもの。これは策を弄する必要があるとあれこれ考え、作戦を立案。そして実行し、めでたく今の状況になったのでした。

ひよつとして、私って策士の資質あるのかな、なんてちらりと思ってみただけど、そんな私を指さして大笑いするたくさんの友達の顔が思い浮かぶと同時に、どうせ資質の“し”の字もないですよとその考えを捨てた。そして、私と同じように策士としての資質の“し”の字もないと思われるお母さんが、なんとダウトで一抜けを果た

した。

最後の二枚を場に出したお母さんは、「あがりですっ！」と心底嬉しそうに勝利を宣言した。これに対して、早苗さんは素直に「渚、すごいです」と微笑み、それとは対照的に、そんな馬鹿なと動揺を隠せないお父さん。正直、私も焦った。なんていうか、今まで自分と同じぐらいのレベルだった人が、いきなりずっと上の遙か彼方に行ってしまった、ぼつんと取り残されてしまった自分を必死に否定するような感じで。そしてあっきーもひどく動揺して、そんなことがあるはずがないと叫び、ダウトを宣告した。

結果はすでに言ったとおり。あっきーは、悪夢だ、と呟きながら山となつていいる場のカードをかき集め、手持ちのカードの枚数を倍に増やすこととなった。これで全カードのほとんどを手中に収めたあっきー。当然、その枚数に喜ぶはずもなく、がくりと項垂れた。

次に上がったのはお父さん。あっきーはお父さんの出した最後のカードに問答無用でダウトを宣告したけど、さらに手持ちのカードを増やす結果となった。

そして次に上がったのは早苗さん。というか、早苗さんのにこやかに訴える眼差しに、あっきーが明らかに屈したその結果だった。

こうして初戦は、誰もが予想していなかったお母さんが一位を取った。でも、お母さんが一位を取ったのはそれが最初で最後。続く二戦と三戦は、早苗さんが勝利。第四戦にお父さんがかろうじて一位を取ったけど、第五戦は早苗さんの返り咲き。ちなみに、最終的にお母さんとあっきーで二回ずつ、お父さんが一回最下位となり、早苗さんは、初戦を除けば常に二位以上だった。

早苗さんのこの強さに、意外だけど意外じゃないというなんともどかしい気持ちにもなったけど、対戦相手をぐるりと見渡せば、やっぱり意外な結果でもないなと一人納得していた。

第五戦が終わったところで、疲れたからとお母さんが離脱し、代わりに私が参戦。ついでにゲームも『大貧民』に変更となって、計五戦した。ここではあっきーが汚名返上とばかりに五戦中二勝し、

私が一勝にお父さんが二勝、早苗さんは一勝も出来なかった。そしてトランプはお終いとなり、ほどなくして目的の駅に着いた。

ローカル線の駅とあってそう大きな駅舎ではないけど、駅前はずいぶん整備されていて、いかにも観光地ですと言いたげな、地元の名産品をこれでもかとアピールするような看板やのぼりを掲げる飲食店やお土産屋さんはずらりと並び、その向こうには連なる山々が見えて、私たちの旅行気分がさらに上昇した。

駅の改札を出た私たちは、駅前のロータリーで出発時間を待っている数台のバスの中の一つに乗り込み、夏を謳歌している自然にすっぽりと囲まれた道で揺られることおよそ三十分、最初の目的地に着いた。木々や草花の揺れる涼やかな音に、鳥たちのさえずる楽しい鳴き声、それと少し不機嫌そうな川の流れる音が道路脇から聞こえてくるそのバス停で降りると、あつきーは「良い感じじゃねえか」と笑顔で感想を口にし、早苗さんは目をきらきら輝かせながら、盛大な感激の声を上げていた。その姿を見て、やっぱり二人を連れてきて本当に良かったと、私の心がさらに躍った。

ひとまずの感想を言い終えると、私たちと入れ替えるように数人の人たちを新たに乗せたバスを背に、周囲の自然に目を向けながらバス停から百メートルほど離れた場所にぼつんと一軒だけある建物へと向かった。大きなロツジといった外観の建物には「お食事処 つつてけ」という、笑いを取りたいのか本気なのかよく分からない店名の看板が掲げられている。ここは看板どおりのお食事処なのだけど、食事以外にも楽しみがあった。ここでは釣り竿を借りることが出来る、目の前の川で釣った魚を塩焼きして食べることが出来るのだ。それと、とても個人的な楽しみが一つ。

車が二台止まっているお店の駐車場を通り過ぎ、中に入ると、お店の人の出迎えの声が響いた。店内の様子は、外観と同じくロツジのような印象が強く、家族連れのお客さんが二組、それとおじいちゃんとおばあちゃんの老夫妻が一組、テーブルで食事したり雑談したりしていた。河原に下りればもう何人かいて、釣りを楽しんでいる

ると思う。

私としては、ここですぐさま釣り竿を借りて河原に下りたいという思いが少なからずあった。もっと言えば、竿を借りなくても良かった。河原に下りて、もう一つの楽しみを実現できれば。ただお父さんの提案は、ひとまず落ち着こうというもので、結局、川を眺められる窓際のテーブルに陣取ることとなった。窓の向こうでは、やっぱり何人が釣りをしていた。

私たちが席に座ると、人懐こそうな中年の女性店員さんがタイミングを見計らって、お水とメニューと、川釣りの案内を持ってやってきた。

「いらつしやいませ。ようこそお越し下さいました。ご注文がお決まりになりましたら、お呼び下さい」店員さんはにこやかにそう言いながら、持ってきたものを丁寧にテーブルに並べ、お父さんはその店員さんに「あとで釣り竿を借りるつもりなんですけど、大丈夫ですか？」と尋ねた。

「はい。皆様の分、ご用意できますよ。竿はたくさんありますので、
「そうですか。それじゃあとでお願い」

とここで、早苗さんが「あの、朋也さん」と遮った。

「はい？」

「私は、遠慮しておきます」

「なんでですか？」

「釣りなんて、やったことないですし」

「ああ、それなら心配ないですよ。なるようになるもんです」

なんともお父さんらしい説得の仕方。店員さんも、よろしければ基本的なことはお教えできますよと言ってくれた。そして、お母さんと早苗さんで一竿借りる、というところで落ち着いた。これで話がついたところで、店員さんはテーブルから離れようとしたのだけど、私はどうしても聞かずにはいられず、思わず呼び止めた。

「あの、すみません！」

「はい。なんででしょうか」

「エリザベートちゃんは元気になっていますか？」

私のこの質問に、店員さんは「あの子をご存じなんですか？」とどこか嬉しそうに答えてくれた。

「六年前に一度来たことがあるんです。ここに」

「そうでしたか。もう結構なおばちゃんになつてますけど、下で元気にしてますよ。どうぞ会ってあげてください」

この言葉を聞いて、私はますますエリザベートちゃんに会いたくなつた。そう、私の楽しみの一つが、エリザベートちゃんに会うことだった。そしてエリザベートちゃんは、釣り竿を貸してくれる、河原へ下りた場所にいる。

「そついや居たなあ。ああ、それで汐はそわそわしてたのか」

「え？ 私、そわそわしてた？」

「そりゃもう。俺はてつきり、お前が」

「お父さん。その先は言わないでね」私はお父さんがその先を言う前にぴしやりと言った。デリカシーのないお父さんがいま何を言うとしてるか、なんて分かり易すぎるぐらい分かる。それはもう、娘だからこそちよつと情けなくなるぐらいに。

「それじゃあしおちゃん、先に下に下りてる？」

「うん」私はお母さんの後押しを借りて席を立ち、店内から下に下りられる階段へとダッシュ。転げ落ちないように手すりに手を掛けながら石階段を駆け下り、エリザベートちゃんがいる場所へと走つた。そして六年ぶりにその姿を目に留め、思わず名前を呼んだ。

「エリザベートちゃん！」

私の声に、エリザベートちゃんのすぐ側にいたおじさんは反応してこちらを見てくれたけど、当のエリザベートちゃんは知らんぷりでも、無視されたからといって怒る相手ではない。まあ、ちよつと寂しかったりするけど。

なにせエリザベートちゃんは、このお店のオーナーさんがペットとして飼っている、豚さんなのだから。

再会の大地 その2

エリザベートちゃんへの一方的な愛情を注いでいると、早苗さんの「まあ〜っ、可愛い〜っ！」というメロメロな黄色い歓声を筆頭に、お母さんやお父さん、あっきーの声が聞こえてきた。そして、こちらにやってきてエリザベートちゃんに一番興味を示したのは、言わずもがな早苗さん。しかも、私を遙かに上回るテンションで、目をきらきら輝かせて、声もとろんとろんに溶けて、まるで小さな女の子になってしまったかのように可愛いという単語を連発し、エリザベートちゃんを撫で続けた。

ここまで早苗さんがノックアウト状態になつた姿を見るのは、過去の記憶をどれだけ漁ってもこれが初めて。それだけ、エリザベートちゃんの破壊力が凄いとことなのだと感じしていると、お父さんが苦笑し、私に言った。

「六年前のお前と渚を見てるみたいだな」

「え？ 私、こういう感じだった？」自分ではここまでメロメロにはなっていないかと思っていたけど、言われてみると否定できない自分が確かにいる。まあ、今の早苗さんの姿を自分に置き換えてみると、ちよつとだけ恥ずかしい気もするけど、だからといってエリザベートちゃんの愛くるしさに抗えるはずもなく、抗う必要もない。そもそも当時の私は八歳。だから問題なし。ついでに、あのとのお母さんも八歳。今の早苗さんも八歳。これでどうだ。

それからしばらく、早苗さんはエリザベートちゃんから離れられず、一足先にお父さんとあっきーが釣り竿を借りて川辺に向かった。残った私とお母さんと早苗さんは、もうしばらくエリザベートちゃんと過ごしてから竿を借り、おじさんに簡単なレクチャーを受けてから川辺に行った。そして、どこで釣ろうかと三人で場所を探し始めてすぐ、私は猛烈な誘惑に襲われた。

二時を少し過ぎた日差しは決して弱くはないというのに、蒸し暑

さを全く感じず、むしろ上流から一緒に流れ下りてくる涼しい風が肌を心地よく撫で、とても気持ちが良い。そして、釣りをする場所を探すそのすぐ側では、どこまでも澄んだ川の水が中央では勢いよく、川辺ではさらさらと流れている。

となれば、どうしたって川の中に素足を浸したいと思うもの。私はその誘惑に易々と屈し、釣り竿を置き、水際の側で靴下と靴を脱ぎ、少々熱く熱せられた河原の石の上を数歩、そろそろと歩いて、川の水にそつと足を浸した。思ったとおり水はとても冷たく、ひゃつと声を上げてしまったけど、すぐに冷たさよりも気持ちよさが上回り、「気持ちいい」と気の抜けた声を上げた。そしてもう数歩前に進んで、くるぶしまで潜った。

冷たい水と、足をくすぐるような川の流れ、そして足裏のツボを手当たり次第押してやるうとしていているような石の感触。そのどれもが私の背骨をどこかに隠してしまいそうな勢いで、私をふにやふにやにした。こうまで気持ちがいいと、是非ともお母さんと早苗さんにも味わってもらいたい。私はさっそく、気持ちいいから二人も入りなよと勧めた。でも残念ながら、二人ともストッキングを穿いていたので入ることはなかった。

足下の気持ちよさについて釣りのことを忘れそうになった私は、せっかくだから釣りもしましょうとお母さんに苦笑されて思い出し、移動するのも面倒だからここで釣ることにした。

私のフィッシングポイントが決まると、お母さんと早苗さんもここで釣ると言った。まず間違いない、困ったときに私に頼るためだろう。そういう意味で言うと、お父さんかあつきーの側にするとう手もあったのだろうけど、釣った魚の数を競っている二人の側にいっては迷惑になると考えて、その選択は最初から排除されていたと思う。

釣りを始めておよそ三十分。途中何度か場所を移して、結果どうにか一匹釣ることが出来た。お母さん早苗さんペアはゼロ。それでも二人は十分に楽しんだ様子だった。そしてお父さんかあつきー。

釣った魚はどちらも二匹。なら引き分けでいいじゃないと思っても、白黒つけなければならぬと二人とも引き分けを認めない。そこで、より大きい魚を釣った方が勝ちということになり、勝者は僅差であつきーとなった。あつきーはすぐ勝ち誇り、お父さんは暗い顔で落ち込んでいる。ということは、何か賭けていたわけね。もしくは負けた方が罰ゲームとか。

そんなこんなで、私たちは釣った魚を河原で塩焼きにして、清流を眺めながらみんなではふはふと美味しく食べ、ここでの時間を存分に楽しみ終えると、何枚も一緒に記念撮影をしてくれた、というかさせられたエリザベートちゃんに別れを告げて、バスで次の目的地へと向かった。

今度は、この川の支流にある滝の見学。上流へ向かって再びバスに揺られること二十分、滝の音が遠くから聞こえてくるバス停で降りた。さっそく入口で入場券を買い、滝の姿を見せようとしてくれない細い山道を少々歩く。音は一步進む毎に大きくなり、ぐるりと回り込む最後のカーブを曲がった途端、まるでわっと脅かすように、迫力ある滝の全身が目の前に現れ、滝壺の轟音が私たちを打った。

びっくり箱を開けたような登場の仕方に、特にあつきーと早苗さんが歓声を上げていた。

この滝の落差は、およそ百メートル。上三分の一は少し傾斜があり、大きなコブがいくつもあつた。コブの表面は、長い年月を経て滑らかな曲面を描いていた。前回来たときのよように水量が少ないときは、そのコブの間を縫うように流れ、いささか迫力が減ってしまったのだけど、今はコブそのものを削り取ってしまったおうかというぐらゐの勢いで、大量の水がすべっている。そしてその下は垂直に切り立っていて、霧状の飛沫をまき散らしながら真っ逆さまに滝壺へと落ちていく。滝壺はその落ちてきた大量の水を、けたたましい音を立てながら次々と飲み込み、四方八方に水飛沫をまき散らしている。

深緑の中でそびえ立っているその景観は、圧倒的で、自然の力を見せつけられているような気分になった。

滝壺のすぐ側まで張り出してある観覧エリアの柵越しに、それぞれ感動の言葉を口にしながらたくさん飛沫を浴びた私たちは、瞬間にしっとり濡れていた。ひとしきり下から観賞すると、今度は滝を上から観賞すべく移動。滝によっては展望台へと駆け上るエレベーターが設置されていたりもするけど、この滝にはそういったものはなく、私たちがとる方法は三つ。駐車場に戻って滝壺と滝上とを結ぶシャトルバスを利用して移動するか、その道をてくてく歩くか、もしくは滝壺の観覧エリアからそのまま進んだ先にある、山の斜面をジグザグに削り取って造ったような、上へと続く坂道というか階段を登るか。

一番楽なのは、考えるまでもなくシャトルバス。その反対は当然ジグザクな階段。二十六、七階建てのビルの最上階へと階段で上がっていくようなものだから、体力に全く自信のない人にとっては、間違いなくでうんざりして回れ右をしたくなるコースだ。八歳の女の子であれば、なおさら回れ右をしようというもの。だけど前回来たときの私はいくと、そんな苦労を微塵も想像することなく、その階段を登りたい一心で、お父さんに階段で行こうと言った。お父さんはすごく嫌そうな顔をしたけど、ため息を一つついてから、諦めたように私の手を握って一緒に登ってくれた。そして私は途中で、お父さんに肩車してもらうことになり、大きなその肩の上で大はしやぎした。

今考えると、子供だったとはいえなんて無茶なことをしたんだろう、しかもお父さんにたくさん迷惑かけて、とちよつとばかりどこかに隠れたくなる。

ちなみにお母さんは、一瞬たりとも迷うことなくシャトルバスを選んでいた。

そんな記憶をお父さんも思い出したようで、「もう肩車はなしだから」と私にチクリ。

むう、やっぱり憶えていたか。でも、ソフトボール部の練習で毎日のように鍛えてる私を甘く見ないでね。

「お父さんこそ。途中でへばらないでね」

「それは俺に言うんじゃない、子供相手に大人げない力自慢をしまくってる、どっかのおじいちゃんに言った方がいいんじゃないか？」

「小僧、だれがおじいちゃんだあ？ ああ？」

「あんただ」お父さんは感情のない顔でびしつとあつきーを指さした。そして私は思う。あつきー、ツツコミどころはそこじゃないよと。

「けつ。さつき負けた腹いせか」

「なわけねえだろ」そう返すお父さんの表情は変わらなかったけど、確かに肩がぴくりと動いた。相手を選んでいるのは分かっているけど、なんだかなあ。

「まあいい。負け犬の遠吠えにムキになるほど、俺様はガキじゃねえからなあ。それよりもだ、小僧。俺様をなめるなよ？ こちとら毎日毎日、早苗の作るパンのせいで町内で追っかけっこしてんだ。しかも、早苗の殺人的なパンをくわえながらだ。それがどれだけすごいことか、てめえは分かってねえみてえだな」

え、ここでそんなこと言っちゃあ……。

「私のパンは、私のパンは……、追いかけてっこをさせてしまつ、殺人パンだつたんですねっ！」

「し、しまつたあっ！」

早苗さんが両手で顔を覆いながら駐車場方面へと駆け出し、あつきーが「てめえのせいだぞっ！」とお父さんに一言文句を言ってから、「俺は死なねえっ！」といつもの調子で早苗さんを追いかけた。

こういう場合、私はお母さんのように微笑むべきなのだろうか、それともお父さんのように、困るべきなのだろうか。

「あゝあ。たく、どこに行ってもあの二人は同じなんだな」

「お父さんとお母さんらしいです」

「ここで“らしさ”を出されても、はつきり言って迷惑なだけなん

だが……。んで、どうする？ 俺は汐と二人で先に行こう思うけど」「そうですね……。私はここで、ちょっとだけ待ってみます。それで戻ってこなかったら、バスで上に行きます。ここに誰もいなければ、みんな上に行ったと思って、あとから来るでしょうから」

ということ、私とお父さんはお母さんに見送られて、百十メートル頭上の展望台へと階段を登り始めた。六年ぶりの階段に、しばらくの間、こんなだったっけかなと何度か首を傾げた。前は、なんで一段一段がこんなに高いんだろうと思いつつ、はあはあふうふうと必死に登ったのだけど、今回はそんなに高いとは思われないし、苦しいとも思わない。

でもそれもそのはず。六年の間に私の身長は三十センチ近く伸びているんだし、体力だつてうんと増しているんだから。そう思うと私も成長してるんだなあ実感湧いてくる。まあ、今一つ成長してくれていないところもあるけど……。でもっ！ ここではむしろ重荷にならずに済んでいるから、かえっていいのだっ！

……。ああ、虚しい。なんて虚しい独り言なんだろう。

なんて一人でツツコミを入れると、不意に、隣を歩くお父さんが言った。

「なに落ち込んでんだ？」

「へ？ あ、うつん、なんでもない！ なんでもないから」

「そか。で、まだ平気か？」

「なにが？」

「体力だよ」

気が付けば、長い階段の三分の二あたりまで来ていた。

「倉橋先生に鍛えられてるからね。まだまだ。それよりお父さんこそ、そろそろきつくなってきたんじゃない？」

「俺だつて、仕事で毎日身体動かしてるからな。それに、これぐらいでへばるような体力じゃ、仕事にならないよ」

「それもそうだね」

なんて軽口を言う私たちの前後を登っている数少ない人たちの多

くが、疲労感をあらわにしたり、息絶え絶えといった感じで登っている。お父さんよりもずつと若そうな男の人たち数人の集団が、みんな文句たらたらでどうにか登っていたりもする。でも中には、決して速いペースではないけど、一定のリズムを正確に刻むようにして、着実に登っているおじいちゃんもいる。しかもさほど息の乱れを感じない。恐るべし、おじいちゃんばわー。

ついさつき追い抜いて、私たちの少し後ろをゆっくり登っているそのおじいちゃんのことをちらりと振り返って一瞥した私は、すぐに前に向き直って「ねえ、お父さん」と声を掛けた。

「ん？」

「お父さんがおじいちゃんになったらさ、今度は私が、お父さんのこと負んぶしてあげるね」

「なにを急に言い出してんだ？ まあ、その時はよろしく頼むけど」「うん。よろしく頼まれる」

おじいちゃんになったお父さんなんて、正直言つと、まだまだリアルには想像できない。おばあちゃんになったお母さんだって。さらに言えば、見た目的にすっかりおばあちゃんになった早苗さんや、おじいちゃんになったあつきも。せいぜいが髪の毛を白く塗りつぶして、ペンで顔にしわを書いたような映像しか浮かべられない。まるつきり、下手な仮装そのものの映像だ。けど、いずれは現実としてそうなる。生きている限り、時間は決して止まってくれないのだから。

そして、誰であろうといずれは止まってしまふ。だから、一瞬一瞬を大切にしたい。大切な思い出にしていきたい。そのときを迎えるまで。

「お父さん」

「今度はなんだ？」

「またいつか、来ようね」

再会の大地 その3

展望台に着いてみると、まだ誰も来ていなかった。とりあえず私たちは、糖分の補充という建前も付け加えて売店でソフトクリームを買い、滝壺へと流れ落ちていく迫力満点の光景に感動しながら食べた。

私たちの次にこの展望台に辿り着いたのは、早苗さんだった。まさかとは思いつつも、あながち冗談ではなさそうな口調で、お父さんが「ここまで走って来たんですか？」と尋ねると、気が付いたらシャトルバスに乗っていて、仕方ないのでそのままここに来た、という至極真つ当な答えが返ってきた。まあ、そうだよな。

続いてやってきたのはお母さん。もちろん、シャトルバスで。

ということ、残るはあつきーなんだけど……。

「まさかオツサン、早苗さんを見失って、当て所なくさ迷い走りまわってたんじゃない？」

その可能性はなきにしもあらず。でもその不安は、お母さんがすぐに解消してくれた。途中で、車道脇の狭い歩道をよろよろと駆け上るあつきーの姿を、シャトルバスの中から確認していたのだ。つまり結果的に、あつきーは三つのコースのうちの間コースを取ったわけだ。ただし、“てくてく”ではないけど。

なんていうか、お約束？

さすがに可哀想に感じたお母さんと、あまり可哀想に感じていない様子の早苗さんは、駐車場まであつきーを出迎えに行ってしまった。しばし、またも私とお父さんだけとなった。なんとも忙しない感じに、「なんつーか、ずいぶんと疲れる旅行になったもんだ」と呟くお父さん。

「そう？ 私は楽しくていいけど」

「お前は気楽でいいよな」

「楽しめるときは思いつ切り楽しまなくちゃ」

「まあ……、そりゃそうだ」

ただ、楽しむうにもしばらく楽しめそうにない人もいる。お母さんと早苗さんと一緒にようやく展望台へやってきた、汗だくでへるへるのあつきーとか。その疲労ぶりに、さすがのお父さんも同情の色を浮かべていた。結局、あつきーは疲れた身体を休めるばかりで、上からの眺めを堪能する時間は少ししかなかった。

滝の見学が終わると、あとは今晚泊まる旅館『天馬の宿』に行き、お風呂に入って晩ご飯食べてまたお風呂に入って、明日に備えて寝るだけ。私たちはバスに乗り、さらに上流にある旅館へと向かった。バスの中ではみんな大人しく、お喋りする声も張り上げられることはない。まあ、一番賑やかにしてくれる人が大人しいから、というのが要因の全てなんだけど、お食事処『つってけ』までの三十分、滝までの二十分、いずれも賑やかにしていただけに、なんだか小学校の遠足帰りのバスみたいで、あながちその表現は間違っていないと、私は一人ほくそ笑んでいた。

旅館へは二十分ほどで着いた。前回泊まった旅館と違うこの日本的な趣のある旅館は、四年ほど前に大改装したらしい。実は前回、この旅館も宿泊先として候補に挙がっていたのだけど、予約確認したときにはすでに満室で、その瞬間候補から落ちたという過去があった。

私たちが泊まる部屋は六人部屋。最初は岡崎家と古河家で部屋を二つとるつもりだったそうだけど、どうせなら部屋は一つにしちゃいましょう、という早苗さんの提案でそうなった。お父さんがフロントで受付を済ませてキーを受け取り、旅館の人に案内してもらって部屋に入る。十三畳間の座敷に、テーブルとソファのある四畳ほどの板の間、そして窓の向こうには、どこまでも見渡せる緑多き山々と、暮れゆく空が広がっている。この日何度目になるかわからない歓声が、みんなの口から一斉に漏れた。

しばし、窓から見える壮大な風景に見入ると、このときを待ってましたとばかりに、急に元気を取り戻したあつきーが「さあて、て

めえら。風呂に入るぞお！」と高らかに言った。汗もかいたし、滝でたくさん飛沫を浴びたし、このまま夕食というのでは折角の美味しいお料理がもつたいないので、私も「おー」と拳をあげて同意した。もちろん、お母さんも早苗さんも同意。お父さんも同意しているようだけど、妙に表情が暗い。

なぜに？

「ということで小僧。てめえは一人寂しく男湯に入つてな。俺あ早苗と、いちゃいちゃしながら仲良く入るからよ」

「くっ……」

お父さんが悔しげに呻く。そしてお母さんは、いったんぎよつと驚いてから「だ、駄目です！ 女湯に入るなんて駄目です！ お父さんが入ったら犯罪です！」とあたふたと指摘。早苗さんも、「ここで警察の方のお世話になるわけにはいきませんから」と笑顔で拒否。

ま、まさかね。

「……誰が女湯に入るつつた。貸し切り露天風呂で混浴だ」

ふう。ちよつとびっくりした。

お母さんも早苗さんも理解したようで、ならば、と快諾。しかも早苗さんは、「秋生さんと一緒のお風呂に入るなんて、何十年ぶりかしら」とわくわくしている様子。うちの両親もらぶらぶだけど、あっきーと早苗さんもらぶらぶなんだなあと、改めてしみじみ思う。にしても、お父さんの表情はどういうことだろう。一人で入るから？ でもそれが理由だとは到底考えられない。むしろ喜びそうなものだけだ。

ここでようやくお父さんの様子に気が付いたお母さんが「パパ？ どうかしたんですか？ 身体の具合でも悪くなつたんですか？」と、ちよつと心配になった様子で声を掛ける。気付いていた私が最初に声を掛けるべきなんだろうけれど、なんとなく、理由は健康面じゃないと断定していたので、成り行き任せでコトの真相を知ろうと黙っていた。そして私の判断は、やはり正しかった。

「気にするな渚」そうお母さんに言ったのは、お父さんではなくあつきー。

「己の無力さを呪ってるだけだ。ま、俺と勝負しようってえのが、そもそものお前の愚かさなんだよ」

「勝負？ なんのことですか？」勝ち誇っているあつきーにきよとんとした顔で質問するお母さん。そしてその質問に、思わず私が答えてしまった。どうやら、黙って傍観しては勿体ないと衝動的に思ってしまったらしい。

「釣りでしょ」

「あ。そういえば、釣りで競ってましたけど……。それが元気のない理由なんですか？」今度はお父さんに質問。

「渚……。それ以上、何も言うな……」

「なんだ。そういうことだったんですか。びっくりさせないでください」

「でもさ、負けたにしても、ここまで落ち込むようなことかな。ひよっとして、罰ゲームがあるとか？」

その質問に答えたのはあつきー。もはや回答者が誰になるかわからない状況になっている。

「鋭いな、汐よ。まあ、罰ゲームと言うよりは、勝者へのご褒美ってやつだがな」そう言うと、早苗さんをぐっと抱き寄せた。

「そのご褒美が、早苗さんと一緒にお風呂に入れるってこと？」

「おう。そうよ」
なるほど。そういうことか。

……って、なるほどじゃなあいつ！

お父さんがここまで悔しがっているのはつまり、お父さんも勝負に勝って早苗さんと一緒にお風呂に入りたかったからってこと？

いやいやまさかっ！ 普通に考えれば、お父さんのご褒美は違うものだよ。で、でも、早苗さんとっても美人で、魅力的だし、お父さんだって男の人だから……。う、なにこれ。私への罰ゲーム？ 私は何をしたっていうの？

などと私が動揺する中、お母さんがどこか不安そうな顔で、訴えるように巨大な爆弾を投げた。

「パパも……、そんなにお母さんとお風呂に入りたかったんですか！」

言っちゃった……。案の定、あつきーは「なっ!? ななななななんだと小僧っ! 早苗の裸を見たいだとおっ! てめえっ! 図々しいにも程があるぞ! 早苗の裸を見ていいのは俺だけだ!」と激怒。対して早苗さんはと言うと、ちょっとだけ驚いた顔を見せてから、嬉しそうにこう言った。

「まあ、そうだったんですか。なら、朋也さんも一緒に入ります? 私はぜんぜん構いませんよ?」

さすがはお母さんのお母さん。爆弾の大きさは本当に半端じゃない。

「さ、早苗っっ!」

「お母さんっ! それは駄目ですっ!」

うん、それは駄目だよ。ていうか、早苗さんの目が本気に見えるのは錯覚だと誰か言ってください。

そしてこの状況に、さすがにお父さんが叫んだ。

「んなわけあるかっ! つうか早苗さんも変なこと言わないでください! 汐も俺をそんな目で見るな!」

だ、だよね……。そりゃそうだよ。ところで、私はどんな目をしてたのだろうか。

「そ、そうなんですか? でも、ご褒美はお母さんとお風呂だった

」

「なんで早苗さん限定になるんだよっ! 俺はっ!」とここで、お母さんへの弁明を突然止めた。当然、その先が気にならないはずはない。そんな雰囲気を感じているお父さんは、しまったとばかりに口に手を当てて表情をひどく曇らせる。でももう遅い。お父さんに替わってあつきーがその先を続けた。みんなに聞こえないようにお父さんは必死に「てめふざけんじゃねえぞ余計なこと言

「つてんじゃねえよ！」と、息継ぎなしでまくし立てて邪魔したけど、残念ながら、出だしの「渚と汐と」という肝心な言葉を防ぐには間に合っていないかった。

そしてお母さんがとどめの一言をお父さんに突き刺した。しかも、ちよつとだけ恥ずかしそうに、微塵も冗談を含ませず。

「それじゃあパパは、私としおちゃんと、三人で入りたかったんですか？」

あ、お父さんが真つ白に固まった。

「なんだ、そんなことなら言ってくれば良かったのに。ねえ、しおちゃん」

「へ？ あゝ……と、うん？」額面どおりに受け取れば素直に頷くだけでいいのだけど、意図が違うところにあるような気がして返答に戸惑ってしまい、さらなる爆弾が投下されることになってしまった。

「私としおちゃんは、お父さんと勝負してないから関係ないですよ。ね。ということ、私たちも親子三人で入りましょうか」

いやそれだと、お父さんとあっきーの勝負は何だったのかっていうことになっちゃうし、それ以前に、その、お母さんは良くても、私はやっぱり恥ずかしいし、お父さんのこと嫌いじゃないけど、つていとか好きだけど、ああそういう意味じゃなくて！ つまり私はもう小学生じゃないんだし！

などと軽いパニックに陥ってしまっていると、早苗さんが助け船を出してくれた。

「渚、汐ちゃんはもうお年頃なんだから、いくらお父さんでも、一緒に入るのはちよつと恥ずかしいんじゃない？」

「言われてみれば、それもそうです。私も中学生のときには、お父さんと一緒にお風呂に入りたいとは思いませんでした」

とりあえず私はその意見に賛成して首を縦に振った。ただし、お母さんの発言にショックを受けているあっきーと、寂しそうに私に目を向けている白く固まったままのお父さんの姿に、その同意は遠

慮がちなものとなってしまった。

という一幕を経て、夕食前にお風呂に入った。もちろんあつきーは早苗さんと貸し切り露天風呂に。私たちかというと、私的にさすがにお父さんと一緒というわけにはいかなかったもので、お母さんと二人で女湯に、お父さんは一人で男湯に入った。その背中にほとんど力を感じられなかったけど、色彩はうっすらと戻っていたっばいから、たぶん大丈夫でしょう。

脱衣所でさっさと服を脱いだ私は、露天風呂へといざ突撃。戸を開けた途端、私は思わず盛大な歓声を上げてしまった。それほどお風呂が広くて、周囲はまるで庭園の中のような造りになっていて、頭上の空はなかなか感動的な色合いを見せていて、それはそれは素晴らしい光景だったのだ。

こうなると、夕食の時間ぎりぎりまでお風呂を堪能したくなる。

許されれば、お風呂のお湯にぶかぶか身体を浮かべて、陽が完全に沈むまでぼんやり空を眺めていたい。

たゆたう私の身体。

心地よく火照る私の身体。

視界をかすめる湯気。

その先に広がるきれいな空。

ゆらゆらと揺れ、心は星降る空へと駆け上り、静かに横たわる大地を見渡す。

光が踊る、少女の居る大地を。

「しおちゃん、お風呂に入らないの？」

つといけない。

「あ、うん。入る。あんまりすごいお風呂だったから、ちょっと感動しちゃって」

いつの間にかぼんやりと突っ立ってしまっていた私は、身体にお湯を流しにそそくさと洗い場へと移動した。お母さんも一緒に移動し、お湯を流す。そして二人して湯気の立つお風呂に入り、まるで息を合わせたように、定番中の定番である一言を意図せず二人同時

に口にした。

「はあ、気持ちいい」

そのユニゾンがあまりにも見事にぴったりだったので、二人ともツボに入ってしまった、笑い声はすぐには収まらなかった。

再会の大地 その4

お風呂から戻ってきたお父さんは、思ったとおりさっぱりした表情で復活していた。お風呂が終わればお夕食。食堂に向かい、テーブル席ではなく、一部屋ずつ区切られた座敷間の一つに入り、運ばれてきたお料理をまずは目で楽しむ。小皿にちよこんと盛りつけられているその姿はどれも色彩豊かで可愛らしく、芸術作品のようにも見えて、食べてしまうのがもったいなく思ってしまうほど。一通り目で楽しむと、次は香り。ん〜と鼻孔で楽しむ。途端に、もつたいたいという気持ちは、早く食べたいという猛烈な食欲に押し退けられてしまった。そして最後に、箸を持って「いただきます」と儀式を終了させて、思う存分舌でたっぷりと味わった。どれもこれもとても美味しく、みんなも美味しい美味しいと口にしながらきれいに平らげていた。

夕食が終わり、部屋で一休み。お風呂とご飯ですっかり落ち着いた私たちは、満たされた心とお腹でまったりと時間を過ごした。そして九時を少し過ぎた頃、もう一度お風呂に。あつきーは早苗さんと入るつもりだったのだけど、私とお母さんとで入りたいからとあっさりとふられてしまい、とても残念そうな顔をしたかと思ったら、とても嫌そうな顔で、「仕方がねえ、てめえに付き合っただけか」とお父さんに一言。もちろんお父さんも、「嫌なら部屋で留守番でもしてるよ」といつもの調子で返し、二人ともぶつくさ言いながらも男湯に入っただけだった。

そして私たちは、湯に浸かりながら満天の星空を眺めたり、湯から上がって火照った身体をしばし冷ますついでに、ぼつりぼつりと見えるずつと向こうの小さな灯火を眺めたりしながら、存分に露天風呂を堪能した。

こうして旅行先で露天風呂に入ると、必ず思う。うちのお風呂が、こんな露天風呂だったらなあ、と。その気持ちはお母さんも早苗さ

んも同じで、色々と話が飛び出した。お風呂を改造してもロケーションが悪いから意味がない。ならば別荘を買おうか。でもそんなお金はないし、そもそももったいない。などと。そして、それじゃあ風景のいい場所にペンションでも開こうか、という意見を私が言うのと、それはいいかもという話になり、必然的にペンションのオーナーは私ということになった。

それはそれで悪くないけど、毎日のように露天風呂に入りたいという理由だけでやるのはいかなものか。

そんな話も交えて一時を過ごし、お風呂を出て部屋に戻る。その途中で、マッサージチェアでゆったりと揉みもぐされている、幸せな顔をして目を閉じているお父さんとあっきーの姿を発見。お母さんと早苗さんはまっすぐ部屋に戻っていったけど、私は迷うことなく、空いているマッサージチェアへと駆け出して、お父さんたちの仲間入りしていた。

その後、旅館内の自動販売機で飲み物とおつまみを少々購入してから部屋に戻り、宴会が開かれた。周りの部屋に迷惑にならないようにと、想像していたよりもずっと大人しい宴会となったのだけど、たぶん、一般的には『大人しい宴会』という言葉は当てはまらなかったと思う。幸いにして、フロントから注意の電話がかかってくることはなく、やがて私が睡魔に襲われると、どうやらお母さんも眠くなっていったようで、宴会はお開きとなった。

テーブルが素早く片付けられ、五つの布団が並べられると、私は意識して選んだわけではなく、なんとなく、ふらふらと端っこの布団に潜り込み、すぐに眠りに落ちた。お母さんと早苗さんもそのまま寝てしまったそうなので、お父さんとあっきーだけは、場所を移してお酒を飲んでいたそうだ。

こうして、旅行初日は終わった。

翌朝、目が覚めてむくりと起きたら、お母さんとお父さんがお風呂から戻ってきたところだった。二人だけでずいとおちよつとだけ

思いつつ、冗談半分で「ひよつとして、二人で入ってきたの？」と聞いたら、お父さんは照れくさそうにそっぽを向いて答えようとしなかったけど、お母さんはにこりとVサイン。

まあ、両親の仲がそれぐらい良いというのはとても喜ばしいことだけど、起き抜けにらぶらぶつぶりを見せつけられると、娘ながらなんだかなあと思ってしまう。ついでに、あつきーと早苗さんの仲の良さを思うと、いまだ彼氏のいない自分が可哀想に思えてしかたがなくなる。

むう。めげるな私っ。きつとそのうち！ 私にだって！

と必死に自分を奮い立たせることから始まった旅行二日目。なんて悲しい始まり方なんだろう……。

そんな気分を一新したいという気持ちもちよこつと混ぜて、私は早苗さんと清々しい朝の空気に包まれた朝風呂に入り、どうにか気持ちを立て直すことに成功して、朝ご飯を美味しく食べることが出来た。食後、みんなで旅館の周辺を軽く散策。そして部屋に戻り、支度を調べてチェックアウト。他のチェックアウトしたお客さんたちと一緒に、旅館の送迎バスで駅へと直行した。

直行便とあって、旅館に着くまでに乗ったバスの乗車時間よりも遙かに短い時間しかかかっておらず、さらに、小さい子供連れの家族も同乗していて車内がなかなか賑やかで、私やお母さん、早苗さんもその仲間に加わったことで、駅までの時間は驚くほどあっという間に過ぎた。

駅に着くと、送迎バスの中で一緒に盛り上がっていた人たちとお別れをして、おみやげ屋さんをしばし物色。そして、十二個人りの美味しそうなお饅頭を一つ買って電車に乗り込み、途中で電車を乗り換えて次の目的地に着いたときには、お饅頭の入っていた箱は空っぽになっていた。

目的の駅に下りた私たちは、駅の改札にあつた観光ガイド用の無料小冊子をいくつかもらい、駅からさほど離れていない場所に点在する観光名所や資料館を眺め歩き、二時間ほどして昼食。地元名産

という謳い文句に誘われて入ったお店のお料理は、正直なところ、まあまあといった出来だった。そして食後、またもやおみやげ屋を物色。ただし今度は、さつきよりも少し多くの時間をかけ、買った量もそれなりにあった。というのも、ここで買うものは、電車で食べるためのものなどではなかったから。そしてそれらは、地元へのおみやげ用でもなかったりする。

手荷物が増えたお父さんとあつきと、何も変わらないその他三人は電車に乗り、本日最後の目的地へと向かう。それはいいのだけど、私としては、その目的地に着く前にやっておかなければいけないことがあった。

「お父さん」と、ボックス席で私の真向かいに座っているお父さんに声を掛ける。

「なんだ？ 汐」

「お父さんは、あつきのことどう呼ぶつもり？」

これに対し、私がどういう意味でそう聞いたのかわからず、「なに言ってるんだ？ お前」と呆れ顔をされてしまった。私の横に座るお母さんも不思議そうな顔をしている。

「まさか、向こうでもいつもどおりに呼ぶつもり？」

「他にどう言えって言つんだよ」

私はその返事に、呆れ半分で「普通に言えばいいでしょっ」とぴしゃりと言った。けどお父さんは、「いつも普通に言ってるだろ」と当たり前前の顔で返答。ああ、お父さんのこついうところ、どこにかしたい。

「どこがっ。お母さんだって、ちゃんと呼んだ方がいいと思うよね？」

「そうですね。まあでも、そんなに気にしなくてもいいとも、思いますが？」

ま、まさかの回答……。ええい、次は早苗さんだっ！

私は望みを託して、通路を挟んだボックス席に座る早苗さんに「早苗さんはどう思う？」と聞いた。

「まあ、最初は驚かれるかもしれませんが、私も渚と同意見です」
「なんでーっ！ しかもにこやかにっ！ ひよっとして、私が間違
ってるの？」

そんな思いで、早苗さんの前に座るあつきーに目を向けた。

「いいんじゃないか？」

「良くないっ。ていうか、あつきーも人事じゃないんだよ？」

「駄目っ。それにあつきーも、お父さんのこと普通に言わなきゃ」

「おいおい、俺も普通に呼んでるぞ？」

ああ、最初から分かってはいたけど強敵がこっちにも。しかも予想外の孤立無援……。これで私にどうしろと。思わず、長い長いため息を吐き出した。二人の口の悪さは昔からだし、今更お行儀良くしなさいというのは難しい注文だってことは分かっているから、常日頃からそうして欲しいとまでは思っていない。それどころか、品行方正な二人を想像すると、苦笑を通り越して、鳥肌が立ってしまう。でも、もうちょっとTPOを考えて欲しいと思うのは至極真つ当なことだし、無理な注文ではないと思う。二人とも大人なんだから。

「汐、なに一人で落ち込んでんだ？」

「……お父さんはお気楽でいいよね」娘の苦勞、親知らず。とはこういうことなんだなと思いつつ、力なくそう返す。すると、孤立無援だったはずの状況が一転。お母さんが私側についてくれた。

「パパ、しおちゃんの言うとおりにしてみるのも、いいかもしれないね」

「お前までなに言い出すんだ」

そして早苗さんまで協力してくれた。なんだか、土壇場で逆転満塁ホームランが飛び出た感じ。

「それでは試しに、二人で呼び合ってみましょうか」

「勘弁してくださいよ」

「朋也さん？ 汐ちゃんを悲しませてもいいんですか？」

「悲しむって、んな大袈裟な」お父さんはそう言っ私を見た。も

ちろん、私は精一杯悲しそうにした……つもりだった。

「汐、お前、演技下手すぎな」

半分演技でも、半分は本気ですっ。

そんなお父さんに構わず、早苗さんが「はいはい。朋也さん、秋生さんのことを、お義父とっさんと呼んでみてください」とお父さんを急かし、さんはいつと軽く手を叩く。そして、お父さんの戸惑った声と、早苗さんの掛け声と手のひらを軽く叩く音が交互に繰り返されていった

「え、ちよつと、ここですか？」

「さんはいっ」

「いや、でも」

「さんはいっ」

「え、と……」

「さんはいっ」

「……」

「さんはいっ」

どうやら早苗さんの勝利は見えてきたようだ。あともうちよつと。がんばれ早苗さん。

「オッサンも何とか言えよ！ それとも、俺にそう呼ばれてもいいのかよっ！」

「冗談じゃねえ。気持ち悪くて聞けるかよっ」

「だろ？」

おつと、ここでお父さんとあつきーが手を結んだ模様。でも相手は早苗さん。当然二人に勝ち目など無く、笑顔で掛け声をかけ、手を叩き続ける早苗さんに、その後わずかな抵抗をするも、結局は屈した。言っではなんだけど、辛抱強く優しく小さい子供を促す、幼稚園の先生みただなあ。でも二人には、別のものとして映っていたようで、ひたひたと迫ってくる幽霊に少しずつ怯えていくような顔をしていた。

「では、朋也さんから。どうぞ」

「お　！　お、おお、おおつ！　うお義父さんっ！」

「はい、良くできました。次は秋生さんです。どうぞ」

「と　！　とととと、朋う也っ！」

「はあい。二人とも良くできましたね」

どうにか言えた二人は、心底嫌そうな顔で体中を掻きむしり始め、早苗さんは満面の笑みを浮かべている。そして、そんな二人に「ではもう一度。今度はお二人とも、笑顔でお願いしますね」と注文付きで告げた。当然、二人からブーイングが起きる。でもやっぱり早苗さんに逆らえない二人。

その後、この呼び合いが何度か繰り返され、その度にお父さんとあつきーは、体中を掻きむしりたい衝動を必死に抑えているからだらう汗をだらだらと流し、引きつった笑顔で「お義父さん」「朋也」と呼び合い、しかも呼び合う言葉に、徐々に禍々しさが加わっていくようにも思われた。まるで、互いに呪ってやると言わんばかりに。

お母さんも二人の邪気を感じ取ったのか、お母さんが二人にアドバイスをした。お互いに、相手を野菜と思って言えばいいと。お互いに普通に呼び合うだけなのに、どうしてこんなことにまでなっているのかと頭が痛くなったりしたけど、とにかく、そのアドバイスの効果があつて、顔の引きつりはまだまだあつたけど、禍々しかった声はだいぶマトモになった。

そうして、早苗さんが「こんな感じでどうですか？」と私に聞いてきたので、「うん、これでいいかな」とOKサインを出した。けど、これですっかり安心、なんて出来るはずもない。むしろ不安はつる一方で、当初の不安とは違った意味の不安も加わっている始末。それでも、これ以上やるとお父さんもあつきーも本気で変な場所に飛んでいってしまいそうな雰囲気だったので、そう言うほか無かった、というのがOKした理由だった。

それに、周囲の視線があまりにも痛く感じて、恥ずかしさもあつたし。

だもんで、私が言い出しっぺなんだけど、電車が目的の駅に着い

たとき、私は心底喜んだ。電車を下りると、とりあえず二人には「さっきの特訓を忘れないで、ちゃんと普通に言つてね」と一言釘を刺して、改札へ向かう。その一刺しにどれだけの効力があるのか甚だ疑問だったけど、自分をちよつとでも安心させたかったからの一言でもあつた。

そして、いよいよ特訓の成果を試す瞬間が訪れた。

改札を抜けると、待合室で私たちを待っていた、真っ黒に日焼けしている元気そうな直幸おじいちゃんが笑顔で迎えてくれた。

「ただいま、父さん」

「お帰り、朋也。今年も来てくれて、嬉しいよ」

直幸おじいちゃんがそう言つと、お父さんとしつかりと握手。続いてお母さん。

「お元気そうだなによりです。今年もお世話になります」

「渚さんも、お元気そうで」

次に私。抱えている不安をぐつと飲み込み、「直幸おじいちゃん、また来たよ」と、お父さんの真似をして直幸おじいちゃんと握手した。そのごつごつした手と、優しい表情に、嬉しさばかりが心に溢れた。

「うん。よく来てくれたね。ありがとうね」

そして、あつきー。

「ご無沙汰しました」

「こちらこそ、ずっとお伺いできなくて。いつも朋也くんの力になつて頂いているのに、お礼の一つも出来ずに」

「そんなことないですよ。私たちの方こそ、たくさん助けられています。ね、秋生さん？」と早苗さんがそれに答える。

「そうだな。色々と楽しいことがあるし」

「そうですか。そう言つて頂けると、私としても嬉しい限りです。さ、ここで話していてもなんですから、車にどうぞお乗り下さい」

そうして私たちは、直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんの暮らす家へと向かうべく、駅舎の前に駐めていた車に乗り込む。それま

でのところ、特訓の成果を発揮する場面は訪れず、このまま何事もなく直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんの家に着くのかなと思っていたのだけど、唐突にその成果が発揮された。ただし、間違った方向で……。

荷物をワゴン車の後部に収め終えたお父さんがバックドアを閉めたところで、それは起きた。お父さんは、はたと思い出したように「そうだ、カップ巻き」と、平静な顔であっきーに言った。それに対してあっきーは「なんだ、クレクレタコラ」と、こちらも平静な顔で当たり前のように答える。

「たばこ買つとかなくて大丈夫か？」

「家の近くに売ってないのなら、ここらで買っておきたいところだな」

「んじゃあこつちだ。案内してやるから、ついてこいよ。カップ巻き」

「悪いな、クレクレタコラ」

そしてお父さんは、そういうことでちょっと待っていてくれと言って、あっきーと二人で行ってしまった。

本来であれば、変な呼び方をした瞬間に「なんだと！」と始まるのに、それがなく、まるで普段どおりに呼ばれているような対応。まさかこれが特訓の成果？ と頭を抱えたくなり、いろいろとツッコミどころが湧き上がってきた。お母さんのアドバイスでこうなったの？ でも、相手を野菜と思ってって言ってたよ？ ああ、カップ巻きはかすってるね。で、クレクレタコラって何？ などと。

でも、それよりなにより、なんだかもう心が折れそうです……。

再会の大地 その5

お父さんがあっきーのことを「オツサン」と呼んでいることは、直幸おじいちゃんも史乃おばあちゃんも知っている。毎年こうして遊びに来てお喋りする中で、お父さんの口から幾度となくその単語が出ていくからだ。そしてそのことに対して、二人とも気にしていないことは知っている。だけど、あっきーがお父さんのことを「小僧」と呼んでいることを二人は知らないと思う。私の知る限りでは、ここでのお喋りの中で、今までそのことは話題に上がらなかったし、あえて言うことでもなかったし、私が電車の中で二人に普通に呼び合っただけだったとき、お母さんもお父さんも特別何も言わなかったから。

そして、今そのことが現実知られようとしていて、いざ目の前にして、直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんが困ってしまったらどうしようと思うと、どうにかしなきゃと使命感が湧いてくる。そういう理由で、お父さんとあっきーには、普通に呼び合ってもらいたいと思っただけだった。

考えようによっては、あっきーだけどうにかすれば済むのかも知れないけど、あっきーを目の前に「オツサン」と呼ぶお父さんの姿を実際に見て、どう感じるだろうと考えると、やはり二人ともちゃんと呼ぶべきだと思う。

だけど、そんな想いはまったく通じず、私の心は長くは保つてくれなかった。

変な名前で呼び合いながらたばこを買いに行く二人に、直幸おじいちゃんはちよつと思議そうな顔をしていただけで、何も言わなかった。このままなかったことになればいいと、無茶を承知で願ったけど、やっぱり無茶なお願いだったようで、二人は戻ってきても変わらず「カツパ巻き」「クレクレタコラ」とお互いに呼び合っている。

そこでついに、直幸おじいちゃんが「あれは？」と不思議そうな顔でお母さんに尋ねた。私はとっさに「あ、あれはね！ 罰ゲームなの！」と、お母さんが答える前に説明を始めた。

「トランプで負けた人は、変なニックネームで呼ばれなくちゃいけないっていう罰ゲームで、お父さんとあっきーが負けたから、それでああなってるの。そういうことだから、気にしないでね」

「そうかい。なるほどね」

直幸おじいちゃんはこの説明ですっかり納得してくれたようで、一安心は出来たけど、ずっとこのままというのも困る。私はお父さんとあっきーを引つ張ってみんなから離れ、ちゃんとやってよと二人に怒った。けど、まだお互い気付いていない模様。

「言われたとおりやってるだろ。なあ、カップ巻き」

「ああ。クレクレタコラの言うとおりだ」

「ねえ……、ひよつとして、二人とも私のことからかってる？」頭が痛い。本気で心が折れそう。

「なんでそんなことしなきゃなんないんだよ」

「クレクレタコラが変なことでも言ったんじゃねえのか？」

「してねえよ。カップ巻きこそ」

「人のせいにしてんじゃねえよ」

「んじゃなんで汐が怒ってんだよ」

「俺が知るか」

あ、なんか眩暈が。ついでに心がぼっきりと……。

そして、気付かないうちに私たちの側に立っていたお母さんが、ぼきりと私の心をへし折った。

「やっぱり、無理みたいですね」

うん、もう無理。もうこれ以上がんばれません。

ということ、お母さんからの終了宣言。もういつもどおりに言っただ丈夫ですよと二人に言った。けど、特訓の成果はそう簡単には消えないようで、だからいつもどおりに言ってるだろうと真顔で返され、お母さんはこの事態を「そのうち治るでしょう」と笑って

済ませていた。どうやら二人とも、本気でちよつと遠くまで行ってしまうらしい。

まさか、それほどまでに無理な要望だったとは。

そして私は、挫けてしまった自分自身に、まだまだなあ、と落ち込んでいいのか悪いのかよく分からないまま、二人が元に戻ったときのために何かしておかなくちゃと、三人を置いて直幸おじいちゃんの元へ走り、「なにかあったのかい？」とちよつと心配そうな顔の直幸おじいちゃんに、必死に説明した。

「うん……と、あのね、さつき罰ゲームだって説明したけど、あれ嘘なの。本当は、お父さんにもあつきーにも、お互いに普通に呼び合って欲しくて、それで来る途中に練習させたんだけど、そしたらあんななちゃって。本当は、お父さんのことをあつきーは『小僧』って呼んでて、お父さんは、直幸おじいちゃんも知ってるけど、あつきーのこと『オッサン』って呼んでて、だからその、目の前でそう呼び合っても驚かないでね。日常会話というか、親しい証拠みたいなものだから」

喋ることに必死だった私は、そこまで喋って、これで分かってくれただろうかと直幸おじいちゃんの様子をうかがった。そしてその表情は、ちよつとだけ申し訳なさそうな笑顔だった。

「そうだったのかい。でも、心配しなくていいよ。それは私も知っていることだから」

「知って……る？ え？ いつの間につ！」

私は思わず大声を上げてしまい、そんな私に早苗さんが説明してくれた。私がまだ小さかった頃、直幸おじいちゃんが故郷に帰る前に一度だけ、あつきーと早苗さんに会っていて、そのときお父さんとあつきーが「オッサン」「小僧」と当たり前に行っているのを見ており、すでに知っているのだそう。そして直幸おじいちゃんは、そのことに対してどうとも思っていないとのこと。史乃おばあちゃんには、話すまでもないからと喋っていないので、史乃おばあちゃんには知らないらしい。ただ、別に気にしないだろうというのが、直

幸おじいちゃんの見。

それじゃあ、私一人で空回りしてたってこと？

いやまあ、最初からそんな感じだったけどさあ……、ああ、私つて、馬鹿……。

なんだかぐつたりな気持ちになってしまった私は、依然として治らないお互いの呼び名を後部座席でどこか遠くに聞きながら、一言も喋らず外の風景を眺め続けた。流れる風景は去年とも一昨年とも変わらず、緑多き田舎町の風情に満ちている。やがて、どこかのお屋敷のような塀をぐるりと回り、一軒の家に着いた。ブレーキを掛ける前に直幸おじいちゃんがクラクションを鳴らしていたのは、家の中で待っている史乃おばあちゃんに、私たちが着いたことを知らせるためのもの。車が完全に止まり、私たちが下りるとほぼ同時に史乃おばあちゃんが玄関から出てきた。

凜としたその姿を見るたびに、史乃おばあちゃんが私の曾祖母だとはとうてい思えなくなる。なんていうか、岡崎家にも特殊な遺伝子が備わっているのだろうかと本気で考えるときがあるくらいだ。

「ようこそいらっしやいました。朋也の祖母の、岡崎史乃です」

「渚の母の、早苗です。はじめまして」

「秋生です。どうもはじめまして」

そう。お互い写真では知っているし、それぞれの情報は私やお父さんが間に入って耳に入れていくけど、こうして直接会うのははじめまして。そして、お父さんとあっきーのやり取りを聞くのも。

「すみませんねえ、私の無理を聞いていただいて、こんなところまで」

「そんな。私も秋生さんも、いつかはお会いしたいと思ってましたから。お店やら何やらで、ずっとお伺いできなかつたので、こうしてお招きして頂いて、とっても嬉しいです」

「お店をなさっているのですから、仕方のないことです。お気になさらないください。さ、とりあえず上がってください。冷たいものでもお出ししますから」

史乃おばあちゃんにそう勧められて、私たちは家の中に入っていく。そこでようやく、お父さんが史乃おばあちゃんに「ただいま、史乃さん」と言うと、お母さんも「ただいまです」と。ここはお母さんにとっても、第三の家になっている。もちろん、私にとっても自宅と古河家に次ぐお家。

「おかえりなさい。朋也さん、渚さん、汐さん」

「ただいま。史乃おばあちゃん」

「あら、汐さん、元気ないみたいだけど、身体の具合でも悪いの？」「うづん、ちよつと疲れただけ。誰かさんと誰かさんのせいで。ね、お父さん？ あつきー？」私はそう言つて、二人に向けて冷たい視線を送る。でも、悲しいかなまだ戻つてきていない。

「おい、納豆巻き。あんたのこと睨んでるぞ？」

「ああん？ あれはポチヨムキンを哀れんでる目だろ」

「なんで俺が娘に哀れられなきゃなんないんだよ」呼び名変わつてるし、それでも通じ合つてるし。ポチヨなんとかつてなに。納豆巻きつて、そういうシリーズで突き進む気？ ていうか、二人とも悪化した？ さらに遠くへ行つちやつた？ ああもう……。

「本当に具合が悪いなら、お布団出しましょうか？」

「ほんとに大丈夫。それより、ちよつと」と私は、お父さんたちには先に行つてと家の上がらせ、ちよつと心配そうな史乃おばあちゃんを引つ張つて外に残つた。

「どうしたのです？」

「あのね、お父さんがあつきーのこと、『オッサン』って呼んでるのは知ってるよね」

「ええ」

「それでね、あつきーがお父さんを呼ぶときは、いつも『小僧』つて言つてて、それが二人にとって当たり前前の呼び方だから、あんまり気にしないでね？」

「でも、今は違う呼び方をしているみたいだけど」

「あう！？ それは、その、ちょっと事情があつて……。とにかく、いいかな」

そして結果は、みんなの意見が正しかったことを証明するものだった。

「私は、気にはしませんよ。ひよつとして、それを気に病んで、元気がなかったの？」

「だって、二人とも大人なのに、ちゃんと出来ないんだもん……」
「まあ」史乃おばあちゃんは、少しだけ驚いたようにそう呟くと、「汐さんも、いろいろと大変みたいですね」ところころと笑った。とちようどそこに、私たちを車から降ろしたあと、車を駐車スペースに移動させ終えた直幸おじいちゃんがやって来て、何を話していたんだい？と私たちに聞いた。そして話を聞いた直幸おじいちゃんも、これではどっちが親でどっちが子供か分からないねと、目を細めて笑った。

正直、私としてはあんまり笑えないんだけど、もういいや。考えるだけ馬鹿みたいだから。なお、お父さんとあっきーがいつものように呼び合うには、もう少し時間が必要だった。なにもそんな遠いところまで旅立たなくても。

とにもかくにも、気に病むことを止めたお陰で、いつもの私に戻って良かったと二人から言われるぐらいスッキリした気分になれた。そんな晴れやかな気持ちでお家に行くと、居間から鈴りんの涼やかな音色が聞こえ、お父さんとお母さんがお仏壇の前で手を合わせていた。そのお仏壇に飾られている写真は、史乃おばあちゃんの旦那さんと、お父さんのお母さん、敦子おばあちゃん。

二人にお線香を立てて手を合わせるの、いつもここに来てまず最初にやることだ。

お母さんとお父さんが終わると、私たちもいいですかと史乃おばあちゃんと直幸おじいちゃんに聞いてから、早苗さんがあっきーとお線香を立てて手を合わせる。そして二人が終わり、最後に私となった。お仏壇の前にきちんと正座して、お線香をろうそくの火で点

し、小さなオレンジ色の炎を手で扇ぐ。その小さな風で炎が消えると、オレンジ色に灯るお線香の先端からけむりがゆらゆらと昇る。そしてお線香を線香容器の灰に立てて、鈴りんを鳴らし、目を閉じて手を合わせる。

「ただいま、と心の中で微笑みかけながら。」

こうしてみんなのご挨拶が一通り終わると、ご挨拶の二週目に入った。みんな畳に正座して、丁寧にお辞儀して、ようこそお越し下さいました、こちらこそお招きいただきありがとうございます、と先ほどのやりとりを繰り返す。

なおここでは、史乃おばあちゃんが、あつきーと早苗さんにも是非とも来て欲しいとお願いをして、二人がそれを快く受けた、という事になっている。それはまあどこも間違っていないのだけど、その前段階の話が抜けている。実は、あつきーと早苗さんをとにかく連れてきたつたから、史乃おばあちゃんからどうにか頼み込みないかとお願いをしたのだ。それが一番効果あるからと。そしてその願いは聞き届けられて、今こうしているという次第。ありがとう、史乃おばあちゃん。そして、偉いぞ策士岡崎汐。

ご挨拶二巡目が終わり、やっとみんな普通に座布団に座りお喋りを始めると、早々に古河パンの話になった。そしてどんなパンを作っているのかという話題になったとき、あつきーが危つく地雷を踏みそうに。すんでのところでお父さんが阻止し、あつきーと早苗さんの追いかけっことは回避され、お父さんとあつきーはふうとため息を漏らし、ひそひそと話した。

「気をつけるよ、オッサン」

「わりい、小僧。油断しちまったぜ」

あ、二人とも帰ってきた。じゃなくて、元に戻った。まあ、今となってはもうどうでもいいけどさ……。

それから、昨日一日の出来事に話に移り、あんなことがあったこんなことがあったと私が中心になって喋っている間中、直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんは、ずっと笑っていた。しまいには二

人とも目尻に涙をためるほどに。

そしてその合間には、冷たい麦茶を飲みながら甘いスイカを食べたり、途中で買ったおみやげを食べたり。ときおり、料理の入った小皿を手に近所のおばあちゃんが入れ替わり立ち替わりやって来ては、「今年もこうして来てくれて、史乃さんも直くんも、ほんと嬉しいねえ」と、しわだらけのとっても可愛らしい笑顔で笑っては、しばし一緒にお喋りをした。毎年こうして会っているので、みんな私やお母さんやお父さんとは顔見知り。あつきと早苗さんは当然初対面。なので、例によって早苗さんをお母さんのお姉さんと思っただおばあちゃんたちは、違つと知るとすごく驚いていた。あつきについて、やはりお母さんのお父さんとは思っていなくてまたもびっくりしていた。

きつと、明日はもっとたくさんの人が来るだろう。例年以上に。

再会の大地 その6

賑やかなお喋りの中、史乃おばあちゃんがふと壁に掛けられている柱時計を見て、夕食の支度をしなくちゃと席を立ち、私たちもそこでようやく、時計の針がどこを指しているか気が付いた。私もお母さんも、そして早苗さんも、史乃おばあちゃんを手伝うと申し出ただけで、私一人で間に合うからと優しく断られてしまった。七人分の料理が必要なわけだから、一人では手が足りないと思うところだけど、近所のおばあちゃんたちからの差し入れが結構な量となつて控えており、これから作るおかずは、実はそう多くは必要としていなかったりする。史乃おばあちゃんが一人で十分と言うのも、無理してのことではないのだ。

でも、やっぱり私としては史乃おばあちゃんのお手伝いをしたくて、「私、史乃おばあちゃんの味をちゃんと憶えたいの。だから、ね?」と目で強く訴えた。史乃おばあちゃんは少し考えるように頬に手を当て、僅かに逡巡してから「それじゃ、汐さんに手伝ってもらおうかしら」と了承。思わず、「よおっし!」と力強くガッツポーズをとってしまった。

こうして私と史乃おばあちゃんとで晩ご飯を作ることになり、お母さんと早苗さんは、それじゃあ私たちの分もお願いなと私に託し、もし手が必要になったらいつでも言うてくださいと言いつつ、お父さんたちのいる居間に戻った。

台所に二人きりになると、さっそく作業開始。私は史乃おばあちゃんの指示に従って下ごしらえをして、ときおり味付けを教えるもらつては、ふんふんと頷き、忘れないようにとしつかり頭に刻み込む。そうして一品一品が作られていった。

途中、史乃おばあちゃんに「汐さん、包丁の扱いがまた上手になりましたね」と褒められると、そんな自覚ないし、正直言うと照れくささもちよつとあつて、「そうでもないよ。中学入ってから、部

活であんまりお母さんのお手伝いできてないし。たぶん下手になつてるんじゃないかな」と答えた。事実、包丁を握る時間は格段に少なくなっている。

「そんなことありませんよ。力の加減も、とても自然になつてますし」

「そう、かな？ 自分じゃよく分かんないけど」

「人の成長している姿というものは、周囲からはよく見えても、自分自身にはときに見えなくなるものですからね」

確かに、それは言える。部活の中で実際に経験しているから、よく分かる。自分では実感なくても周りから上手くなつたと言われたり、逆に、上手くなつたと思つた子にそう言つと、そんなことないよと気付いていなかったり。

だから私は、素直に「ありがとう」と答えた。

そうして数品のおかずとお味噌汁を作り終わると、準備が終わつたことを告げに居間に行き、配膳の援軍としてお母さんと早苗さんを連れて台所に戻つた。運ばれるのを今か今かと湯気を立てて待っているお料理に、途端に顔を綻ばせた援軍が口を揃えて美味しそうと言つのを聞いて、史乃おばあちゃんの顔が綻ぶ。そして私の顔も綻ぶ。それらが居間のテーブルに次々と並べられる度にお父さんたちの顔も綻び、いよいよみんなで食べ始めるときには、誰の顔にも笑顔が溢れかえっていた。

お料理の感想や、どうやって作ったのかなどで賑やいだ晩ご飯は瞬く間に終わり、食後のまったりした時間の中でお風呂となつた。一番風呂に誰が入るかで少しばかり譲り合いが行われ、なんで大人の人っていつもこうなんだろうと思いつながら、これじゃいつまで経つても決まらないのではと心配になり、私が半ば無理矢理決めてしまった。一番手は私と史乃おばあちゃん。二番手はあつき。三番手がお母さんと早苗さん。そして最後に、お父さんと直幸おじいちゃん。

二人を最後に回したのは、長風呂になることを知っているから。

私がお父さんと一緒にお風呂に入らなくなるまでは、私とお父さんと直幸おじいちゃんと三人でお風呂に入っていた。もちろん、翌日のお風呂は史乃おばあちゃんと。

お父さんはいつも、直幸おじいちゃんの背中を洗っていた。懐かしむように昔の話をしながら、時間をかけて。まだ小さい頃は、私もお父さんの真似をして直幸おじいちゃんの背中を洗いたいという気持ちもあつたけれど、その雰囲気、子供心に邪魔しちやいけないような気がして、私はいつも湯船からその様子をじっと眺めていた。そしてお父さんが身体を洗い始めると、私は「次は私がお父さんの背中をこしこしするっ！」と勇んで、お父さんの大きな背中を洗った。そして史乃おばあちゃんと入ると、やっぱり史乃おばあちゃんの背中もこしこしと洗い、お母さんの背中もこしこしと洗っていた。

という経緯があつて、私は今、史乃おばあちゃんの背中を洗っている。その背中には骨張っていて、否が応でも史乃おばあちゃんの本来的な年齢を感じさせられ、力加減は大丈夫だろうかと何度か「痛くない？」と聞いては、「いいえ、全然。とても気持ちいいですよ」という答えが返ってきていた。

ほぼ一年おきではあるけど、もう十何年も洗ってきた史乃おばあちゃんの背中は、数年前までは全然感じなかったし、考えもしなかったけど、少しずつ小さく、そして弱々しくなっていくように感じられる。それは間違いなく、私自身が成長しているからであり、史乃おばあちゃんが年老いていつてるから。

そして時間は容赦なく、史乃おばあちゃんを誰の手にも届かない場所へと連れて行く。それまで、何回こうして背中を洗えるのだろうかと思うと、自然と、「長生きしてね」と呟いていた。史乃おばあちゃんは、どうして急にそんなことを言ったのだろうかと怪訝に思っただけだったけど、「そうね」と深い思いを感じる優しい声で答えた。

「私も、長生きしたいと思うわ。だって、こんなにも楽しい一日を、

神様が届けてくれるのですから。それに、汐さんがいい人を連れて来てくれる日が楽しみですし、汐さんの花嫁姿も見たいし、言い出したらきりがなくらい、楽しみなことがいっぱい待ってますからね」

「そうだよ。まあ、いい人が現れてくれるかどうかは分かんないけどさ……」

「大丈夫ですよ。必ず出会えます」

励ますつもりが逆に励まされてしまった。何やってるんだか、私後ろがずらりと控えていることもあって、私たちは長くは湯に浸からずにお風呂から出て、あつきーにバトンタッチ。そしてバトンは最終組まで渡り、それから三十分近くしてお風呂タイムが終了。それからほどなくして、直幸おじいちゃんが「これから蛍を見に行きませんか？ とてもきれいですよ」と提案し、みんなで見に行くことになった。

数本の懐中電灯と虫除けスプレーを装備して車に乗り込み、真っ暗な夜道を走ること十数分、無数の光が舞う光景が遠くに見えてきた。車内に歓声が上がリ、やがて小川のすぐ近くで車が止まると、足下に気をつけながら次々と降りる。そして目の前の光景に、先ほどとは比べものにならない感嘆の声が上がっていた。

毎年このあたりで蛍の群れを見ている私やお母さんやお父さんでさえ圧倒されてしまったほど。ならばあつきーと早苗さんがどれだけ感動したかは言うまでもないと思う。あつきーは驚きの声のあと、呻くように「こいつはすげーぜ」と呟いたままじっと見つめ、早苗さんは息を飲むような声を出したと思ったら、口元に手のひらをあて、目を潤ませながら見つめている。直幸おじいちゃんや史乃おばあちゃんも、これほどまで集まっているのは本当に珍しいと言って驚いていた。

そしていつの間にか、みんな喋ることを忘れて、ただ黙ってその光景を見つめていた。

漆黒の中で無数に輝き瞬いている星々の下、月明かりにうつすら

と照らされた川辺で、微かに聞こえる小川のせせらぎの音と、鈴虫たちがりーんりーんと遠慮がちに奏でる音に包まれ、ときおり吹く涼やかな風に、寝静まっていた草が揺れ動いてはさわさわと身じろぎし、ほのかな明かりを点す無数の蛍が、外界のざわめきなど気にせず思い思いに舞い踊っている。

とても幻想的で、神秘的で、圧倒的で、人の手では絶対に触れることの出来ない神聖な光景を前にしているような気持ちで、僅かな物音を立てることすら無粋な行為ではないかと思ってしまうほど、とても感動的な世界に、ただただ立ち尽くした。

そうしてしばらく時間が過ぎ、私たちだけ止まっていたかのような時間が、やがてゆっくりと動き出した。

あつきーにぴたりと寄り添っている早苗さんから、ぼつりと言葉が零れる。その声には、まだ幻想世界にいるような印象があり、心の中から一滴一滴、ゆっくりとこぼれ落ちていくように感じた。

「……秋生さん、なんだか、夢の世界にいるみたいですよ」

「ああ。そうだな」そう答えるあつきーも、早苗さんと同じ場所から見ているよう。

「もしかしたら、本当に夢の世界なのかも、しれないですね」

あつきーはその言葉に、少しだけ間を置いて、「そうかもしんねえ」と蛍の舞を見つめたまま答えた。私は二人のこの会話を、目の前の光景に対する感想だと思った。でもそれは間違い。二人が見ていたものは、私が見ていたものとは違っていた。

早苗さんは、「私、たまに思うときがあるんです」と静かに語り始める。

「秋生さんと結婚して、渚が生まれて、苦しいことや、辛いこと、悲しいこともあったけど、家族三人でがんばって暮らして、一緒に笑って、一緒に苦しんで、一緒に泣いて。」

それだけでも十分幸せだったのに、渚が朋也さんと出会って、新しい命を授かって。苦しい時期もあったけど、汐ちゃんがこうして無事に生まれて、とても優しい子に育ってくれた。

こんなに幸せなのは、もしかしたら夢だからなんじゃないか。現実には、もつとたくさん、辛いことや悲しいことがいっぱいあるんじゃないかって……」

その言葉を聞いて、私はふと思いついた。お父さんが話してくれた、もう一つの世界の物語。私が生まれたと同時に、お母さんが死んでしまい、私は五年間あつきーと早苗さんに育てられて。

その記憶を持っているのは、私が知る限りではお父さんだけ。というのも、お父さんからしか聞かされてないし、他の人に尋ねはしてこなかったから。もしも、あつきーや早苗さん、それに他の人たちも心のどこかに残しているのなら、この世界を夢のように感じるのも自然なことなのかもしれない。私自身についても、はつきりとした記憶はないけど、不思議とそれが本当のことだと思えている。

いや、『思える』のではなくて『感じる』。そしてその感覚は、少しずつ増しているような気がする。ひよっとしたらそれは、その時の記憶が私の中のどこかに残っているからなのかもしれない。

そんなことをぼんやりと思う中、あつきーが言った。幻想世界からではなく、今私たちがいる世界に立って。

「どっちでもいいんじゃないか？俺たちは今ここにいます。夢の中だろうが、現実の中だろうが、そんなのは関係ねえ。それにだ、もし夢の中ってえんなら、きっとそれは、神様がくれたご褒美だ。現実の中の俺たちへの、な」

あつきーはそこでいったん区切ると、にっと笑って、こう付け加えた。

「もしくは、その逆とかな」

「逆、ですか？」意表を突かれたように、早苗さんがきょとんとした顔をあつきーに向けて繰り返す。

「ああ。これが現実で、夢の中はひでーことになってる。そう考えてもおかしくないだろ？まあいずれにしろだ、幸せで悪いことなんてあるわけねえ。だから「そこでまたいったん区切ると、見上げる早苗さんにようやく顔を向けて、力強く言った。

「胸張って、幸せですって言ってるやいいんだ」

その言葉に、早苗さんの表情からすべての不安が消え去り、「そうですね」と答えたその声は、祝福されるようにこの幻想的な光景と解け合い、とてもきれいに輝いて聞こえた。思わず、なんとも言い難い温かいものが私の心にこみ揚がり、瞳が潤みだす。そしてちらりとお母さんとお父さんを見ると、二人は手を繋ぎながら見つめ合っていて、お父さんがちょっとおどけるように「だそっだ」と言うとき、お母さんは「はい」と笑顔で答えていた。

そして、そんなお父さんたちを優しい瞳で見守っている史乃おばあちゃんは、「家族とは、本当に素晴らしいものですね」と嬉しそうに呟いた。直幸おじいちゃんは、そっだねと答えると、少し寂しそうにこう続けた。

「……敦子にも、味わって欲しかったけど」

史乃おばあちゃんは、どう答えようかと考えるように口を結び、そしてまっすぐな声でこう言った。

「きつと、天国で味わっているわ。あなたを通じてね」

直幸おじいちゃんは、ほんの少し驚いたような顔をしてから、頷くように視線を落とし、静かに「……うん」と答えると、次いで空を見上げた。まるで、そこにいる敦子おばあちゃんに微笑みかけるように。

きつと私は、この時間のすべてを、一生忘れることはないと思う。満天の星空、川のせせらぎの音、鈴虫の音色、草のささやき、無数の蛍の光、そして、ここにいる大好きな人たちの言葉と、その言葉に込められている思いを。

再会の大地 その7

翌朝のご飯は、お母さんと早苗さんが史乃おばあちゃんを手伝った。私はというと昨日手伝ったので落選。朝食を食べると、直幸おじいちゃんは畑へと向かい、お父さんにあつきー、もちろん私も帽子を被ってついていった。

直幸おじいちゃんの畑ではたくさん野菜が育てられていて、きゅうりにトマト、茄子、大根、キャベツ、白菜、じゃがいも、にんじんなど種類もいろいろ。本格的に農家を営んでいるわけではないので、畑の面積は他の農家に比べてずっと狭く、一品種あたりの作付け面積もそう広くなく、家庭菜園を本格的に大きくした広さといった印象がある。それもそのはずで、もともとは心と体を癒すのに良いということ始めたことで、最初は本当に小規模な家庭菜園でしかなかったそうだ。

それが、周りの人たちの協力もあって、畑は年々少しずつ広がり、育てる野菜もちよつとずつだけが増えていたりする。このまま本格的な農家になってもおかしくないように思うのだけど、直幸おじいちゃんにはその気はないらしい。あくまでも、無理をしない範囲でやりたいということだ。

当初お父さんは、直幸おじいちゃんが家庭菜園をすることに賛成してはいたけど、すごく心配していた。長い年月、ずっと心身共に消耗しきっていただけに、家庭菜園とはいえ体力的にも無理があるんじゃないかと。実際のところ、やり始めた当初は毎日のように体中が痛み、全身湿布まみれだったそうだ。でもその痛みは、直幸おじいちゃんにとっても心地の良いもので、今自分が生きているという実感を十数年ぶりに感じる事が出来たと、とても嬉しそうに笑っていた。

そんな、どこか得意げに笑いながら苦労話をする直幸おじいちゃんの、いくつものマメを潰して出来たごつごつの手のひらや、真っ

黒に日焼けした肌、それと、長い間見ることのなかったとても充足した笑顔に、お父さんはちよつと涙を浮かべていた、とお母さんが教えてくれた。

以来直幸おじいちゃんは、こうして畑を耕し、野菜を植え、育て、収穫し、その野菜の一部を我が家へ送ってくれていた。そして私たちは毎年ここに来てはお手伝いをしている。例えば雑草取りとか、十分熟したお野菜の収穫とか。何度か畑を耕してみたりとか、種蒔きをさせてもらったこともあったけど、私もお父さんも思うようにいかなかった。そんな私たちに、私も最初は全然できなくてとても苦労したよと直幸おじいちゃんは笑っていた。

そして今年はおつきーが初挑戦。と言いたいところだったけど、残念ながら今年は種蒔きなどの大活躍の場面は用意されていなかった。

作業を始めて二時間ほどした頃、お母さんと早苗さんが日傘を差し、もう一方の手に魔法瓶を持ち、畑へとやって来た。早苗さんは「ここ、全部直幸さんの畑なんですか？　すごいですね」と感心するように声を弾ませた。そしてお父さんは直幸おじいちゃんに「父さん、早苗さんを案内してあげてくれないか？　こっちは俺たちでやってるから」と提案。

早苗さんは、邪魔しては悪いからお母さんと二人で適当に見て回ると言っただけ、直幸おじいちゃんは「頼んでいいかい？」と聞き、私もおつきーも頷くと、二人を連れて案内を始めた。直幸おじいちゃんの説明する声や、早苗さんの質問の声、そしてときおり収穫しては早苗さんの喜ぶ声もあり、それらを聞きながら私たちは作業を進めた。

そうして三十分ほど経っただろうか、早苗さんたちは一回りし終えて戻ってきた。

「どうでした？」と、やや興奮気味な早苗さんにお父さんが尋ねると、嬉しそうに「はい。とても楽しかったです」と答え、こういった経験は生まれて初めてだったからと色々話し、そしてお母さんと

一緒に帰って行った。

こうして午前中を畑で過ごし、立派に育った野菜を手に汗を拭き拭き家に戻ると、お父さんたちは上半身裸になり、背中を丸めて外の水道で頭から首にかけてじゃぶじゃぶと水を被り、上半身も濡らした。年齢で見れば、お父さんが一番体格が良くて、次いであつきー、そして直幸おじいちゃんという順番と考えるのが普通だろう。けれど、実際は直幸おじいちゃんが一番体格が良い。ムキムキというわけじゃないけど、すらっとした体躯に筋肉がほどよく主張していて、正直かつこいいと思う。まあ、お父さんもあつきーも十分かつこいいけど。

そして私も、Ｔシャツを脱いで背中を丸め、頭から首にかけて水を被り、やっぱり上半身も濡らした。もちろん、着けるものはちゃんと着けて。ちなみにそれは下着のブラじゃなくて水着のブラ。このために仕込んでおいたものだ。

子供の頃は私も一緒に上半身素っ裸になって、結局全身水浸しにしていた。けれど、それまで平気だったことが出来なくなった年、私はＴシャツの下にタオルを入れて、どうにか拭ける範囲だけ汗を拭いた。それがとても面倒だったということもあつたけど、何より、気持ち良さそうに水を浴びているお父さんと直幸おじいちゃんが羨ましくてたまらなく、でもやっぱり妙に恥ずかしくて脱げず、なんだか悔しかったり寂しかったりで、なんとも釈然としない気持ちでいっぱいになった。

そこで私は考え、対策を講じた。それがこれ。水着を仕込んでおくという戦法。なら素直にお風呂で水を浴びればいいじゃないと言われるだろうけど、お日様の下、この場所でなければ意味はないのだ。

ということですよ。つきり水を浴び、膝下丈のズボンに水着のブラという格好のままお昼ご飯を食べた。そしてその食事の時に、午前中にやっぱりご近所さんが入れ替わり立ち替わりやってきては、話に聞いた以上だとみんな驚いていたと聞かされた。そしてそんな状況

に、史乃おばあちゃんが気を利かせて畑にこれを届けてと早苗さんとお母さんに魔法瓶を持たせたということだった。

食後は風鈴の音色に耳を傾けながら一時間ちよっとお昼寝。目を覚ますとお父さんと直幸おじいちゃんの姿がなく、二人は直幸おじいちゃんの師匠のところへ行っているとのこと。そしてお母さんにあつきー、早苗さんもまた姿がなく、散歩に出ている。

つまり家には私と史乃おばあちゃんだけ。私はみんなが戻ってくるまで史乃おばあちゃんを独り占めできると喜び勇み、ここぞとばかりに話したかったことを色々喋った。いつもは私が喋ってみんなが聞くというパターンが多いのだけど、今年は事情が違う。たまにあつきーがボケて、お父さんが突っ込むというパターンを交えつつ、話し上手な早苗さんがうまく会話を進行し、私はどちらかという聞き役に回っていた。そういうこともあって、私自身話し足りなく思っていたようだ。

とこのように言うと、いかにも私がお喋り好きな女の子のようだけど、友達といるときでも、どちらかという聞き手に回る人が多い。これは両親から引き継いだ私の性格もあるのだろうけど、たぶん、生まれたときからお父さんたちの生コントを見てきた影響ですっかり観客というポジションに収まっていたせいもあると思う。

ただしここでは例年コントは発生せず、結果、客席から下りたりステージに上がったたりしているうちに、私が喋ることが多くなっていた。

それはともかく、私はおおきばんのことや、雨の中を平然と歩いていた犬のナオジくん（仮）のことなど、基本、みんなには話済みだけど、現場の記憶をお母さんたちとあまり共有していない話題を話した。現場の記憶を共有している話題なら、みんないるときに話した方がより楽しく盛り上がるので、それは夜に取っておく。

やがてお母さんたちが散歩から帰ってきて、それから間もなくお父さんたちが帰ってくると、知り合いのおじさんの運転で、みんな総出でブドウ狩りに出発。そこでブドウを狩り、その場で食べて、

ワインを飲んだ。とそれだけなら良かったのだけど、例年よりもワインを飲み過ぎたようで、気が付くとお母さんが顔を真っ赤にして、とろんとした目でお父さんのことを「朋也くん」と呼びだした。

その声と顔で危険に気付いたお父さんだったけど、もう遅い。他のお客さんもいる中、お母さんは上機嫌で「また一緒にお風呂入りましょうね」と昨日の朝の混浴をちよつと甘えるような口調で自らばらし、お父さんは口に含んでいたワインを思いつ切りあつきーに吹きかけてから、顔を赤らめて「なに言い出すんだ！」と暴走しだしたお母さんを止めようとした。けれど、早苗さんに「恥ずかしがることないのに」と笑顔で言われ、近くにあつた台布巾で顔を拭いたあつきーが、「渚と汐と三人で入りたいつて言つてたのはてめえだろつがっ」と追い討ちをかけ、あるうことかお母さんが「そうだ！」と急に眉をつり上げると、「朋也くん、お母さんとも入りたいつて言つてましたっ！」と声を荒げ、「言つてないだろ！」と反論するも、史乃おばあちゃんに「まあ、そうなの？」と真顔で問い質されたり、「朋也、それはいかんだろつ」と真剣に言う直幸おじいちゃんに「せめて父親だけは息子を信じるよ」とお父さんが肩を落としたり。

この状況にお父さんは私に救いを求め、「汐からも何か言つてくれ！」と言つてきたので、私はこう答えた。

「お父さん、胸の大きい人好きだもんね」

「お前もかよっ！」

なんとなく、乗つかった方が良いかな、と。

こうして、いつもの光景がここでも展開されることとなった。

不幸中の幸いというか、それからお母さんが意識を保っていた時間はそう長くはなく、自分自身がぐらんぐらんと揺れていることに気付くことなく、お父さんに「どうして朋也くんは、そうやってふらふら動いて、私の話を真面目に聞こうとしないんですかっ！」と回りきつていない呂律で文句を言つて間もなく、電池が切れたようにぱたしとテーブルに突っ伏した。

事態の收拾に多大な時間が費やされることはなく、周囲から怒られることなく済んだので良かったは良かったけど、まあ、迷惑に思われたことは間違いないでしょう。そしてお父さんも、疲れ切ったようにテールにばたしと伏した。

といった風景を日常のものとしていない直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんは、最初はこのハイテンションなテンポに圧倒された感があった。けど、途中から雰囲気をつかんだようで、それからずっと笑っていた。史乃おばあちゃんが「頬が痛い」と笑いながら頬を押さえるぐらいに。

そうしてブドウ狩りが終了し、岡崎家と古河家で白ワインと赤ワインを二本ずつ、計四本買い、ここから直接家まで配送してもらおうべく伝票に送り先等を書き、再び知り合いの車に乗せてもらって帰還。その間中お母さんはすうすうと気持ちよさそうな寝息を立て続け、帰還後も眠ったまま。目を覚ましたのは、晚ご飯が出来上がる少し前だった。

ちなみに、今晚の料理はお母さんと早苗さんで作る予定だった。今朝、早苗さんが申し出て、史乃おばあちゃんはお客様に全部作ってもらうわけにはと遠慮したけど、「せめてものお礼に、是非、お作りしたいんです」と、破壊力抜群な早苗さんの、優しくにこやかにお願いをするその表情とオーラに、数度のお願いの末につい陥落。そうして二人で作ることになっていたのだけど、お母さんが酔いつぶれて完全戦力外となったため、急遽私がピンチヒッターに起用されていた。

目を覚ましたお母さんは、心底申し訳なさそうに何度も頭を下げ、明日の朝食をお母さんが作ることと解決となった。もちろん、私も早苗さんも手伝って。

その後はわいわいと賑やかに過ごし、一日が終わった。

再会の大地 その8

夏休み最後のイベントも今日が最終日。

その日、午前中からけっこうな数のご近所さんがあつきーと早苗さんを見逃すまいとやって来た。その人たちの多くは、昨日の午後訪ねたはいいけど、ちょうど私たちがブドウ狩りに行っている最中だったので会えなかった人たち。なんだか、こうして注目を浴びている様子を見てみると、二人がちよつとした芸能人にも見えてくる。取り囲む人たちの平均年齢はかなり高めだけど。

そうこうしているうちに出立の時間となった。お父さんは見送ってくれるご近所さんたちに「父さんと史乃さんのこと、よろしくお願いします」と頭を下げ、そして直幸おじいちゃんの運転する車に乗り込んだ私たちは、また来年も来てねと手を振って見送られ、駅へと向かった。

駅に着けば、直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんとお別れするのはもうすぐそこ。正味たったの二日間の再会が終わってしまうとあって、やっぱり心残りは出てくる。正直、満喫するには日数的に全然足りないし、話したいこともまだまだあったから。という気持ちを含みながら抱いていかどうか分からないけど、駅に着いてお別れのご挨拶をする中には寂しさもあった。でも、それ以上に楽しい思い出がたくさんあり、笑顔とともにありがとうという言葉が互いに行き来していた。そして私たちの乗る電車が間もなく到着することを告げる放送が流れると、いよいよその時間となった。

「それじゃ史乃さん、体に気を付けて」

「朋也さんもね」

「はい」お父さんはそう答え、続いて直幸おじいちゃんに「無理して、怪我なんかするなよ」と微笑む。

「もちろんそのつもりだよ。朋也こそ、体を大事にするんだぞ」

「ああ。それじゃあ、また来るからな」

「うん。待っているよ」

そうして、お父さんたちは改札をくぐっていった。私も最後尾でくぐったのだけど、その直前に一度回れ右をして、直幸おじいちゃんとお史乃おばあちゃんの元に駆け寄った。そして何事だろうと思っ
ているらしい二人に、耳を貸してとゼスチャー。二人が私に顔を寄
せてくると、ひそひそ話をするように言った。

「そのうち、一人で遊びに来るからね。それと、お母さんたちには
まだ内緒ね」

それだけ伝えると、にっと笑って、もう一度回れ右をして改札を
くぐる。そして振り返り、またねと言いながらぶんぶんと手を振っ
た。そのあと、お父さんに何してたのか聞かれたけど、そのときみ
んなを驚かしたいという思惑があって、適当なことを言って誤魔化
しておいた。ま、年齢的に驚かれるような行動ではないのだろうけ
ど、気分の問題ということだ。

入線した電車は私たちを飲み込み、発車のベルに続いて、ゆっく
りと動き出した。そののっそりとした滑り出しは、後ろ髪を引かれ
ているかのように感じさせる。やがて電車はスピードを増し、私た
ちを見送る直幸おじいちゃんと史乃おばあちゃんの姿は見えなくな
った。

その後、電車を乗り換えること二回。その途中で駅弁を買い、私
たちは周囲をすっかり緑に囲まれた田舎駅に降りた。駅舎はごぢん
まりしていて、時代を強く感じさせる造りをしていることもあって、
とても古めかしく映り、それでいて朽ち枯れてゆく気配がまったく
ない。その姿は私がこの場所を記憶し始めてから何一つ変わってい
ないように見え、まるで時間に取り残されたような空間だった。

あつきーや早苗さんも、話や写真で知ってはいたけど、初めて実
際に見るこの光景に目を見張っていた。

どこまでも長閑な風景の中、青々と茂る木々からの木漏れ日に気
まぐれに照らされ、数力所から聞こえるアブラゼミの鳴き声を耳に、

私たちはあまり喋ることなく歩いた。もう十年以上見てきた道の風景も、駅ほどではないけど、時が止まっているように感じる。

私はふと、こんなことを思った。

町に意志があるとするなら、ここにも意志があるのではないのだろうか。そしてその意志は、変化を望まず、今の姿のままでありたいと願っている。だからここはずっと変わらずにいるのだろうか、と。ということはつまり、私の住む町でも、町の望まない変化を人間がしようとしても、結局町に受け入れられずに事なきを得る、という結果に終わるといふことなのだろうか。そう言えば、智びよんが言っていた。結局は町の願いのとおりのことをすることになると思っている。

うん。きっとそのとおりだ。町の願いはちゃんと届く。そしてこの場所の願いもずっと。

やがて、私たちは木々のトンネルのような道を抜け、最後の目的地へとやって来た。そこにある光景に、一昨日の夜に蛍の群れを見たときのような反応、とまではさすがにいかないまでも、あっきりも早苗さんも、とても感動していた。道の左手に、黄色い花びらでぎっしり覆われた広大な菜の花畑が、青空の中で燦々と照る陽の光を、めいっばい浴びていた。

何度見ても、やっぱり綺麗で壮観な風景だ。私はんーっと大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出し、ずっと向こうを見る。

「しおちゃん」

「うん？」

「お昼ご飯、あとにする？」

私はすっかり見入っていたようで、いつの間にかお父さんとあっきりが木陰にビニールシートを広げていた。

「今」私はそう即答して、「花より団子」だとお父さんたちを手伝う。でも実際は“花と団子”。目の前の黄色い絨毯を眺めつつ、食べずにおいた駅弁をつつくわけだから。その姿は、桜を見上げながらお弁当をつつくお花見に似ている。ただし、本当に桜を見ながら、

という人がどれだけいるかはかなり疑問なところだけだ。

お弁当からひとつまみして口に運び、もぐもぐと食べながら菜の花畑を眺め、空っぽになるとまたひとつまみ。たまに空を見上げて、そう言えばここで雨に降られた事ってないなあ、とぼんやり思っては、それもこの場所の意志だったりして、と半分本気で考えてみる。そうして、ゆっくりと時間が流れていく。私たちを除けば、動くものといえば忙しく飛び回る昆虫たちと、風に揺れてさざめく花たち、それと頭上にある申し訳程度の雲ぐらい。

なんとなく、ここを外界から隔離された閉じた世界のように思っ てみた。このままここに居続けたら、ひよつとしたら浦島太郎と同じように、一歩外に出たら何百年も経っていた、ということもあり得るのではないか。そんな冗談を口に出すと、誰も笑い飛ばすことなく、むしろその逆で、その可能性を認めるような言葉がみんなから返ってきた。普段なら絶対に茶化したことを言うてくるであろうお父さんから。

それだけ、この場所が変わらずにいたいと願っているということなのかな。

最後の一口を食べ終わると、これで団子は終了、あとは花だけだと立ち上がり、私は菜の花畑へと歩み出した。昔は食べ終わると同時にシートから飛び出し、その中を嬉々として走り回り、いつまで続ける気だとお父さんに呆れられるぐらい遊び続けていたけど、それはとっくに卒業していた。そして今、花の香りを楽しみながらその中をゆっくりと歩いている。隣には早苗さんがいて、二人ともあまり言葉を交わさずに、この世界に溶け込んでいた。お母さんにお父さん、あっちはシートの上でのんびり。

まったりとした午後を、時間の許す限りそれぞれがまったり過ぐす。

そうして歩き続けていると、不意に何かを蹴った。遠くを長めながら歩いていたので、何を蹴ったのか分からず、足を止めて視線を下に落とす。

「どうかしたの？」

「うん。何か蹴ったみたい。なんだろ」

私は、こちらへんにあるかなと当たりを付けて菜の花を掻き分け覗き込む。はずれ。じゃあこっちの方かなと掻き分ける。またもはずれ。別の方向に蹴っ飛ばしたのかな。向きを少し変えてもう一度搜索。そんな私に、早苗さんが「大切なものなの？」と聞いてきた。それだけ私が必死になっているように見えるということだろうか。

「どうだろ。わかんない」

「なら、あまり気にしなくてもいいんじゃない？」

「そうなんだけどね……」

そう答えるも、搜索を止めようという気は起きてこない。正直、自分でもどうしてこんなに探し出そうとしているのだろうかと思議に思う。でも、何故だか諦められないのだから仕方がない。私の頑固気質が発動したのだろうか。早苗さんが、私も探しましょうと言ってくれたのだけど、すぐに見つかるだろうからと断った。これも何故だか、一人で探したいという気持ちがあったからの返事。

そして、今度はそんな様子を見ていたお父さんの「汐ー、どうかしたのかー？」という声が飛んできた。うまく説明するのも面倒なので、「なんでもなーい、気にしないでいいよー」と答える。

それからしばらく、私は一人で辺りを探した。気が付けば早苗さんの姿はなく、お母さんとあっきーの姿もない。たぶん高台の方に行っているのだろう。お父さんだけが、シートの上でこっくりこっくりうたた寝をしている。

思いつ切り蹴ったわけじゃないし、地面を転がるように飛んだわけだから、わりと近い範囲内にあるはず。そう思って扇状に広がる前方の搜索範囲を慎重に捜し進めど、なかなか見つからなかった。そこで、蹴られてすぐに茎に当たって逆方向に転がっていった可能性に気づき、ひよつとしたらとUターンした。ただ、蹴った場所を正確に記憶していたわけではなかったので、搜索はさらに頼りないものになってしまった。そもそも、何を蹴ったか見ていないのだから

ら、最初から頼りないものであったわけだけでも、それでも私は探した。

どれだけの時間そうしていたかは分からない。でも、陽が大きく傾くほどの時間ではないことは確か。ふうと顔を上げると、お父さんが目を覚ましていて、こちらをぼんやりと眺めていた。お母さんたちはまだ戻ってきていない。

「見つかったのか？」あまり関心なさそうなお父さんの声が、向こうからどこかのんびりと聞こえた。私も「まだー」とどこかのんびりした声で答える。

「そうかー。ほどほどにしておけよー」

「わかってるー」

私はそう答え、視線を落として菜の花を分けては探す。またはずれ。そしてちよつと移動。すると、私のつま先が何かにつんと当たる音がした。これが私の探していたものであることを願いつつ、足元周辺を探す。そしてそれはすぐに見つかった。私はそれを拾い上げると、まじまじと見る。

すると、とたんに私の胸に熱いものがこみ上がってきた。それは突然燃え上がった巨大な炎が私を飲み込むように、一瞬にして私のすべてを焦がした。全身が震え、視界はぼやけ、喉が焼かれたように痛み、大音量の音が鼓膜を壊さんばかりに響いている。

私は、生まれたばかりの赤子のように大声で泣き叫んでいた。

どうして泣いているのかなど考えることもなく、大粒の涙をぼろぼろと落としながら、ただただ大声で泣き叫んだ。

どこか遠くで、私を心配するお父さんの声が聞こえた。私はひどく歪んだ視界の中でお父さんを探し、手を伸ばせば届きそうなるまで走ってきていたその姿を見つけると、迷わず飛び込む。私を受け止めたお父さんは、最初は泣いている理由を聞こうとしたけど、何も答えられない私に諦めて、泣きやむのを待つことにしたらしい。私を抱きしめたまま、なにも言わずにいた。

それが私に拍車を掛けることになったようで、私の泣き叫ぶ声は

もう一段階上がる。お父さんの戸惑いも一段階上がったようだけど、だからといって今の私にはどうにもできない。私は、気持ちが落ち着くまであふれ出てくるものにすべてを任せた。涙も、泣き声も、感情も。

そうして時間が過ぎ、ようやくすすり泣きの状態にまで鎮静化してくると、いくらかだけど、どうにか自分をコントロールできるようになった。気持ちの整理はまだまだ出来そうにないけど、ひとまずお父さんから離れることは出来た。見ると、お父さんの胸のあたりがびっしょりと濡れている。

「気は済んだか？」

「ん……」お父さんの優しい声に、そう呟いて小さく頷く。

「で、どうして泣き出したか、説明できるか？」

私は首を振って答える。私にもよく分からない、という意味で。

でもお父さんは、説明できる状態にはまだないと答えているのだと受け取っているよう。

「……そか。とりあえず、痛いところはあるか？」

この質問にも首を振って返答。怪我が理由ではないと知って、少しホッとしたような様子で「それじゃ、シートのところに戻って休もう。歩けるか？」と言って、私を支えるように肩を抱いた。それに対し、首を振ると、また心配したように「気分、悪いのか？」と私の顔を覗き込んだ。

やっぱり言葉で答えなきゃと、「違うの……」とどうにか声を出した。その声はかすれていて、ちよつと途切れがち。しかも喉が痛い。

「じゃあ、他のところ」

「そうじゃ、なくて、これ……」

「ん？」

私は目をぐしぐしと拭い、胸に抱きかかえていたそれを、お父さんに見せた。

泥だらけで、あちこち痛んでいる、古ぼけたロボットのおもちや

を。

「これが、どうかしたのか？」

「これ、見たら、ああなつてた……」

「なんでまた」

だから、私にもよく分かんないの。

そう心の中で呟きながら、込み上がってきいていた感情がどういったものだったかを思い返してみようとした。すると、私はふと思いつき、全てが繋がったかのように思えた。

「お父さん、前、言ってた、よね。別の世界の、このこと」

別の世界。お母さんのいない世界。その世界のこの場所で、五歳の私はお父さんに初めて買ってもらったおもちゃをなくしてしまった。探しても探しても見つからず、とうとう見つけ出すことは出来なかった。でもその代わり、私はお父さんの胸で泣くことが出来た。五年間我慢してきた想いを、やっと果たすことが出来た。

もしかしたら、今手にしているおもちゃがまさしくそれなのかもしれない。残念ながら、記憶を探ってもこれがそのときのものと同じ形をしているかさえ分らないのだけど、そう考えても不思議ではないと思う。それに、急に私が泣き出した説明も、込み上がっていた感情の正体の説明も、これでつく。……と思う。

心のどこかで、お父さんがハッとした表情で迷わずそうだと答えしてくれることを期待しながら、私は聞いた。

「これが、そのときのおもちゃ、なのかも。お父さん、わかる？」

でもお父さんは、私の手にあるおもちゃをじっくりと観察することすらなく、あっさりと「さあな。俺にも分からん。たぶん、知らない誰かが落としていったものだろ」と答えた。現実的に考えればそれはそうだろうけど、でもちょっと寂しい気もして、「やっぱり、そうなの、かな」と俯いた。すると、私の頭にお父さんが手をぽんと乗つけてこう付け加えると、その寂しさはどこかへ行ってしまうた。

「でも、汐の言うとおりだとしたら、すごい奇跡だよな」

「うん」

「んで、それどうするんだ？」

そう私に尋ねるお父さんの顔には、聞くまでもないかと言いたげな悪戯っぽい笑みがあった。そしてそんなお父さんは、奇跡って代物は、たまにそこらに転がっていたりするものかもしれないな、とときおり冗談交じりで言ったりしていた。

まだそんな経験はしていないけど、不思議と私もそう思っている。
だから。

Episode「再会の大地」 - 了 -

再会の大地 その8（後書き）

ラストエピソードとなる直幸&史乃編でした。

当初登場予定のなかった秋生と早苗を同行させたおかげで、二人の陰が薄くなってしまった感がありますが、まあ、二人ともこのとおり元気で健康的に日々を送っています。

そして私は、今エピソードで一人称ゆえのもどかしさを改めて実感した次第です。

さてさて、次話は最終回となるエピローグ。

今までも、これからも

弾丸ライナーが三塁線を抜けた瞬間、スタンドから歓声と悲鳴がわき起こり、私も一瞬息を詰まらせた。そしてボールがファールゾーンに落ちると、歓声を上げていた人たちは盛大な落胆の声をもらし、悲鳴を上げていた人たちは盛大な安堵の声をもらし、私もほっと胸をなで下ろす。これでカウントはツーストライクワンボール。ピッチャー有利のカウント。

そして次に投げるボールが決まり、ピッチャーがモーションに入る。どんな打球がきても対応できるようにぐっと腰を落とし、ピッチャーとバッターの細かな動き一つも見逃さないように見つめる。

ピッチャーの腕がぐるりと大きく円を描き、その手からボールが勢いよく放たれ、一瞬の判断の遅れも許すことなく全神経を最大限に研ぎ澄ます。キャッチャーミットの位置はストライクゾーンから外れた外角。けど、ボールはそのやや内側へと向かっている。そしてバッターは、見逃し三振だけはすまいとバットを振った。

決して甘いボールではなかった。それでも相手バッターは、強振したバットでボールをぐしゃりと弾き返した。

二対二の同点で迎えた七回裏、ワンアウト一塁三塁。そしてその三塁ランナーにホームへと生還されると即試合終了。我がソフトボール部の負けが決まる。しかもただ負けるだけじゃない。この試合は秋季中学校ソフトボール大会の県大会決勝戦で、創部して初の大きな大会での優勝、そして全国大会出場という快挙を、ここまで来て手放すということ。

強い打球は、前進守備のショート横へと転がった。セカンドを守る私は迷う必要なくセカンドベースへ走りながら、その早い打球に見事に反応したショートの須美沢さんのグラブにボールが収まるのを見届けた。

「セカントッ！」

すぐさまキャッチャーの指示が飛ぶ。須美沢さんは塁から離れた三塁ランナーを一瞥してその足を止めさせてから、セカンドに入った私に素早くボールを投げ、それを捕球した私は一塁へ送球。そのボールは打者が一塁ベースを駆け抜けるよりも早くファーストミットに収まった。

一塁塁審の右手が高々と挙がり、歓喜や安堵や落胆の声がどよめきのようにながった。もちろん私たちは、グラブでハイタッチしながら意気揚々と引き揚げた。ベンチに戻ると、倉橋先生、もとい倉橋監督がにたりと笑みを浮かべて、「よく守りきった。今度はこっちの番だ。二倍と言わず、三倍にして返してやろう」と私たちを鼓舞し、おおっ！とみんなで気合いを入れた。

野球と違って、ソフトボールは延長戦に入ると自動的にノーアウト二塁から始まり、前の回の最後のバッターが二塁に入るルール。ということ、私は二塁に向かうべくヘルメットを被る。

「岡崎。どんな状況でも、いけると思ったら迷わず走れ。アウトになってもかまわないから、躊躇だけは絶対にするなよ」

「はいっ」

「よし。行ってホームを踏んでこい」

「はいっ！」監督に背中をぽんと押され、小走りで二塁に立った。

バッターボックスに立つ二番バッターのきつちゃんこと岸さんと私は、ベンチで自分の体のあちこちを忙しげに触っている監督を見る。バッターへは送りバントの構えだけで初球は見送り、ランナーへはそのままといいそのサインに頷いた。

そして初球。ピッチャーが投げると同時にファーストとサードが猛ダッシュし、ショートとセカンドがそれぞれベースカバーの体勢に入る。サインどおりきつちゃんはバットを引いて見送り、私もあまり大きなリードを取らずにベースに戻る。ボールはストライクゾーンを通過してキャッチャーミットに。ただしそのボールはミットからぼろりと前にこぼれ落ち、ピッチャーへの返球も少しそれていた。その二つのプレーで、私は次の二球目で盗塁する意志をサインでべ

ンチに伝える。それに対して返ってきた監督のサインに頷き、ピッチャーが投げると同時に私は三塁へと走った。きつちゃんもサインどおりバスターのふりをして盗塁を援護。結果、キャッチャーが少しもたついて楽々セーフ。ノーアウト三塁となった。カウントもワンストライクワンボール。

この状況に、相手チームがタイムを取って内野陣がマウンドに集まり、諸々を確認しあう。私たちも、次どう攻めるか監督からの指示を確認する。サインは、“小細工はもう必要ないから、積極的に打て”だ。相手チームが守備に戻り、試合再開。

きつちゃんはバントの意志を見せず、大きく構える。それに合わせて相手の守備位置が少し後ろに下がる。そして四球目。ボールは内角低めへと放られた。きつちゃんは体を開いてそのボールを打ちにいき、思い切りバットを振る。ボールはバットの下っ面に当たり、地面に叩きつけられてショートへと大きく跳ね上がった。その瞬間、私は猛然とホームへ走った。もしもショートを守っているのが須美沢さんだったら、間違ってもこんなことはしない。でも、相手ショートの守備力を考えれば無茶な走塁じゃない。むしろ絶好のチャンスと言つていいと思う。

ホームをまっすぐ見据えて走る間、様々な歓声が四方八方から地鳴りのように聞こえた。それぞれを聞き分けることは出来ないけど、確実に、私が暴走したと見て怒っている人も混じっていただろうし、対照的に、自らアウトになろうとしてくれてありがとうと感謝する人もいたはず。

でも残念。ショートからのボールを待つキャッチャーの脇を、私はヘッドスライディングで通り抜け、見事勝ち越しのホームを奪った。主審がそれを見て両手を横に広げ、「セーフ！」と大きな声でコールした瞬間、球場全体が今までで最大の歓声に包まれた。

ユニフォームについた土を払いながらベンチへ戻る私へ、チームメイトから、そしてスタンドで応援してくれている人たちからのたくさんのお言葉がどっと押し寄せ、私はちよつとだけ気圧されつつ、

小さなガッツポーズでそれに応えた。

その後、キャッチャーが私をタッチしようとしたことで一塁に残ったバッターランナーが、送りバントで二塁に進塁。続く四番バッターが三塁打を打ちさらに一点追加。これで相手チームの集中力が切れたようで、なんてことないファーストゴロをファンブルし、バッターはアウトになったけど三塁ランナーはその隙に生還。そしてさらに、フォアボールのあとにホームランが飛び出し二点を追加。計五点を取り七対二として、お返しは三倍どころではなくなっていた。

こつも一方的な点差になってしまえば、さすがに相手も戦意をほぼ失ってしまい、淡泊なバッティングでボール球を引っかけてはアウトを二つ重ねた。そして三人目の打者の打球がファーストへと力なく上がると、スタンドから勝利を確信した歓喜の声と、悲鳴に似た落胆の音がわき上がり、その打球をファーストが慎重に捕球した瞬間、この日一番の歓喜の渦が私たちの勝利を包み込んだ。

その渦の中で、チーム全員がピッチャーズサークルに集まり、抱き合ったり泣き合ったりしながら喜びを分かち合い、そこからはもう勝利に酔ったままあれよあれよと時間が過ぎていった。ある程度冷静になれたのは、大会の閉会式で、優勝トロフィーを受け取るべく整列したとき。正直、試合終了直後の礼をいつの間にかやったのか覚えていなかった。

閉会式も終わり、更衣室で大騒ぎしながら着替えを済ませた私たちは、球場を出てすぐの集合場所へと、興奮未だ冷めやらずといった雰囲気ですろろと歩く。そこには倉橋先生が待っていて、最後の締めをして解散という段取りになっているのだけど、その場所にやってくると、倉橋先生と楽しげにお喋りをしている、晴樹くんを抱っこした智びよんがいた。その姿を見つめるや否や、私は思わず「智びよん！」と大声を上げていた。すると何人かの子が後に続いて「智びよんだっ！」と声を上げ、他にも晴樹くんを大歓迎する

言葉もいくつも出て、二、三年生は全員猛ダッシュで駆け寄り、智びよんをあまり知らない一年生の子たちは、突然走り出した先輩たちに引きずられるように走っていた。

私たちの声に振り向いた智びよんは、ちょっとだけ苦笑いした顔で、「みんな、おめでとぅ」と言った。ちなみに、言うまでもなく“智びよん”という愛称を部内に広めているのはこの私です。

一方晴樹くんは、猛然と駆け寄ってきた私たちにびっくりしたように、目をまん丸くして智びよんの首にしがみついている。ただでさえ可愛いのに、そんな姿をされては、耳を覆わんばかりの黄色い悲鳴がどつとわくのも当然というもの。そして晴樹くんは、さらに智びよんにしがみつくことになった。

「こらこらお前たち、そんなに子供を怯えさせるんじゃない」

倉橋先生が笑いながらそう言うと、和むのはいいが、やることやっつてからだということ、癒されタイムは早々に中断。智びよんが晴樹くんを抱いたまま私たちから少し離れてその様子を見守る中、倉橋先生が整列する私たちに賞賛と労いの言葉を贈り、最後にこう聞いてきた。

「今日以上の喜びを、みんな味わいたいと思わないか？」

もちろんみんな味わいたいと思っている。だから全員声を揃えて「はいっ！」と答えた。

「うん。俺も味わいたい。となると、全国大会で優勝しなくちゃな」正直、県大会の優勝は今まで夢見たことあるけど、全国大会での優勝だなんて夢想だにしたことなかった。でも今は違う。実際に優勝出来る力が私たちにあるかどうか分からないけど、優勝したいと強く思う。みんなとまた心から喜び合うために。そんな思いを胸に抱いた我らがソフトボール部全員が、さらに強い気持ちで「はいっ！」と答えた。

そうして私たちはその場で解散となり、大半の子たちはしばし晴樹くんを怯えさせてから、それぞれが待っていてくれた人たちと市営球場を後にしていった。そして私も、スタンドで応援してくれて

いた、たくさんの大好きな人たちの輪の中に入っていった。

まずは亜矢ちゃんや美樹ちゃんなど学校の友達とひとしきり喜び合って、その次にお母さんにお父さん、あっきーに早苗さん、杏先生に椋ちゃん、ゆかりちゃん、陽平おじちゃん、御久島さん、そして有紀寧お姉ちゃんたちと喜び合った。そこに智びよんと晴樹くん、そして倉橋先生が加わり、いつそう賑やかな集団と化した。

そしてこの集団へと、荷物を抱えて一人の女の人が走ってきた。その女の人は、風ちゃんだった。しかもその後ろから公子さんが「ふうちゃん、危ないからっ！」と走って追っていて、さらにそのずっと後ろで芳野さんが歩いている。

風ちゃんは息を切らして私の前にやって来ると、「ま、間に合いましたか？」と必死な様子で聞いてきた。

何を基準に間に合ったのかよく分からないけど、とりあえず「試合は終わったよ？」と答える。

「そ、そんな！ 風子、てっきりぎりぎりセーフだと思ってたのに！」

雷に打たれたようなショックを受けてよろめく風ちゃん。そして心底残念そうに「ショックです。せつかく用意したというのに……」と頂垂れた。

「用意って、その荷物がそうなの？」

「はい……」風ちゃんはそう答えると、紙袋からがさごそその荷物を取り出し、いつの間にか得意げに変わっていた表情で、それを手に持って広げた。

「汐ちゃんに試合で着てもらおうと思って作った、風子特製、ヒトデ型ユニフォームですっ！」

ユニフォームというより、着ぐるみ？ しかもリアルタイプ？

これを見た面々は、盛大にずっこけたり唾然としたり深い深いため息をしたりと、様々な反応を見せていた。私も、あまりにも色々な要素があって、何からどう言えばいいのかさっぱり分からず、一瞬呆然としてしまった。とにもかくにも、さすがに試合でこれは着

られないでしょ。

そんな中でただ一人、このヒトデ型ユニフォームに喜んでいた人物がいた。それは晴樹くんだった。一人息子のその反応に、智びよんは何とも複雑な表情。すると、結末は見えているのにお父さんが「将来性ありそれで良かったな」と智びよんをからかう。智びよんの表情がそのまま固まったかと思うと、すぐに笑顔を作り、「そんなこと言われると、照れるじゃないか」と明らかに作られた照れ笑いをした。お父さんに、回し蹴りをしながら。

蹴りを食らって地面にめり込むも、いつものようにすぐに復活して「そんな照れ方するがヤツいるかあつ！」と一吠え。でも、「あまりにも嬉しいこと言うからだ」と変わらず笑顔で答える智びよん。杏先生も「自業自得よ」と鼻で笑い、お母さんたちも杏先生と同意見のようで苦笑い。陽平おじちゃんは「言わなくて良かった……」とちよつと顔を引きつらせてぼそり。あつきーは「さすが智びよん。良い蹴りしてるぜ」と感心しきりで、ゆかりちゃんは、すぐに復活したお父さんに感心しきり。

そして風ちゃんは、智びよんの真似をしてお父さんに回し蹴りをしようとしている。

相も変わらぬ賑やかな日常の風景。そしてその中にいる私。それがとても嬉しく、じんわりと心が温かくなる。

不意に、背後になにか気配を感じた。なんだろうと思ひ、振り返る。

そこには、幻想的な風景の中に佇む、微笑を浮かべる一人の女の子と、その子の両脇で、がらくたを寄せ集めて作ったような人形がそれぞれ女の子の手をそつと握って立っている姿があった。光の舞い踊るその幻想風景にどこか懐かしさを感じると、不意に、一ヶ月ちよつと前に直幸おじいちゃんの故郷で、たくさんの蛍の舞をみんなで見えた夜のことを思い出していた。

あのとき、早苗さんは今が夢の世界かもしれないと言った。そしてあつきーは、夢だろうが何だろうが、幸せならそう言って胸を張

っていいばいいと言った。そして私たちは、幸せであることを感じていたと思う。少なくとも私にはそう感じたし、今でもそれを疑ってなどいない。

光舞う幻想的な夜の中で。

そんなことを頭の片隅で考えていたからだろうか。

幻想世界に立つ彼女たちに、意図してではなく、なんとなく、私は二つの言葉で挨拶をしていた。

女の子と右隣のお人形さんには、また会えたね。と。

そして左隣のお人形さんには、はじめまして、と。

その声が二人のお人形さんに届いたかどうかは分からない。表情というものが一切なく、身動き一つしないで、ピースを詰め込んだような二つの目を虚ろに向けているだけ。でも女の子は違った。喋ることはしなかったけど、聞こえたことを伝えるかのように微笑んだ。

私は、光舞う幻想世界でお人形さんたちと一緒にいる女の子に尋ねた。

あなたは、幸せでいるの？

すると女の子は、頷くように目を細め、その両手に握られているお人形さんの手を軽く握った。それまで動かなかったお人形さんたちが、ぎいという音を立てていそうな動きで女の子の顔を見上げ、彼らも女の子の手を軽く握り返す。そしてそんな彼らに、女の子は優しい笑顔を向けて応えた。

それで十分だったし、それ以上はむしろ不要だった。三人とも幸せでいることを理解するのには。

私は、この答えに気持ちがとても温かくなるのを感じた。そしてそんな私に、今度は女の子がその瞳でこう話しかけてきたように見えた。とても嬉しそうに。

あなたも、幸せそうだね。

私はすぐに答えず、一度振り返った。いまだ賑やかにお喋りを続

けている、大好きでとても大切な人たちを見てもらうために。それから再び女の子たちへと向き直って、真っ直ぐな気持ちで答えた。彼女たちに負けなくらいに、心を込めて。

「うんっ！ 私も、とっても幸せだよ！」

完

今までも、これからも（後書き）

『クラナド 汐の見る風景』は、これにて閉幕。

終始退屈に思われた方は多かった（というか大多数）と思いますが、作者としては、書きたかったことをほぼ書くことが出来て、とても満足しております。

最後まで本作におつきあい頂き、誠にありがとうございました。そして

“クラナド世界のすべての人々に、永遠の幸せと、そして光あれ”

あとがき

アフターを見終わってからしばらく、正直、釈然としない気持ちがつきまとい、納得することが出来なかった。

朋也と離ればなれで暮らしていた五年間の、汐の想い。

菜の花畑でやっと父親の胸の中で泣くことが出来たときの、汐の想い。そして、喜び。

汐だけでなく、朋也を心配する多くの人たちも、たくさんの想いの中で生きていた。

早苗さんは、ようやく立ち直った朋也が汐を育てることになり、夜の縁側、秋生の一言で、五年間のいろんな想いがたくさん涙と一緒にあふれ出し、大声で泣きじゃくった。きっと、秋生も一緒に大声で泣きたかったことと思う。

そういったたくさんの想いが、ご都合主義的に無かったことにされたかと思うと、激しい怒りさえ感じることもあった。朋也の記憶に残っているとしてもだ。

でも、渚のいる世界ですくすくと育っていく汐の姿に、これで良かったとも思えた。その気持ちは少しずつ大きくなり、釈然としない気持ちは少しずつ小さくなり、やがて、これで良かったという気持ちで遙かに上回った。

そしてアフターをもう一度見て、総集編まで見終えた瞬間、強く思った。渚のいる世界の汐を書きたい。家族三人で幸せに暮らしている汐の姿を書きたい、と。

こうして、この作品を書くことになりました。

汐を書く。というと、汐中心で話が進むというのが普通なのでしよう。がしかし、書こうと思ったまさにその瞬間、プロローグ『ま

たね』の全シーンが鮮明に降ってきて、さらに次の瞬間には、汐以外の原作キャラの賑やかな姿を通して、幸せな汐の日常を描こうと決めていました。

そして、終わってみれば原稿用紙約七〇〇枚という不思議。

ショートエピソード一〇編、プロローグとエピソードの二編、計一二編で、一月か一月半ぐらいで書き上げるつもりで、当初連載を始めました。そして、相も変わらずの展開。

ショートエピソードが一編増えたのはまあいいとして、それよりも、一編あたりのボリュームが軒並み想定外に。もっと少なく考えていたのに、いざ書き始めてみると、最初のエピソードがあれよあれよと原稿用紙六〇枚ほどになり、それから六〇枚から八〇枚ぐらいのボリュームで推移。

最後のエピソード『再会の大地』では、約一二〇枚というボリュームに。どこその番組ではありませんが、本当に「なんとということでしょう」な展開でした。

そして連載期間についても、一編あたりのボリュームが増えれば、当然それだけ完結まで時間がかかるわけですが、加えて、中断やペーシングもあって、一ヶ月近くという長期連載になってしまいました。

その中身を書くとき、芽衣編（『きょうだい』）を書き終えたあたりで煮詰まり始め、ことみ編（『天才博士の終わりなき挑戦』）をどう書こうかで筆がなかなか進まなくなり、本作品に対するいつまでも変わらない反応の薄さもあって、筆を置いてしまおうかとちらりと思ってみたりとブレーキがかかり、そしてことみ編を書き上げると、気分が乗らずにPCゲームをやりだして、しばらく完全棚上げ状態。そのまま中止ということも当然考えました。

がしかし、やっぱり書きたい。美佐枝さんと志麻くんを書きたい。幸村先生を書きたい。風子を書きたい。直幸や史乃を書きたい。そしてなによりも、汐の「とっても幸せだよ」という最後の言葉を、

自分自身がどうしても”聞き”たい。

例え一人の読者もないとしても。 。
という気持ちが少しずつ立ち上がり、その思いだけで筆を持ち上げ、こうして書き上がりました。

話が逸れますが、長編を書くたびに必ず意欲の低下が起きます。上記のとおり今作も例外ではありませんでした。

話が煮詰まり先に進めなくなって、という理由だけならいいのですが、「ああ、どうせ誰にも相手にしてもらえてないだろうに、なんでこんなに悩んで書こうとしてんだろう。馬鹿じゃね?」というネガティブ思考が加わると、たいていしばらく止まります。

それでもどうにか気持ちを立て直し、数本の長編を完結させることが出来たのは、

「結末を書きたい」

「ラストシーンを書きたい」

「最後の台詞を書きたい」

などといった思いを、結局は捨てることが出来なかったから。諦めきれないゴールがそこにあつたからでした。

そして目指すゴールがないと、たんに話に詰まっただけでも結果打ち切りとなり、実際に過去三作ほど、その運命を辿っています。

長編を完結させるのは大変な作業です。たくさんの良い反応があれば、苦労はあつても意欲はそう減りませんが、悪い反応ばかりとか、反応がほとんどないとかだと、意欲はどうしても低下していきます。

それでもなお書き続け、完結させるためには、漠然とした「こういう物語を書きたい」ではなく、「このラストをどうしても書きたい」という最後の目標がなければ必要で、それがないと極めて難しいと私は思っています。私に限って言えば、ですが。

といった経緯を経て完結したこの作品。

エピソード後書きにも書きましたが、この作品を読んだほとんどの人は、期待したものと全然違うと回れ右したり、つまらない、退屈だと回れ右したことと思います。なにぶん、他愛のない日々の様子が描かれているだけですから。でも、これが私の書きたかった”汐の物語”です。

この作品を最後まで読み、心に何か残してくれる人がいてくれればと願うばかりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0117i/>

クラナド 汐の見る風景

2010年10月8日12時53分発行